
神隠しが起こる村 埒外編

密室天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神隠しが起こる村 埒外編

【Nコード】

N8654S

【作者名】

密室天使

【あらすじ】

怠惰な生活を送っていた主人公。いつもものように無気力な日々を過ごしていると、自らを許嫁と名乗る少女が現れる。くしくも主人公は非常識の奔流にのみ込まれていく。歪んでいるのは、人の心か、社会の仕組みか、あるいはそれ以外なのか？ 何から何まで歪み始めた主人公の日常。もはや平穏な日々は取り戻せない。

これは（神隠しが起こる村）の続編にあたるものです。前作も併読して下さると理解が深まると思います。

第一話 虚飾症 1 (前書き)

この物語にプロローグもエピローグもない。

気が付いたら何かが起きていて、何かが終わっている。

不要、というわけではない。

物語のスピードに追いつけないから、あつたところで意味がないだけだ。

第一話 虚飾症 1

いただきます。

そういつて手を合わせる。

自然の恵みに感謝して、神々に礼賛する儀式。

なんと幸せなことなのだろう。この時は至福の時間だ。

食べる。すなわち、愛。あるいは愛しいものとの一体化。相手と

自分が渾然と混ざり合う、その概念。それは素晴らしいことだ。

食べることは何事にも勝る。

その反面、好きでもないものと溶け合うのは、とてつもなく不快なことだ。それはひどく不恰好。致命的に愚かだ。

だからだろうか。

これはおいしくない。

それもそうだろう、と納得する。今になって再発したこの症状。

ひたすら食べたいとうづく肉体。増大する食欲。

手当たり次第に漁ったのがいけなかった。

こんなことではいけない。もっといいものを。もっと大好きなものを食べよう。

目の前の品を乱雑に捨て去る。

これも当然の行いだろう。

なんせ私は、赤ん坊の手足を愛していないのだから。

目覚めは最悪だった。

頭がガンガンする。バカでかいハンマーで思いっきり叩きつけられたみたいだった。

酩酊する頭に手を置いて、髪を掻き毟るように掴む。堪らなく気分が悪かった。

薄っぺらい蒲団から起き上がる。左の窓から漏れる朝日。窓外からは野鳥が囀っている。

鬱々と沈む脳髄を無理やり起動させ、意識を叩き起こす。曖昧だった世界はだんだんと色を取り戻していく。視界には朝日影が映り、全体としてはオレンジ色。それが染みついた畳を照らす。

誰もいない部屋。俺しかない空間。何かが死んだところ。

寝ぼけ眼を覚醒させるために洗面所へと向かう。剥げた畳の上を歩き、取っ手を掴む。老朽化からなかなか動かず、開けるのに苦労した。

脱衣所のすぐ横にある洗面所。鈍色に光る蛇口を捻って水を出す。それを洗面器が受け止めて、雑然と水が撥ねる。顔に何滴かかかった。

顔を洗ってもすっきりとはしなかった。黒いタールのようなものが燻っていた。それは倦怠感にも似ていて、全身にくすぶっていた。

鏡には不愛想な面が映っていた。釣り目の瞳に、金色に輝く髪。

中学校から染め始め、今でも金髪を貫き通している。三日坊主な俺が唯一続いたことは、髪を染めることくらいだった。部活動も勉強も対人関係も長く続いたことはない。何かが欠陥した俺に、そんな高潔なものが長続きするはずがなかった。

小学校低学年の時に入籍していたクラブチームは、いじめが原因でやめた。勉強のほうも、あまり身に入らなかった。そもそも学問を修めることで自分の中の何かが変わるとは思えなかった。その何かとは友人との青春や、異性との甘酸っぱい恋で形成されるもので、両方とも不足していた。そんな人間が勉強に取り組んだところで、虚しくなるだけだった。対人関係のほうも壊滅的だった。そもそも不良たる風体の男と仲良くしたがる物好きがいるとは思えない。

札付きの不良。

いるだけ邪魔な存在。

存在自体が罪。

それが俺だった。

近頃では薬をやってるんじゃないか、といった噂が飛び交っている。それも詮方ない。不良と薬物はワンセット。一次元的に繋がっている。しかし薬物に手を出したことは一度しかない。前にヤケになってシンナーに手を出したが、気分が悪くなってやめた。こんなもので人生壊されてたまるか、と思った。けれど、空虚な俺の人生が壊れたところで誰かが悲しむとは考えづらい。そもそも薬があるうがなかるうが、俺の人生は最初から破綻していることに変わりはない。そこに薬があるかないかという差異だけだ。

「俺は」

言葉は続かなかった。何かを言いたかったはずなのだが、これ以上の言葉が出なかつた。

みんなから苛められない子になりたい。

みんなから好かれるいい子になりたい。

幼いころからの夢。外界からの揶揄や嘲罵で打ちのめされた俺の最優先事項だったもの。

絶対にしなければならぬこと。

なしとげなければならぬこと。

幼少期のいじめの反動からか、俺は周囲の気色を窺う、阿諛追従あゆついしょうな人間になっていた。媚びへつらい、追従笑いを絶やさない。その軽薄さから爪弾きにあつたのは言わずもがなだろう。主体性を持たない人間が人に愛されるはずがない。

ではどうやって意思表示をするか。自分の感情を表現するか。

それは髪の色が証明している。

あれ以来俺には進歩の跡が見られない。差し伸べてくれる手を振り払って、全てを拒絶した。自分を受け入れてもらえるかどうか不安だった。そうならないために拒絶した。拒絶すれば自分が傷つく

ことはない。そうやって過剰に自分を守っていくことで、自分という存在を確保した。それは星霜を経ることに淀んでいき、弱くなった。あたりまえの結果。抗いがたい。

誰も愛してくれない、と嘆いたところで好転すると思っただら大間違い。社会は面倒見のいいお母さんではない。

なんだか惨めだった。自分では誰も愛するつもりはないのに、誰かの愛を求め。それは愚かだ。一方的に相手を求めるだけ。それなりの天寿を全うして、誰にも看取られずに死んでいくだけだ。

適当に生きて、適当に老いて、適当に死んでいく。嫌なことがあつたら考えない。思考することを放棄する。解決策や対抗策を練らずに、ただただ堕ちていく。そのほうが楽だから。考えないほうが生きる分には楽だから。

得るものもない。

失うものもない。

そもそも俺に価値のあるものはない。だから関係ない。

紛らわすようにテレビを点ける。社会から遮断された日和見村では、テレビくらいしか外の情報を知ることが出来ない。伝統主義を掲げる家が多いこの村では、一昔前の自然がそのまま現存している。情報化社会から取り残された村といっても過言ではない。

番組はローカルニュースだった。神隠しに関するニュースで、近ごろその動きが顕著になっていっているらしい。

何の前触れもなく消失する村民。神隠しに遭った人々に関連性はなく、捜査は難航しているようだ。

また神隠しにもこれまでの傾向から背反した“新種”が登場したと放送されている。

……新種？

元来の神隠しは、人そのものが消える。しかし新種の場合、体の一部が消えるのだそう。それは指であったり足であったりして、その対象は乳幼児に多い。また被害に遭った幼児には例外なく口に布が詰められていた。声を出させないためにこしらえたものだろう。

母親が気を逸らしている隙に幼児の手足を切断したのだ。

今のところそれが神の仕業なのか、人間の仕業なのかは不明。後者であることは明確であるが、神隠しの言い伝えが神秘性を加味していた。

新種の神隠しは今年に入って三件起きている。犯行は一樣に同じで、同一犯の可能性が高いそう。しかしその手口は巧妙で、一度も目撃されていない。当然凶器や指紋も残っていない。手がかりはゼロなのだ。

テレビを消す。朝から嫌なニュースを聞いてしまった、と後悔。

四月八日。

さすがに始業式くらいは行ったほうがいかもしれない。

面倒だが行くことにする。あるのかどうか分からない良心がそうさせたのだろう。こういった式典にはちゃんと出席しないと先生に睨まれる。最近は薬の醜聞もある。ここで欠席すればますます仄聞そくぶんに尾びれがつくだろう。篝火かがりび白夜はやくざと関係があるとか、不良たちを何人も血祭りに上げたとか。そういった悪評に拡大していくだろう。痛くもない腹を探られるのはごめんだった。

午前八時。

久しぶりに着る制服は新鮮だった。

学校の正門に近づくにつれ、周囲の視線が厳しくなっていくのを感じた。不躡な視線が俺を貫き、辺りからはヒソヒソ声が鳴りやまない。

新人生だろうか。物珍しそうに俺を見ている。俺が睨むと急いで

目を逸らした。滑稽だった。また校舎裏からは制服を着崩した男たちが俺を見ていた。きつと何週間か前に夜討ちを仕掛けてきた連中だろう。腕に包帯を巻いた不良たちは歯軋りして俺を見た。復讐してやる。そういつているような気がした。

正門には挨拶をする先生がいた。スーツを端正に着こなし、柔和な笑みを浮かべている。その笑みが俺を見たたん、面白いように崩れていった。嫌悪。恐怖。そういつた感情が見て取れた。

門を潜り抜ける。そのさい先生が低い声で唸った。お前はここに来てはならない。お前は存在してはならない。その瞳は苦虫を潰したような嫌悪感がこもっているだろう。

奇異なものを見るような目を向けられるのは日常茶飯事だった。俺を中心に不可侵の輪が広がる。半径二メートル以内には誰も寄りつかない。

慣れてるから、いい。

学校指定の鞆。それを肩にかけて悠然と歩く。まるでモーゼの十戒のように道が出来ていく。濛々と土煙が舞いあがった。

静まり返る。下駄箱を目指した。

誰にも挨拶されず、誰にも声をかけられず、歩いていく。

自分の足で歩く。

聞こえはいいが、ただの孤独なのだと気づく。

使い古された靴を脱ぎ、上履きを履く。その折に太い胴間声が聞こえてきた。振り返ると柔道着姿の男がいた。その男はやけに体格がよかった。体育の先生だろうか。名前は忘れた。

「篝火白夜だな」と確認を取られる。

凄みのある濁った声。居丈高な口調。無条件で俺が悪だと決めつけるような態度。俺は一発でこの先生のことを嫌いになった。

俺が首肯すると、いきなり髪の毛を掴まれた。手荒な動作で俺を引き寄せ、獣のように凄んで見せる。「なんなんだ、この髪の色は」
答えない。俺は黙した。

「なんなんだといってるだろ！ 先生の声が聞こえなかったのか！」

高飛車にいい放つ。顔は憤然としていて、眉間には皺が寄っていた。どこか嗜虐的な表情だった。

正義感に酔ってるんだろうな、と他人事のように考える。

「この金髪！ 明らかに校則違反だ。早急に染め直してこい！」
髪の一房を掴み、荒々しく引つ張る。

ふと視線を巡らすと大半の人が注目していた。何かを期待するような目。

生意気な不良を懲らしめてくれ。

先生、殴ってください。

なんだってそいつは不良ですから。

不良だから何してもいいんですよ。

いつそのこと殺してください。

いるだけで社会に害をなします。

代替行為。生徒たちは普段たまった俺への鬱憤を、この先生を媒体にして発散させたいのだろう。
いい気味だ。

これだから頭の悪い不良は。

いきがってるだけのクソだよ。

あんな奴退学すればいいのに。

死ねよ、もう。

その考えがあまりにもバカバカしいので、鼻で笑ってしまった。

それが癢に触ったか、男が鼻息を荒くして俺の腹に拳を入れた。

くの字に折れ曲がる体。腹部から熱い痛みが生じる。ドロドロとした塊。それは激しい嘔吐感となってせり上がってきた。

「社会のクズが。調子に乗りやがって」

男は愉悦の籠った拳をぶつけた。頬に重厚な拳骨が襲う。強烈な一撃に吹っ飛ばされ、壁に頭を打った。頭蓋骨を砕くような衝撃。

呼吸は一旦止まり、酸欠に陥る。唇を切ったのか口内は鉄の味がした。嫌な味だった。

「和田先生」

腫れた瞼が隻影を捉える。視線を伸ばしてみると白髪の老人がいた。穏やかそうな顔つきは険しくなっている。

拳を振り上げようとした男は老人に気づくと、拳を下げた。バツが悪そうに顔を伏せる。

「生徒に体罰は禁止されています。それくらい承知なさっていると
思いますが」

「高松先生。こ、こいつが悪いんです。髪を染めたり、教師に反抗したりするから」

高松先生と呼ばれた老人は責めるように男を見た。凜冽とした双眸には非難の色が混じっていた。

観念したらしい。和田と呼ばれた男は、俺を一睨みしてから踵を返した。

壁に背を預け、情けなく呻く。高松先生はそんな俺を心苦しそうに見た。助けるようなことはしなかった。構うなど視線で訴えかけたからだ。それを汲み取ったのか、何も言わず去っていった。その表情は痛々しげで、俺のことを心配してくれているのだろう。

心の中で礼を言っ、のっそりと立ち上がる。腹と頬が痛い。エンジンと痛みを蓄える肉体。動きが鈍くなっている。俺との意思疎通を拒んでいるようだった。

高松先生が去ったのと同時に、生徒たちは蜘蛛の子を散らしたように逃げていった。傍観者気取りの輩はあつという間に姿を消した。辺りは閑散としている。それは篝火白夜の内面を投影しているようだった。

長いだけの始業式は終わり、新学年のホームルームが始まる。

俺は2 - 2組だった。席は窓際。一人でぼんやりと座る。

サボり気味だった俺はあまり学校に立ち寄ったことがない。そのせいか顔見知りの人間はいなかった。

担任は熱血漢っぽい中年の男だった。眉村まゆむらとかいう教員で、俺を目の仇かたきにしている先生の一人だ。和田とかいう先生もその一人なのだろう。腐った蜜柑が周りを腐らせる前に排除しよう。単純だが効果的な方法だ。それが一番いい。俺もそう思う。

担任は開口一番、俺について言及してきた。髪をどうにかしろ。素行をどうにかしろ。内申をどうにかしろ。出席日数をどうにかしろ。そんなことばかりだった。

同じクラスになった生徒は男女問わず不快な顔をした。俺を軽蔑するもの。俺を恐怖するもの。俺を無視するもの。色々な奴がいた。共通項は俺にいい感情を持っていないということだ。

担任の眉村は学生時代の体験談を話しているようだった。関とぎを作る生徒たち。男の小話に耳を傾けて、どっと笑った。俺だけ笑わなかった。

ホームルームが終わると、部活着を取り出すものや、帰宅する人がいた。俺は後者。俺は万年帰宅部なので、放課後になれば学校に居残る理由はない。暇を潰す友人も、一緒に遊ぶ友人も特にいない。部活動はいいとは思うが、面倒。集団行動が苦手な俺が部活動をする姿なんて想像できないのが本音だった。仮に部活をすれば先生たちは更生したと考えるだろうか。青春の汗を流し、仲間と切磋琢磨する篝火白夜。そんな俺が一秒でも存在できるはずがない。それ以前に俺を入部させてくれる部活動があるとは思えない。門前払いがオチだ。

大して重くもない鞆。黒塗りの表面は落剥していた。

ざわめく校舎。騒然と色めく生徒たち。歓談や閑談が嫌でも耳から入っていき、通り過ぎていく。その喧騒はどこか遠い。

痛覚はいつの間にか収まっていた。生まれつき頑健だったからか

治りが早い。その頑丈さが唯一の取り柄だった。

今年の四月は結構肌寒かった。学ランを着ていても風が染み渡り、冷気が体の奥まで浸透してくる。

寒さで目を細めていたからか、すれ違った人はみな顔を背けていた。関わりたくない。そういった感情が如実に表れている。

この村で俺の名を知らぬものは多分いない。あいつは性質の悪い不良だ。そういった酷評が隅まで轟いている。

反面俺はみんなを知らない。関わったことも話したこともない。寂しいとは思わない。それでいい。

一人でいることは楽だ。負担がない。筋肉は負荷をかけることで強力になる。それは対人関係にもいえる。

俺は帰路についた。

第二話 // 2

俺には親がない。

俺の両親は八歳のころに司法の手に委ねられ、法の裁きを受けた。銃殺刑。きつと死ぬまであつたという間だつただろう。気がついたら死んでた。父母を死刑で失つたのは俺くらいではないだろうか。

両親の趣味はドライブだった。父は昔走り屋をやっていたらしく、ドライビングテクニクには目を見張るものがあった。篝火かがりび白夜の揺籃よつらんは揺れ動く車内だった。

俺と父親と母親の三人家族。典型的な核家族だった篝火家は世間的に見ても、まあまあ幸せだつたと思う。

穏やかな父。優しい母。甘えん坊だつた俺。絵に描いたような平和な家族で、経済的にも豊かだつた。

ただ。

問題があつたとすれば、それは両親の異常なまでの殺人癖だつた。とにかく両親は人を轢き殺すのが好きだつた。生きがいと断言してもいい。両親の趣味、というか楽しみは、人殺しにつきた。

父は休日に母と俺を乗せて山にドライブに行く。母は張り切つてご飯を作り、俺はその日を心待ちにしていた。

父は道路に人がいたら、逡巡も同情も憐憫もなく、とりあえず轢いた。何人いようと轢いた。男であろうが女であろうが、若かろうが老いていようが、やつぱり轢いた。

車との衝突で人だつたものが吹っ飛んでいく。その光景は爽快で、家族共々喝采を上げていた。

よくぞやってくれた。

父はいつもと変わらぬ笑みで、たんぱく質の塊を称賛する。

それは母も同じで、功労者である死体に馳走を振る舞つた。父が見事に轢殺した日の昼は、その死体とともに昼食を食べた。死後硬直の始まつた死体は物言わぬ人形となつて、俺たちと輪を囲んだ。

両親は楽しそうにご飯を頬張り、死者の肩を叩くのだった。

それが異常だと思つようになつたのは、両親が死んで一年たったころ。ちょうど善悪の区別がつき始める年頃だった。

ある日両親は警察に勾引された。事前処理を一切やっていない両親が捕まるのは必定だった。そして判決。当然のように死刑。十人以上の人間を轢殺したのだ。しかるべき判決だろう。

当時の俺にしてみれば、両親がいなくなったことよりも、楽しい娯楽が消えてしまったことに喪失感を感じた。あんなに楽しいことはなかった。それはまるで映画のワンシーンのようで心躍った。しかしもう体験できないのだ。

両親の事件は大々的に放送された。世紀稀にみる大犯罪と銘打たれ、マスメディアは湧いた。

俺の名は伏せられてはいたが、すぐに殺人鬼の息子であると周囲に露見した。その時はひどかった。すさまじいバッシング。俺は犯罪者の十字架を背負わされ、手ひどいいじめに遭った。おかげでクラブチームの退部を余儀なくされ、被害者の執拗な恨みを買った。

俺の背中には十人以上の命が乗っている。その業はあまりにも重い。

矢面に立たされた俺は各地を転々とし、やがて閉鎖的な田舎である日和見村に落ち着いた。

優しい親戚の計らいで住むところは提供してもらった。俺が不自由なく生活できるのも親族のおかげなのだ。家を貰い受けたさいにいわれたことは、もう二度と私たちに関わるな、だったが。

眼下には老朽化の進んだアパートがあった。心麗しい親族が与えてくれた家だ。

ポケットには家の鍵があった。ポケットに突っ込んだ右手でそれを握りしめる。

みしみしと鳴る階段。自宅の扉に鍵を突っ込む。

そして。

気付く。

……おかしいな。

扉の右上にある電気メーターがなぜか稼働していた。明かりを点けっぱなしにしたまま登校したのだろうか。俵約がモットーの俺がそんなことをするだろうか。それとも泥棒だろうか。疑問は絶えない。

もし泥棒だとしたら一大事である。ただ俺の家に高価なものはない。あるのは卓袱台と布団、それと年代物のテレビくらいだ。付言するなら本やCDもない。趣味らしい趣味のない俺の休日には、寝るかぼーっとするかのどちらかだった。

様々な憶測を一旦しまいこみ、身構える。警戒しながらも開錠。油断せず慎重に動く。

予想通り部屋には明かりが灯っていた。オレンジ色の光が玄関に漏れている。そこで俺は目を見開いた。

靴。

玄関には見たこともない靴が一足あった。否。それは靴ではなく下駄だった。鼻緒は赤く、巫女や舞妓が履くような代物。なぜ下駄があるのだろうか。

覚悟を決めて足を進める。闖入者ちんゆじの気配は色濃くなっていく。間違はなく誰かがいる。そう確信した。

鬼が出るか蛇が出るか。

そう身構え、奥へと進んだ。

と。

「おかえりなさいませ、白夜様」

呆気にとられる俺を尻目に、目の前の少女は深々と額ぬかずいた。鴉の濡れ羽のような髪がさらさらと垂れた。

数秒間静止して頭を上げる。端麗な面立ちが光に映え、凜々と笑みを浮かべた。なまじ着物姿だったせいか、とみに妖艶だった。

「……どうかいたしましたか？」

かわいらしく小首を傾げる。心底から不思議そうな表情で俺を見た。

「お前は 誰だ？」

「ご冗談を。私のことを“視”てないのですか？」

視る。なんのことだ。何を視るんだ。視ていて何かが変わるのか。意味が分からないぞ、それ。

それ以前にこの女を知らない、という真実。

「白夜様の許嫁でございます」

「……は？」

「もう一度申し上げましょうか」と無知な子供を諭すように、「私は白夜様の許嫁なのです」といった。

「エイプリルフルは何日か前に過ぎたぞ」

「ふふふ、冗談がお上手で」

少女はしとやかに笑んだ。切れ目の瞳に優しい光がともる。

「しかしまあ、簡素なお部屋ですね。飾らない白夜様らしいというか、なんとというか……。誠に僭越ながら、ある程度掃除をしておきました」

確かに少女のいうとおりだった。薄汚れたフローリングはピカピカに磨かれている。畳のほうも綺麗に清掃されており、さながら新居のように整然としていた。

「月に一回は清掃に努めたほうがよろしいかと。それと空気の入れ替えも。空気が淀んでいます。それでは邪気のたまる一方でございますよ」

「あ、ああ」と狼狽する。

どうなっただ、と自問。

手狭な部屋。玄関口から向かって左には洗面所と脱衣所。鰻の寝床のように奥行きのある室内にはテレビがしつらえてある。脇には冷蔵庫や台所。

そして。

中央には女がいる。

チグハグな絵だ、と思った。何かが噛み合わないのだ。

少女はゆっくりと立ち上がった。隙のない動き。洗練された所作

は、女としての魅力を深く持ち合わせていた。

「またのちほど」

「お、おい、おまえ」

戸惑う。なんなんだ、これ。

「白夜様は確か二組であられましたね。私は一組です。明日学校でお逢いできることを心より願っております」

「待てよ。おまえはなんなんだよ」

「だから許嫁と」

「違う」と遮った。「おまえの名前は」

少女は得心したようだった。頬を釣り上げて嬉しそうに笑う。「

佩刀はかしひすみ歪。佩刀とは貴人が帯びる刀のこと。歪は 字面通りでござ
います」

俺は首肯した。抜本的な解決にはなっていないものの、一つの謎が解決された。

もう少し質問を重ねるべきか。

そう悩む。この女は未知なるものだ。それも不法侵入を行う辺り、ますます猜疑心は深まっていく。

知らないということはそれだけで罪だ。

知るということはそれだけで罰だ。

必要以上に関わるのはよくないことだ。 unnecessaryなものを背負うことになる。

しかし気になることがある。

言動から推察するに、この女は俺と同学年なのだろう。

ならばなぜ俺よりも早く帰宅しているのか。

おそらく俺が一番初めに学校を出たはずだ。しかしこの女は平然とここにいる。それも着つけるのに時間のかかりそうな和服を身にまとっているのだ。

日和見村に高等学校は一つしかない。つまり俺とこの女は同じ学校に通っているはずである。

「佩刀」

「歪とお呼びください」と懇願するようについて。

「……歪。おまえは俺と同じ学年だろ」

「そうですね、なにかございますか」

「帰るのが早いな」といった後、「学校はさつき終わったはずだと付け足す。」

どうやら俺の疑問を感得したようだ。「簡単なことです。私は今

日、学校を休みました」

「……なぜ」

「こうして白夜様の気高い御前に参じ馳せるためです。この着物も専門の業者に依頼してもらったものです。上等な着物でございますよ」

佩刀は袖を掴んで見せた。曖昧に頷いてみせると、嬉しそうに破顔する。

「それだけのために休んだのか」

「重要なことです。嫁入り前の女は必ず行う儀式なのですよ」

「おまえ、結婚するのか」

「はい」

俺と同じ年齢ならば、この女は一六歳ということになる。法律上では婚姻関係を結ぶことのできる年だ。だがそうだとしても変な気がする。

高校生で結婚。

あまり実例がないからだろうか。違和感が拭えない。

現実味の欠けた言動。佩刀歪のいうことは支離滅裂だった。

そもそも誰と祝言を上げるつもりなのだろうか。

薄々分かつてはいたが、最終確認のつもりで質問する。「早婚だな。誰とだ」

「白夜様でございます」

「……俺と？」

やっぱり、とは思ったが、一応先を促す。

「先ほど申し上げたように、私と白夜様は切っても切れぬ鴛鴦の仲

なのです。佩刀家の女は結婚年齢　つまり一六になるまで相手方と接触を持つことは禁じられています。それまでの年月、どれほど白夜様に恋い焦がれたことでしょうか。すれ違っても挨拶すら出来ぬのです。実に殺生な掟だと恨めしく思いました。しかし禁を破れば佩刀の名字を剥奪され、一生淑女のままです。頭が狂いそうになります。そして私は結婚年齢に達しましたので、こうして参上した次第なのです

「俺とおまえが……結婚？　いつ」

「白夜様が一八歳になられたらすぐにでも」

「どうやら虚言や妄言の類ではないようだ。目を見れば分かる。」

佩刀は嘘をいってはいない。

佩刀の名で思い出す。佩刀といえば日和見神社の宗家のことだろう。この村の加持祈祷の一切を請け負う神事の血筋だ。長年この村で居住していれば嫌でも耳に入る名前。

佩刀。

はかし

うたたね

転寝。

なとぎ

名伽。

この御三家は日和見村の頭領のような存在だ。

「それでは白夜様」

少女は俺の前を通り過ぎ、フロアリングを抜けていった。その折に甘いシャンプーの匂いがした。それが色香となって部屋に残った。少女は下駄を履き、扉の前に立った。

帰るのだろうか、とぼんやり考えていたところ、少女が何かいいたそうなそぶりを見せていることに気づいた。

帰る気配のない少女。熱っぽい視線が俺を縫いつけた。

「帰らないのか」

「そういつと少女はこういった。」

「お別れの接吻はないのですか」

春泥の混じった畦道を歩く。靴裏に泥がついて不快だった。

見上げると憎々しいくらいに清爽な空が広がっていた。雲がふわふわと浮かんでいて、千切れては消える。それは地平線まで連なっていた。

茫茫とした空。無意識に感慨に耽る。

素振りをしていない奴がホームランを打てるはずがない。シュート練習をしない奴がゴールを決められるはずがない。努力を怠っている人間が、努力をしている人間に勝てるはずがない。努力すらしない人間が誰かに勝ろうなどおこがましい。勝ったとしても運がよかつただけだ。それは自己の実力でもない。ただの錯覚。

そう、錯覚。

篝火かがりび白夜の人生は錯覚だらけだった。何かを間違えて、履き違えて、結局何も得ることはなかった。

後ろを振り返る。眼下には驚くほど平坦な道が見えた。土と泥。

雑草の生えた田舎道。それはまるで己の人生のようだった。起伏も何もない軌道。嬉しいことも悲しいこともない。薄汚れているだけ。空白。がらんどろ。

勘違いするなよ。

そう、自らを自戒。これは幸せな錯覚だ。寂しさが紛れたことを嬉しく感じている。ひよつとしたらしいことが起こるかもしれない。そう思ってる。

佩刀歪はかしひずみが帰った後、急いで洗面所に駆け込んだ。水で口をすすぎ、吐き出す。俺は何度もうがいを繰り返した。そうして乾いたタオルで唇を拭いた。

異物が侵入した口内は淫らだった。女の唾液がついた歯。絡み合った舌。触れ合った歯茎。佩刀歪は俺の歯を磨くようになぞっていた。軽く唇が触れた程度なのに、ものすごい威力だった。

口を離すとぬめりのある橋が架かっていた。それは篝火白夜と佩刀歪とに繋がっていた。

女が満足げに去っていくと、ひざから崩れ落ちた。そのまま放心状態。さして価値があるとは思えない上の純潔が消えた瞬間だった。死んでしまえたらいい。

俺はすさまじい罪悪感を感じた。同時に人並みの幸福感も。

ずっと虐げられていた俺には覚えのない感情。両親の轢殺シヨーとは違う愉悦。純然たる性。色情の欣喜きんき。

「バカ野郎！ 暢気に突っ立ってるんじゃないよー！」

暢気に突っ立っていたらしい。

トラクターに乗る農夫は罵声を浴びせるだけ浴びせて、俺の横を通り過ぎた。巨大なタイヤが泥土を巻き込ませて、轟々と音を立てていく。いくら遠ざかっても背中から聞こえるほど大きかった。

やっぱり死ねばいいんだ、俺は。

そう思っただけで足を速めた。雨に濡れたらしい土はぬかるんでいた。やはり不快だった。

憂鬱な一日が始まるうとしていた。

「回答やめ。後ろから回収してください」

テスト監修らしい先生がそういうと、安堵の息が漏れた。だんだんとペンを走らせる音がとまっていく。周りの体が弛緩していくのが分かった。

恐る恐る回される回答用紙。その手は震えている。

冷たい目で一瞥し黙って受け取る。ほぼ白紙の回答を重ねて、前に回した。前の奴の背中のはぶるぶると震えていた。全身が緊張で強張っている。そんなに恐ろしいのか、俺が。

テストの出来は空白の量が証明している。それで俺が徹底的にダメな奴と思われるのは心外だ。俺はただ分かる問題だけを解いているだけなのだ。

確実に理解できる問題だけに手を伸ばし、分らないと思った問題は着手しない。無駄を省いた合理主義。事実前回の成績は、百人中三十二位となかなかの好成绩だった。勉強もまあまあ出来る。そこら辺が嫌われるのだろうか。そんなのただの僻みだ。不良に勉強で負けることが恥ずかしいのだろうか。

テストは全て終了し、五分程度のホームルームで今日は終わり。予定のない俺は帰宅を残すだけだ。

担任の眉村先生が入室してくる。

先生が何かを話している。俺は頬杖をついて窓の景色を遠望するだけだった。

そしてホームルームはお開き。和気藹々とした活気。鞆に荷物を詰め込んで帰ろうとした。

その時だろうか。

教室が大きくざわついたのは。

異変に気づく。なんだろうと首をその方向に向けると、信じられないものを見てしまった。

すらりとした手足。均等の取れた肉体。その上には巧緻なガラス細工の顔が乗っていた。

腰まである黒髪をなびかせ、悠々と教室に入っていく。その姿を女子は憧憬と嫉妬のこもった目で眺め、男はひたすらに色めいていた。

そいつは制服姿だった。着物もそうだが、制服も様になっている。ぼんやりと足取りを追う。しかし何度見てもこちらに来ているようにしか思えない。

「テストはいかがでしたか、白夜様」

佩刀歪は切れ目をたわめた。

辺りに衝撃が走る、とはまさにこのことだった。誰彼問わず瞳孔を見開いている。周章する女子や眼前の光景を疑う男子。口を大きく開けて、愕然としていた。

「おまえ……、本当にこの生徒だったのか」

「そうです。驚かれましたか」と佩刀は笑んだ。すれ違ったら振り向かずにはいられない微笑。

「驚いた。だって俺、おまえのこと知らなかったし」

「それも当然でしょう。なにせ白夜様はご遅参やご欠席をたくさんしておりましたから。外出をほとんどなさらなかったのでは、私のことを知らなくてもやむを得ぬことかと」

佩刀の口調は論理的だった。正鵠を射ている。佩刀の聡明さが見て取れた。

しかし。

それは俺の実生活を熟知していることを前提とするものだった。

監視。

んなバカな。

一抹の疑心。この女はどこまで知っているのか。

この村では俺が殺人鬼の息子であることは知られていない。もう何年も前の事件であるし、特集する番組もないだろう。

隠しているわけではない。ただ露見してほしくない、とは思う。

けれどそれは杞憂。誰も篝火白夜の過去に興味はないのだから、心配しなくていい。

不可測の事態。まさか実際問題、昨日の少女がこの学校の生徒だったとは。

「思ったのですが、それでは出席日数が危ういのでは」
「先生を殴ってどうにかする」

佩刀はふっと頬を緩めた。「なるほど。確か白夜様の成績は上位でしたよね。学年順位は三十二位。さすがは白夜様」

なぜそれを知っているのか。

口元まで来た疑問を押し潰す。それは些細なことだ。

「そういっておまえはどうなんだ」

「私ですか。申し上げづらいのですが、よろしいでしょうか」と目を下げる。いいにくいことなのだろうか。

首肯すると、佩刀はおずおずといった。「学年順位は一位。全国模試では総合偏差値七十七でした」

偏差値が七十七。東大レベルである。

瞠目すると、恥ずかしそうに俯いた。「すみません。なんだか自慢しているようで……」

「別にいい。おまえがそういう奴とは思わない」

それは本心からの声だった。目の前の女がそんなことを自慢するとは思えなかった。この女は自己顕示欲や優越感からもっとも遠い存在に見えた。佩刀歪はそんな低俗な人間ではない。

この女の口吻からは知性や知性といったものが充溢していた。それに狡猾さや卑しさはなく、純粹に人の内面と向き合える人間なのだろう。

逆にいえば、いくら成績がよかろうが、運動神経がよかろうが、顔がよかろうが、内面がくだらなければ冷酷に切り捨てられるような性格。もしそうなら目つきが悪くとも、髪が金髪であっても、目が死んでいようと関係ないのだろうか。この女にとって内面の価値こそが全てで、表層の虚飾などどうでもいいのだろうか。

だとすれば真の意味で、人を見極める慧眼を持っているのかもしれない。

ならば。

なぜ俺に話しかける。

「白夜様……。そのお言葉、謹んで承らせていただきます」

佩刀歪は大仰に腰を折って、こうべを垂れた。その様子は紛れもない敬愛、尊敬の念がこもっていた。不思議だった。なぜ俺に頭を下げるのか。

「頭を上げる。こつちが恥ずかしくなる」

「分かりました」

恭順な返事。疑うことを知らない幼児のような表情。

普段佩刀歪がそういう人間なのかは分からない。しかしこうも無防備な表情をされると困る。

だれそれ関係なくこうなのだろうか。別に俺に限った話ではなく、色々な人間に同じように笑うのだろうか。

少し嫉妬する自分に自己嫌悪。自分だけ特別と思うこと自体が凡人の発想だ。非凡を願う凡人なんて山のようについて、ゴミみたいに埋もれている。本当に非凡な奴は自己を特別とは思わない。狂人が自己をおかしいと思わないように。

その分かりやすい例が目の前にいる。

試しに、特別な奴の条件はなんだと思う、と訊いてみる。この女の場合、自分のような人間です、と答えても許される。佩刀歪は真正銘、特殊な人種だ。

できれば今すぐこの場から立ち去りたかったが、口が勝手に動いていた。

この女について知りたい、といったのだろうか、俺は。

「篝火白夜様であることです」

「は？」

「白夜様は唯一無二の存在です。ですから、篝火白夜様であることはすなわち、特別であるということです。白夜様ほど尊く、素晴らしいお方はいらっしやらないでしょう」

「……やっぱいいい。訊いた俺がバカだった」

佩刀のほうはというと、「^{いっしょ}、^{いっしょ}、^{いっしょ}」毫も疑問を抱いていないようである。
人でかくはん攪拌される教室。倉皇そうおうと人が集まっている。

「白夜様。この後に「ご予定等はおありですか」

「ない」

「では私と帰りましょう。よろしいでしょうか」

佩刀はにっこりと笑った。魔性の笑み。男子はバカみたいな表情

で呆けていた。

俺は目をすがめ佩刀を見る。「どうかいたしましたか」と問う女。「なんでもない」といって、鞆を肩にかける。

俺は一人で帰ることにした。

昼下がりの日差しは眩しかった。

テストは正午ちようどに終わったので、下校時間は必然的に早くなる。辺りには雨稜高校つりょうこうの学徒がぼつぼつと散在していた。

春風で紫苑色の躑躅つづじがそよぐ。脇には清冽に流れる川があった。随分前に補強工事があったらしく、防波堤が築かれていた。

後ろ目で見ると、背後には俺に随行する女の姿があった。その距離は常に一メートルを保っていて、一ミリも違えることはない。足取りは湖畔を歩く鳥のように静かだった。

気にしないことにする。

穏やかなせせらぎが聞こえてくる。それは自然と頭に入っていて、心地よかった。俺はこの音が好きだった。流動する水。それに身を任せる自分。平和。安泰。面倒なことがないのはいいことだ。足は意識せずとも自宅に向かっていった。それでも後ろの女はついてきた。

とうとう俺の家の前まで。

ポケットに手をつ突っ込む。眼前にはボロアパートが見えた。女は従順に俺の一步後ろにいた。

「おまえ」とさすがに気にかかって問いかける。「家に帰らなくていいのか」

「別に構いません。白夜様に傳かくことは、私の義務であり使命であり喜びですから。どうぞお気になさらないでください」

振り返ると佩刀は嫣然を浮かべていた。瞳は弧の形を描き、唇は緩やかにしなつた。

何もいわずに背を向けた。アパートの二階に上がり、扉を開錠する。

ふと振り向くと佩刀はやはりそこに佇んでいた。目が合うと包み込むような優しい笑顔を見せた。

変な気分だった。

そんなことが一週間も続いた。

「すみません、白夜様。今日は生徒会の議会があるのでお見送りをすることが出来なくなつてしまいました」

始業式から一巡した日の昼休み。

いつものように一人で食べていると、佩刀はそういった。

教室は俄然騷擾ウツキウツキたる雰囲気ウツキウツキに包まれている。

俺は佩刀が生徒会の人間であることを初めて知った。確かにこの女はそういうことに秀でていそうだった。俺とは違い人望はあるようだし、周囲の反応から判断するにみなから好かれているのだろう。つくづく俺とは正反対の人間だった。

教室で食べるのはやめようかな、と思う。

次からは誰もいないところで食べよう。中庭辺りが穴場かもしれない。

「そうか」といって、パンをかじる。

「申し訳ございません。ここ最近生徒議會を無断欠席していたものですから、強制招集を受けてしまいました」

佩刀は済まなさそうに下唇を噛んだ。

俺は真面目そうなの女が無断欠席をするのかどうか疑問だった。

「欠席したのか。なんで」

「白夜様を送り迎えるためです」

佩刀は当たり前のようによく返した。それには確然たる意志が感じられ、決して翻せない信念といったものが窺えた。

「ずっと俺についてきたな、おまえ」

「当然です。白夜様に関することは何よりも優先すべきことですから」

面喰ってしまふ。その言葉もだが、驚いたのはその目だった。

波の立たない水面のような双眸。それは己の中に絶対なものを持っているものの目だった。

絶対なもの。

俺なのか。

佩刀歪にとって、篝火白夜は絶対な存在なのか。

そういったことを問うと、佩刀は肃々と頷いた。「その通りです。私にとって白夜様は絶対な存在なのです」

迷いが無いということは恐ろしい。

迷いが無いということは自分の言動に疑問を持っていないということだ。躊躇。逡巡。遅疑。佩刀歪にはそういったものがない。この女は篝火白夜という人間を崇拜すらしている。

「金髪だぞ」

「関係ありません」

「不良だぞ」

「関係ありません」

「頭よくないぞ」

「関係ありません」

「俺と関わることでその他のもの全てを失うのだとしても」

「関係ありません」

佩刀歪は毅然とした態度でいった。

「私には白夜様がいていただければそれで十分です」
むせそうになった。

慌てて佩刀が介抱しようとするが、片手で制する。

「おまえ……、なんかおかしいぞ」

「おかしくなどありません。おかしいのは周りです。なぜこんなにも公明正大なお方を遠ざけるのか……。理解が出来ません」

佩刀はわけが分からないといった様子で溜息をついた。

なんてこつた。この女は頭がおかしいんじゃないのか。

根強い忠誠はどこから湧いてくるのか。

根深い陶酔はどこから湧いてくるのか。

「生徒会っておまえみたいな奴が集まってるのか」と思わず呟いてしまふ。もしそうだとしたら、生徒会なる組織は魑魅魍魎の集まりだ。

「何がですか」

「何でもない」

「生徒会が気になさるのですか」

「いや……、その、大変なのか、それ」

「そうですね……。確かに生徒会の仕事は雑多なこと多いです。

白夜様が望むのなら退任いたしますが」

「……本気か」

「白夜様がお望みとあらば」

佩刀の目は真剣だった。

このまま首を縦に振れば、本気で退任する。

佩刀に干渉するつもりはない。そもそもこういうのは嫌いだった。第三者の意志で自分のあり方が決まるのは誰だって嫌だろう。俺も嫌だ。

「辞職しなくていい。そこまでする必要はないだろ」

「しかし、白夜様に裂く時間が減ってしまいます。私としては芳し

いことではありません」

「そのままがいい」

「白夜様がそうおっしゃるのなら」

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

「それでは白夜様」と深く一礼して教室を去る佩刀。

その姿をぼんやりと眺める。癖のない黒髪が綺麗に流れていく。

身長は百六十センチと高いのに、縦は細い。全く欠点がない。佩刀歪は恐ろしく現実離れた女だった。

目を閉じると、佩刀の残像が浮かび上がってきた。ある程度の輪郭なら思い出せる。

それはつまり。

佩刀歪が身近な存在になりつつあるということだ。

六時間目の古典が終わると、緊張していた雰囲気^{雰囲気}が切れたようだった。

古典の先生が退出すると同時に、みな^{みな}の表情に笑顔^{笑顔}が浮かぶ。五十分間の拘束から解き放たれた開放感^{開放感}。何をしても大丈夫。そうだった雰囲気^{雰囲気}が辺りに充満した。

俺はその様子を杳として見ていた。ガラス越しの世界を眺めているようで現実味に欠けた。

ホームルームは相も変わらず不変だった。変わり映えのしない光景。変わり映えのしない自分。

放課後。

俺は頬杖をついたままだった。それは誰かを待っているようだった。

誰を待っているのか。

気がつけば習慣になっていたのかもしれない。誰かを待つという行為。では、その誰かとは誰なのだろうか。

机の上で頬杖をし続ける俺。傍から見れば滑稽な絵図^{絵図}だろう。いきがった男がきもしい女を待ち続けている。

佩刀歪^{はかしひずみ}は生徒会の招集を受けている。

そうだろう、と思うも、体が動かなかった。倦怠感。疲労感。そうだったものが体中を巡った。

ふっと自嘲して、机から立ち上がる。

その時後ろから気配がした。

「ちょっといいかな？」

女の声。振り向くと声質通り女が立っていた。

白亜の肌。髪は肩まであって、目が合うと天衣無縫に微笑んだ。

訝しげに眉をひそめる。その様子に気づいたららしい女は、一步俺に近づいた。両手を上げる。敵意はありません。そういったジェス

チャー。

「ごめんごめん、いきなり話しかけて驚いた？」と舌を出す女。片目をつぶって、妖精のような笑みを浮かべた。

「何か用か」

「まあね。ねえ、あなた」と一旦区切り、「私と友達にならない？
と聞いた。

「断る」

俺はさっさと帰ろうとした。すると女は俺の服の裾を掴んだ。「
待ってよ。もう、イジワル」

「……離せよ」

「……話せよ？ なるほど、あなたは私と話したいのね。分かった
わ、近くにいい喫茶店があるからそこで話しましょう」
「って、おい」

静止の声を振り切って、名の知らぬ女は強引に俺を連れていった。
言葉の解釈を誤った女は上機嫌そうだった。テンポの速い鼻歌を
歌い、スキップ寸前といった具合。やけに気分よさげだ。

女に連行される金髪。周囲の学生たちは奇怪な目を向けた。

廊下を猛スピードで駆けていく女。道連れを食らった俺は立ち止
まることが出来ないでいた。そのまま下駄箱まで一直線。有無を言
わさぬ口調で、靴を履き替えるよう命令。理不尽なものを感じなが
らも女のいうとおりにする。

「結構飛ばすけど、いい？」

反応する間もなく、俺の悲鳴は尻すぼみになって消えていった。

強制連行された先には綺麗な喫茶店があった。取り囲むようにいくつものプランターが配置されており、チューリップやパンジーなどの花が植えられていた。その隣には自転車がとめてあった。「行きましよう」

ずい腕を引つ張られる。思いのほか女の膂力じりょくは強く、抗うことは難しかった。あれだけ走ったのに汗一つかいていない。涼しい顔ではてた俺を見る。体力に自信はあるが、この女には敵わない。無尽蔵のエネルギー。この女は超人か。

肩で息を整えながら女に連行される。女がドアを開けた。居然とした鈴の音。どこか気合いの抜ける音だった。

店内は静かだった。それもそのはずで、客が一人もいなかった。ただ店員らしい女が一人いただけだった。赤いエプロンを着用している。

女は眠たそうに机に突っ伏し、暇を持て余しているようだった。

ほどよい内装。テレビの音だけが静寂を慰める。

俺たちに気づいたららしい店員は、ゆっくりと頭を上げた。まず視軸が俺を連れてきた女を捉えた。次いで俺に標準が定まる。店員は不思議そうに瞳を凝らした。

「……玉梓たまずき」

「お店の番ご苦労さま、東子とうこ」

横にいる女は店員に向かっていった。どうやら店員の名前は東子というらしい。

東子なる店員はおどけるように肩をすくめた。純白のリボンで結えられた髪が揺れる。頬には妙な痣があった。きつと突っ伏している時についたものだろう。なんか間抜けだ。

「その様子だと走ってきたの」と店員は問うた。呼吸困難になった俺を憐察したのだろう。店員は気遣うようなウイंकを投げかけた。

「うん。彼を連れて、無理やり」

はははと笑って、店員は俺と女をテーブルに促した。店員が座っているテーブルへと向かう。これ幸いとソファアに身をゆだねる俺。

対して、玉梓と呼ばれた女は俺の横に座った。優雅に足を畳み貴婦人のように腰を下ろす。なんだか腹立たしい。どうして疲れない。

「それで、彼が例の？」

「そういうこと」

女は典雅に笑った。深窓のご令嬢のよう。

俺の存在を無視して開始される会話。それもその渦中には俺がい
るらしい。俺はむっとした。「おまえらの目的はなんだ」

「そういえば自己紹介がまだだったわね」と思っただしたようにいう。

「私は練絹玉梓ねりぎぬたまずら。あなたと同じ二組の人間。目の前にいる子は梅雨

利東子りとうこ。所属は2 - 1組よ」

そんなことはどうでもよかった。それは話題のすり替えだ。それ
では女の素性は知れても、俺を連れてきた理由には繋がらない。

例えば殺人事件があったと仮定する。その原因がナイフだと知っ
てもどうにもならない。ナイフという固有名詞を知ったところで根
本的な問題解決には至らない。重要なのは、なぜ凶器にナイフが使
用されたのか。どうしてその人が殺されたのか、だ。

「練絹」

「どうしたの？」

「俺は帰る」

「無理」

その二文字で叩き潰される。武芸者なのかあっさりと手を捻られ、
抵抗する意志を奪われる。柔道の技のようなものを受けた俺は、ソ
ファーの上に転がった。

「あなたがいないと意味がないのよ」

女はしとやかに笑った。しかし女の力量を知った今、それは違う
意味合いを帯びる。逃げてはいけません。逃げたら武力に訴えます、
と言外で伝えているようだった。

「なんなんだよ、おまえ……」

「あなたに害を与えるつもりはないわ。あなたと友達になりたいだ
けなのよ」

練絹の真意は分からない。もしかしてこの手の詐欺が流行っているのか。あなた様の許嫁です。あなたと友達になりたいの。

俺は無気力に練絹を睨んだ。動じることなく微笑を返される。なんだか調子が狂う。

「玉梓は君に執心でさ、まあ簡単にいえば君に興味があるんだって」「東子のいうとおり。あなたを一目見たときから、その何かしら。来るものがあつたのよ」

胸を撃ち抜かれたしぐさをする。演技じみていたが目は鋭かった。性質の悪い冗談だ。

「なっ、あなた、鼻で笑つたわね！ 私のことバカにしてるでしょ」「バカにしてない」と弁解した。「ただアホだとは思つた」

「何それ。意味変わらないじゃない！」

「それはバカでアホってことか」

「違うわよ、失礼ね。だから友達が出来ないのよ」

だろうな、と鼻で笑うと、鼻で笑うな、といわれて殴られた。頬骨を的確に掴んだ拳。そこら辺の不良のパンチよりも強力だった。

その様子をずっと見ていた店員はくすくすと忍び笑いを漏らした。白のリボンが蝶のようにパタパタと動いていた。富士額ふじひたいとした面立ち。瞳は深淵のように深い。

俺は女がまつたく臆しないことが驚きだった。それは梅雨利という女も同様で、俺を軽くあしらう。

俺と顔を合わせた人間が取る選択肢は多くない。一目散に逃げるか喧嘩を売るか。その二つしかなかった。この二人のように俺と恐れずに接してきたのは佩刀歪くわいぐらい。それは新鮮な体験だった。

戸惑っていたのかもしれない。夢だったのかもしれない。こうやって構えずに話し合える人が欲しかったのだろうか。よく分からない。最近こんなことばかりだ。

「ねえ、篝火君かがりび。私、何者だと思つ？」

特に考えることなく答えた。「高校生」

すると店員は、「なぜそう思つ」といった。

「まず店員にしては若すぎる。次いで厨房裏に黒塗りの鞆が少しだけ見えた。雨稜高校の鞆だ」といって、店員のエプロンを指差す。

「何より制服の上にエプロンを着ているのが決定的だ」

「ご名答。見かけによらず頭は切れるみたいだね」

「これくらい誰にでも分かる」

店員は間を開けた。どうやらこれからが本題らしい。

「なら質問。なんで同じ学校にいる私が、走ってきた君たちよりも早くこれたのはなぜだと思う？」

「簡単な話だ。おまえは自転車を使って先回りしたんだ。店先に止めてあった自転車、おまえのдар。この様子だと一人も客はいないようだし、自転車には雨稜高校のシールが貼ってあった」

俺は店先に駐輪してある自転車を示した。メタリックな銀色。市井によく出回るモデルだった。

「さすが私の見込んだ人だわ。洞察力は合格ね」と練絹は満足そうに言った。

「うーん、私もまあ及第点かな。こんなことも分からなかったら無言で逆十字固めをかますとこだけだ」

「お、恐ろしいこといな……」

「私、頭の悪い人嫌いなんだよね。それと女を食べ物にする男。その点君は安心かな。女に関心なさそうだし」といった後、考え直すそぶりを見せる。店員は須臾の間黙考した。「いや、そうでもないか。話変わるけど、君って佩刀さんと付き合ってるの？」

「……あー、それ私も気になるわ。あの難攻不落の要塞をどうやって切り崩したのかしら」

こっちが聞きたい。

「知るか、そんなこと」

「なるほど。篝火君は秘密主義ってことなんだ」と店員がニヤニヤ笑う。

何かを勘違いしている目だった。

訂正するのも面倒なので黙っておく。

「白夜様だもんねー、どうやってあの堅物を手懐けたのか……。イケナイ薬でも使ったの？」

「使ってない」

「まあ関係ないか。なんだか君。面白そうだし」と梅雨利東子は猫のように笑った。

点けっ放しのテレビからは、例の新種に関する報道がなされていた。

ついに連続切断魔 『鬼』による四件目の鬼隠しが行われました。

ニユースキャスターの男がすごい形相で唾を飛ばした。『鬼』というのは、神隠しの新種に名づけられた異名だ。

犯人は神ではなく 鬼。そう結論づけたわけだ。

「最近『鬼』の活動が活発化してきたね」とテレビのほうに目を向けた梅雨利がいった。「ていうか、『鬼』なんてつまらないネーミングだね。神隠しならぬ、“鬼隠し”ってわけ？ 安易というか単純というか……。篝火君だってそう思うでしょ」

そう促される。別に名前なんてどうだっていい、と思ったが、とりあえず頷いておいた。

「けどまあ、いたいけな赤ん坊を襲うんだから、『鬼』っていわれども無理ないかも」

鬼というのは古今東西、畏怖と恐怖の対象である。メディア媒体からこれらの凶行を鬼の所業と解釈されても首肯に至るものはある。テレビでは『鬼』について、ためつすがめつとした論争が起こっていた。犯人は自己顕示欲の強い若者であるとか、原因はサブカルチャーなどの虚構に影響され過ぎたからであるとか、そういった憶測が飛び交っていた。中には警察機関の腐敗を嘆く意見まで登場している。

「……鬼かあ」と練絹は憂いのこもったため息をついた。

「もしかして次は自分かも、なんて心配してる？」と梅雨利が質問を投げかけた。「大丈夫だって。標的は相も変わらず赤ちゃんばっ

かりだから。そういう意味では高校生は安心だね」

「それ、不謹慎だぞ」

そう注意すると、「上等よ。他人の不幸は蜜の味、ってよくいうじゃない」と遺族を逆なでするような発言が返ってきた。「禍福はあざなえる縄のごとし、ってことわざ知ってる？ 単に幸福が来る前に巨大な不幸が襲って来たってことよ。運が悪かった、としかいいようのない」

めちやくちやな理論、だとは思うが、そうなのかもしれない。幸福と不幸は波のように周期していて、偶々『鬼』との遭遇という波が襲ってきただけ。それは確率論に近い考えだ。

なら、俺にも幸福はやってくるのだろうか。

愚問だとすぐに気づく。篝火白夜の禍福はあざなえない。別に我が身が不幸だと嘆くつもりはない。そうやって己に憐憫や同情を寄せることはしない。

幸福と不幸は波の関係。ただ俺の場合、一直線なだけだ。上がりもせず、下がりもせず、常に平坦。幸福も不幸もない。今を停滞している。

ある意味、一番幸せな生き方なのかもしれない。これといって悲しみや憂いに直面せず、平和に生きていく。人はそれを退屈というが、別に悪いところなんてない。まあ、良いところもないが。

自分の生き方に後悔はしていない。自分の生き方だけは否定しない。

それだけは、しない。

「いつとくけどあなたにその、特別な気はないわ！ た、ただ面白そうな人だと思って、声をかけただけよ！ かか、勘違いしないでよねっ！」

練絹はいいわけするように言った。顔は赤い。

「ああ」と気のない返事をする。

梅雨利はそれを楽しそうに眺めているだけだった。「そうだ、オレンジジュースいる？」

「いるっ！」と練絹。

「いない」と俺。

分かったといって厨房に消えていく。その顔には策士のような笑みが張りついていた。

梅雨利がいなくなった途端、練絹は顔を俯かせた。

「本当に……、佩刀さんと付き合っていないんだよね？」

練絹は物憂いとした声で尋ねた。前髪で顔が隠れて表情は分からない。

「そんなわけではない。俺とあいつじゃ釣り合わない」

「……そう、なんだ！」

練絹は妙に嬉しそうだった。なんか失礼だぞ、それ。

ヒーリングファンがぐるぐる回る。テレビは誰となく情報を垂れ流す。

深々とした雰囲気。蒙昧な頭脳で練絹の言動の意味を探ろうとしたが、やめた。いちいち言葉や態度に意味を求めるなんてバカみだ。

どうせ飽きる。俺を深く知れば失望する。この程度の人間だったのか、と認識を改めさせられる。俺の元から去っていく。

必然だ。覆しがたい。

結局何も得られない。変わらない。

飽きられるなら早いほうがいい、と俺は思った。

瞳が光を捉える。

呻き声を上げながら目を覚ます。朝だった。

生活感のない閑居。男の一人暮らし、というわりに結構整っているほうだと自分では思っている。もっとも、整然としているわけもなく、つとに殺風景なだけだが。

閑勤かんけいとした日光。窓からは亭々と大木が連なっているのが見える。無為自然な大路がどこまでも広がっていた。無数に枝分かれする間道が雑然と田畑を区分けしていた。

そこら辺にほっといておいた携帯を掴み、ディスプレイを見る。七時。

あと数分寝れる。いつもなら余裕をこいて二度寝し、その後遅刻、あるいは無断欠席するところだが、今日に限ってそういう気にはなれなかった。

佩刀歪はかしひずみに当てられたのだろうか。あの女はきっちりしている。常に自分を律していた。その清廉な様子に感化されたのか。

ポロシャツの袖に腕を通し、ボタンを留める。かける相手もない携帯電話をバックに入れる。授業中に機能しない筆記用具。書かれた形跡のないノートも同じく。

普段なら蒲団に包まっている時間帯に学生らしいことをするのは久しぶりだった。悪の道からの再起。不良の汚名返上。バカバカしい。

腹が減ったので冷蔵庫を開ける。何もなかった。諦めることにする。

することがなくなったので窓の縁へりに腰掛けた。窓ガラスに頬をつけ、ぼんやりと時間を過ごす。暖色な色合いを見せる風景が視神経に伝達された。

こういう時に趣味があればいい。趣味があれば気が紛れる。寸暇

を潰せる。けど俺には趣味がない。

本も読まないし、音楽も聴かない。一応テレビはあるものの、これといってテレビ鑑賞に関心はない。本当に何も無い。無駄な呼吸ばかりしている。

日輪に染まる部屋。どこかくすんでいて、写真ブレしている感があつた。

そうして時間を持て余しているとインターホンが鳴った。眉をひそめて玄関に向かう。

「いい天気でございますね」

扉を開けると、佩刀歪がいた。純真な笑みは眩しく綺麗だった。

空を見上げると、確かにいい天気だった。「空が青いな」

「そうですね。見ていると清々しい気分になります」

感嘆の息を漏らす。目を細めると人形のように見える。シヨウウインドウ越しのマネキンみたいに精緻だった。

「緊急の用事か何かか」

「いえ、そんな大層なことではありません」

「おまえが朝に来るなんて初めてだぞ」

佩刀は微笑した。「そうでございますね。誠に勝手ながら、白夜様のお迎えに上がった次第なのです」

この女ならありえる、と思った。放課後に見送りと称してついてくることはあつたが、朝から迎えに来たことはなかった。

この女は送り迎え、その両方をするつもりなのだ。

下手をしたら遠回りになるのではないだろうか、と心配。「まだ七時だ。早すぎやしないか」

「ダ、ダメでしょうか……」

「ダメ、じゃない。立ったままじゃきついだろ。よかつたら入れよ」視線を自分の部屋に向けた。登校時間まで時間はたっぷりある。

その時までずっと玄関で立たせておくのは忍びなかった。

佩刀は相好を崩した。体をそわそわさせて、上目遣いに俺を見る。「いいのですか？ その、お邪魔になって……」

「不法侵入した奴がそういうか」というと、佩刀は申し訳なさそうに低頭した。

蒸し返すつもりはなかったが、気にしているらしかった。

佩刀は恐れ多いことをしました、と何回も謝り、青菜に塩をかけたように小さくなった。

…… オーバーな奴だ。

そのことについて咎めるつもりはない。自宅に盗まれて困るものはない。たとえ部屋を荒らされようが、メチャクチャにされようが、どうでもいい。元に戻せばいいのだから。多分、時間はかからない。何もないから。

「一度でいいから入ってみたかったです……」

「ん、何かいったか？」

「いつ、いえ、何もいつていません！」

体を前のめりにして必死に訂正する。佩刀はぶんぶんと首を振った。

釈然としなかったが、とりあえず案内することにする。

興味深そうに室内を見渡す佩刀。白っぽい壁。茶色のフローリング。時折それに触れてはにんまりと笑うのだった。

不思議に思いながらも先ほどのように窓の縁に尻を乗せる。佩刀は卓袱台の脇に鞆を置き、近くに腰を下ろした。屹然と胸を張って端座をつく。この女はどこにいても見栄えする。汚い部屋の中でもそこだけ違う空間。場所時間問わず優雅でいられる女だった。

「悪いけど、お茶も何も出せない。あいにく切らしてるんだ」

「構いません。私のことなど気にせずご自分の時間をお過ごしください」

そうか、と小さく頷く。足を伸ばして固定された風景を見た。

佩刀は正座のまま動かなかった。仙人のように瞑想する。それでも気配は常時俺に向いているのが分かる。気になるレベルではない。相互不可侵。

こついつては変だが、気兼ねなく放心していられる。何もしない

ことが好きな俺にはちょうどよかった。

俺の意志を汲んだのか、これと違って口を開けるそぶりを見せなかった。俺が黙っていると佩刀も黙る。俺が喋るとなんらかの言葉が返ってくる。気のない応答や、つまらない返答を俺がしても、それが変わることはない。力のない俺の言葉が何十倍もの質量を持つ言葉に変換されて帰ってくる。

話題の主意を違えることはいわない。かといって出来過ぎたこともいわない。主導権は俺のまま話を進行してくれる。篝火かがりび白夜の意志が最優先される会話。佩刀の意向は二の次に回される。本人はそれでいいらしく、むしろそうであることすら望んでいる。

佩刀との距離感は心地よかった。佩刀との会話で思慮の深さに感心することはあっても、基本的に何も起こらない。それはいいことだ。すごく。

「歪」

「なんでございましょうか」

「何か話してくれないか。何でもいい。おまえが面白いって思ったことを」

「承知しました。そうですね……。では、とある説話の話をいたしましょう」

目で俺の気色を窺う。その話でいいですね、という了解を得る合図。軽く頷くと嬉しそうに顔を綻ばせた。

耳に快然たる声韻で語りかける佩刀。佩刀の紡ぐ物語が頭の中に挿入され、場面場面の光景が目めに浮うかんだ。

佩刀歪は話しも得手だった。馥郁ふくいくとした声は眠気ふくすら誘う。

苦手なものがないのか。

佩刀の話を聞いてる時に、ふと思った。

「そろそろお時間です。ここら辺で打ち切ってもよろしいでしょうか」

佩刀は腕時計から視線を上げた。

「どうやら時間らしい。」

話に聴き惚れていたせいか、時間のことは気にならなかった。それほど佩刀の口上が巧みだったのだろう。

「いかがいたしますか。ご所望でしたら続けますが」

「学校に遅れるぞ」

「大したことではございません。白夜様がよろしいのでしたらもうしばらく話させていただきますが」

出来るならばそうしたかった。だがそれでは佩刀に迷惑がかかるそれは嫌だった。

ここで断れば佩刀は傷つくだろうな、と思った。佩刀は純粋な好意で申し出てくれる。それをむげにするのは感に堪えないものがあった。

「いや、続きは次の機会つてことにする。よくいうだろ。楽しみは後に取っておけて」

佩刀は目を伏せた。前髪からは紅潮した頬が見えた。

「そうでございますか。そのお言葉、衷心より拝受させていただきます。ぜひ楽しみにいらしてください」

うまく断れただろうか。

コミュニケーション能力の落ちた俺にはこれが精一杯だった。

「それでは白夜様」

「ああ」

その一言で立ち上がった。手元にある鞆を掴み肩にかける。佩刀も華美とした動きで鞆を手を取った。

佩刀がやや先行して、靴を履く。手慣れたしぐさで扉を開けた。

ドアノブを掴み、一人一人入れるくらいのスペースを確保する。その体勢のまま微動だにしない。

「……出ないのか？」

「まずは白夜様から」

ややあつて得心する。つまり俺から先に出るというわけか。

大時代的な気もするが、これまでの佩刀を鑑みれば十分ありえる行動。

佩刀を横目に扉を抜ける。完全に通過した後、佩刀は後ろ手で扉を閉め、ゆつくりと下がった。俺はポケットから家の鍵を取り出す。施錠の完了。再びポケットに戻す。

涼風が香る。佩刀の艶美とした髪がさらさらと流れていく。佩刀はあおられた髪を片手で押さえた。切れ長の双眸が細い弧を描く。冷たい瞳が虚空を見つめていた。

やっぱり人形だ、と持った。

佩刀歪は人形のように無機質だった。人間らしさを失った肢体。美しさと凜々しさが先駆した相貌は浮世離れしていた。

「……白夜様？」

怪訝そうに見つめられる。俺は気圧されそうになった。

こんな眼球、見たことがない。あまりに綺麗すぎる。無垢で純粋な目。何かが過剰に余っていて、何かが過剰に足りていない。過不足がありすぎるのだ。

身長はさほど変わらないので、目の位置はほぼ同じ。スマートな体を屈めて、下から覗き見られる。俺の吃語きごとした様子を心配しているようだった。

なんでもない、と誤魔化す。実際は何でもあるのだから、きつと表情に表れているだろう。

「分かりました。床の作りが脆いようですから、足元にお気をつけください」

しかし佩刀は特に詮索しなかった。

見逃すことにしたのだ。俺の思考を瞬時に付度そんたく、その意向に従っ

た。そういうことなのだろう。

「決して白夜様のお住まいをけなしているわけではありませんよ。客観的観測です。お気を悪くなさらないでください」

「あのなあ……、それくらいでふてくされるかよ。それに俺もそう思ってるしな」

「補強工事をお勧めします。ただ失礼ながらも申し上げるならば、白夜様の家計は貧困しております。持ち合わせがないなら私が工面いたしますが」

「遠慮する。女を食い物にする男は嫌われるって、誰かがいった」
「卓見ですね。地球上の男性に聞かせてあげたい名言です」

「それと頭の悪い男も嫌われるらしい」
「頭脳が鋭敏であることに越したことはありません。それに関して
は白夜様は完璧ですね。理想の男性像を体現したお方です」

凝然と目を合わす。佩刀の目は揺れておらず、波紋一つ広がらない。これまでの様子から考えてみて、心からそう思っているらしい。

「……なんでそう思う？」
前々から思っていたことを^{そじょう}俎上^{じょう}に上げる。なぜそうも高く見積もるのか。過大評価も甚だしい。篝火白夜はそんな高尚な人間ではない。

佩刀歪は相変わらず無表情だった。表情がないのではなく出さな
いだけ。佩刀はあまり感情というものを表に表さない。

佩刀歪は自分をコントロールできる人間だ。自分という存在を完
全に把握している。ただ俺が笑えといえば笑うだろうし、泣けとい
えば多分泣く。佩刀は確固たる自分を持っていながら、行動の指揮
系統を俺に委託しているのだ。

「それはあなた様が篝火白夜様であるからです」

「……は？」

「私が佩刀歪で、あなた様が篝火白夜様。それだけで事足りるでは
ありませんか。これ以上の理由が有史以来存在するとは思えません」

ムチャクチャな理論。正直意味が分からない。

存在自体が何かの理由にはならない。理由には百パーセント根拠がある。佩刀の場合、その根拠として篝火白夜の存在を定義しているのだ。

「私は白夜様の許嫁です。その体は白夜様に傳くためにあり、その心は白夜様に捧げるためにあり、その全ては白夜様に帰結します」

「そんなことで人生を棒に振るのか」

「そんなことはありません。白夜様は立派で気高いお方なのです。白夜様自身が自覚なさってないだけです」

いつの間にか校門の近くにまで来ていた。目の前には公立雨稜高校と書かれた表札。

俺は口を噤んだ。同様に話すことをやめる佩刀。

佩刀歪は篝火白差の思うとおり動く。篝火白夜が口を閉ざしたら、佩刀歪も同じ行動をとる。

喋りたくないと思えば、佩刀はそれを推察してくれる。苦慮も憂慮もない、安息。偽りの安息。

「……すみません。出しゃばったまねを」

「謝るな。意味が分からない。おまえが謝る意味が分からない」

「白夜様……」

「立派だとか、気高いだとか。そんなのどうでもいいんだ。自分の価値くらい自分で決める」

ともなればきつと、俺の価値は飴玉一個分にも及ばない。

誇りなんてない。プライドなんて一寸足りともない。

誇りで生きられる人間はほとんどいない。だけど誇りのない人生は人生とはいわない。

だから俺の人生は飴玉一個分の価値すらない。

四時間目の数学。授業担当は担任の眉村まゆむらだった。

三角定規を持って教室を遊泳する。問題演習の時間らしく、ちよくちよくと生徒のノートを覗き見ていた。

三列前の女子には柔らかに注意を促し、その横の男子には何か冗談らしいことをいう。小さく苦笑がして、誰かが何かをいった。再び教室が湧いた。

その勢威を保ったまま、眉村が俺の横を通り過ぎる。その時だけ教室が静まり返った。眉村が俺の後ろにいる生徒に声をかける。友人らしい誰かが小言を呟いた。失笑が漏れる。俺は教科書を閉じた。授業時間はまだ三十分もあった。

信じられないことだが始業式から皆勤賞だった。十日もの間、遅刻や欠席をしたことはない。やはり佩刀はかしひすみ歪のおかげなのだろうか。佩刀がいなければ今頃俺は、いつものように蒲団の中だった。

驚異的とすらいえる結果。一部の先生は俺が更生しようと頑張っているのでは、と解釈しているようだった。確かにこの一巡、俺はそれらしい事件を起こしていない。不良も俺に突っかかってくることは不思議となかった。

佩刀か。

佩刀歪の存在が俺をより近寄りがたくしているのだろう。不良といえど佩刀と顔を合わせるのには面映ゆいのかもれない。佩刀は綺麗過ぎる。圧迫感といってもいい。美しさで裏づけされた女の色艶人の一生を狂わせることすら出来そうな容姿。この異性に気にいられたい。対峙した男子はまずそう思うだろう。

とはいったものの。

俺は今朝の出来事を思い出した。

朝。迎えに来た佩刀と登校し、教室に入ると雰囲気が変わった。豹変した、と表現すればいいのだろうか。俺が入室すると同時に、

みな配ががらりと変容した。俺を軽蔑の眼差しで見るもの、三々五々と固まってひそひそ話をするもの、憎らしげに俺を見るもの。いつものことだ。気にはならない。

机に鞆を置く。朝のホームルームまで時間は多少ある。それまでぼんやりと過ごすことにする。

「篝火かがりび」

どこからともなく声がする。

一瞬、誰の名前だっけ、と思った。それくらい人から名前を呼ばれるのが久しぶりだった。

声のしたほうに目を向けると、見知らぬ男子がいた。きつと同級生なのだろう。線は細いが目に力のある男だった。

無気力にそいつを見る。男はナイフのように尖った視線を俺に向けた。

男は意を決したように、「おまえ、佩刀さんと付き合ってるのか？」といった。

いつの間にか周囲の興味はこちらに集まっていた。みな固唾を飲んで見ている。

きたか、と思った。不可解な接触を続ける篝火かがりびと佩刀やぐさ。その関係の異常さを尋問および糾弾しにきたのか。そしてこの男が衆意の代表らしい。取り巻きの男子たちが心配そうに男を見守っている。

気がつけば廊下にも人だけが出てきた。そんなに気になるのだろうか。

取り巻きと目が合うと、思いきり睨まれた。バカな真似すんじゃないぞ。視線でそう訴えかけているようである。まだ観衆の一部にも、物騒なものを用意してる奴がいた。金属バットでないことが幸いか。ただ木製バットでも殴られるとかなり痛いことくらい分かっているはずだが。俺が野球ボールじゃないってことも。

フォームから察するに投げるつもりらしい。勿論身構えてる奴も結構いる。周囲がどちらの味方なのか、想像に難くない。あまりに

も分かりやすい勢力図だった。

「なぜそう思う」

「お、おまえがその……、佩刀さんと登校していたからだ！」

毅然とした表情にほんのり赤みが差す。周りの男子も似たような反応をした。

「それがどうかしたのか」

「どど、どうしたもこうしたもないだろ！ 僕のいいたいことが分からないのか？」

考える。結論はすぐ出た。

「歪のことが好きなのか？」

「おつ、おまえ、何を！」

そういうと、男は顔を真っ赤にした。目を見開いて首を横に振る。違うといっているようだが、そうは見えない。

単純な奴。

「そうじゃないのか」

「ち、違う！ 僕はそんな、軽薄な、人間じゃ、ない！」

「俺みたいに？」

「そ、そうだ。僕はおまえみたいな中途半端な奴が大嫌いなんだ！」
そうだそうだ、と誰かがいった。たちまち熱を持って押し寄せる。そうだの大合唱だった。

侮辱されたのが相当こたえたらしい。目は憤怒の色を帯びている。

「おまえみたいな不良が佩刀さんと釣り合うか？ 釣り合うわけないだろ、バーカ」

そうだ、そうだ。

「身の程を知れよ。自分の立場分かってるのか？ 誰にも見向きされないゲスだ」

そうだ、そうだ。

「どうせ弱みでも握って関係を強制してるんだろ。このクズ。和田わた先生のいうとおり、おまえは社会のゴミだ」

そうだ、そうだ。

「そういえば、練絹ねじぎぬさんとも何かしているそうじゃないか。おまえ、どんな汚い手使ったんだよ」

「そうだ、そうだ。」

「さっさと佩刀さんたちを解放しろ。おまえにつきまとわれて嫌がってるだろ」

「そうだ、そうだ。」

「それとこれは僕個人の意見だが、おまえ。退学でもしたらどうだ？ どうせこの学校にいても居場所なんかないんだ。そうだろ？ さっさとこの学校から消えろ。おまえのような奴は死ねばいい」

「死ね。死ね。死ね。死ね。シネ。シネ。」

男はせせら笑うようにいった。

「この辺で勘弁してやるよ。佩刀さんを解放しなかったら僕はおまえを許さないぞ。絶対にな」

男は踵を返した。背中には大事をなしとげたという満足感があつた。みなに手を振り、満遍の笑顔を振りまく。周囲は男の敢為をたえ、盛大な拍手をした。黄色い声援が上がり、男の肩を叩くものもいる。色々な人と抱擁を交わし、喜びを分かち合った。

取り巻きの一人が俺を見た。口ばくで何かをいう。バーカ。そのまま友人たちと帰っていった。

「一対一だったらあんなこといわないだろうな、と思った。そんなリスクを冒す奴はいない。ただ、あの男の場合大丈夫だと踏んだのだろう。大衆を味方につけた安心感からか、今までくすぶっていた想いが爆発したらしい。」

男が去ると何事もなかったかのように景色が元に戻った。生徒たちは席に着き先生を待つ。あるものは読書をし、あるものはお喋りに興じていた。当たり前前の風景。日常の再来。

いつものことだ。

すぐ慣れる。

「篝火」

四時間目の授業が終了すると、眉村が俺の名を呼んだ。

またか、と思つて眉村を見る。汚物を見るような目。眉村は嫌悪感丸出しで俺を見た。

「おい、聞いているのか！」と大声。「今すぐ職員室に來い」

眉村は俺を睨んだ。息苦しい静寂に包まれる教室。誰もが動きをとめ、話の趨勢すうせいを窺っている。

先生に呼び出されるのもまた、いつものことだった。

抵抗したところで意味がないことは、これまでの経験で染みついている。反抗しようものなら、和田とかいう先生が躰と称して鉄拳制裁をくだすことは目に見えていた。

のっそりと立ち上がる。体が重い。テレビ越しに自分を見ているようだ。現実感が希薄だった。

眉村の後ろをついていく。振り向くことはない。眉村は振り向かなかった。

職員室に入るのは何回目だろうか。先生に叱責されるのは何回目だろうか。

どうでもいいことだ。

眉村は椅子に座った。俺は立ちっぱなし。そして言う。「おまえ、今回のテスト、よかつたぞ」

不意を突かれる。眉村は疲れたように言葉を続ける。「最近のおまえの素行は比較的好い。これと比べて問題を起こしたわけでもなく、テストの成績もはつきりいつて平均以上だ」

予想外。眉村の言葉は本当に予想外だった。

「篝火。俺はそれなりにお前を評価している。いや、そうだな……。」

高松先生がいうにはお前はやればできる子らしい」
たかまつ

やればできる子。

なるほど。俺はやればできる子なのか。

ということとは、やらなければできない子なのか。

眉村は椅子に座りなおした。

「ただ金髪はやめる。目障りだ。即刻髪を黒に染める。見ていてうざいだけだ」と激しい口調でいう。険しい表情がさらに険しくなった。そこには深い嫉妬と憎悪が刻まれていた。「それとおまえ。佩刀とどういう関係だ」

既視感。どこかで聞いたことがあるようなセリフだ。

「友人です」とだけ答える。

「生徒がいうには登下校を共にしているらしいじゃないか。妙な話だ。どう考えてもおまえと佩刀じゃ釣り合わない。いっておくがこれは忠告だ、篝火。今すぐ佩刀と縁を切れ。成績素行ともに優秀な佩刀まで感化されたらたまらんからな」

それが話の主題か。

眉村を見る。頬はだらしなく弛緩し、夢見るような目つき。俺の名前を出すときは険悪な表情をしたが、佩刀の名を出すときだけ幸せそうな表情をした。

禁断の愛なんて流行らないぞ。

そういつてやりたいが、いわないことにする。これ以上話をこじらせたくない。

きつと前半の話は本題のためのクッションなのだろう。セールスマンの常套手段だ。相手を喜ばせておいて、頼みごとを突きつける。断りづらいところを一気に畳み掛ける。掌を返すような美辞麗句。しよせんは偽装か。眉村は俺のことを露ほども評価していない。むしろ悪意すら抱いている。

これで分かりました、というのはつまらない。他人の思惑に踊らされるのはごめんだった。

しかし。

眉村のいうことは一理ある。否。全てその通りだった。

佩刀歪はあらゆる面で常人を上回っている。そんな有能な人間ならば、やがて俺という幻想から覚めるだろう。それでいい。俺は佩刀と同じ土俵に上がってはいけない人間だ。

「そもそも佩刀のような人間がおまえみたいな奴と付き合っているのはなぜだ。暴力で脅したのか。それとも弱みでも握ったのか」俺は吐き気がした。こいつも同じことをいう。

「もしそうだとしたら篝火。それは犯罪行為だぞ。早急に取りやめる。佩刀に関わるな。おまえのせいで佩刀が穢れたらどうするんだ」

俺は無言で眉村を殴った。

二メートル近く吹っ飛ぶ。

騒然とする職員室。アホみたいな面で俺を見る眉村。

俺は先生たちに取り押さえられた。

十分後。

俺は職員室から追い出された。

体の節々が痛む。いきなり体を動かしたからだろうか。理由はそれだけではない気がした。

愚かな俺。弱い俺。ダメな俺。しょうもない俺。涙なんて出ない。なぜか出ない。

眉村は俺に対する負い目があったのか、これといったお咎めを与えなかった。ただここは寛容に許してあげましょう、と振る舞う辺り如才ない。

いかにも懐の深い立ち振る舞いを見せた眉村。おかげで大事にこ

そならなかったが、俺への警戒度はさらに上昇するだろう。職員室には何人か生徒がいたから、即座に広まるに違いない。

「何落ち込んでんの？」

誰もいない体育館の裏。一人でレンガの上に座っていると後ろから声が聞こえた。

興味なかった。無視する。

「うわあ、無反応はやめてよ。結構傷つくんだよ、無視って」

純白のリボン。端麗な顔。

俺のすぐ横に店員が腰かけた。手には妙な缶を二つ持っている。

店員は憔悴気味の俺に微笑みかけ、「こつてり絞られたね。お疲れさま」と缶を差し出した。受け取る。抹茶コーラ。何これ。

「……もしかして抹茶コーラ知らないの？ あーあ、人生の三割損してる。メチャクチャおいしいから飲んでみて」

「えつと……」

「梅雨利。梅雨利東子」

「梅雨利。これ、返す」といって抹茶コーラを返却。少し飲んでみたが圧倒的に舌に合わなかった。抹茶とコーラ。相入れるはずがない。

「えー、もつたいないなあ。分かった。いいよ、もう」と梅雨利はふてくされたように唇を尖らせた。「こうなったら私が飲むから。

やけ酒だよ、やけ酒」

梅雨利は豪快にラッパ飲みした。すでに一本目の抹茶コーラは飲み終わっているらしい。信じられなかった。

空は曇っていた。それはまるで荒んだ俺の心を代弁しているようだった。

「なんで殴ったの？」

その問いは哲学的な疑問すら含んでいるようで、妙に神秘的だった。

なぜ人を殴るのか。

「なんでだろうな……。俺にもよく分からない」

「悪口をいわれたとか、暴力を振るわれたとか、そんなことなかったの？」

話すかどうか迷う。悩みに悩みぬいた末、話すことにした。眉村との会話。成績。佩刀。暴力。犯罪。訥々と話す。

俺は弱くなっているのかもしれない。

話してる最中、そんなことを思った。佩刀や練絹玉梓ねりぎぬたますざ、梅雨利東子。彼女らは穏やかで優しい。とても同じ人類とは思えないくらい人間が出来ていた。俺のことを第一印象や固定概念で判断しなかった。純粹に一人の人間として扱ってくれたことが嬉しかった。常に遠慮のない白眼に蹂躪されてきた俺は、彼女たちといる時、どうしていいのかわからないくらい幸福を感じた。存在が認められるということは嬉しいことだ。

でなければ、こんなこと話さない。自分の心情を吐露しない。

篝火白夜はここまで弱くなっていたのか。

第七話 // 7

「……ふむ、なるほど。確かにそれはひどいね」

俺の話聞いた梅雨利は、憤慨したようだった。

「眉村先生も陰湿なことするよ。そんなことして明日食う飯がうまいかつーの」

梅雨利は空になった抹茶コーラを茂みに投げた。地面に衝突する甲高い音。空しく響く。

体を近づける梅雨利。腰を突き合わせて俺を見る。研がれた日本刀のような目。紅い唇。

けどね、篝火君。

梅雨利はそう前置きを置いて、「状況から考えても、君の行動は納得できるよ。多分間違っていないと思う。けどね、それは間違ってるんだよね。そんな状況下で暴力を振るうことは間違いじゃないけど、それを先生に振るうことは間違ってる」といった。「本当に不器用だね、篝火君は。客観的に見て一概にはいえないことでも、ろくに精査せずに判断する人もたくさんいるんだから」

俺は今朝のことを思い出した。利己的な物言い。有無をいわせない断罪。その他大勢の正義が押しつけられ、俺の正義が消えていく。くだらないと否定され、それでお終い。

価値観なんて多数決だ。

俺が少数派であの男が多数派。

それだけの話だ。

けど大丈夫。考えるのはやめよう。考えなければいいのだ。そうすれば嫌なことなんてすぐに忘れる。何も思わなければ何も感じなくなる。よくやる。

「ねえ、ちゃんと聞いている？ 全部君のために話してるんだからね。ちゃんと聞かないとお仕置きしちゃうよ。抹茶コーラ飲ませるから。それでね篝火君。はいこれ」

梅雨利はポケットから一紙を取り出し、俺に手渡した。

「……なんだこれ」

「開けてみて」

梅雨利のいうとおりになると綺麗な筆致で気号が綴られていた。無数の数字の羅列。何かの番号だ。おそらくメールアドレス。

「誰のだ」

「玉梓の」梅雨利はにっこりと笑った。「玉梓のメアドだよ」

「……練絹のか」

おまえのじゃないのか、とはいわなかった。意図があるのだろう。どういう意図から分らないが。

梅雨利は楽しそうに笑っている。何かを企んでいる笑み。

「梅雨利東子が篝火白夜に命令します。今すぐ件の子に電話しなさい」
「いい」

「なんでだよ？」

「なんでって、なんで？」

「いや、理由がないだろ」

「理由なんて後からくっついてくるから。さっさと電話しなさい」
俺は押しに弱い。

やたらと練絹との通話を強制してくる梅雨利。

しかし俺の手元に携帯電話はなかった。きつと鞆の中だろう。

そのことを説明すると、梅雨利のポケットから白色の携帯が出てきた。「これ、使いなさい」

受け取りを拒否するも、無理やり携帯を掴まされる。金属の冷たい感触が伝わってきた。

「遊びに誘いなさい。家に誘ってもいいし、どこかに遊びに行くのもありよ。とにかく玉梓と遊びなさい」

「いや、理由がな」

「いいから」

画面にはすでに練絹玉梓と表記されていた。逡巡していると、『もしもし』という声が聞こえてきた。雑踏に混じった練絹の声。教

室付近にいるのだろうか。周りの話し声がうるさい。

目で通話するよう合図を受ける。仕方なく出ることにする。「もしも。俺だ」

『……………』

沈黙。

俺だけでは伝わらなかつたらしい。当然だ。俺と練絹は覚える限り、一度しか会話をしていない。茶屋の一軒だけだ。

とりあえず名前を出すべきだろう。

「ああ、俺だ。篝火白夜。覚えてるか？」

『……………うん』

控え目な声。不審がっているのだろう。梅雨利の携帯から別の人間が電話をかけてきたのだ。

頷ける反応、とは思ったが、少し寂しかった。

『その……………なんの用？』

「ああ、その、なんだ。遊ぼう。俺と」

『……………』

俺と遊ぼう。

なんか嫌な響きだ。軽薄な男、といった風。ナンパの常套句だ。

断わってくれ、と願う。面倒事は嫌だった。そもそもなぜ俺が練絹と遊びに行かなければならないのか。

『……………いいよ。どこに行きたい？』

だが、練絹の返答はまさかの了承。

「……………そうだな」

困った、と思った。まさか受諾されるとは。予想外にもほどがある。

『篝火君の家はどうかしら？』

自室を想起する。何もない空間。「ダメだ。行ってもつまらない」

来る人間が佩刀みたいな規格外な人間ならいいが、と思った。佩刀は一切合財俺に対して文句をいわない。なんでも許容する。全ての奴がそうだとは限らない。練絹だって五分で飽きるだろう。それ

だけは保証できる。

模様替えでもしてみるか、と画策するも、意味のないことに気づく。

『……そんなことないと思うけどなあ』

「練絹はどこがいいんだ」

『わっ、私？ ……私の家、は？ 結構広いし。というか一軒家だし』

「分かった。放課後にな」

携帯を切ろうとしたが、『ちょっと待って』と練絹の制止。

何かいいたそうな気配。躊躇っているようだった。呼吸が荒れているのが分かる。

『……楽しみにしててね』

「ああ、楽しみにする」

回線を寸断すると、梅雨利は笑っていた。口に手を当てもせず哄笑する。妙に様になる辺り、性格が歪んでるんだろうな、と推測。いいすぎかもしれないが、この女は普通の女とは決定的に違うような気がした。

「初々しい会話だったね。中学生みたい」

「余計なお世話だ」

「そつやって反論するところもかわいいね。電話中、顔が赤くなってたよ」

俺は梅雨利に向かって携帯を投げつけた。

六時間目の授業は残り五分程度で終わる。

中年の先生が黒板に何かを書く。行き来する視線。ペンの滑る音。黙々と板書に没頭する生徒たち。

遠目に眺める。チョークが粉になって黒板の溝に落ちる。書き足されていく文字、記号。動く指。刻まれるノート。厳粛な雰囲気に含まれた教室。

つまんねえ光景、と思った。つまらない。面白くもなんともない。窓の下方からは体育館が見えた。体育が終わったらしい生徒が各々群れを作っている。渡り廊下には無数の人影があった。

きょしおん
登音や話し声。

感情のこもらない目で俯瞰する。
と。

一際目立つ黒髪。五、六人の女子に囲まれ、穏やかに笑っている。集団の真ん中、そこには佩刀歪がいた。

友人だろうか。そのうちの一人が佩刀に喋りかける。相変わらずの無表情だったが、ゆっくりと感情の波が広がっていく。相槌をして返答。どうやら会話は弾んでいるらしく、笑い声が絶えない。

見てはいけないものを見てしまった。

知ってはいけないものを知ってしまった。

分かつてはいけないものを分かつてしまった。

静かながらも毅然と存在感をあらわにする佩刀。周囲の目には尊敬と畏怖の色。佩刀を中心に輪が形成され、会話は継続される。

一瞬で景色がモノクロになった気がした。脳細胞が一つずつ凍りつく。それは不快だった。同時に諦念が飛来してくる。索然とする頭。現実を認識する脳。影が際涯のはてまで塗り潰していく。

歓談。俺にしか向けないと思っていた笑みが佩刀の顔に浮かんでいた。楽しそうな表情。友人との会話を愉快に思っている笑顔。

一気に冷めていく熱。ああ、そうか。そういうことなのか。

急激に佩刀が遠い存在のように思えてきた。手を伸ばしても届かない距離。置いてけぼりを食らった感じ。

身勝手な喪失感であると自覚する。

いい気になるなよ、篝火白夜。

しよせん一人のままなのだ。札付きの不良と人気者の優等生。噛み合うはずがない。そんな狂った歯車、誰も認めない。

裏切られた、なんて思ってるのか。

間違いなのだと気づく。わがままだと、そう理解する。

そう、これでいい。これが本来の形だ。散逸したものが修正され、矯正された。ただそれだけだ。これこそが正しい。現状理解は大切だ。そうだろ、俺。

自分と、佩刀。その位置関係。そこには絶対に埋まらない格と位がある。階級が下のものが上のものに近づいてはいけない。そんな簡単なことも忘れたのか。それとも舞い上がっていたのか。

錯覚だ。

視線を外す。

見たくない、知りたくない、分かりたくない。

幸せなんて刹那的だ。幸福なんてありえない。篝火白夜は幸福になんぞなれないし、なる資格もない。面倒なことや困難なことから逃げてきた奴がいつていいことじゃない。

勉強せずに学年一位になりたい。朝練せずに試合に勝ちたい。楽をしていい思いをしたい。そしてそれなりの成績を収めれば、より怠惰になっていく。突き放されるまで天狗になる。

愚かな考えだ。結局のところ、何も変化しない。何もしなければ、未来には何も残らない。無為に現在を生きて、過去の栄光に縋る。

そして、現状に満足できず不平不満を述べる。自分はこんなにも結果を出しているのに、とお門違いなことをいう。

今の俺はまさにそれだ。

失ったというわけではない。もともとそれがあるものだど取り違えただけだ。初めから何も無い。貸し与えられただけだ。いざ取り上げられても、文句をいえる対場ではないのだ。

手に入らないものを見るべきではない。

そうだ、考えるのをやめよう。そうすれば楽だ。不快な思いをし

なくてすむ。気が紛れる。

チャイムが鳴る。

委員長が号令をかけ、授業は終了。筆記用具が片づき、教科書が机に収容される。開放感に溢れた生徒たち。椅子から移動して友人と話しこむ奴。授業の復習をする奴。帰る用意をする奴。

つまらねえ光景、と思った。

「か、篝火君……」

消え入りそうな声で練絹はいった。

俺のクラスは他クラスよりもホームルームが終わるのが五分くらい早い。学級で一番早いのでは、と思う。

鞆をからって教室を出る有象無象。滞在する部活動生。様々な音が他の音を打ち消し合い、雑然と賑わう教室。

「なんだ」

自分でもびっくりするくらい冷然とした声。鋭利な刃物のような言葉が練絹に突き刺さる。

前に見た練絹の活発さはなりを潜めていた。それどころか俯き加減で今にも消え入りそうだった。

「え、忘れたの……？ 今日来てくれるんでしょ。私の家に」
辺りの人間は軽蔑した目で俺を見た。またたぶらかしたのか。目がそういつている。

ああ、そういえばそんなことがあったな。

過去に遡及してみると、該当する事実があった。昼休みに練絹とそういつた約束を交わしたような。

どうでもよくなる。

今すぐ蒲団に入っただけでじつとしたい。何も思わず、何も感じず、蟬の幼虫のようにしていたい。

「練絹。悪いけどそれ、なしてことにしないか」

「ダメ。そんなのダメ」

体の奥底から湧き上がる声。ハッと口元を隠す練絹。妙な緊張が漂う。

「その……それは、ダメ、かな。だって約束してきたのあなたじゃない。そんなのルール違反だよ。遊ぼうっていったのに。楽しみにしてるっていったのに」

それは悲痛な叫びにも聞こえた。切々とした表情だった。「私を裏切るの。私の想いを、楽しみを……裏切るの？ 許されないよ、そんなこと。そういうことは、許されないよ。私が許さないよ……」

「わ、分かった。その……、泣くな」

「泣いてない！」とヒステリックに叫ぶ練絹。

たじろいでしまう。女に泣かれたらどうしようもない。

「ね、練絹。い、行こう。今すぐおまえの家に行こう。テレビ見たり勉強したりしよう」と練絹の手を握って下駄箱に直行。前とは立場が逆になる。

「うん」

練絹は嬉しそうに握り返した。華奢な指が深く絡みついた。

あと少ししたら佩刀が来るはずだ。来るかどうか分からないが来るはずだ。

その時教室に俺がいなかったらどう思うだろうか。悲しむだろうか、怒るだろうか。あるいはどうも思わないだろうか。

多分後者のほうだろう、と見当をつける。あれだけみな慕われているのに俺と関わる意味がない。佩刀にとって、俺との関係は遊びなのだろう。適当に遊んで、飽きたら捨てる。その時期が早まっただけだ。肩を落とす必要もない。

もし前者だとしたら、俺は佩刀を裏切ったことになる。それはそ

れでいいような気がした。いまさら佩刀と馴致したところで、このモヤモヤは晴れない。こんな曖昧なものを抱えたまま佩刀の前に出るのは、佩刀に失礼な気がした。

そんなことをしたら嘘をつかなくてはいけなくなる。虚飾しなければならなくなる。それは一度りハーサルの済んだ劇を演じるような恐怖があった。台本通りの台詞、行動、感情。不用意にバ力なことをいって、佩刀を傷つけたくなかった。

なんてこった。なんという卑小な思考回路。これほど心が狭量な人間がこの地球上にいるのか。

下駄箱で靴を履きかえる。前方にいた練絹が振り返った。「篝火君」

「なんだよ……」

「白夜君って、名前で……、呼んでいいかな？」

なんだそりゃ、とは思ったが 首肯。名前なんて個々を識別する記号だ。名前で呼ぼうが名字で呼ぼうが関係ない。そいつの本質が変わるわけでもない。

「あー、うん。それとね、白夜君。わ、私のことも、玉梓って、呼んで、いいからね」

「お安い御用だ、練絹」

「びゃっ、白夜君！ 全然分かってないよお」

練絹は不満そうに唇を尖らせた。

「それで何するんだ」

「うー、音楽！ 私の趣味、音楽なの」

若々しさに満ち溢れた笑顔。純然たる美の結晶。女の色香がこぼれ落ちそうなほど発散されている。

対する俺の顔にはどこか引き攣った笑みが張りついていた。長年笑ってなかったせいだろうか。表情が白々しく見えまいか、と心配。杞憂だったのか、特に気にする様子はなかった。爛々とした足取りで正門に向かっていく練絹。自由奔放で穢れを知らない後ろ姿。

もてるんだろうな、と思う。練絹の容姿は異性を引きつけるには

十分すぎるほどだ。

「早く行きましょう、白夜君」

にっこりと満開の笑み。大輪の花が咲き乱れたようで、美しかった。

急いで靴を履いて、その後を追う。顔には自然と笑みがこぼれていた。

「……本当、女って不思議な生き物だ」と。

そう思わずにはいられなかった。

春塵が濛々と舞い上がる。

草が萌え出る季節。

未墾の地も多々ある日和見村。四方八方を山岳や河川で囲まれた田舎である。

畑の脇道には攔座かくざした車の残骸。その先には大きな空き地があり、大破したタイヤや無数のゴミがうず高く連なっていた。

笠雲のかかる頂。雅趣溢れる山々を背景に俺と練絹は歩く。

「ねえ、白夜君」と迦陵頻伽かりようびんがとした声。「ここが私の家だよ」

練絹が立ち止まる。少し遅れて俺も歩くのをやめる。

眼下には二階建ての一軒家。黒を基調とした家で、閑々とした佳景に溶け込んでいた。表札には「練絹ねりぎぬ」の文字。

「……おい、電気がついてないぞ」

そういうと、なんてことないような声が返される。「そりゃそうだよ。親いないし」

「……いないのか」

「うん」

「誰も？」

「そうだよ。両親は共働きだし、兄さんは部活があるから七時まで帰ってこないわ」

「……それは」と口をもごもごさせる。「その、マズインじゃないか」

「何がマズイの？」

なんとはいえばいいだろうか。

「とにかくマズイだよ」

練絹は不思議そうな顔をした。

前々からおかしな奴だとは思っていたが、ますますそれが深まる。今まで一度した話したことのない男をこうもあっさりと上がらせる

のか。

表面上誘ったのは俺なのだが、それを決定したのは練絹本人である。

たんに貞操観念が緩いのか、俺の自意識過剰か。

「大丈夫よ。七時までには帰れば誰にもばれないから」

「そういう問題じゃない」

「じゃあ、どういう問題？」

「……もういい」と説得を諦める。なんだかとぼけられているような気もしたが、なんてことない。俺がそういうことをしなければいい。

別に興味はない。

「それじゃあ行こうよ」

練絹に連れられ家にお邪魔する。

扉の先には未知なる空間が広がっていた。嗅いだことのない独特な余薫。生活感のある匂いが鼻腔を通り抜けた。

それは我が家にはないものだった。俺の家には虚無しかない。だから匂いも何もない。無機質なだけの、殺風景な家。

玄関には一足も靴がなかった。どうやら練絹の話は本当らしい。

自分の家とは違う様相。誰かの家にかかるなんて随分久しぶりだった。そのせいか僅少なから、興奮と不安があった。全く知らない土地を踏む時の感覚とよく似ている。無礼ないいかただが、俺にとって練絹家は未開のジャングルと相違なかった。

玄関を抜けると広々としたリビングがあった。当然人はいないのだが、穏やかな雰囲気伝わってきた。キッチンにテーブル。そしてピアノ。俺の家にはないソファが二つある。頭の中に一家団欒する家族の絵が連想された。新聞を開く父。忙しそうに配膳する母。椅子に座って勉強する妹。漫画に夢中になる兄。慌ただしくも平和な練絹家の朝。

羨ましい、とは思わなかったが、懐かしさは感じた。俺にもこんな時があったな。そんな感慨だ。

今となつては叶わぬ夢。兄弟はもともといないし、両親は手の届かぬところにいつてしまった。

別に両親を恨んでいるわけではない。両親の異常な殺人癖なんて、いつてみれば好き嫌いと同じレベルだ。ピーマンが嫌いな奴もいるし、トマトが嫌いな奴もいる。そこに歴然とした嗜好があるように、両親は轢殺という概念に愉悦を見出したに過ぎない。それは一種の娯楽で、本人たちにしてみれば、日常の延長戦だった。それが続いたのも、その行為の中に興奮や高揚が多分に含まれていたからだろう。

正常と異常がいつも両極に位置するとは限らない。正常と異常はよき隣人であり、よき理解者でもあるのだ。

「……いいリビングだな」と思わず口にする。

「そうかな」

「ああ、優しい感じがする」

我ながらバカっぽい形容だと自嘲。対人能力が衰え、語彙が少ない俺にはこれが精一杯の賛辞だった。

「ありがとう」と練絹はにっこりと笑った。

ありがとう、といわれるのも久しぶりだった。誰にも感謝されたことがなかったからだろうか。

俺の視線がピアノに向いていることに気づいたのか、「私、ピアノ習ってたの」と練絹はいった。

「……ピアノ？」

「今はもうやってないけど、幼稚園のころからかな。中学校卒業までずっと」

時間に換算してみれば十年間くらいだろうか。「よく長続きするな」

「そうでもないわ。スランプで何カ月もピアノに触ってない時期もあったし、時々面倒になることも多かった」

「それでも続けたんだろ。継続は力なりってよくいうじゃないか。続けるってことはそれ自体に忍耐がある」

忍耐。

篝火白夜がもつとも苦手とすることだ。一度としてそれをしたことがない。続けることはおろか、始めることもしない。忍耐どころか決起すらしない。生産性も建設性もまるで皆無。篝火白夜の自叙伝なんてたったの三ページ弱で完結してしまうだろう。俺の人生には全くもって変化や変容がないのだから。

「……へえ、案外まともなこというんだね」と感心したようにいう。「見直したわ」

「悪かったな」

「ごめんね、そんなにすねないですよ」

「すねてない」

「すねてるよ」

「……そうだな」

「正直でよろしい。それでどうする？ 私の部屋……、行く？」

「どっちでもいい」

「なら今すぐ行きましょう。大したものはないけどね」

にこやかに笑って、階段のほうに足を向ける。

練絹の自室は女の子らしい部屋だった。しわ一つないシート。丸型の小型テーブル。整頓された机。背もたれのある椅子。

ピアノをしていたからだろうか。本棚には音楽関係の資料がたくさんあった。鍵盤楽器の書物は勿論、クラシックやジャズ。ロックや演歌まである。あらゆるジャンルを網羅した本棚は、図書室のようだった。

個人の部屋にはその人物の性格や内面が色濃く反映される。練絹の場合、音楽を主軸においた内装だった。練絹玉梓にとって、音楽は趣味であり生きがいなのだろう。机の上には何十枚ものCDが散在しており、音楽機器らしきものが鎮座していた。

「座って」と促され、テーブルの近くに座る。練絹も同様に、俺の向かい側に座った。

練絹の顔が咫尺しせきに見える。鮮やかな紅色の唇。形のよい鼻梁。アモンド形の瞳は知性の色をたたえていた。

刹那の沈黙。

「白夜君って兄弟、いる？」

「いない」と即答。

「一人っ子なんだ。少し羨ましいわ」「なんで」

「だって私の兄さん、過保護でむやみやたらに干渉してくるのよ」と憂うようにいう。長い髪を指でいじって、悶々としているのが分かる。

「迷惑なのか」

「そうじゃないけど……。時々行き過ぎてるとは思っわ」とそこで口を噤む。「だから私が男の子を連れこんだら、結構、マズイ」

どれくらいマズイのだろうか。

程度は分からないが、ほらやっぱり、と思った。「さっき大丈夫っていつてなかったか」

「そうはいったけど……。そういつたらあなた、帰りそんな勢いだっただじゃない」

「そりゃそうだろ。それにほら、これ」といって髪の一房を掴む。

「家族だったら絶対にいい気はしない」

練絹は苦笑に近いものを浮かべた。「金髪だもんね」

「親にしても、娘が悪い男に騙されてる、って普通は思う」

「そうかもしれないわね」と暢気な声で返答。全然そう思っていない、と呆れてしまう。

「そういうわけだから、すぐ帰る」

「それはダメ」と峻拒。険しい表情で俺を見た。

その理由を問うと、とにかくダメといった返事が返ってきた。
んな理不尽な。

「そもそも誘ってきたのはあなたのほうだわ。失礼よ、それ」

「それはまあ、そうだよな……」

「そうよ。だからあなたは私を楽しませる義務があるわ」と言い切る。練絹はバカみたいに背中を反らした。

そうはいつでも、俺にそういう才能はない。全くない。

困ったことになった。

何か話題になるものを脳内で検索するも、ゼロ。笑えないくらいに何もなかった。というか、帰宅部で家に閉じこもっている俺に語るべき事件なんてない。朝日が綺麗だったとか、珍しく早起したとか、それくらいしかない。かといって貧困な想像力では作り話すら創作できない。

……血なまぐさい喧嘩談なら腐るほどあるが、受けは悪いだろう。女子供に話すべきものではない。それくらいは理解している。

進退これに極まるとはまさにこのことか。

散々考えたあげくに出てきたのが、梅雨利って何者、といった言葉だった。

複雑な表情を作る練絹。恨めしそうに俺を睨む。安全策と踏んだが、まさかの地雷か。

「……東子はね、変人。以上」

「……それだけか？」

「それだけ」

会話は打ち切られる。

息苦しい静けさ。

なんなんだ、これは。

初めて感じる静寂。それは嘲弄のこもった静寂でもなく、会話のネタが尽きた時の静寂でもなかった。それらとは明らかに次元が異

なる。冷たい手で心臓を鷲掴みにされたような苦しみ。自分の体が
少しずつ闇に飲みこまれていくようだった。

沈黙を破ったのは練絹の陰の混じった声だった。

「白夜君。なんで、女の子の部屋で違う女の話をするの？」

練絹の表情は能面のようにだった。感情の一切が抜け落ち、色らし
い色が消滅している。それは女神の彫像のようにも見えて、反道徳
的な美を持っていた。

危険だ。

この女は危険だ。

本能の最下層、篝火白夜の根源をなすものがそう囁く。警笛を鳴
らす。

「ご、ごめん」

怖くなって謝る。

「いいよ。分かってくればそれで
と。」

一転、元通りの快活な笑み。ほっと安堵する。

「そういえば、なんで東子の携帯で電話したの？」と行って、俺の
目を見すえた。猜疑心。やはり少なからず変に思っているらしい。

梅雨利に無理やり、というべきか。

逡巡。いつくかの選択肢を考慮、様々な考えを一つに帰趨させる。

「持っていないだ」とだけいった。「携帯電話、持っていないだ」

練絹はその一言で感得したらしい。「それで東子の使ったの？」

「そうだ」

実際そうではないのだが、そうだといいた。

俺の携帯電話に練絹のメールアドレスは登録されていない。その
ことは練絹も十分分かっていているだろう。

「そっか。白夜君、携帯持っていないだ……」

なら、直接言ってくればよかったのに、といわれるかと危惧し
たが、そうとはいわなかった。練絹はぶつぶつと呟くだけだった。

おもむろに練絹が立ち上がる。「そういえば白夜君。何か音楽聴

初っ端からすっげー破壊力。

低迷していく思考回路。なんかもうどうでもよくなる。母親の胎内にいるような気分だ。羊水に満たされ、自分の体を抱く赤子。母親とへその緒で繋がり、深い眠りにつく。そこには深い安らぎしかなくて、平和なところ。

ぶおおおおおおおん！

「ななな、なんだこれはああ！」

意識が途切れそうになる。否。途切れる。間違いなく。

「きゃあああああ！ これいい。これメチャクチャいい！ 白夜君はどう思うっうう？」

「聞こえないに決まってるだろうがああ！ とと、とりあえず、一旦とめろおおお！」

ガチャ。

何も聞こえなくなる。

どうやら悲痛な叫びが練絹に届いたらしい。スピーカーからは何も聞こえてこない。ただ、あまりにも莫大な音量で聞いていた反動で、何も聞こえないという可能性もあったが。

思い切りカーペットに突っ伏し、肩で息を整える。運動をしているわけでもないのにものすごく疲れた。全身が疲弊しきっている。異常事態だ、これは。どうなってるんだよ。

一方の練絹はけろりとした表情だった。間延びした声で、「どうしたのー？」と訊いてくる。

……それはこっちの台詞だ。

人間、極限まで追いつめられると笑ってしまっ、というのは嘘ではないらしい。

俺は笑い転げそうになった。おかしい。この女の聴覚はどうなってるんだ。

死にそうになっている俺を見て、練絹は小首を傾げた。今の俺の状態を不思議に思っているらしい。しかしそんなことどうでもよくなったのか、新たなCDを再生しようとしている。そのパッケージ

にはギターを叩き割る男の姿。目にアイシャドウを施した男が甲高い断末魔を上げている。混沌を体現化したようなイラストだった。口を動かそうにも、縫いつけられたように動かない。とめろといいたいの、唇が上下に開かない。マズイ。これはマズイ。生死に関わる。

しかし声にもならない絶叫が届くはずもなく、無情で無常なイントロが聞こえてくる。無上の喜びを噛みしめる練絹。
断言しよう。

この世に地獄は存在する。

結局。

あのまま何十曲ものハードロックを聴かされた俺は、満身創痍で練絹家を後にすることにした。

練絹に何度も引きとめられたが、振り切る。本当に申し訳ないが、あれ以上はダメだ。体の構造が変わる。

頭上からぽつぽつと雨が降り注ぐ。初めは穏やかだった雨足はだんだんと強くなっていた。それは横殴りの雨となつて俺を強襲した。腕をかざそうにも意味はなく、いたずらに濡れるだけだった。

ちよつと七時を過ぎた頃だろうか。

夕日が雨雲に隠れて時刻は判然としがたいが、きつとそのくらいだろう。

液体が服に染み込む。そして吸い込まれていった。その感覚は不快で、生理的嫌悪感を感じた。視界が良好でないため歩くのにも苦勞する。地面も雨でぬかるんでおり、足がもつれてしまうのだ。何より聴覚が故障気味だったのが最悪だった。視覚と聴覚を奪われては、正常な歩行が出来るはずもない。環境もまた劣悪で、歩くには適していない天気だ。

天候は今や豪雨に近い状態になっている。まさに土砂降り。土塊の混ざつた濁流が足元を流れていく。

傘を借りればよかつた、といまさらながらに後悔する。しかしそれは無理な相談だった。たとえ雨が降ることが分かつていても、一秒も早く練絹家から出るだろう。ロックンロールで発狂するより、大雨に見舞われるほうがずっとましだ。

浸水した田畑や車両を横目に走る。なるべく足を取られないよう慎重に。

これがタ立だったらいいが、あいにくそうではないらしい。一向にやむ気配がない。本降りになる前に帰ろう。これ以上濡れるのはごめんだ。

俺は多少の被害を度外視して駆けた。制服が汚れようが、汚泥がところどころでもいい。早急に帰宅することだけを考える。

そして。

自宅まであと少しといったところ。

やっと風呂に入れると思った俺は、少し速度を緩めた。二十分間の全力疾走はさすがにきつい。雨に打たれながらも呼吸を緩やかにさせる。火照った体に雨が心地よかった。

「……ん？」

歩幅を短くして進んでいくと、アパートの前に人影があった。

相変わらず雨はひどい。にもかかわらず直立不動で佇んでいる誰か。なんか怪しい。

少し警戒して足を動かさず。視界が悪いせいか、その人物が誰なのか視認できない。

距離が縮まる。するとその人影が誰であるのかはつきりした。

「……おまえ」

「白夜様……」

人影の正体は佩刀歪だった。

制服は大量の雨を吸っていて重そうだった。ずっとこの場に立っていたのか、顔色は蒼白。寒そうに肩を震わせ水を滴らせている。それが元から付着した雨露なのか、新たに付着した雨露なのか判別しがたい。

とにかくあらゆる個所が湿っていた。当然長い黒髪や鞆はずぶ濡れになっている。

佩刀は俺を見ると嬉しそうな顔をした。

無邪気で無作為な、綺麗過ぎる笑み。

俺は無言で佩刀の手を掴んだ。そのままアパートの中につれていく。階段をすごい勢いで上がっていった。なぜか疲れは吹き飛んでいた。

「びゃ、白夜様……？」

戸惑ったような声。それを無視し扉を開錠する。この時ほどもどかしく感じたことはない。早く開けよ、クソッ。

佩刀を土足のまま部屋に入れる。そのさい、廊下に土を含んだ足跡が出来る。大粒の水溜りができる。そんなことは瑣末なことだと切り捨てる。重要なのはそんなことじゃない。もっと大切なことが

ある。

佩刀を風呂場に連れていき、乾いたタオルを渡す。拭けと行って、風呂にお湯を入れた。

俵約家の俺はあまり風呂のお湯は出さない。だがどっばどば入れる。蛇口がはちきれそうになるくらいに放水させる。たちまちお湯が溜まっていく。浴槽には蒸気が立っており温かそうだった。

「今すぐ風呂に入れ。いいな」

「し、しかし、白夜様こそ濡れ」

「いいな」

佩刀の言葉を遮る。俺は男でおまえは女。なら優先順位は明白だ。佩刀を強く睨む。堪忍したのか消え入りそうな声で、「はい」といった。

何度も念を押して風呂場を出る。脱衣所からは水が落ちる音と、布切れの音がした。

無然とした面持ちで居間に入る。

タンスから服を取り出す。大した種類はない。色も地味だ。体操服や寝間着くらいしか収納されていない。

佩刀の体型を思い浮かべる。瘦躯で長身。手足は細く、全体的に華奢だ。

俺は中学校のころのジャージを手を取った。少し大きい気もしたが、小さいよりはいいだろう。

ジャージの上下を脱衣所の籠に入れた。佩刀の制服や下着はなるべく見ないようにその場を去る。

そういえば俺も靴を脱いでいなかった。しかし、いまさら脱ぐ気にもならなかった。

急いで台所の棚を開ける。その中には即席カップ麺が数個貯蔵されていた。適当な奴を二つ掴む。ポットのお湯を確認し、湯を投入した。湯気の湧くカップ麺に蓋を置く。後三分ほどで完成だ。

窓からは雨が地面を穿^{うが}つているのが見えた。カーテンを閉め、じつとする。

回復した聴覚が雨音を拾っていた。
鬱々とした室内。それはなにも雨だけのせいではないような気がした。

ガラガラと音がした。どうやら佩刀が風呂から出たらしい。

しばらくしてジャージを着た佩刀が居間に来た。俺の意図を汲み取ってくれたらしい。ジャージはやはり大きめだったらしく、ブカブカだった。それでも着こなす辺り、美人は得だと思う。

髪は艶やかに濡れている。体は上気しており、頬は健康そうな桃色だった。

申し訳なさそうに居間に入る。

「カップラーメンしか急いで作れるものがなかった。これで我慢してほしい」とテーブルの上の即席麺に視線を促す。佩刀が入浴してすぐにお湯を入れたから、多分伸びている。おいしさは損なわれているだろう。なにもあそこまで急ぐ必要はなかった、と思う。

向かい側に座る佩刀。顔を伏せているので表情が読み取れなかった。

無言を肯定と解釈した俺は、カップ麺の一つを佩刀にやった。箸を添えてやる。

「……白夜様」

「どうした」

俺がカップ麺を食べていると、佩刀が顔を上げた。涙を流していた。

瞠目する。頬には透明の液体が伝っていた。

なんで。

なんで泣くんだよ。

悲しんでいるのか。

悔やんでいるのか。

おまえは悪くない。

よく分からないが、多分、おまえは悪くない。

悪いのはきつと俺だ。

だから。

泣くなよ。

佩刀は呻吟するように唇を歪めた。いいたいことはあるけど、それをいえない。そういった表情。「おつ、お風呂には入られないのですか……」

「後から入る」

「それでは風邪を引きます」

「そんなことはいいんだ。おまえも食べるよ。ずっとあそこで立ってたんだろ」

佩刀の腹の音が鳴った。どうやら凶星らしい。佩刀は顔を赤くした。

綺麗な手が箸に伸びる。汁の吸った麺を食べる姿はかわいらしかった。

「すみません」

「何もいっな」

無言の時間が続いた。

わずかに咀嚼音が聞こえる程度。箸だけが動いた。

大しておいしくもない即席麺が腹に収まる。科学調味料の味しかなかった。

食べ終わる。緘口かんこうしたままじっとする。するとだんだん寒くなってきた。鼻がぐずつき、全身に震えが走る。さすがに入浴しないとマズイ。そんな危機感を持って立ち上がる。

その折に佩刀の視線が刺さったが、無視した。黙って脱衣所に入

る。たつぷり水を含んだ服を脱ぎ、浴槽に浸かる。たちまち冷えきった体がぼかぼかと温まる。いつもの倍の水量がある入浴は気持ちよかった。

そのまま十分、浸かり続ける。

入浴をすまし服を着る。柄のない黒い寝間着。俺は無地が好きなので、タンスの中には無地しかない。

居間に入ると佩刀が背を屈めていた。腰まである黒髪をゴミで縛っている。

どうやら雑巾で床を拭いているようだった。泥が混じったバケツは黒っぽい色をしていた。

足音で俺に気づいたのか、振り返る。袖まくりをした腕は、陶磁器のように白かった。

「今すぐ掃除いたします。しばらくお待ちください」

健気に笑って雑巾を絞る。

黙って雑巾をもぎ取る。バケツの中に沈めた。

「な、何をなさいますか」

「風呂に入ったばかりだろ。掃除なんかしたらまた汚れる」

「し、しかしそれでは……」

「掃除は明日すればいい。おまえは休んどけ」

佩刀の腕を強引に握る。そのまま立たせ、洗面所へ連行。蛇口を捻って、佩刀の手を洗う。汚かった指は綺麗になり、タオルで拭かせた。

再び居間へ。佩刀を無理やり座らせた。

「なんであそこにいた」

顔を突き合わせる。佩刀は顔を俯かせた。

……やがて、朴訥と喋り始めた。

私のクラスのホームルームが終わり、白夜様がいらっしやる二組へと向かいました。されど白夜様のお姿はそこにはありませんでした。気になって知人に尋ねたところ、どうやらご友人と清遊に行かれたのだと聞きました。白夜様のお出迎えは私の責務です。なので

白夜様の尊宅で白夜様のお帰りを待つていた次第なのです。

「……学校が終わってからずっとか？」

信じられなかったのでそう質問する。佩刀は二時間近く立ち続けていたのか。

佩刀は首肯した。「そうでございます」

「雨が降ってたのにか」

「別に気にはなりません」

「……そういうことじゃない」

雨にずっと打たれていれば、具合は悪くなるし、風邪だって引く。そんなの当たり前のことだ。

そういうと、佩刀は腰を折って頭を上げた。「申し訳ございません。いらぬ心配をおかけしました」

女に額ずかせるというのは嫌な構図だ。第三者から見ればあらぬ誤解を招く。

佩刀に頭を上げさせる。それでも気丈に拒む佩刀。佩刀は己の不甲斐なさと罪悪感を恥じているようだった。

「いいから上げろって。俺が困るんだ」

「……分かりました」

不承不承で低頭をやめる。目の位置がほぼ一緒になった。

「白夜様……」

上目遣いに見られる。佩刀の表情は官能的で情緒的だった。

「本当になんと申し上げたらよいのか……。私のために甲斐甲斐しくお手当てしてくださいって、それにお風呂まで……」

「別にいい。それくらい当たり前だろ」

「今後とも粉骨碎身、白夜様をお世話させていただきます」

「勝手にしろ」

俺は横になった。

篝火白夜と佩刀歪。

この二つを繋ぐものは何なのか。どういった関係性なのか。知人でも友人でも恋人でもない。しいていうなら主従関係。主人

と従者のような繋がりがりだ。

篝火白夜が主人。

佩刀歪が従者。

なんだかチグハグだ。信じられないくらい違和感がある。

篝火白夜は主人といえるほど度量が広いわけでもない。

佩刀歪は従者といえるほど程度が低いわけでもない。

瞼がゆっくりと落ちる。欠伸が出た。

「白夜様。お蒲団をお出ししましょうか」

側臥したまま頷くと、「承知いたしました」と応じる声。

テーブルを部屋の隅にどける。押し入れから蒲団を取り出し、居間に敷いた。

少し早い気もしたが、眠気がひどい。雨の中を走り続けたからだろうか。疲労が体に蓄積している。鉛を埋め込まれたみたいに重かった。

さて寝るか、と意気込むも、不意にあることに気づく。

「……歪」

「どうかありませんか」

「おまえ、これからどうするんだ」

起き上がって窓のほうを見る。カーテンを開けると滝のような暴雨。先がまったく見え、太鼓を叩くように雨が降り注いでいる。

とても外出できる天候ではない。こんな中飛び出すなんて自殺行為に等しい。

ではどうするか。

「……白夜様」とおぼろげとした声。「その、誠に恐れ多いことですが、と、泊らせていただいてよろしいでしょうか……」

「……仕方ないよな」

花が咲いたような笑顔。

佩刀歪は万遍の笑みで俺の横に滑り込んだ。

蒲団は一人暮らし故に一組しかない。同様に枕も一つだけだ。

必然的に二人で一つの寝具を使うことになる。

佩刀は枕に頭を置いた。髪の毛同士が接触する。すごく近い。

「……もう少し離れろ」

「そんな寂しいことを仰らないでください」佩刀は恥じらうようにいった。「それで白夜様……、や、優しくしてくださいね。私、こういうことは初めてで……」

「……おまえ、勘違いしてるだろ」

溜息をつくと隣から寝息が聞こえてきた。

ふっと頬を緩めて立ち上がる。電気を消して消灯。

蒲団に戻ると、知らぬ間に枕が独占されていた。幸せそうな表情で寝入っている。

抜け目のない奴だ、と思って、枕を諦める。

極限まで佩刀から離れ、就寝することにする。

眼前には木目の荒い天井が見えた。

おもむろに起き上がる。脚部は蒲団にかかったままだった。

「おはようございます、白夜様」

佩刀が台所からひよっこりと顔を出した。割烹着を着衣し、包丁を握っている。それには野菜の屑がついていた。

ああとあって、のっそりと立つ。今は何時だろうか。時間が気になる。

「七時四十分です」と佩刀がいった。俺の思いを感得したらしい。今日は土曜日だ。休日なので遅刻する心配はない。

佩刀は何をしているのだろうか、と思って台所に向かう。そのさい食欲をそそる香りが鼻腔をくすぐった。

背中越しに覗く。佩刀は大皿に料理を盛りつけているところだった。

「……うまそうだな」

「勝手に使ってしまったが、よろしかったでしょうか」

「別にいい」と答えて、蒲団のほうに戻る。節々の痛む体で蒲団を畳み、押し入れにしまっておく。倒していた卓袱台を元の位置に戻した。

昨夜から何も食べてないからか、ひどく空腹だった。

佩刀が大皿を抱えてやってきた。「お召し上がりください」といって、卓袱台の上に置く。箸や取り皿も同様に。

いただきます、と呟いて箸を握る。佩刀の野菜炒めは俺の作るものより何十倍も美味だった。「おまえ、なんでもできるな」

「そうでもございません。しいていうなら厳格な家風からくるものでしょう。私の家では家事洗濯から礼儀作法に至るまで、徹底的に叩きこまれていましたから」

佩刀の家はかなり厳しいものらしい。珍しく佩刀が複雑そうな表

情を浮かべている。

ただそれだけに、佩刀は実に洗練されている。所作も容貌も何もかも。

佩刀歪。

何か特別な訓練を受けているのか、動きに全く無駄がなかった。一挙手一投足が刃のように研ぎ澄まされている。

それは日本舞踊に通じた動きだった。例えるなら能楽のそれに近い。

佩刀と向き合っていると、なんとなく威圧される。存在感が尋常でない。仮に俺と佩刀が干戈かんかを交えたのなら、即効でやられる。その実感はある。説明しづらいが、この女は何かを隠し持っていそうだった。

この女もまた、練絹玉梓と同様に武芸者だ。直感で分かる。きつと梅雨利東子も同じだ。

頭脳は犀利あきじり。容姿は濃艶。

「どうかなされましたか」

箸が止まってることに気づいたのか、声をかけられる。

よく見てるよな、と思う。常に俺の拳動に気を配っている。

「これ、おいしいな」と誤魔化すようにいった。

「そういつていただけると幸甚の限りです」と嬉しそうに笑んだ。

「作った甲斐がありました」

「そうか」

キャベツを口に含む。

窓外には朝焼けの空。爽快で縹渺しやうびやうとしている。

二人での食事は新鮮だった。いつも孤食。その反動だろうか。今はいい。この雰囲気は幸せだ。

顔を突き合わせて飯を食べる。

何の変哲のない行為で、こんなにも朝が楽しくなる。

自分の存在を肯定されたようだった。いつも一人だったからだろうか。よく分からない。この時間が終わってほしくない、とは思う。

篝火白夜はずっと一人だった。けど二人でいると安心する。そしてなんだか強くなれたような気さえするのだ。

佩刀は力強いエネルギーに溢れていた。佩刀に触れ続ければ自分もかっこいい奴になれるように思えた。

まあ、幻覚だが。

自分を甘やかしてくれる相手といると軟弱になる。

自分の価値観や存在を他者に依存して、生きる。それで立派に生きたつもりになってる。そんなの傲慢だ。砂上の楼閣に等しい。

朝食を食べ終わり、食器を流しに放り込む。皿が冷たい水に沈んでいった。

「食器は私が洗っておきますね」

「……そういえばおまえ」と前置きを置く。いおうかどうか迷ったが、いうことにする。「家に帰らなくていいのか。厳しい家なんだろう。朝帰りなんてご法度じゃないのか」

納得した風に首肯する。佩刀はにこやかな笑みを浮かべた。「ご安心ください。父は私と白夜様の関係を容認しています。むしろ奨励しているといっても過言ではありません」

何とも不可解な話だった。

奨励。

なぜ。

「そういえば申し上げておりませんでしたね。なぜ私が白夜様の許嫁になったのか、その経緯を」

それは俺のあずかり知らぬところである。

そもそも本人の知らぬ間に結婚を取り決められてたなんて聞いたことがない。

早く帰ったほうがいいのでは、と思っていたが、そのことも気になる。佩刀歪の謎が解けるかもしれない。

佩刀は深閑と話し始めた。

「私の家は代々験者げんじやの家系です。験者とは加持祈祷を行う行者のことを指します。佩刀家の出生は平安時代にまで遡ります。蔵の古文

書によれば、我々は陰陽道の一派であり、不祥事を起こしてこの村に逐電したのだとか。それでここ日和見村に住み着いたというわけです。佩刀家はこの村で隆盛を誇りました。また武門の名伽家、能楽の転寝家が数世紀後に居を構えた。この御三家を枢要に、日和見村という隠れ里のようなものを築きあげたのです」

…… 一気にややこしくなった。

この村の変遷と何か関係があるのだろうか。

肅々と佩刀は先を進める。俺の疑問など気にもしないで。

「佩刀家は霊験や神事、その一切を取り仕切る。それは今も変わらぬならわしです。名伽家も同様に、この村一帯の道場は名伽家が管轄しております。確か現代の当主は名伽高嵐でございますでしょうか。佩刀、名伽。両家とも徹底した尚古主義です。ただ転寝家は例外で、転寝の棟梁である転寝隆寛は現役の警察官を勤めています。現代社会との融和ですね。あるいは見解の相違。まあ、そんなことはどうでもよいことです。重要なのはここから。佩刀家にはとある掟があります」

「…… 掟？ なんだそれ」

「掟。すなわち 婚姻に関するものです」

やっと本筋らしい。

佩刀は背筋を伸ばして整容した。

「佩刀家では装着おもちの折に、生涯の夫が決まります。断っておきますが、離婚は許されておりません。両者とも結婚年齢に達すれば、即入籍でございます。そしてその相手は「夢視」という儀式で決定いたします。夢視とは読んで字のごとく、夢を視ることでございます。視るのは私ではなく、家の主たる実父なのですが。そして数十年後の我が子の姿を視るのです。己の夢の中で。そのさいに隣にいた男性こそが、のちに結ばれる相手、という寸法なのです。正直私も半信半疑でした。しかし父上は夢視が成功したらしいのです。で、その相手が」

「俺だった、というわけだ」

「左様でございます。これは奕世から続く格式高い儀礼。勿論例外などありません。掟は絶対です」

メチャクチャな話だ、と思った。夢の中に出てきた男と結婚する意味が分からない。大時代的過ぎる。

なんとという、浅ましき。夢で見た。そんな不確定極まりないことで、結婚の自由を奪うのか。それでは選ぶ自由を侵害している。

「……んな、アホらしい」

「しかし佩刀の一家郎党は真剣です。本気で私と白夜様を結婚させるつもりなのでしょう」

嘘をついてる口調ではない。いつている内容は荒唐無稽だが、確然たる真実なのだろう。

「……おまえはそれでいいのか。見ず知らずの男と結婚式を上げるなんてバカバカしい、とは思わなかったのか」

「私も少なからず腑に落ちないものは感じました。いくら掟とはいえそれはおかしいでしょう。しかし、掟は絶対。やむを得ず、その相手とやらの顔を見ることにしました。ちょうど三年前のことです。そこで私は」

佩刀の口ぶりが急にしばむ。

何事かと気色を窺う。佩刀は頬を仄かに染めていた。

「その、なんでしょう。吹っ飛びました。掟やらなんやら、頭から飛びました。真っ白になる、といえばよいのでしょうか。まさに無我の境地。私は打ちのめされました。私は……、篝火白夜様の堂々たる威容に惚れてしまったのです」

顔を下げる。佩刀は恥じらう乙女のように体を縮こまらせた。
んなバカな。

俺の思考は冷えていた。理性がありえないと一蹴している。佩刀家の珍妙な因習もだが、佩刀の披瀝ひれきによって、ますます現実味がなくなつた。

「おまえ、冗談がうまいな」

「じよ、冗談ではありません!」

はつと顔を上げて、また下げる。そして蚊の泣くような声で言った。「そ、その……。別に白夜様が金髪であるとか、不良であるとか。それ以前の問題です。本能がこのお方と一つになりたいと、このお方の子供を授かりたいと、そう囁いているのです」

「歪」と肩に手を置く。

「白夜様……」

「一回精神科を受診したほうがいい」

俺は一笑に付して、腰を上げた。「そんな与太話はいいから、さつさと帰れ。家の人が心配してる」

「ち、違います！ 本気なんです。私、本気なんです！」

「とりあえず電話で安否を伝えておけ。電話は玄関の近くにあるから」

「白夜様あ！」

抱きつかれた。押し倒された衝撃で後ろに転倒する。

背中が痛い。壁で骨を打ったようだ。みしみしと鳴る。

目の前には佩刀の顔があった。漆黒の目。濡れた唇。篝火白夜と書かれたジャージの透き影から見える鎖骨。その奥には胸の谷間が絶妙な位置で姿を覗かせていた。首筋の雪肌は紅潮している。

すぐ近くまで接近してくる。佩刀は足同士を絡ませ、体をこすりつけた。熱を帯びた手が服の隙間に入り込む。肌と肌が触れ合う。ゾクツとする。

「私……もう、ダメです。こんなこと初めてです。こんな想いになったの初めてです」

佩刀の息は荒い。はあはあと肩で呼吸をしている。それが頬にかかる。吐息は甘い。

体は硬直して動けなかった。体の神経が死んでいるようである。

「……逃げないでください。私を遠ざけないでください。ずっと傍にいたいです。分かってくれますよね。白夜様なら分かってくれますよね」

何を。何を何を。

何を分かれというんだ。

佩刀の体が胸板に乗っている。重いだろ。いくら女でも重いに決まってるだろ。

けどなんだろうな。口が動かない。

「昨日誰といたのですか。知人によれば、女だったそうじゃないですか。どこに行っただんですか。どこまで行っただんですか」

佩刀は獣性のこもった瞳で睨む。唾液が滴っている。それに気づかない佩刀。

「別に白夜様が誰とお遊びになろうと勝手です。私に飽きたのならほかの女と遊びたくもなるでしょう。けれど、それはあんまりじゃないですか。ひどいじゃないですか」

悲痛な叫び。佩刀は信じられないくらい弱々しかった。けど目は、目は……。

ねっとりとした視線。

舐めるような視線。

這いずるような視線。

味わうような視線。

「さつきもいいましたよね。私、本気なんです。理性の力じゃどうにもならいくらいのレベルなんです。どうしたらいいんですか。私はどうしたらいいんですか」

ゆっくりと縮まる距離。佩刀の顔がだんだんと肉薄していく。それに準じて愛部も激しくなった。俺の腰と胸を撫でまわす。表面で円を描くように手が動いていた。

「白夜様と初めて口を吸った時、嬉しかったです。三年前からずっと夢見ていました。白夜様。私のどこがダメなんですか。足りないところがありますか。遠慮なさらずに申し上げてください。改善します。矯正します。白夜様好みの女になります。何でもお申しつけください。好きに扱ってください。なんでもします。白夜様のためならなんだってします」

うわごとのように呟く。

酩酊していく頭。なぜか動かせない。口も手も足も。全部が全部動かせない。

佩刀は熱っぽい目を向けた。ごくんと唾を飲み込む。

「私は、その……、せつ、せ」

ピンポーン。

「おはよう白夜君。あれ、いないのかしら。白夜君、いるなら返事してね。ねえ、東子から聞いたよ。あなたってご両親がいらっしゃらないそうじゃない。だから朝ご飯、作りに来てあげたわよ。男の一人暮らしなんて、ろくなもの食べてないでしょう。けど大丈夫。ちゃんと栄養のつくもの食べさせてあげるから。それと……、昨日は本当にごめんね。いくらなんでもあれはやり過ぎたわ。けど、けどどけどけど、だってあなた、いかにもロックが好きそうな顔してたから……。ほら、金髪の人ってロックとかパンクとか好きそうじゃない。……ええ、弁解よ、けど悪いとは思ってるわ。いきなり家から出られても仕方ないと思う。だからそのお礼に朝食を作ってあげるわ。感謝してよ、調理には自信あるんだから！」

扉の開場音。

門扉の向こう側。ビニール袋を抱えた練絹玉梓が入ろうとしていた。鼻歌交じりに玄関に上がる。

開口できない。篝火白夜の網膜は練絹の歩みを無気力に映していた。

「……何これ」

茫然とした声。フローリングにビニール袋が落ちる音。袋から、ニンジンやトマトがこぼれ落ち、床に転がっていく。

「……そういうこと？ あなたたちってそういう関係だったの？」

こんな朝からそういうことをする関係だったの？ ……えっ？ 白夜君と佩刀さんは……、やっぱり、こそ、そういう関係だったの？」

音が消えた空間。音も何もない。どいつもこいつも彫像になっちまった。

篝火白夜も。

佩刀歪も。

練絹玉梓も。

「…………ごめんね。お楽しみ中にお邪魔しちゃって。私、お邪魔虫だわ。うん、お邪魔虫。…………というか、その、佩刀さん主体なんだね。いきなり襲っちゃったのかな。その、女の子のほうからそういうことをするのはどうかと思うよ…………」

練絹の独白だけが残響した。

後ろを振り向く。そして走っていった。廊下には一滴だけの水溜りが出来ていた。

取り残される。

あらゆるものが。

取り残される。

気まずい空気が流れる。心なしか部屋の温度が低くなった気がした。

「……帰ってくれ」と憔悴した声で言う。佩刀の視線から逃げるように目を逸らした。

なぜか鬱屈とした気分になった。

「……白夜様」

「帰ってくれ」と強い口調でいった。「帰ってくれ」

思ってもいない威勢に押されたのか、佩刀は体を起こした。佩刀の細い足が俺の足を挟んでいる。小動物みたいに無防備な目で俺を見える。縋るよう表情。清澄とした瞳は恐れと不安を抱いていた。なにかを堪えているようで痛々しい。

「そんなことをいわないでください……。私、そんなつもりじゃなかったんです。そんなつもりじゃな」

「関係ない。さっきいったら。家の人が心配してるって」と無感情な声。永久凍土よりも冷たい。「だから帰れ。家まで送ってやるから」

佩刀は何もいわなかった。俺の言動に含むものがあるのか、恨めしそうに見る。しかし俺に従順なのは変わらず、いうとおりにした。俺から数歩距離を置いた。

これでいい、と思った。これこそが本来の距離感だ。つかず離れず。近づきすぎたら今みたいになる。離れすぎては何も出来ない。だからこれでいい。

腹筋の要領で起き上がる。最近体を使ってないからか、筋肉がなまっているようだった。不自然に体が重い。

深い森に迷っているようである。頭が落ち着かない。冷静な判断が下せない。別にあそこまで佩刀に辛く当たる必要はなかった。悪いのは全部俺だ。篝火白夜の責任なのだ。履き違えるな。佩刀に罪

はない。罰は俺が背負う。

後で謝ろう。練絹にも佩刀にも後で死ぬほど謝罪しよう。よく分からぬが、練絹は傷ついていた。その原因は紛れもなく俺。俺のせいで練絹は悲しんだ。

練絹玉梓はいい奴だ。こんな俺のために朝食を作りに来てくれた。だから裏切るのはよくない。

裏切られることは許容できても、裏切れることは許容できない。自分のせいで誰かが嫌な思いをするのは、俺が嫌だ。人を傷つけておいて、知らぬ存ぜぬを通すことは篝火白夜にはできない。

「歪。家までどれくらいある」と容顔を窺いながら問う。佩刀も心に瑕疵をこつむつたのだろう。でなければ、そんな目をしない。

「……二十五分ほどでございます」
「分かった」

部屋の電気を消す。明るかった室内が暗くなる。残照のように、朝日だけが差し込むだけである。

廊下には野菜やらなんやらが散在していた。
空しくなる。

後で練絹に届けてやるべきだろうか。いや、いい。傷がより深くなるだけだ。ありがたくいただいでおこう。冷蔵庫に入れるのは佩刀を送った後だ。金のほうは梅雨利東子を仲立ちにして渡してもらおう。

佩刀は昨日の下着や制服を脱衣所で回収した。濡れた衣服は洗濯してある。乾燥機で乾かしたから、着れる状態にあるはずだ。

制服に着替えるのだろうか、と予想する。

佩刀が廊下に出てきた。俺の予想に反して、俺のジャージ姿のままだった。手で制服を携行している。

俺は靴を履くのをとめ、「制服を着ないのか」と提案した。

「なぜそう思うのですか」

「乾いてるんだろ。そっちを着たらどうだ」

「別にいいです」

「俺のジャージじゃアレだろ」

アレがどういうものであるのかは説明しにくい。けれど後々のことを考えれば、後難は避けるべきである。なんせ、ジャージには篝火白夜と克明に刺繍されているのだ。下手に見られようものなら、あらぬ噂が広まるだろう。それではいずれ佩刀にも迷惑をかけることになる。

それに、もったいないような気もした。佩刀ほどの麗人がわざわざざくすんだジャージを着ることもない。似合わぬわけではないのだが、違和感はある。

「問題はありませぬ」

「俺の名前が書いてあるぞ」

「構いません。むしろこれがいいです。白夜様の匂いがたくさんします」

佩刀は袖に鼻をうずめた。犬のようにクンクンと匂いを嗅ぐ。その後、自分の体を抱きしめた。

「いい匂いです。心が落ち着いて、幸せな気持ちになれます」

どうやら佩刀は防虫剤の匂いが好みらしかった。

佩刀も遅れて履物に足をつけた。あられもなく乱れた衣服を整える。

暗闇の中、俺の様子を瞥見。やがて咳くようにいった。「白夜様」

「なんだ」

「父上にご挨拶いたしますか」といった。折角だから、といった二ユアンスがこめられていた。本人もそれを望んでいるようである。

「しない」

「御意のままに」

佩刀は扉を開けた。眩しい光が視界を覆う。思わず手をかざした。いつものように鍵をかける。

俺は無言のまま、部屋の門扉に背を向けた。

日和見神社は荘厳な作りだった。

百段以上ある石段。鳥井を潜り抜けると、豪華な春日造の本殿が見えた。猩々緋の庇。注連縄が神前に設けられている。

俺と佩刀は砂利の敷かれた境内を歩く。互いに一言も発しなかった。

「じゃあ、ここで」と立ち止まる。

竹林がざわざわと音を立てた。

周囲は森で囲まれているらしく、敷地の中は閑散としていた。闕あ伽棚かたなには花が供えてあった。日和見神社には物憂いとした寂寥感しかない。

「それでは白夜様。用心してお帰りください」

佩刀は深く一礼をして、春風に紛れていった。

俺は元来た道を逆走した。

茫漠とした空気の流れが背中を打つ。うつら悲しい気分で鳥井を通過した。そのまま階段を一段ずつ下りていく。

ポケットの中が震えたのはその折のことである。

手をつ突っ込むと、携帯電話がバイブレーションを繰り返していた。どうやらズボンに入れたままだったらしい。画面を見る。そこには見知らぬアドレスがあった。

悪戯電話だろうか。

階段を下りながら電話に出る。すると聞き覚えのある声が聞こえてきた。『はてさて問題です。一体全体、私は何者でしょう？』

……ヒント？ ヒントなんて当然なし！ さあさあ私の正体を当ててみよ！』

電話を切ることにする。

『いきなり切るってどういう見よ！ 非礼、無礼、失礼、その三拍子！ レディーに対してそんな態度はないと思うこの頃、篝火君はいかがお過ごしですか』

「……元気でやってるよ」

そう答えると、梅雨利東子は電話越しに含み笑いを漏らした。

面倒や奴からかかってきた、と苦々しく思った。よりによってこのタイミングとは、運が悪すぎる。

『ねえ君。今、運が悪いとか思ったでしょ。思ったでしょ、思ったでしょ、思ったでしょ』

……エスパーかよ。

この女には予知能力か何か備わっているのだろうか。あるとしても驚かない。そんな意外性があってもおかしくはない。

「おまえ、何かの達人だろ」と試しにいつてみる。

『剣道の段位は三段だよ』

……ほらやつぱり。妙に隙がないと思ったら、そういうことなのか。

それ以前に高校生の身でありながら、剣道三段という時点で異常である。

「流派は」

『さあ、中学校のころに少しかじった程度だし。道場主の名伽高嵐さんか、狭霧先輩に訊けば分かると思うよ』

「……狭霧先輩」

『あれ、知らないの？ 名伽家次期領袖、名伽狭霧』

「……知ってるよ。あの人にはちよつとばかり因縁がある」
すると、梅雨利は笑ったようだった。

『私も狭霧先輩から聞いたよ。なんでも君、先輩に挑戦状叩きつけたらしいね。無謀というか果敢というか……、よく先輩に挑もうと思ったたよね』

「昔の話だ。あのころは荒れてたからな。誰彼構わず、といったところ」

『で、負けたんでしょ。篝火白夜の全勝記録はそこでストップした』
梅雨利の声は透明だった。背後の喧騒とは無関係に聞こえてくる。
脳に直接語りかけているようだった。

『けどまあ、相手が悪かったね。相手があの稀代の武門 名伽の怪物じゃあ、勝てる勝負も勝てない。名伽家の人間に勝てるのは佩刀の人間くらいだよ。それか裏御三家の頭、外道剣術の蔀家しとみ。それくらいだろうね。その点、生徒会長の蔀譲羽しとみずりはは有名な。なんたって狭霧先輩を降した唯一の人だし』

蔀譲羽。

知らない。

後日佩刀に訊いてみよう。佩刀歪は生徒会の一員だ。その蔀譲羽なる人間のことを知っているはずである。

一抹の興味は、ある。あの名伽狭霧を破るほどの強者なのだ。気にならないといえは嘘になる。

名伽狭霧。

艶やかな銀髪を腰までおろした女。中学校の頃、道場破りをしていた俺を叩きのめした相手だ。あの時期は外界全ての人間が敵だと思っていた。道場破りを決意したのも単純な理由で、周りから悪鬼だとか悪魔だとか呼ばれていたからである。

なら本当の悪鬼、悪魔になってやろう、というわけだ。

ただやってみると面白いほどに連勝を重ねた。おそらく日和見村の道場の六割は俺が潰したのではないだろうか。

特殊な訓練を受けているわけでもなく、筋肉トレーニングを課しているわけでもない。にもかかわらず、連戦連勝。その勝因は俺の動体視力にあるのだろう。俺の目は意識のスイッチを入れたとたん、冴えた。そして判断力と洞察力。この三つを駆使して数ある道場は篝火白夜の軍門に降った。

その例外が由緒正しき武家 名伽家だった。

詳細は梅雨利の話したとおりである。遡行してみれば、笑えるくらいあっさりとやられた。年齢は相手のほうが上とはいえ、女性で

ある。体格や筋肉量に履せない差があるはずだ。だが鎧袖一触がこしゆいっしゅくのごとく、ねじ伏せられた。

「本当、生徒会メンバーは独特だね。個性的すぎて破綻してるっていうか、いや、逆？ 個性的であるあまり、一つの組織体系を形成してる、といったほうが正しいかな。佩刀歪もそうだし、葩讓羽にしても常軌を逸している。篝火君は知ってるかな？ 狭霧先輩も一応、生徒会の人間なんだよ。あまり生徒会室には出入りしないけどね」

別に興味はなかったが、訊いてくれと口吻に漏らしているので、やむを得ず訊いてやる。「なんでだ」

「よくぞ訊いてくれました。狭霧先輩はね、著名な美術コンクールに作品を出展するんだよ。そのために生徒会活動は一時中止。生徒会長も了解してる。五月ごろに発表するんだって。本当にすごいよね、狭霧先輩。やっぱり御三家には特殊な人が多いよ。生徒会もそういう格式高い家柄で構成されているしね」

生徒会など知ったことではないが、なんだか奇々怪々とした集団であることは分かった。

それよりも気になることがあった。

「……おまえ、もしかして美術部員なのか」
肯定の返事が返ってくる。

気がつけば階段を下り終えていた。当然目に映る光景は変化している。眼下には変わり映えのしない田畑が広がっていた。振り返れば雄偉たる石段が天に伸びている。

「で、梅雨利」と仕切り直す。「俺に何か用か」

「ああ、そうだった。忘れてたよ本来の目的。随分と脱線しちゃったなあ」

はははと笑う。なんとも軽薄な笑みだ。

梅雨利東子の第一印象はストイックである。凜冽とした器量を感じられ、一筋縄でいきそうにない人間。それが梅雨利東子の見解だ。しかしある程度の会話を重ねていくと、この女ほどメチャクチャ

な人間はいないように思えてくる。顔つきはやや幼いが、得体の知れないものと対峙しているような不安に襲われるのだ。例えるなら、魔球を隠し持つていそうな女である。それもギリギリまでそれを隠し通し、土壇場で一気に蹴りをつけるタイプだ。

純朴だが面妖。

放蕩だが律儀。

温和だが酷薄。

そういった二律背反とした認識が、俺の中で定着しつつある。

話し方も歯に衣着せない。思ったことをずけずけと言いつつ。それが時々確信を突くのだから、始末におえない。色々と考えさせられる。思慮が深いのか浅いのか、浅いのか深いのか、判断しづらい。何かと謎の多い女だ。

そもそも。

なぜ俺のメールアドレスを入手できたのだろうか。

様々な憶測が浮かんできたが、どうでもいいと一蹴。いまさら知ったところで何かが変わるわけでもない。無駄な労働はしない主義だ。

『それはそうと、白夜君。断っておくけどこれからが本題だからね』と一旦区切る。『んで、玉梓の体はどうだった？ 柔らかかった？ 甘かった？』

梅雨利のいいたいことが理解できなかった。俺は呆けるように、「あー、うん」と曖昧な一言を漏らす。

『ふーん。その様子だと私のいいたいことが理解できてないみたいだね。据え膳食わぬは男の恥、ってことわざ知ってる？ 据え膳なだけに、せつかく私がお膳立てしてあげたのになあ……』

「お膳立て？」

『うんうん、なんでもない。こつちのお話』

電話口から狼狽した声が聞こえてきた。言葉をもついくつか取り繕われる。なんとも不審な態度だった。

そういえば、と練絹のことを思い出す。とたんに影が落ちる。心

臟が嫌な具合に締めつけられた。

「梅雨利」

「ん？ 何、そんな真剣な声出して……」

「おまえに頼みたいことがあるんだ」

起きてみれば枕脇にジャージが置いてあった。几帳面なまでにきつちりと畳まれている。洗濯してくれたのか、仄かに品のいい香りがした。

隣には置手紙が添えられており、突然の訪問をお許しください、といった文辞とともに礼の言葉が述べられていた。

曖昧模糊とたゆたう意識。視線を壁に向ける。時計の針は午前九時を指していた。

どうやら佩刀は早朝に俺の家に来たらしい。そしてなんらかの手段を用いて自宅に侵入。昨日貸しておいたジャージを返却した。その折に誠心とした書簡を書き添えたというわけだ。

律義な奴だ、と思う。義理堅いというか、かたくなというか……。手紙にはこう綴られていた。

折角ですから朝餉をこしらえておきました。粗肴そくわですが、よろしければお召し上がりください。

相も変わらず俺への敬意は不動のままだった。現に台所には手作りの朝食が用意されていた。ラップで綺麗に包装されている。調理されて随分たつているようだが、おいしそうだった。

昨日のことが気に差すのか、佩刀の姿はない。

頭の中でジャージを折り畳む佩刀の姿が想像される。

なんだか気だるくなつた。もう一度寝ることにする。蒲団を肩の辺りにまでかけて、枕に頭を預けた。

目の皮がたるむ中、ぼんやりと夢想到に耽る。

最近、やたらと変な人間と出会う。

佩刀歪しかり、練絹玉梓しかり、梅雨利東子しかり。

三者三様、独特だ。これまでにあったことのない人種。極端に他者との交流がすくない俺でも断言できる。

そういう意味では名伽狭霧も非凡な人間だった。

あまりに完結しすぎていて、むしろ何も無いような印象すら受ける。名伽狭霧は初めから完全な人間だった。それ故か、その場にいること自体、現実味に欠ける。空想の中の人間であるかのように、卓絶で、絶無で、無敵だった。

それは佩刀歪にも当てはまる。タイプは違うが、この二人の存在感は常軌を逸している。練絹玉梓や梅雨利東子も例外ではない。

人間はどうしても他者との交わりを必要とする。しかし彼女たちには不要であるような気がした。自分一人で存在を確定できる。

矛盾や撞着。

醜悪や卑小。

そういつた人間らしい不純物が、ない。

初めから不完全な俺とは対極の人間だ。受動的に生きて、幸運や楽しいことが来るのを待つ。能動的に動かない。それがかつこいいことだと思っている。自分は特別だと思っっている。自分は無限の可能性を持っている、と錯覚している。

無限の裏返しが無駄だと、気づかない。

どこまでも頑迷固陋だ。

惰眠に慣れた体が沈んでいく。

ゆるやかに。

ゆるやかに。

冷蔵庫の中には大量の食品が入っていた。種類も豊富で、生鮮食品や果物などなど。昨日練絹が買ってきてくれたものだ。

なぜか気分が滅入る。近ごろ外出していないからだろうか。陰鬱

なものが部屋に溜まっっているのかもしれない。

ここまま懶惰らんたとした日々を送っても差し支えはない。死活問題だった食糧難は解決されているし、出かけようにも特に行きたいところはない。

畳の上で横になる。佩刀が作ってくれた朝食は腹の中に収まっていた。電子レンジで温め直したのに、鮮度や味は落ちていなかった。時刻は十二時。

無為自然と思索を巡らす。

ふと、練絹玉梓の言葉が想起された。

前に練絹家に行った時の話だ。練絹から俺の出生や環境などを根掘り葉掘り訊かれた。そのさい趣味の話になった。

俺には趣味がない。そういうと練絹はひどく驚いた。文化人の練絹には信じられないことだったのだろう。趣味のないことは寂しいことらしい。練絹は多種多様な音楽や書籍を勧めてくれた。それをぼんやりと受け取る。どれもこれも未知なる代物だった。

白夜君はね、一つくらい趣味を持ったほうがいいわ。そうじゃないと人生、面白くないじゃない。

俺は上体を起こした。

ハンガーにかけていたTシャツを掴み、着替える。

安っぽいジーパンを穿き終わると、洗面所に駆け寄った。なにかを振り切るように勢いよく洗顔。すっきりとした気持ちになる。

練絹の切言は一理あるような気がした。俺には何もない。一日中寝るか、喧嘩を吹っかけられるか。そのどちらか。どう見ても空虚で、実が伴わない。

ズボンに財布を突っ込み、玄関で靴に足を入れる。アパートの部屋の隙間から、昼下がりの日差しが差し込んでいた。

眼前には面白みのない田園が広がっている。物寂しい落莫とした景色。その上部では嵐気溢れる山々が見えた。

前向きになっているのかもしれない。

以前はこんなことを考えもしなかった。だが、今は違う。

篝火白夜は変わろうとしているのだろうか。

誰のおかげなのか。

憂いが晴れる。

俺は狭隘キョウアイなアパートを出た。

とりあえずバスに乗ることにする。ご無沙汰だった商店街にでも行こうと考えたからだ。

查として窓の絶勝を眺める。窓際の縁にひじをついて、取りとめのないことを考えていた。

俺の住む場末の地から、どんどん離れていくのが分かった。風景も田畑から住宅地へと変貌しつつある。人のいる気配が濃厚になっていった。

プシューと間抜けな音。どうやら着いたらしい。所要時間は三十分。俺は財布の中を確認しながら、不躰な視線をねめつけて黙らせた。

降車すると無数の雑踏があった。清掃されたアスファルト。斉一と活気立つ商店街。シャッターを下ろしている店は一つとしてない。

日和見商店街名物の一つに、巨大な噴水がある。何年か前の村長が竣工しゅんこうしたモニュメントのような奴だ。

その一角に腰を下ろし、どこことなく遠望する。

さて、どうしようか。

俺は早くも、考えあぐねていた。

思案に思案を重ね、考えを纏める。その結果、当てもなく彷徨うことに決めた。

腰を上げて、後白波あとしろなみと歩く。

気がつけば路地裏に来到いることに気づく。両端の建造物に日光を遮られているせいか、かなり薄暗かった。表通りとは違ってビール袋やゴミが散在している。どことなく汚らしい。汚泥が溜まっている。

頭上ではカラスが鳴いていた。黒い影が空を滑空する。

路地裏は迷路のように入り組んでいた。むやみやたらに曲がり道が多い。

なるようになれ、と後ろを振り向くことなく歩を進める。

『柚子原堂』なる店とすれ違ったのは、その折のことである。

初めて振り返る。左側には不気味な筆致で描かれた看板があった。ペンキで塗ったらしく、『柚子原堂』と記されている。年端のいかない子供が描いたような、稚拙でいて恐怖をあおる筆意だった。

店名から判断するに、何かを売買する店なのだろう。推測するに骨董店。それも眉唾物のアンティーク辺りが陳列されていそうな雰囲気だ。

一瞬、こんな路傍に店があるのだろうか、といった根本的な疑問が出る。

外から遮蔽された空間。光は届かず、人も来ない。こんなところで商売して利益が出るのだろうか、と心配。

逡巡するも、暖簾をくぐることにする。

怖いもの見たさ。それが背中を後押しした。

入店する。

店内は路地裏以上に暗黒だった。塗りつぶすような漆黒がわだかまっている。天井には裸電球が点いているものの、意味をなしているようには思えない。むしろ不規則に明滅しているので、一層不安をあおる。

形の見えないものは前から嫌いだった。オバケやら妖怪やら、そういったものは形而上的なものである。有形でないということは、存在を知覚できないということだ。それが幼心に暗然とした影を落とすとした。それは今も変わらない。恥ずかしい話、いまだにホラー映画が見れない。

経常と続く闇。目を凝らしてみれば、棚の上には奇妙なものが並べてあった。

羽の生えた豚や、頭が三つある犬の模型。頭のない人体模型。肉がそげ落ちた天使の彫像。逆十字を抱える神父の絵画。断頭台に登る女神。

その中で目に留まったのは、一冊の書物だった。埃のかぶった表紙を手で払い、パラパラとめくる。どうやら小説か何かであるらしい。古めかしい文字で文章が書されていた。

「お気に召したかね」

ぞおつと背筋が凍った。急いで本を閉じ、声のしたほうに視線を向ける。

カウンターの奥、そこには老婆がいた。

どんよりと淀んだ瞳。白内障なのか、眼球は虚ろだ。

「それはね、『壺中の天』という曰くの本だよ」

しわがれた声で老婆はいった。それは寂々とした店内を攪拌した。「なんでもそれを書き上げた何某が、雷鳴に打たれて死んだって話でねえ。くしくも作中に登場する主人公と同じ死に方だったのさ。

面白い話じゃろ。まさに運命のイタズラ」

ひっぴと笑う。唇が醜く裂け、顔面がくしゃくしゃになった。それは齡傾いた魔女を連想させるものだった。

急にこの本が怖くなった。『壺中の天』が音を立てて落下する。それが空しい音を立てた。

「恐怖に駆られたのかな。無理もない。それには妖気が充満しているからのお」

黄ばんだ歯が唇の隙間から見える。そしていった。「持って行け。

それをおまえさんにくれてやるう」

「……代金はいいのか」

老婆は意味深に笑って見せた。「いらん。それに学術的な価値はない。よって代金は無用じゃ」

おずおずとその本を拾う。塵芥ちりあくたにまみれた背表紙。無機質に描かれた文様。そいつは淫靡に輝いていた。

「……本当に、いいんだな」と再度確認。後から代金を要求されては困る。

「いいさ。これもまた巡り合わせ。その本がおまえさんを選んだにすぎぬ」

「やたらと詩的なババアだな」

「だが当意即妙」

電球がちかちかと点滅する。

「私の言がなんであろうが、ここでは些細なことじゃ。それよりもその本、貰ってゆけ。客のニーズに応えるのが商魂というものじゃろう」といって、老婆は俯いた。

……寝ているのか？

寝息を立てた老婆はそれきり動かなくなった。まるでネジの切れたぜんまい人形のようにだった。

食えないババアだったな、と思う。結局何がしたいのか、あまり分からなかった。

俺は例の本を抱えて、店を出た。

『柚子原堂』を跡にした俺は路地の隅にいた。

汚れた壁に背中を預ける。近くから旺盛な客引きの声。威勢のい
いかけ声が行きかっていた。

なんだか世界から切り離された気分。疎外感にも似たものを感じ
る。

「おまえ、篝火白夜だろ」
と。

尖った声が聞こえた。

視線をスライドさせると、長髪の男がいた。その横には短髪の男
が一人。そして、茶髪の男。三人ともだらしなく着崩している。

暗みに立つ三人の男。背後から気配がすると思ったら、もう三人
俺を挟み打ちする形でいた。

計六人、俺は六人の男たちに囲まれていた。

お決まりのパターンだな、と自嘲する。

そのうちのリーダー格らしき男が一步前に出た。先ほど俺の名を
いった長髪だ。

「ちよつと、金貸してほしいんだ」

長髪の男が俺をねめつけ回した。脅すように前に詰め寄る。

条件反射的に身構える。男たちの視線が獰悪だったからだろう。

「そんなに構えるなつて。ほら、穩便に行こうぜ」

短髪の男が甘い口調でいった。へらへらと薄い笑みを張りつけな
がら。

どくろが刺繍されたパーカー。露出した素肌は小麦色に焼けてい
た。筋肉が隆起している。

気力のこもらない目で男たちを一瞥する。

無関心な態度が癪に障ったのか、ピクリと唇が痙攣した。短髪の
男はポケットに手を突っ込んで、厳めしい面を作った。

「金、貸せつていつてるだろ」と長髪がいった。
動かない俺。何もしない。

「おい、聞こえねーのか？」

「金貸してほしっていつてるんだけど。穩便に」

「そうそう、早く貸してくれたらいいからさ」

「悪いことはしねーって」

短髪が目の前に迫ってきている。そのまま俺の襟を掴んだ。口臭は酒精交じりだった。臭くて濁っている。

距離を詰められる。やがて六人の男たちに包囲された。

俺は、篝火白夜は、そのことを他人事のように考える。

男に腹を殴られると、衝撃で地面に突っ伏した。情けない呻き声を漏らす。男たちは優越感を浮かべていた。

「よっ、よええ」

「うわうわうわ、クリーンヒットじゃん！」

「たった一発でこれかよ」

「クソざこいなあ。つまんねーんだよ、こういうの」

男たちは不快そうな表情で俺を見下していた。

感情を押し殺す。面倒。早く立ち去ってほしい。

そう思ったままじっとしていると、不意に長髪がいった。「そう

いえば、こいつ。佩刀歪と付き合ってるらしいぜ」

「……それ、マジかよ！」

「いや、全然マジ。俺、見たぜ。こいつと佩刀歪が歩いてるとこ」

聞き覚えのある固有名詞が男の口から出てくることに驚く。なぜ

それを知っているのか。なぜそんなことをいうのか。

「信じらんねーくらい似合わねーよなあ」

「だな。こんなクズじゃあなあ」

短髪は俺を蹴りあげた。転がって壁に激突する。

どうやらこの連中は同じ高校の生徒らしい、と見当をつける。

「なんだよ、張り合いねーな、篝火白夜はつえーのなんのって噂だ
ろ」

「ああ、めちやくちやつえーって噂だぜ」

「あのバカ強い名伽狭霧とやり合えるほどの奴だ。つえーはずなんだが……」

「噂は噂ってことだろ。信用ならねーな」

「もしかして本気だしてねーんじゃねーの？」

ははははと笑声。俺を嘲笑する軽薄な響き。黙って地面に倒れる。俺の首を狙いに來たのだろうか。篝火白夜のネームバリューが欲しいのか。

「ならよ。本気、ださせてやろうぜ」

「どうやって？」

「そうだな……。犯すか、佩刀歪」と軽い口調で誰かがいった。「そうすりゃ、こいつも本気だしてくれるだろ」

言葉を失ってしまう。

やめるよ。佩刀歪は健気な女だぞ。心が綺麗でかわいい子なんだぞ。なんでそんなことがいえるんだ。どうして簡単に犯すとかいうんだ。佩刀歪は関係ないだろ。

「……それいいな。佩刀歪強姦作戦」

「佩刀もクソつえーらしいが、しよせんは女だ。六人がかりで襲えばやれるだろ」

「まわすのか？」

「ああ。しよせん女なんてただの道具さ。男のいうとおりによがりゃいい」

「ははは、またそれかよ」

男たちは下卑たる笑い声を上げた。選民意識に酔いしれた顔。そして、ついでのように俺の脇腹を蹴りたくった。

気がつけば、拳を作っていた。

なぜそうしたのは分からない。

起き上がる。そして、偶然近くにいた男を殴った。体がくの字に折れ曲がり、吐血する。俺の拳を受けた男はどさりと路地裏に横たわった。体中の筋肉は弛緩しており、軟体動物のように脱力してい

る。

先ほどの痛覚は消え失せていた。結構殴られたり蹴られたりしたのだが、全て消滅している。

「て、てめえ！」

短髪が殴りかかってくる。俺はそのパンチを流して、男の真横にならんだ。首筋に手刀を入れる。糸の切れた操り人形のように倒れ込む短髪。意識がないのか、受け身を取らないまま落ちていった。どさりと派手な音がする。

かぶせるように四人のうち一人が動き出す。ポケットから鋭く光る何か。腕に刺繍をした男がナイフを向けてきた。

刃渡りの長いサバイバルナイフ。横薙ぎのナイフが弧を描く。その一瞬に、右手に持っていた本を投擲。男の視界を遮断。その軌道が俺の体を通過する前に、刺繍の男の腕を掴む。

そのまま。

くるりと。

回す。

空中で半回転し、刺繍の男は倒れた。同時に『壺中の天』とナイフがアスファルトに落ちた。

「ぶっ殺してやる！」

刺繍の男と挟撃するつもりだったのだろう。俺の背後を取った男は重厚なバールを振りかざした。

後ろを見ずに手でバールを掴む。冷たい感触。男たちが息を飲む音が聞こえた。

そのままバールを腕力だけで奪う。たたらを踏む男。適当に足払いして、胴体を蹴りあげた。激しく壁にぶつかる男。だらしなく唾液を垂らし、失神した。

無気力な目で残りの二人を見る。戦慄に身をすくませる二人。唇をわななかせ、足を震わせていた。

「なっ、っ……、強すぎだろ……。ムム、ムチャクチャだ」

長髪の視線は伏した仲間に向けられ、やがて俺のほうに動いた。

目が合うと怯えたように目を泳がせる。

俺は脇に転がる本を手に取った。本を片手で抱える。もう一方の手はボールを握っていて、それを男たちに向けた。

「歪には手を出すな」

と。

いった。

「うわわわわわわわわわわわわわわわわ」

男たちは体を反転させた。そのまま猛烈なスピードで逃げだす。

別に追うつもりはない。それなりの恐怖を与えておいたから報復には来ないだろう。連中は俺の知名度に釣られた不良、その一角に過ぎない。適度にサンドバックになって、敵を叩き伏せる。そうすれば、相手にも俺と渡り合った、という自負心が芽生える。それに満足して俺には手を出してこない。向こうは俺を強襲しなくなり、俺が迷惑をこうむることはなくなる。双方に損害のない、理想的な展開。それが俺なりの流儀であり、処世術だった。

逃げ出す男たちを目で追う。必死に足を動かす二人。仲間なんか二の次で、まず自分の身の安全から。

薄情な奴らだ。

と。

思った。

その時だろうか。

男たちが舞ったのは。

信じられないくらい鮮やかに吹っ飛ぶ二人。二人の体は宙に滞空し、すぐさま地面に叩きつけられた。

瞠目してしまう。成人男性と変わらぬ体格の男が二人いつぺんに飛んだのだ。それも綺麗な軌跡を描いて。

表通りの光が路地裏に差しこむ。逆光で顔は分からないが、誰かがいることは分かった。輪郭は不明瞭だが、見覚えのある形。

そいつは傘を差していた。

草鞋わらじを履いた足で悠然と闊歩する。紅梅の着物に身を包んだ肢体

はたおやかだった。さながら大和撫子のようで、気品に溢れている。そいつは倒れ込む不良たちを見て慨嘆した。仙骨とした容貌が妖艶とたわむ。

風に乗って銀髪がなびく。

「男のくせに弱い奴らだ」

名伽狭霧は嘆くようにいった。

喫茶店『ヘルツ』は落ち着いた内装だった。

名伽狭霧に連れられた俺は、なぜかコーヒーを啜っていた。

『柚子原堂』で譲渡された書物はソファにうもれている。テーブルに置いてもいいのだが、なんとなく恥ずかしかった。

おまえ、そんな崇高な趣味があったのか。

なんていわれるのがオチだ。面映ゆい。

……いや、待てよ。

決めた。新しい趣味は読書にしよう。これも何かの縁だと思って、読んでみるか。

読書は価値観が広がるといわれている。事実、科学的な根拠も上がっているのだ。愚鈍な俺にはおあつらえ向きだろう。

「まったくひどい話があるものだな。大人数でいたいけな女を襲おうと画策するとは。男とは概してあいつたものなのか」

和服に身を包んだ名伽狭霧は悲しげな表情で茶を飲んだ。ソファの脇には日笠が立てかけてある。振袖から見える肌は新雪のようだった。髪が銀髪であるからか、名伽狭霧は透徹とした印象を受ける。全体的に清涼としていて凜々しい。

どうやら佩刀歪のくだりを聞いていたらしい。入店した直後、男として答えずらい質問をされた。

そこにいたのなら、なぜ助けに来てくれなかったのか。そう思ったが口には出さなかった。

しばし黙考。男という人種がどのようなかを分析する。

「情けないことに」と躊躇うも、「そうなってる」と続ける。

名伽狭霧は偉い吐息をついた。爾後、上目遣いに俺を見る。名伽狭霧は確認するようにいった。「その中にお前も含まれているのか」「俺も例外じゃない」

そうなのか、と行ってソファーに背を預ける。そのしぐさに敏感に反応する男性客。頬を赤く染めて陶然としている。だが俺を見る時の表情は親の仇といわんばかりに陰険だった。憎悪が含有された嫉視が突き刺さる。それを受け流す俺。佩刀や練絹の時に散々味わったから耐性がついたらしい。

人に恨まれるのは慣れてる。嫉妬であろうと憎悪であろうと、俺に不快な感情を抱いているということに変わりはない。

名伽狭霧は常時着物を着る。季節にそった振袖に身を包み、赤い鼻緒のついた草鞋を履く。日差しが強ければ和傘を持っていくし、場合によっては木刀を携帯することもある。名伽狭霧の服装は時代錯誤甚だしい。

「そういうわりに性欲はないようだな」

「……どういう意味だ」

「佩刀歪を見てどうも思わぬ辺り、一つくらい、次元を超越してる」

梅雨利東子のいうように、名伽狭霧は生徒会役員らしかった。同じ生徒会として佩刀歪と交流があるのだろうか。

「そういう対象じゃない」

「ならなんなの。都合のいい道具か。それとも恭順な世話係か」

名伽狭霧の言及は静かながらも迫力があつた、図らずも口を閉ざしてしまふ。

佩刀歪。

一考してみると、確かに不明確だった。篝火白夜にとって佩刀歪はどのような存在なのか。悪い感情を抱いているわけでもないし、不平不満もない。佩刀の恩恵で助かることも多々ある。

佩刀歪は篝火白夜に潤いを与えてくれる人間だ。しかし、その関係性を言語を持って表すのは難しい。

都合のいい道具か。

恭順な世話係か。

「どっちも違う」

「ならなんだ」

「……分らない」

名伽狭霧は複雑そうな顔をした。「分らない、とくるか。佩刀の言い分というか……、意見は聞いておるだろうな」

「飽きるほど聞かされてる」

「……やはり叩いても響かぬようだ。佩刀の健闘空しく、といったところか」と小さくいった。「佩刀のこと、大切にしているのだぞ。相当おまえに入れ込んでおるからな」

「どれくらい？」

「常におまえの自慢話ばかりして、周囲を困惑させるくらいだ」

重症だな……。

俺は心の中で長大息ちやうたいそくをついた。

「やれ白夜様は素晴らしいお方だの、高潔なお方だの、顔を突き合わせるたびにそういった講釈を垂れるのだ。それがあまりにも病的故か、周りはずますお前に猜疑を抱いておる。おまえからも注意してやってくれ。いらぬ助太刀をしたのも、茶屋に誘ったのもそれが主な理由だ」

なるほど、と頷く。

去る者を追わずの名伽狭霧が、助太刀　　というか、後始末をしたのにはそういった事由があったかららしい。もっとも、あの助太

刀はするだけ無用な気もするが。

そういつた趣旨のことを問うてみる、すると名伽狭霧は憤慨した様子で語った。

「……天誅？」

「いかにも。ああいった輩にはきついお灸をすえてやる必要があるのだ。身を持って痛みを経験せねば、他者の痛みは分からぬ。……付言しておくが、暴力を肯定しているわけではないぞ」

名伽狭霧はそれほど暴悪的ではない。黙って首肯する。

「こついう時にこそ木刀があればよいのだが……。まあ、奴らが幸運だったというわけだ」

さらりとそんなことをいえるのも、名伽狭霧らしい。勧善懲悪を掲げる名伽狭霧にとつて、あの手の一派が許せないのだろう。

しかるべき手段を持って断罪する。そこに躊躇などなく、冷徹に人を壊すことができる。

……いっておくが、名伽狭霧は過剰な正義を行使する分からず屋ではない。情状酌量の余地があれば、それなりの対応を取る。その判断に狂いはなく、臨機応変だ。名伽狭霧ほど鋭敏な慧眼を持つものはいないだろう。

聖人君子のような女だ、と思う。名伽狭霧ほど慈悲深く、生一本人間はいない。

「どうかしたのか」と問いかけられる。

なんでもない、と呟いて頬杖をつく。

窓には不景気そうな面が映っていた。染められた金髪。切れ長の目。睡眠時間は多いはずだが、表情に生氣はない。

「……大丈夫だよな」

一人言のつもりだったが、ことのほか大きく響いた。

「何がだ」

「歪なことだ。もしものことがあつたら、腹を切るぞ、俺は」

今の関心事はそれだけだった。本気でするつもりはないだろうが、万が一、という場合もある。そうなったら悔やんでも悔やみきれな

い。絶対に阻止すべきことだ。

「……なるほど。なかなかいい奴ではないか」

「誰かが傷つくのが嫌なんだ」

「……時々お前が分からなくなるよ。ダメな奴だと思ったら、とたんに器量の広さを見せる」

「そんな高尚なもんじゃない」

「そうであってもなくても心配はいらぬ。佩刀はあの程度の奴らには屈せぬ」

「強いのか」

「強い。少なくともお前よりは強いし、実力は私とほぼ拮抗する」

それならば杞憂に終わるだろう。名伽狭霧と同等の力量を持つなら大丈夫だ。

梅雨利東子に稀代の武門と形容される名伽家。それはまんざら嘘でもなく、名伽の家系は尋常じゃなく強い。それは目の前の存在が証明している。

名伽狭霧の太鼓判ももらった。十中八九佩刀に危険が及ぶことはない。ないとは思うが、理性とは別のところで佩刀が心配だった。

そのことを話すと笑われるだけだった。

どうやら雨が降ってきたらしい。

窓の景色は風雨で荒れていた。

朝。

インターホンが鳴った。扉を開けると佩刀歪が立っている。

目が合うと、「おはようございます」と一礼された。ただその後、申し訳なさそうに目を伏せられる。

気にしているのだろうか。

硬直状態のまま、数秒が過ぎる。

「入らないのか」

「入らせていただきます」

二人で廊下を歩く。始終無言で、何も交わされない。

卓袱台で向かい合う。佩刀は相も変わらず直立不動。対する俺はゆったり姿勢を崩した。

登校まで三十分ほど時間がある。

静寂。

それを破ったのは佩刀だった。

「昨日はいかがなされたのですか」とそう尋ねられる。

喫茶店『ヘルツ』でのことだ。名伽狭霧と別れる前に、佩刀家の電話番号を教えてもらった。

喫茶店の電話機を借りて、佩刀の家に電話する。なんコールかした後、佩刀歪が出てきた。後々考えれば、家族親類が出てこなかったことが幸いだったと思う。

佩刀に今いる場所を問う。佩刀にしては珍しく戸惑った様子で、自宅にいます、と答えた。

自宅なら大丈夫、と踏んで、一日中家にいるよう伝え、電話を切った。その様相を名伽狭霧は呆れたように見ていたのを思い出す。きつとそのことだろう。

返答に窮する。理由をいったら笑われる気がした。

押し黙っていると、「いえ、なんでもございません」と佩刀の声。

助かった、と思う。佩刀は深く詮索してこないのだ。

「白夜様……。そちらのものは？」

佩刀は不思議そうにそれを見た。卓袱台の足の近くには、昨日受け取った『壺中の天』があった。唐草模様で彩られた表紙は、やはり埃がついている。

試しに昨晚読んでみたのだが、物の数分で辞退した。どうも文章が硬すぎるのだ。今どき使う機会のないであろう難解な文字が、微に入り細を穿っている。それに本の状態も劣悪なので、読み難いと一人である。

「貰ったんだ」

「誰にですか」

「……さあ、誰だったかな」と答えをはぐらかす。その状況が説明しづらい。いつても信じてくれるかどうか。

「そうでございますか」と曖昧な答えに納得する。

佩刀歪はなによりも篝火白夜の意志を尊重する。俺がいいずらそうな表情をすれば、その意向を汲み取ってくれる。

自分がダメになっていく。そんな予感がした。佩刀は俺にとって都合のいい存在だ。俺を否定もせず拒絶もしない。

人は過剰に守られすぎると腐り、淀んでいく。周りからの悪意や害意の耐性が消えていくからだ。箱庭育ちの奴に暴力や無視の恐ろしさが分かるはずもない。そういう奴はいざという時に破綻する。矢面に立たされれば、あつという間に崩れさる。

佩刀歪が悪いわけではない。悪いのはそれを享受する篝火白夜。勞せず甘い蜜を嚼る俺こそが卑小なのだ。

梅雨利東子も、女を食い物にする男は嫌いだといっていた。俺はそれに近いのではないだろうか。佩刀の好意を食い物にしているだけではないだろうか。

俺は名伽狭霧の問いに答えられたのか。佩刀をどういう風に捉えているのかどうか、きちんと考えていたのか。

このまま曖昧な関係を引きずっていくつもりなのか、俺は。

「随分と古い本ですね」

「少なくとも平成じゃないだろうな。作者は不明だ」

「それは怪しげですね……」

佩刀は目を凝らした。興味深そうに古書を熟視する。何かいい
そんな表情だった。

「……読みたいなら貸してやろうか」

「い、いいのですか!」

「別にいい。俺には読めそうもない」

それが本音だった。まだ俺には早い。もう少し簡単なものから着
手すべきだろう。今まで読書というものをしたことのない俺には、
三百ページは荷が重いのだ。

「ありがとうございます」

佩刀は嬉しそうに『壺中の天』を手に取った。

どうやらお眼鏡に叶ったらしい。こんな煉瓦本のどこに惹かれる
というのか。

「気にいったのか」

「それはもう、一見してこれだと思いました」

「結構本を読むのか」

「はい。自宅の書庫は汗牛充棟としております」

「……かんぎゆうじゆうとう?」

「汗牛充棟とは、蔵書の数が非常に多いことのとえです」

「なるほど」

佩刀は懇切丁寧に説明してくれた。

なんだか情けなくなった。やはり両名の間には致命的な隔たりが
あるようだった。

前々から思っていたのだが、俺がこの女よりも勝るところがある
のだろうか。

「おまえ、苦手なことあるか」と訊いてみる。

佩刀はうとうと沈思した。首をかわいらしく捻って、真剣に考えて
いる。「そうですね……やはり料理でしょうか」

「……料理？ 料理が苦手なのか」

「はい。私がまだ小学生だった頃は、いつも母上に叱られていました」と佩刀はうなだれた。

んなバカな。

もし佩刀が料理を苦手とするなら、俺の場合、苦手どころでは済まされないだろう。

佩刀は謙虚な奴だ。自らの技量を平均よりも下に見せる。過大評価が甚だしいのも困るが、過小評価が過ぎるのも考えものだ。それでも。

自身の力量を正確に把握しているだろうが。

厳格な家風故か、調理のほうもハードルが高いのだろう。世間の標準に照らし合わせてみても、佩刀の食事は十分おいしい。

「……本当にそうなのか？」

「私はどう思っています」

「俺は好きだぞ。おまえの料理」

佩刀の頬に赤みが差す。

泥土を歩いていると、おもむろに金曜日のが頭に浮かんだ。

傍から見れば、生徒間のいさかいと暴力事件。クラスの代表が不良に正論を述べ、いかれた不良が先生を殴るっただけのくだらない話。先生の計らいにより、その不良は表面上無罪放免になった。ただ、周囲の評判はますます悪くなった。あいつはそこまで堕ちたのか。人を平気で殴るのか。そういった悪評が絶えない。

誰が悪いのか。

何が悪いのか。

篝火白夜か、長広舌を振るった男か、眉村という教師か、それとも腐敗した社会なのか。

分からない。

俺には分からない。

誰が正しくて誰が間違っているのか。

何が正しくて何が間違っているのか。

程度の低い頭では思いつかない。

もし篝火白夜と佩刀歪を天秤にかけたらどうなるだろうか。

考えていくうちに気分が沈んでいった。そんなの分かり切っている。自明の理だ。

離れたほうがいいんじゃないのか、と思った。佩刀歪から離れたほうがいいのかもしれない。きっとそれが正解。誰もが喜ぶ結末。

しかし心のどこかで手放したくないと思う自分もいた。この関係性はすごくいい。とても楽だ。きつくない。

ほら、やっぱり。

俺は軟弱になっていく。他人を欲する。前まではそんなことなかった。一人でも耐えられた。

だが、今ではどうだ。

佩刀が生活の一部に組み込まれた日々。何をしても佩刀と一緒に。佩刀がいなければ何も出来ない。どんどん弱くなっていく篝火白夜。

前までは他者との関わりなんてお断りだった。不快とは思わなかったが、面倒だった。幼少期のトラウマだろうか。コミュニケーション能力のない俺は、そうやって生きてきた。

田畑が茫漠と広がっていた。

それを横目に歩き続ける。佩刀は一步下がって随行していた。

前よりも距離が近くなってる、と思った。以前までは一メートルくらい間があった。しかし今では、三十センチもない。体をずらせば十分接触するだけの距離だ。

これをどう解釈するか。

どうでもいい、と一蹴。考えるだけ面倒くさい。だから放棄。それが一番。

佩刀から離れる、という案は昏愚だった。俺から離れなくとも、佩刀ははずれ失望する。篝火白夜に幻滅して、離れていくのを待たばいい。簡単なことだ。何も自分から働きかける必要はない。

それは胸襟のどこかで、佩刀歪を出来る限りとどまらせておきたい、と思っっているのかもしれない。希少価値が高いからだろうか。篝火白夜に優しくしてくれる人間は稀有だ。

幸せを追い求める。誰かといえることに固執する。

それはなにも佩刀歪にのみ向けられたものではない。

練絹玉梓や梅雨利東子にだって当てはまる。もしかしたら名伽狹霧にもそういつた認識で捉えているかもしれない。

「歪」

「いかがでしたか」

俺は佩刀の目を見ずに、「俺といて楽しいか」といった。

佩刀は緘黙かんもくした。

だよな、と思った。諦めが胸中を支配した。

佩刀は俺の予想通りのことをいった。

「……楽しい、というわけではありません」

「……そうか」

「というよりも充実感、でしょうか。私の心は幸福で満ちています」

「……幸福？」

「はい。私は恐れ多くも、白夜様のお世話をさせていただいております。それはとても幸せで尊いことです。私は白夜様との毎日が幸福で仕方ありません」

視線を佩刀に向ける。

佩刀は続けた。

「勿論楽しいと思う時もあります。ただそれ以上に幸せや満足感。そういったものがまず湧き上がるのです。それと発見もあります」

発見。

発展性のない俺とはほど遠い言葉だ。

そんな俺といて新しいことを発見できるのだろうか。

「どういう発見だ」

「白夜様はお考えになる時、瞬きの回数が通常よりも三回ほど増えます。また、お食事のさいにはまずご飯から召し上がります。次いで、白夜様はつむじの位置がやや後ろにあります。靴は右からお履きになりますし、脱ぐときは左から。ご存知でしたか」

「いや、知らなかったけど……」

「それが発見です。私の知らない白夜様を知ることへの喜び。私の中に白夜様が蓄積されていく。そのような白夜様との積み重ね、遍歴。それは私が持つ代替不可能の宝物です」

「なんだそりゃ」

「古い言い回しだったでしょうか。当意即妙だと思いますが」

「そんなことじゃなくて……、その、本気が、それ」

「当然です。私は白夜様を誰よりも愛している自信があります。なんせ、白夜様に惚れてからずっとストーキング行為をしていましたから。白夜様が寝入っている真夜中に、白夜様の家に無断で入ったことも一度や二度ではありません」と饒舌に語るが、自分が何を話しているのを自覚したらしく、慌てて口を噤んだ。恍惚とした表情もしまった、といった表情に変わっている。「そそ、その、そういうことがしたかったから、ではありませんよ？」

そういうこと。

一瞬、不埒な考えが浮かんだ。一応俺も男だから、“そういうこと”の知識は多少なりともある。

そんなわけない、とは思いつながらも、「夜這い、なんて」といつてみる。

だが案の定、佩刀は狼狽した。普段は冷静沈着なのに、この時だけ激しく焦っていた。

「いえ、そういうわけではありません！ それはまあ、したいとは

思いましたが……、なんとか理性を押さえましたよ。白状すれば、白夜様の寝顔を写真に収めるにとどめました。それと……」

佩刀はいい淀む。その様子はいかにも不審げだ。
「というか。」

「……不法侵入は一度だけじゃなかったのか。」

「それと……、なんだよ？」

そう追及すると、佩刀は呻いた。いうべきかどうか迷っているようである。「いつ、いわなくてはいけませんか？」

「気になる」

「……引くかもしれませんよ？」

佩刀は上目遣いを向けた。うるうると潤んだ瞳で小動物のようにたじろいでいる。

引かない、と何度もいうと、決心したのか、一転佩刀はどこか嬉しそうに口を開けた。それは自分を知ってもらえる喜びに満ちていた。

「それと、よくゴミ箱の中を漁ったり、お風呂場にも入りました」

「……なんで？」

「それは……、白夜様の私生活が知りたかったからです。レシートを見れば、白夜様がどういった生活を送られているのかが分かりま
すし、使い終わった割り箸や食べかけのものがあれば、回収できま
したから。お風呂も少々ぬるかったですが、気持ち良かったです。」

白夜様が入浴したお風呂でしたから、こう、全身が白夜様のエキス
で染み渡っていくように感じました」

「……」

「そそ、そんな表情をしないでください！ その、私がいいたいの
は……それくらい白夜様のことが好きだった、ということですよ」

相手のことが好きで、その人について知りたい、と思うのはさし
て変ではない。誰だって持ちえる欲求の一つだ。

ただ、愛が行き過ぎれば別のものに変わる。

佩刀歪の奇態をどう表現すべきか迷う。なんだか普通ではない。

話に聞く限り、佩刀の奇行は少しばかり偏執的だ。それもどこか思い当たる節がある。ゴミ箱の位置が妙にずれていたり、風呂の水かさが減っていたり、カーテンが開いていたことは割とあった。たんなる違和感と切り捨てていたが、まさかそんな裏があったとは。尋常でない意志を感じて、どことなく怖い。

「愛がその、重いな」とはぐらかすようにいう。しいていうなら、こういった形容に落ち着くだろう。

「そうやって発散しておかないと、発狂寸前でしたから」
愛に狂う。

そう一笑に付すが、佩刀の表情を見ると、それが冗談でないことに気づく。

教室の前で佩刀と別れ、2 - 1組に入室した。

窓際の席に鞆をかける。筆記用具や教科書はあらかじめ置いていた。

いつものように机の中をがざごそとかき回す。

その時奇妙な感触がした。筆記用具の硬い感触でも、教科書の厚い感触でもない。

くしゃくしゃと音が鳴る。

なんだこれ、と思ってそれを掴む。

机の中から出てきたのは 手紙だった。白い便箋。裏返してみれば、ミッキーマウスのシールが貼ってあった。

ためしに振ってみる。

かさかさ、という音だけである。きつと内封された紙がこすれた音だろう。

どうやらかみそりの刃ではないようだ。

小学生の時、何かの入れ物にかみそりの刃を入れられた覚えがあった。それが上履きの中なのか、筆記用具の中なのかどうかは忘れた。ただ手に大怪我をおったことは記憶している。あれ以来かみそりに対して特別な恐怖を抱くようになっていた。見る分にはどうということないが、触れると全身から嫌悪感と吐き気が湧きおこる。肌の上で蛇が這いずっているような そんな不快感だ。

警戒は緩めない。慎重に封を切る。

一瞬、恋文かもしれない、と思う自分はめでたい奴だと思う。

一紙を取り出す。それには丸みを帯びた文字で文章が綴られている。た。

放課後、音楽室に来てください。そこであなたを待っています。

その紙を元に戻した。黙って鞆の中に突っ込む。

随分と古典的な手を使ってきやがる……。

頭の中に放埒と高説を垂れる男を思い出す。佩刀と縁を切れ。練絹玉梓と縁を切れ。おまえ、死んだほうがいいんじゃないの。

筆跡は女性のようだが、断定はできない。男の姦計かもしれない。悪意が詰まっているかもしれない。

俺は頬杖をついて、ぼーっとした。

変わり映えのしないホームルームが終わる。

佩刀は来ない。生徒会の活動があるそうだ。

椅子から立ち上がり、無気力に教室から出ていく。廊下には学生がたむろしていて、友人たちのお喋りに興じていた。

それを横目に眺めながらも、階段を下りた。自分と自分以外のものに隔たりがあるような、そんな疎外感を感じながら。

生徒とすれ違う。

教師の脇を通る。

辺りはモノクロ。

静かな思考回路。緩やかに流れる旋律。ピアノだろうか。流麗に刻まれていくリズム。

心地よい、と思った。汚れた自分が洗われていくような気がして、心が晴れた。

音源に目を向ける。

それは音楽室からだった。

音楽室　　とあって、今朝の手紙が連想された。丸みを帯びたか

わいらしい文字。

誰かがピアノを弾いているのか。

独りでにピアノは動かない。ならばそういうことなのだろう。

では、誰が。

雨稜高校に合唱部はない。吹奏楽部はあるが、仮に吹奏楽部が演奏しているとしても、ピアノ以外の音が聞こえてくるはずだ。そもそもピアノは管楽器ではない。

ならば

放課後、音楽室に来てください。そこであなたを待ってます。

朗々と流れるメロディー。それは素人である俺が聞いても、すごいと思わせる力を持っていた。

待っているのだろうか。

誰を？

俺を。

漸増する罪悪感。人を待たせるのはいけないことだ。

逡巡する。

畏、かもしれない。日曜日の不良の件もある。俺への意趣返しのために仕掛けられたのかもしれない。待っていたのは凶器を携えた不良ども。

あるいは 俺をからかうための策謀か。

誰もいない音楽室で右往左往する俺を見て、日頃の鬱憤を紛らわすつもりか。愚かな俺を見て同情し、嘲弄する目的なのか。

危険度は高くない。しかし、もし本当に純真な誰かが待っていているとしたら。

俺は最低な奴になる。

待っているのが不良なら叩き潰せばいい。誰もおらず、笑い声が聞こえたとしても、俺の心に傷が残るだけだ。誰も傷つくことはない。

ただもしも、健気な誰かが待っているとして、俺がこのまま帰ってしまえば、そいつが傷つく。そんなのごめんだった。自分が傷ついてても、別に、いい。だけど、誰かが不幸な想いをするのをとめられるなら、とめたい。来た道を戻り、階段を駆け上がった。

音楽室からは儂い調べが響いている。繊細で鮮やかな調子。聞いているとざわめく心が安らぐようだった。

ドアをスライドさせる。斜めに漏れた斜陽が机や肖像画をオレンジに照らしていた。

同時にピアノがやむ。とたんに静けさが襲ってきた。

「来てくれて嬉しいわ」

夕焼けに映える音楽室。

そこには練絹玉梓がいた。

艶のある黒髪がさらさらと揺れる。日の沈む空とのコントラストが美しかった。

鞆の中から一枚の手紙を取り出す。それを練絹に見えるようにかざす。「おまえか、この手紙の差出人は」

「ええ、そうよ」

肯定の返事。事由は明白となった。

どこか郷愁的な光景だった。放課後の音楽室というのは。

懐かしい感慨が起こる。苛められる前の記憶がゼピア色でよみがえった。

友達との他愛のない会話。日没まで遊んだ公園。学校のグラウン

ド。笑い声と楽しさに溢れた輝かしい記録。

今となつては遠い過去。

ポケットに手を入れて、壁にもたれかかる。

「この風景、綺麗だと思わない？」

ピアノの椅子に座ったまま、練絹はいった。物寂しげな表情だった。

窓の景色は雄大だった。どこまでも続く地平線。傾く太陽。

「そうだな」

「絶景よね。ここでピアノを弾くと心が真っ白になって、リラックスできるの。そしてこう思うわ。私のピアノが愛する誰かに届いてほしいって」

「心を打つ言葉だな」

「ありがとう。だってそうでしょう？ 音楽は想いの伝達手段。言葉だけでは伝わらないもの、それを音楽なら伝えることができる」

音楽は言語とは違ったものを表現できる。音楽は欠陥だらけのコミュニケーションを補うために作られたのかもしれない。

「届くといいな」

なんていつてみる。

練絹の感じているものが誰かに響いてくれたら嬉しい。

「私もそう思うわ」といつて、立ちあがる。そのまま歩を進めた。

遠くから部活動のかけ声が聞こえてくる。それはだんだんと小さくなり、消えていった。

「私ね、前々からあなたにいいたいことがあったのよ」

練絹の声はやけに低かった。

訝しげに眉をひそめる。「それが用件か」

「そうよ。そのためにあなたを呼んだの」

練絹の顔が、逆光で見えなくなる。

目をつむつて、といわれる。有無をいわせぬ口調だった。

なんだそりゃ、とは思うも、練絹のいうとおりにする。これが練絹の用件と関係があるのだろうか。

近づいてくる足音。視覚以外の感覚が研ぎ澄まされていく。だからだろうか。

口内の異変を敏感に感じたのは。口腔を侵入する何か。それは口の中を動き回って、魚のように巡遊していった。

舌と舌が濃密に絡み合って、粘液を共有する。その事実には背筋が冷え、体が熱を帯びていく。

練絹のいいつけを破って、目を開ける。眼前には練絹の端麗な顔があった。いつの間にか肩を掴まれている。

離れようとするも、練絹の膂力は尋常でなかった。まさに万力。練絹の指ががちりと肩に食い込んでいる。

甘い呻き声。練絹はさつきよりも深く浸水していった。濃艶な唾液が口の中に注ぎこまれる。そして俺の唾液を何度も吸い続けた。

肩のダメージを度外視して練絹から離脱。その勢いでしたたかに尻を打ちつけた。

「逃げないでえ！　なんで逃げるのよお！」

練絹に手を取られ、逆のほうに捻られる。身動きを封じられた俺は、練絹が覆いかぶさってくるのを防ぐことが出来なかった。

完全に背中が床につく。その拍子に頭を打った。全身が痛い。

首のすぐ横に練絹の腕がある。床と九十度になるようにひじを張って、顔をつきつけた。

「ごめんね。痛かったでしょう？　けど、こうでもしないと、あなた。私に付き合ってくれそうもないから。本当にごめんね。私、こういう女なの」

練絹の息は荒い。整った唇を近づける。

上唇と下唇を割って、何かが入ってきた。ぬめりのあるそれは俺の舌を丹念に愛撫した。

貪るように口を吸われる。クチュクチュと淫靡な音がした。

俺の舌端が練絹の口に入っていく。

そして。

千切れた。

「つつ！」

激しい痛覚とともに床に這いずりまわる。その衝撃で凶らずも練絹を突き飛ばした。

練絹は盛大に倒れた。スカートはめくれ、白い太もがあらわになる。しかし本人は気にした様子ではなく、恍惚とした表情。あれもない姿で呆けている。

混乱する思考を一旦停止する。慌てて自分の舌を確かめようと、軽く触れてみた。鋭いしびれ。ひりひりと痛んだ。

ない。

舌の先が。

ない。

ではどこにいった。

練絹のほうを見る。よく分からないが、なぜか、練絹は口を動かしていた。何かを咀嚼しているように見えた。

……何を？

俺の舌を。

んなバカな。

顎が上下する。練絹は至福の表情で、何かをかみ砕いていた。

俺は口から血が出るのも気にせず、呆として眺め続けた。

……やがて、練絹の喉が少し隆起。何かを嚥下する音が聞こえた。

「……おいしかったわ。すごく……、おいしい」

ぞくつとした。

練絹は妖艶だった。スカートからは素足を覗かせ、制服の裾が見事にはだけている。そんな艶姿の練絹は、頬を紅に褒めて、夢見るような目つきをしていた。

「私の中に……白夜君のものが、入って、いく……。いいわ。すごくいい」

ねえ。

ちようだい。

じりじりと間隔が狭くなる。俺は腰を抜かしたまま、目を見開いた。

ほしいよ。

骨の髄まであなたが欲しいよ。

「……お、おまえ」と呻く。舌が欠けていて喋りずらかったが、どうにか言葉を捻りだす。「なっ、なん、で？」

「なんでって……決まってるじゃない。あなたが欲しいからよ。あなたの髪、あなたの血、あなたの肉、あなたの骨。全部欲しい。食べたいの」

「たっ、食べる……？」

「そう食べるの。私、好き嫌いが激しくてね。好きな人の肉しか食べれないの。病気なのかな。そういう変な体質なのよ」といって、鈴の音を転がしたように笑った。「もう勘づいてると思うけど、私、あなたのこと好きだったのよ。それはもう、本気で愛してたわ」

意味が分からない。

おまえが、俺を、好き……？

バカバカしい。くだらない冗談だ。

そう笑い飛ばしたいが、練絹の目は真剣そのものだった。

「きっかけはなんだったかしら。忘れちゃったわ。けど気がついてら、あなたのこと目で追ってて、あなたのことばかり考えてた。

なんで、って顔してるわね。しょうがないじゃない。好きになっちゃったんだから。愛に理由なんていらないうじゃない？ 好きになつたらどうしようもないもの。食べちゃいたくなるもの」

練絹は続ける。

「前にも話したっけ。私ね、子供のころからピアノしてたのよ。毎日、飽きもしないでお稽古に行ってたわ。それはもう、指が痛くなるくらい頑張ってた。そうすると、お母さんが褒めてくれるの。よく出来たねって、褒めてくれるの。それが嬉しくて、練習に励んでたわ。それでね、私の通うピアノ教室でコンクールがあったの。私、どれにどうしても一位になりたくて必死だったわ。お母さんが褒めてくれる、お父さんが褒めてくれる。おだてられるのに弱いか

らかな、ものすごく頑張ったわ。けど、私の友達にずっとうまい子がいたの。私よりもはるかに滑らかにピアノを弾くのよ。それが悔しくて悔しくて……。勝てない、って思ったわ。もう褒められないみんな褒めてくれない。そう思うと悲しかったわ。そして、コンクール前日。不幸か偶然か、その子が事故に遭ったの。ピアノ教室から帰る途中に、歩道を歩いてたら車に轢かれたらしいわ。それで全身が切断されて、バラバラになった。ひどかったわ。凄惨な死に方よ。ちよとすぐ後ろにいたからよく見えたわ。その子の死体がね。同情もしたけど、同時に、なぜか嬉しさもこみ上げて来たわ。これで一番になれるって、思った。コンクールで一番になれるって、けどね、私よりもうまい子なんてまだたくさんいたわ。事故に遭った子がいなくなったところで、私が一番になれる確率はほぼゼロ。私の実力では決して一番にはなれないのよ。このままじゃ相手にされない。褒めてもらえない。悲しくなっただけ泣いたわ。周りの人は別の解釈をしたけどね。何回も考えて、考えて、一番になれる方法を考えた。で、思考の末 食べたわ。事故で死んだ子の一部をね。たまたま私の目の前に飛んで来たのよ、あの子の指が。チャンスだっと思って、口に含んだの。そしたらどうかしら。おいしかったのよ。これまで食べたどれよりも、甘美で、芳醇で、濃厚で……。格別の味だったわ。それでくしくも、コンクールで一番になったわ。その子のおかげね。死んだその子の技能を寸断された指が受け継いでたのよ。それを食べたから、ピアノの腕が上がった、と考えられるじゃない。それからかな、人の肉に違う意味合いが帯びてきたのは

頬に手をそえられる。温かい指。熱っぽい視線に絡みとられて、動けなくなる。

「私にとって、人は栄養源だったわ。愛の 栄養源。私の欲求を満たしてくれるたんぱく質の塊だったのよ。それは動物も同じだわ。私の家ではペットを飼ってたの。ニャン次郎っていう三毛猫よ。私、こう見えても動物好きだから一杯かわいがってたわ。だから 食べ

たのよ、ニヤン次郎。ちょっと肉が硬かったけど、やっぱりおいしかったわ。猫のひき肉も結構いけるものよ。何よりうれしかった。大好きなニヤン次郎の肉体を摂取して、一体化したその愉悦。異なる二つのものが混ざり合って、一つになる瞬間。興奮するわ。どうやら私、特別な感情を抱いた個体を食べるのが無上の喜びになったのよ。男女の愛も畢竟のところ 結合でしょう？ それと根本は同じよ。私は愛するものと一つになることを求めているの」
なんてこった。この女は、練絹玉梓は
カニバリズムだったのか。

日本語でいえば人肉嗜好。人の肉を食べることだ。
虚言や暴力。そういった単調な悪とは次元を異とするもの。自分を形成する時点で何かが狂ってしまったもの。感情の起源そのものの歪み。

練絹玉梓は決定的に軋んでいる。

食べる。

人を。

食べる。

全てが一つになる行為。練絹玉梓はそれに愛を感じてしまうのか。奪われた舌端で口の中をこする。ざらざらとした感触。鉄の味がする。きつと口の中は血で真っ赤だ。

「だからかしら。見知らぬ人の指はおいしくなかったわ。いくら瑞々しい赤ん坊の指でもね」といった後、取ってつけたようにいった。

「実は私 鬼、なのよ」

「……鬼？」と拙い言葉で問いかける。

練絹が 鬼？

どういうことだ。自分の異常性を鬼と形容しているのか。食人癖の醜悪さが鬼だともいうのか。
と。

それらとはまったく異なるものが浮かび上がる。
背中に慄然としたものが走る。その様子を見た練絹は、楽しそう

にいった。「そうよ。私が連続切断魔　鬼、なのよ、これが」

頭の中で巨大な包丁を持った鬼の姿が想像された。そいつが赤子の指や足を切断する。泣き叫ぶ赤子。嗜虐的に笑う鬼。

練絹が。

鬼？

「練絹玉梓は実は鬼だったのよ。メディアは体の一部を切り落とす殺人鬼だと騒いでいたわね。けどそれは間違い。私はただ食べたかったのよ。　人の肉が。それには赤ん坊の指がおいしそうだったし、簡単そうだったから、赤ん坊を狙っただけ。連続切断魔の正体は連続食人魔だったってわけ」

驚いた？

そう締めくくる練絹は子供のようは無邪気だった。とっておきのクイズを出し終えた満足感。練絹に悪意や害意のようなものは見当たらなかった。

目の前には神隠しの亜種が存在している。発生起源は食人欲求を満たすため。自らの欲望に身を任せ、赤ん坊の手足を切断した。

それだけのために。

それだけのために、赤ん坊の手足を切り取ったのか。

それだけのために、赤ん坊の未来を刈り取ったのか。

それだけのために、赤ん坊の希望を奪い取ったのか。

「何度も試してみたけど　ダメだったわ。色々調理してみても、全部まずかった。その原因を考えていると、不意にあることに気づいたわ。好きな人の肉じゃないと満たされない、って。コンクールの子は嫌いじゃなかったし、ニャン次郎は好きだったもので、様々な考証をした結果、その考えは盤石なものになったわ」と。

練絹玉梓は言葉を切る。

「それで思ったのよ。あなたを食べればこの欲求は満たされるかもしれないって。思えばこの食人欲求はずっと前からくすぶっていた

かもしれないわ。コンクールの時に指を食べてから、ずっと、ずっと、ね。それがあなたという人を認識して再び膨れ上がっただけなのよ」

練絹の論理は飛躍しすぎていた。一貫して破綻している。

異形のものがゆっくりと迫ってくる。顔立ちは整っていて、体型もスマート。ただ心は常時とは明らかに一線を画す。食人を愛情表現と思う鬼　なのだ。

「ある意味で拒食症ね。私は嫌いなものを決して食べることができない体になっていたわ。現に魚類はほとんどダメね。おいしくないわ。焼き魚にしる、煮魚にしる。あんな不格好なものが食べられるなんてどうかしてると思わない？　いや、私のほうが異常なのかしら。けど誰にも好き嫌いはあるでしょう？　だからそういう偏屈な体質でも文句いっちゃダメよね」

長い髪の毛が艶やかに流れる。凜然とした瞳は莞爾としてたわんでいた。

喋りたくとも喋れない。舌がうまく操作できない。これじゃあ、助けも呼べない。体も恐怖でガチガチに強張っている。情けない。

動けよ、俺の体。

ああ。

何も出来ない。

練絹玉梓の思考は理解の域を逸している。常識との遊離。馬脚を現す練絹は致命的に異質だった。故に理解できない。そこら辺の不良よりもはるかに恐ろしい。そういう意味では名伽狭霧よりも恐ろしい。

剣が峰に立たされる。まさに八方塞。

いや、まてよ。

音楽の先生は？

普通に考えれば、音楽室に滞在しているだろう。

なら希望はある。

しかし、俺の浅慮を見透かしたのか、「音楽の先生は吹奏楽の監

督でないわよ」と楽しそうにいった。「残念ね。佩刀さんも生徒会らしいじゃない。東子や名伽先輩も美術室にいるわ」

練絹玉梓は馬乗りになった。

女は笑った。心底楽しそうに笑った。笑って、当たり前のようにポケットからナイフを取り出した。刃渡り二十センチ以上の鋭いナイフ。それを首に突きつけられる。練絹は間違いなく騎虎きこの勢いだった。

ひんやりとした感触。あと数センチ動かせば、俺の首は飛ぶ。戦慄。その簡易さ、簡単さに驚愕する。

指を少しずらせば。

俺は。

死ぬ。

軽い命。

「あなた、佩刀さんとどこまでしたの？ ねえ、どこまでしたの。キスだけで済むはずないよね。あんな体勢じゃ、絶対最後までいってるわよね……。答えてよ。答えてよ！」

ナイフが少し進む。縮まる俺の命。脆弱な篝火白夜の灯火。

「何かいってよ！ どこまでしたって訊いてるの！ 嫌だよ。なんで私以外の女とそんなことするの……。ダメ。白夜君を犯していいのは私だけよ。ほかの女は触れちゃいけないのよ。私だけが犯していいの……。犯して犯して、食べるの。安心して。すぐには食べないから。白夜君の体を十分に堪能した後、その時に余すところなく食べてあげるから。私だってあなたとしたいわ。一杯体に出してもらいたい。当然でしょう？ やっぱり、好きな人とはそういうことしたいに決まってるじゃない」

布がこすれる音。練絹が制服を脱ぐ音。はらり、と上着が落ちる。あらわになる肢体。ブラジャーに包まれた乳房。たわわな二つの肉。

練絹の体は綺麗だった。思わず見とれた。こんな時でも情欲は湧き上がる。しかし、それ以上の恐怖が体を支配した。

それはあてがわれたナイフが証明している。

「夕方っていい時間帯だとは思わない？ 風景がより一層美しく見えるわ。けど夕方が好きな理由はそれだけじゃないの。なんだと思う？」

突然の質問に困惑するも、なんとか首を横に動かす。

「それはね、あなたの髪と同じ色で世界を照らしてくれるからよ。夕日を浴びてると、あなたの体内にいるようで安心するわ」

練絹玉梓はびっくりするくらいに澄んだ笑みを浮かべた。

激しい衝撃。ナイフが床を滑る音。俺はしたたかに体をぶつけた。コンマ一秒の間、視界が真っ黒になる。

「お怪我はありませんか」

机の群れに突っ込んだ俺の聴覚は、聞き覚えのある声を拾っていた。

静まり返る音楽室。

佩刀歪は視線をこちらに向けて、にっこりとほほ笑んだ。

「おまえ……な、んで？」

「話は後で。まずは外敵の駆除が先かと」

唇を引き締め、凜呼と前を見すえる。その先には顔を歪めた練絹玉梓の姿があった。

亡者のように力なく立ち上がる練絹。乱れた前髪から見える瞳は切れそうなほど鋭利だった。

「佩刀 歪」と忌々しげに呟く。千鳥足を踏む足は血が流れ出ていた。しかし、それを気にもかけず、佩刀を射殺すように見つめる。先ほどの強襲で背中を打っているはずだが、それを表に出すことはなかった。

壁に背におののく篝火白夜。

篝火白夜の前に立つ佩刀歪。

佩刀歪と対峙する練絹玉梓。

練絹の手にしていたナイフはどこかに消えていた。佩刀が蹴り飛

ばしたのだろう。盛大に瓦解した机のどこかにうもれているはずだ。
「練絹玉梓。白夜様に手を下した罪、万死にも勝る」

そういつて、見たこともない構えを取る佩刀。後ろから見ても隙はなく、ものすごい気迫が空気を震わせた。

練絹も不審なものを感じ取ったらしく、瞳を凝らしていた。しかし、油断はしていないらしく、重心を整えているのが分かる。確かに佩刀の雰囲気は尋常ではない。嵐の前の静けさといった風だ。

「降伏してください。今なら間に合います」
「すると思っ？」

「でしょうね」と溜息をつく、床を蹴った。それを狼煙に戦端が切つて落とされた。

佩刀の拳が練絹の腹部を捉える。間一髪でかわす練絹。練絹も相当の手練らしく、佩刀の排撃を巧みにさばいていた。実力は伯仲しているようである。

対する俺は置いてけぼりを食らった感があった。
わけも分からず練絹に襲われ、わけも分からず佩刀が現れ、わけも分からず二人が争っている。

眼下では二人の少女が戦野を駆けていた。
と。

視界の端に不吉な光を視認する。

ナイフ。

二本目のナイフが練絹の右手に握られていた。

横薙ぎにはられるナイフ。それをバックステップで回避する佩刀。しかし、そこで隙が出来てしまった。

能面のような顔つきで、佩刀に蹴りを入れる練絹。佩刀は体をくの字に曲げて、後ろに吹っ飛んだ。

咄嗟に体をスライドさせる。俺は佩刀をスライディングキャッチした。と同時に、背中に強烈な痛覚。痛みを蓄積した体は悲鳴を上げた。

それでも佩刀を全身で包み込んで、床の上を転がる。佩刀が傷を

おわないように、優しく。

停止。

ほっと一息ついたと思ったら、前と後ろから机が落ちてきた。佩刀を庇うように、強く抱きしめる。

大丈夫大丈夫、と佩刀の髪を梳く。後は俺がどうにかする。もう心配しなくていいから。安心していいから。

後頭部と背中に机の端がのめり込んだ。

体内で小気味よい音が聞こえた。

それが骨の折れる音だと理解する前に、気を失う。そのまま意識が遠のいていった。

痛苦とともに目が覚める。

疲労困憊とした体。痛みが山積した節々は、断末魔を上げていた。「お目ざめになりましたか、白夜様」

ベットに臥したまま、浩然とした声が聞こえてきた。玲瓏とした響きは血のように全身を巡り、深い安らぎをもたらした。それに準じて、筋肉が緩んでいく。

起き上がる。横に目を向けると、しとやかな笑みを浮かべる佩刀歪がいた。ベットの脇のパイプ椅子に腰かけている。

どうやら病院のようだった。消毒液のにおいが思い出したようにおぼえてくる。

音楽室じゃないのか。

様々な記憶の奔流が怒涛のごとく溢れ出る。頭の中は走馬灯のようにくるめくめく場面が変わった。

想起していると、なんだか夢の中の出来事のように思えた。あれらは全て性質の悪い冗談のような気がする。

しかし。

滅入るような痛覚は本物だった。

病院に搬送されている辺り、どうやら命脈を保ったようである。気分はすぐれないが、時期回復するだろう。

佩刀は俺の手を取った。その手は自分のおでこに導く。そのまま瞑目した。

数秒がたつ。

佩刀は噛みしめるように、「白夜様がご無事で何よりです」といった。涙声だった。

驚いて佩刀の顔を見る。目には涙をたたえていて、嗚咽を堪えているようだった。

しきりによかったですよよかったです、と壊れたCDみたいに繰り返

返す。手は涙に濡れ、肌の上に熱が通過した。

潤んだ瞳は上目遣いを向けた。長いまつげがしつとりと濡れている。その双眸は何かを訴えているようだった。そして、掴んだ指を口に含んだ。佩刀の舌が俺の指を丁寧な舐める。はあはあと息を荒くして、指を銜え続ける。頬は赤く上気していて、拙い声で俺の名を呼ぶ。ふやけた声がなやかに残響した。

「ひ、歪？」

「……よかって、れ……ふ。びやくやさま、がふひで、ほ……んと、う……によかつ、てれふ」

何をいいたいのか分からず、悶々とする。ぴちゃぴちゃと水音。

佩刀は獣性と従性を含有させた視線を投げかけた。

いつもの歪じゃない。

「はっ、離せつて」といつても、佩刀はなめずることをやめない。

……しかたなく強硬手段。指を強引に引き離す。

「ひゃんっ！」と奇声を上げて、うっう、と唇を尖らせる。指は唾液でべとべとだった。

佩刀に舐められた指が淫靡に光る。艶めかしい、と思った。

「舐めてください」と佩刀。

「なっ、何を」

佩刀は視線で俺の指を示した。先ほど佩刀がしゃぶった指だ「私の唾液を舐めてください」

「……は？」

「舐めてください」と一転して真摯とした表情でいわれる。

やむを得ず口に含む。指には佩刀の唾液が付着していた。それらを一通り舌ですくい取る。

「おいしいですか」と訊かれる。「私の唾液、おいしいですか」

変な質問だな、と思う。佩刀の目はとろんとしていた。

気がつけば首を縦に振っていた。

「そうですね。それはそれは……。ふふふ」と魔女のように笑う。

今日の佩刀はどこかおかしかった。

「おまえ、変だぞ」

「変ではありません」

「いや、変だろ。どう見ても」

「そんなことよりも白夜様。お身体のほうはどうですか」

……話をすり替えやがった。

とはいえ佩刀の気遣いは嬉しかった。事実、不自由な感じはある。

「気分が悪い」

「それもそうでしょう。あばら骨を何本か折っているのですから、無理ありません」

やはりか、と思った。あの感触は予想通り骨折だったらしい。

「おまえはどうなんだ。怪我はないのか」

「おかげさまで切り傷程度で済みました。なんせ白夜様が身を挺して守ってくださいましたから」と佩刀は嬉しそうに相好を崩した。

「ね、練絹はどうなったんだ」

「練絹玉梓は精神病棟に入院することになりました。白夜様が気を失われた後、私も危機的状況にあったのですが、どうにか練絹玉梓を降すことができました。そして事情を警察に話し、苦労の末、警察のお縄につく運びとなったのです。しかしその言動があまりに支離滅裂なため、少年院ではなく、精神病棟に通院することとなりました。これらの諸事情は世間には伏せられています。知っているのは練絹玉梓の家族と、私だけです。ともなれば、練絹家が転寝家に働きかけたのでしょうか。警察官僚に強いパイプのある転寝家頭領

転寝隆寛によって、これらは闇に葬じゅうこんられました。世間体を気にしたのでしよう。練絹家と転寝家は昵懇じゅうこんの中でしたから。世間一般に練絹玉梓は重篤な病を患い、施設に療養中であると説明されています。ある意味心の病ですからね、見当違いというわけでもありません。ご理解いただけたでしょうか」

「ああ……」

「これで練絹玉梓の脅威は消え去ったというわけです。さすがは表御三家の一角、転寝家といったところでしょうか。殺人未遂を都合

のいいようにもみ消すとは。これも社会との繋がりが強い転寝家でなければ不可能だったでしょうね。当然私にも口止めがなされています。白夜様も口外しないほうが賢明だと思います。お気持ちは察しますが、転寝家を含む表御三家を敵に回すべきではありません。私もはらわたが煮えくりかえる思いです。白夜様を襲うという一級犯罪を犯しながらも、のうのうと生きているとは……。許せません」

佩刀はぎゅつと拳を握りしめた。切齒扼腕せつしやくわんと憤慨している。

「そんなことどうでもいいだろ」

「しかし白夜様……」

「おまえが無事ならいい。練絹の一件は忘れる」

「白夜様……」

佩刀は感動したようだった。「さすがは白夜様。自らのお命を狙った敵方にも情けをかけるとは、誠に寛大。私は今、白夜様の偉大な御心に感服しております」

「……時代劇の見すぎではないだろうか。」

やはり佩刀は時代錯誤だった。

「思ったんだけどな。どうしてお前、あの場所にこれたんだ？」

「愛の力です」

「……」

「私と白夜様の愛は山よりも高く、海よりも深いのです」

「……」

「……生徒会室で三階に上がる白夜様のお姿を見かけましたので」

佩刀はかわいらしく舌を出した。その後、眦を決して続ける。

「放課後、白夜様は寄り道をせずにお帰りになりますので、不審に思い、後を追ったのです」

「生徒会を抜け出してから」

「はい。なんだか胸騒ぎがして……。で、手当たり次第に白夜様のお姿を探しました。そして、見つけたのは見つけたのですが、練絹玉梓にナイフを突きつけられたお姿でした」

「ありがとうな。おまえのおかげで助かった」

「白夜様……」

また泣きそうな顔で俺を見た。実際、早くもうるうるときている。困ったことになったな、と思う。女はこんなにも涙もろいのか。涙腺が緩いのか。

泣くという行為は自己証明の一つだ。泣くことによって自らの位置を知らせる。ここにいて、と誰かに伝えかける。

泣くことが最大の感情表現だったころ、俺は嫌なことがあれば泣いた。不愉快なことがあれば泣いた。それは泣けば誰かが助けてくれると理解していたからだ。それは泣くこと以外に自分を表せなかったことへの裏返しなのかもしれない。

いじめを契機にして周囲に迫害されて何年もたつ。十年近く経過しているのではないだろうか。

十年。

長い年月で篝火白夜は変われただろうか。泣くこと以外に自分の思いを告げる方法を見つけただろうか。

変わっていないかもしれない、なんて思う。少なくとも実感はしていない。肉体は成長しているが、精神年齢はあの頃のままだ。陋^{ろう}列^{れつ}で愚鈍。

練絹玉梓を打ち倒したのは、篝火白夜ではなく佩刀歪。俺を守ってくれたのも、佩刀歪だった。

佩刀の話信じれば、練絹玉梓は精神病棟に移ったらしい。

病名は拒食症。愛するものしか食べれない、病。練絹玉梓はそういうに漏らしていた。

俺の両親と変わらない。全く一緒だ。向かうベクトルを違えたただけで、それ以外はいたって普通。たとえ、赤子の手足を食べたり、人を轢いたところで、本質は変容しない。

誰だつてそういう一面はある。俺だつて今を虚飾しないと、生きていけない奴だ。自らを偽ることでは、安穩を得られない。

傷つくことが嫌なだけの愚か者。

惰性で生きていくだけの怠け者。

オレンジ色の窓光が差しこむ。どうやら夕刻であるらしい。幽谷を鮮やかに染める夕陽。

ふと、練絹玉梓の言葉を思い出す。練絹はこの時間帯が好きなのだそうだ。よく分からない感情だ。

にしても、ああいった感情を向けられるとは夢にも思わなかった。ただ練絹は勘違いしている。練絹は“食べたい”という想いに突き動かされただけだ。本質的には俺をなんとも思っていない。好きとか嫌いとか、全然関係ない。

よく身の危険を感じる時の感情を、恋愛感情と錯覚する、といった話がある。練絹もそれと似たようなものだと思う。危機感が食欲に切り替わっただけだ。

篝火白夜を愛してくれる人は希少だ。

それは俺が空洞だからだ。空虚で空白で、空疎なのだ。中身がない。空っぽ。

そんな俺を満たしてくれる人がいる。空々とした容器をたくさんのもので満たしてくれる。それはすごく幸せなことだ。

「白夜様。先刻お借りした書物のことなのですが、まだ読み終わっていません。もう少しだけ待っていただけないでしょうか」

『壺中の天』のことだろう。あれを読了することは生半可なことではない。眼光紙背を徹す佩刀とて、購読に苦勞していることが窺えた。

そのことに安堵感というか、仲間意識のようなものが芽生える。

「どのくらい読んだんだ」と気になったので、そう訊いてみる。

「二百ページです」

「……嘘だろ」

二百ページ。『壺中の天』の前ページは三百ある。つまり六割以上読み終えたということだ。

「嘘ではありません。そもそも私が白夜様に嘘をつくことは天地がひっくり返ってもありえません」

冗談を排した表情。目は本気だった。

盲従とした忠誠心。

なぜだろう、とはこれまでの日々であまり考えなくなった。考え
ても無駄な気がした。

これはハッピーエンドなのだろうか。

ぼんやりとした頭で考える。

結局のところ、篝火白夜は何をしただろうか。

事件を処理したのは佩刀歪。

暗躍していたのは練絹玉梓。

全ては篝火白夜とは無関係に進行していく。でも、篝火白夜は巻
きこまれる。

それは偶然なのか、必然なのか。あるいは抗いがたい運命なのか。
しかし、篝火白夜にとって、それらのくくりはどうでもいいこと
だった。

物事があるがままに受け入れる。それが良いことでも、悪いこと
でも。そうやって毎日を受動的に生きてきた。そして、これからも
そうするつもりだった。

自分が変わることは、多分、ない。

篝火白夜はそう思っている。

第十八話 似非合同 1

生まれてこのかた、“ \equiv ”という記号が好きで堪らなかった。好きで好きでしようがなかった。

算数も数学も嫌い。けど、この記号だけは嫌いになれなかった。

左辺と右辺を結ぶ、不思議な気号 イコール。それは魔法。異なる両者を結び付ける、魔法の気号だった。

間違い探し。

私たちの間に、間違いがあつたらいけない。差異や変化、そういった異常があつたらいけない。

違うということは、私が私であるという論理を破綻させる。私が君であるという論理を崩壊させる。

私たちは、 $1 + 1 \equiv 1$ 。二人揃って1になる。

それなのに。

それなのに 違和感。

この違和感はなんなのかな。この拭いきれない、微量ながらも強大な差異はなんなのかな。

微量な量の変化は、強大な質の変化になる。

差異があれば、君は君じゃない。私は私じゃない。

君は私でなくて、私は君ではない。

怖い。

その概念 怖い。

だから。

許してほしい。

私たちが私になることを。

「すみません。ちょっと訊きたいことがあるんですけど」

目の前の少女は綺麗な歯を見せた。

五月十日。

ちょうどゴールデンウィークが終わった時期である。

碧空を遮るように、柔和な少女の顔がある。黒髪のショートボブで、快活とした雰囲気。表情には邪気がない。

背中には草木の柔らかい感触がする。風は春色に香っていて、心地よい。

「のいてくれないか」

「なんでつか」

「おまえの顔が邪魔で起き上がれない」

その一言で少女は感得したらしい。「それもそうっすね」といって、視界から消えた。きつと顔を引っ込めたのだろう。

枕代わりに敷いていた腕で地面を押し上げ、上体を起こす。覚醒しきれていない脳で状況確認。

すぐ横には先ほどの少女がいる。犬のように四足歩行で肘を張り、天衣無縫に微笑みかけてきた。「おはようございまーす」

「……おはよう」と条件反射で返答。寝ぼけ眼を少女に合わせる。曖昧だった意識はだんだんと明瞭になっていった。

少女の後ろには木造の校舎が見えた。第四校舎だろうか。そこだけ他の棟とは違って、離れのように孤立している。今はもう使われなくなった棟だ。だからなのか、人通りはさほど、ない。

佩刀歪はかしひずみによれば、四棟丸ごと生徒会の版図はんとらしい。生徒会役員以外立ち寄らないので、第四校舎は生徒会執行部の牙城というわけだ。それも質の良いソファや、冷蔵庫、クーラーなどが具備されている辺り、生徒会が優遇されているのが分かる。なまじ職員室より

設備がいい。

もつとも、生徒会の構成員は五人未満の小人数らしいのだが。

その奥には見慣れた空。かがりびびやくや篝火白夜の習性で、空を見ると、いつの間にか眠くなる。

再び船を漕いでいると、先刻の少女が肩を叩いてきた。「起きてくださいよお。なんで寝ちやうんすか？」

「眠いんだ」といって、瞼を閉じる。また寝るつもりなんすか、と耳元で叫ばれ、肩を揺さぶられる。それも結構強い力で。

ガクンガクンと首が上下。眠気なんてすぐ吹っ飛ぶ。

「寝ないで聞いてくれますか？」

「……聞くから、その、やめろ」

少女はニコニコと笑って、俺から離れた。前方に腰を落ち着ける。

「あのですね、図書室の場所を教えてほしいっす」

「図書室？」といぶかしげな声を出す。「脈絡がないな」

「文章の空白補充問題と思えば、それほど苦じゃないと思うんで、教えてくださいます！」

……図書室。

はて、どこだろうか。

あまり学校に寄りついたことがないので、記憶がどこかに埋もれている。そもそも図書室なんて一回も入ったことがない。

推測するに、第三棟だと思われる。あそこには家庭課室や、理科実験室などの特別教室が集中していたような。「三棟じゃないのか」

「三棟ってどこっすか？」

「あつちだ」といって、後ろのほうを指差す。

三棟は四棟とは違い、中庭からはそれなりに距離がある。一棟、二棟、三棟と続き、第三棟と第四棟の間に中庭が設けられている形だ。

四棟から先は完全に森で、学校の敷地外。神隠しのせいなのか、山間地帯のほとんどは禁足地の指定を受けている。

「随分と遠いっすね」と眉をひそめる。「本当にここ、中庭なんす

か？ もろ端っこにあるじゃないですか！」と少女は憤慨した。力強い手ぶりで中庭の改名を訴えていた。

それをぼんやりと聞きながら、自分は何をしているのだろう、と自問した。本当に何をしているのだろうか。俺はこんなバカ話をするために起こされたのだろうか。

「篝火先輩もそう思いますよね？」

「なあ」

「そもそも学校の構造が変なんですよ。正門からかなり離れた場所にある中庭なんて、聞いたことないっすよ」

「なあ、おまえ」

「入学してまだ一カ月なんすけど、いまだに迷っちゃっすよねえ。方向音痴は損っす」

「なあ、おまえ」と一拍置き、「誰だ」と誰何する。

「……はい？」と少女は調子はずれな声を出した。爾後、ああと納得した風に得心顔を作る。「なるほど。それはもつともな疑問っす！ そうっすよね、そうっすよね、先輩もそう思っっすよね？」

……元気な奴だ、と思う。それにどう思うと訊かれても、訊いた俺が本人なのだから、いわずもがな。

しかも、この女、若干短気の気があるようだった。まくしたてるように詰問してくる。「早く答えてくださいよ、先輩」とうるさい。

短気は損気。

元気も損気。

「……ということですよ、先輩」と少女は一旦口を閉ざした。その後、もったいぶった態度を作る。「つまり、先輩は私が何者なのか、どの国の間者なのか、誰の手先なのか、気になるってことっすか？」

色々間違っているような気もする。「そうだ」

「恋ですね」と無邪気に笑う。「先輩は私に恋してるんすか？」

無言で少女の額にデコピンした。存外、なかなかの威力を込めて。少女は、「ううう」「とうづくまった」。

「いたた……。もう、何するんですか！」と患部を手でこすりながら、恨めしそうに俺を見た。

「手が勝手に動いていた」と自らの指を示す。「だから、無罪」

「無罪も無実もないっスよ！ 普通、か弱い乙女にビンタなんかしますか？」

「ビンタじゃなくて、デコピンだ」と訂正。

さりげなく俺の罪状を悪くする魂胆か、おまえは。

「Sっス！ 先輩は盛大なSっス！ それはもういたいけな美少女である私に甘言を弄し、姦計を巡らせ、狡猾で卑劣な罠を張って、蜘蛛のごとく待ちつけるような、どうしようもない変態性欲の塊、Sの大魔王っス！」

もう一度デコピンした。

額に手を当て、「ううう」と唸る少女。傾いた前髪の間からは、煮えたぎった瞳が見えた。

「……分かりましたよ、先輩」と上目遣いを向ける。「これが先輩なりの愛なんスね？」

「……はあ？」

「本当に不器用な人っス！ 暴力でしか愛情表現が出来ない人なんスね！ 新手的萌えって奴っス！ まさかの新ジャンル開拓っスか？ 萌えの歴史は俺が変わる、ってわけっスね！ 私、一生ついていきます！」

「何がいいたいんだよ、おまえは……」

名も知らない少女に無理やり起こされ、こうして益体のない話に興じている。これではせつかくの昼寝が台無しだと、そう思う。

俺と少女以外に人気はない。それだけに、少女の大きい話し声が中庭に響いた。

そうしてる間、再度瞼が落ちそうになる。

放課後まで寝入っていた、というのによくある。俺は寝始めたら結構寝る。昼休みに寝たら、三時間くらい熟睡する。目が覚めたら夕方、なんてザラ。

そのときは歪が起こしに来てくれる。午後の授業にも顔を出さずうにいわれる。強制、というわけではない。短い付き合いで、歪は無理強いはしないことは自分でも承知していた。あくまでも佩刀歪は篝火白夜の意向を最優先させる。

「あー、また寝ようとしてますね、先輩！ 寝ちゃダメです！ 死んじゃいますよ」

「……ここは雪山かよ」となし崩しに応じた後、「おまえ、図書室はいいのか」と尋ねた。

少女はぼかんと口を開けて、しばし緘口かんこうした。「そっ、そうでした！ 私としたことが、すっかり忘れてたっス！」

「図書室に行きたいんだろ。さっさと行かないと昼休みが終わるぞ」「それはヤバイっスね」といって、慌ただしく立ち上がった。スカートの裾をぱっぱと払い、俺の後ろを見すえる。そのまま韋駄天のごとく走り去っていった。

首を百八十度曲げ、その後ろ姿を見届ける。名の知らぬ少女は俊敏に駆けていった。

と。

不意に少女は立ち止まった。

眉をひそめていると、少女はくるりと後ろを振り返った。「教えてくれてありがとうっス！ 私は転寝うたたね素っつていいいます！ それでは、篝火先輩、お達者で！」

少女は深く一礼して、三棟へと馳せていった。

かの少女の名はどこか聞き覚えのあるものだった。

……転寝。

どこで聞いたのだろうか。それに転寝素なる少女は、なぜか俺の名前を知っていた。俺と少女は初対面のはず。

待てよ、と考える。篝火白夜の噂はこの村の隅まで広がっている。あの少女が俺の名前を知っているのも不思議ではない。

とくれば、それはそれで不思議だった。篝火白夜の噂を聞いているのなら、その悪評まで耳にしているはずである。

三年前、近隣の道場をいくつも潰したことや、襲いかかってくる不良をことごとく病院送りにしたことなど、際限ない。独り歩きした噂こそあれど、ある程度のことば事実である。それでも、いささか大きくなり過ぎている悪評もある。常に青竜刀を携行しているだとか、幼女をレイプしただとか……。

普通の人間ならば、避けて通る人間像であつた。しかし、例の少女は気さくに声をかけてきた。

妙な引っかけりを感じる。

棚上げ。

眠気が込み上げる。体を地面に預ける。

「白夜様」

「……歪」

目を開けると、歪の顔が見えた。双眸は夕焼けに照らされ、オレンジ色に映えている。

その光景に既観感を覚える。

空は茜色に染まっていた。どうやら完璧に熟睡してしまつたらしい。肉体には沈むような倦怠感と、突き抜けるような心地よさがあった。

寒々とした風が吹き渡る。春だというのに、いまいち気温が低い。体を起こすと、歪が黒塗りのバツクを手渡した。わざわざ教室から持って来てくれたらしい。

礼をいって、自分のバツクを受け取る。

「何時くらいだ？」

「六時ちょうどでございます」と歪は自らの腕時計で確認した。

「……五時間も寝ていたのか」

「どうやら」と小さく笑った。「そのようですね」

「帰るぞ」

「御意」

俺と歪は下駄箱に向かった。靴を履き替えるためである。俺は勿論、歪も上靴のままだった。

歪の立ち位置は、俺の真横へと変わっていた。まるで新妻のように、ほのかに肩を寄せて。

きめ細かい黒髪が俺の肩にかかる。歪の髪は腰までである。それが風に翻って、俺の腕に触れた。

つまり。

それくらい近い。

それに関してとやかかくいうつもりはなかった。

歪との対面や、四月の事件。その濃い一カ月で理解したことは、この少女に害意や敵意の類がないことだった。むしろ、篝火白夜のことを好いている。過剰に、好いている。

異性同士の恋情。

家族同士の愛情。

友人同士の友情。

両者の関係は、そういった領域から外れている。根本から違う。篝火白夜にとって、佩刀歪はなんなのか。

まだ答えは出ていない。

中庭から下駄箱まではそれなりに間遠い。

もの静かである。

ふと、これまでのことを回顧する。

四月に練絹玉梓なりのぎめたますきの事件があつて以来、ずっと一人で考えていた。あれでよかったのか。一見落着といえるのか。何かが解決したといえるのだろうか。

練絹玉梓が精神病棟に入院してから、鬼隠しはぱったりと消滅し

た。どうやら練絹玉梓の証言通り、あいつが鬼だったのだろう。鬼隠しは迷宮入りにこそなったが、これ以上の被害者が出ることはない。そういう意味では、篝火白夜の愚行、佩刀歪の尽力は無駄ではなかったのかもしれない。俺が醜態をさらし、歪が助成しなければ、こういった運びにはいたらなかった。

事件は表面上解決した。しかし、自らに対する羞悪おしづしはある。練絹の想いに気づけず、歪までも巻き込んだのは、篝火白夜だった。

自責の念にかられる。堂々巡り。思考は袋小路に行きつく。

そんな俺を気遣ってか、歪は特に干渉しなかった。送迎は今も継続中だが、それ以外の接触はない。

時々梅雨利東子つめりとうしが電話をよこす。きつと練絹の不可解な入院について、情報を求めているのだろう。テレビをつけてみても、練絹玉梓の狂態は隠蔽されているようだ。

それでも不審に思うものがあるのだろう。友人なのだから、心配するのも当然だと思う。梅雨利は藁にもすがる思いで、俺に電話してきたに違いない。

だが真実は話せない。後日、やたらと厚い札束の入った封筒つまり口止め料が自宅のポストに投函されていた。それには、『警告』とだけ記されており、それが何を意味するのかが明白だった。

どうやら、俺の知らないところで不穏な動きがあったようである。

……ん？

形のない情報が輪郭を構成する。何か繋がったような気がした。靴箱から靴を取り出す。その途中に、「歪」と声をかけた。

「なんででしょうか」

「転寝　という名前を知ってるか？」

歪は小首を傾げた。俺が自発的に話すこと自体珍しいのに、その内容が突飛だったのだから無理もない。

「はお、存じております。表御三家の一角ですね」といった後、無表情だった顔に瞋恚しんいの炎が焚き起こった。「四月の一件では一杯食わされましたから、よく覚えております」

「ああ。その転寝だ」

「……それがどうしたのでしょうか？」

なんでもないと誤魔化す。何事もなかったかのように、靴を履き換えた。

「そうでございますか」と掘り下げることなく、俺の横に並んだ。思い出す。

鋭く横に切れた瞳。

艶っぽく濡れた睫。

小さめに整った鼻。

雪のように白い頬。

形のよい紅色の唇。

無駄な肉のない体。

第一印象に過ぎない。一度会っただけでそれの本質は読み取れない。たった一度の出会いでそれの全てが分かる慧眼を、大半の人間は持ち合わせてもいない。

ましてや人間関係が死滅している篝火白夜にとって、それはなおさら。篝火白夜には一切の眼識がない。だから転寝棗の本質がどうなのか、分かるはずもない。

ともすれば、佩刀歪も同じかもしれない。

佩刀歪は見たところ、仁徳もあり、周囲からの人気もあるようだった。頭の回転も速い。運動神経だって卓絶している。

しかし。

歪唯一の欠点は、その盲目さにあった。どうしてか篝火白夜につきまとう。自らを俺の許嫁だと断言して、俺にかす傳く。その様相は明らかに奇怪で、どこまでも嘔み合っていない。

容姿、頭脳、能力、どれをとっても頭一つ抜けている。そんな歪には白壁はくへきの微瑕びかはあるようだった。

彼女は致命的な人選ミスを犯した。

だからといって何をするまでもなかった。篝火白夜は誰かに特定の感情を抱くことが苦手だった。

それが好意でも悪意でも。

好奇心が希薄で、探究心が薄弱。ようは怠け者なのだ。何事も面倒。なぜ面倒なのかを考えるのも面倒。そうやって思考を放棄していつて、無駄なものをそぎ落としていく。

無駄を、そぎ落とす。

字面はいい。ただ、人の人生は無駄の積み重ねだ。無意味なこと、無意義なことを蓄えていくのが生きるということだ。

事実、人生の大半はそういったものでできている。

篝火白夜の場合、削っているのは肉、ではなく 骨、なのだ。

なくなっているのは枝葉末節ではなく、その本体たる“生”そのものだった。

これだからすっからかんになっていく。

一時的に満たされたところで、結局、こぼれ落ちる。

五月になっても桜は満開だった。

雨稜高校の校庭には巨大な桜が植樹されている。今日も儂げに花びらを散らしていた。

「……綺麗だな」と柄にもないことを口にする。

「桜の花は日本人が一番美しいと感じる花ですから」
深々と降り落ちる。どことなく風流だ。

だからか、「風流だな」と気がついたら口にしていた。

俺の独白に気づいたのか、歪は雅やかな笑みを浮かべていた。「
白夜様は粹人でございますね」

風流だなといった程度で、粹人を名乗れるとは思わなかったが、
「ああ」ととりあえず答えておく。

今まで桜といった風雅なものに目をとめたことはあまりなかった。
俺が無粋な人間だったからだろうか。しかし、こう改めてみると美意識を刺激するものはある。

これまでの人生で見えてきたものはおおむね背景に過ぎなかった。
桜に限らず、動物や人でさえも風景の一部だった。何かに注目する
ことがなかったからだろうか。一つのものに執着して考えるという
ことに慣れていない。
それでも。

歪と出会ってから、物事を深く考えるようになっていた。気のせ
いかもしれない。けれど、その実感はある。この桜のように。

それに桜には特別な思い出があった。
ドライブの途中だっただろうか。まだ両親が存命だったころ、よ
く花見に行っていた。父はドライブの場に山を選ぶことが多かった
ので、春になれば山間の桜を見に行くこともあった。

そんな感慨に耽る。俺はぼつりといった。「もう五月か。花見の
季節じゃないな」

「学校の桜は咲き誇っていますよ。今からでも十分に間に合います」
「学校が許可しないだろ。多分、無理だと思う」

「では日和見神社の神苑しんえんはいかがでしょうか。あそこならまだ桜は咲いていますし、誰も咎めるものもいません」

「それもそうだろう。日和見神社の神主は佩刀家の人間なのだ。佩刀の口添えがあれば、ことなきを得る。」

「俺と、おまえで？」

歪は物憂いとした表情を作った。「ご不満ですか……」

「いや、そうになると二人つきりになるな、と思ってな」

「私は二人つきりがいいです」と歪は無表情のままいった。「ずっと白夜様のお傍で過ごしていたいです」

「……はあ」

「白夜様のお世話は私でないと務まりません。白夜様と一緒にいいのは私だけです。ですから、お花見のさいには私と白夜様のみでやるべきです」

歪と目が合う。すると手に温かい感触がした。「まだ肌寒い季節です。こうしていれば温かいでございましょう」

指同士が深く絡み合う。歪の力は思いのほか強く、はずそうにもはずれなかった。

「もっと体を近づけてください。そう……肩が触れ合うくらいです。でないと寒いでしょう」

「……こんなに近づく必要、あるか？」

「ありますよ」

「なんだよ？」

「私が幸せな気持ちになります」

歪と一緒に登校していると、奇妙な人だかりがあった。その大半は雨稜高校の生徒で構成されている。時折近隣の住民が不審そうに眉をひそめていた。しかし、人だかりが邪魔で何がどうなっているのかは分からず、後ろ髪を引かれながらも去っていった。

人の群れは正門を栓のようにせき止めていて、通行が困難だった。やむを得ず、その手前で立ち止まる。

「何かあったのでしょうか」

「さあな」

正門の手前で佇立する二人。なぜ生徒たちがひしめいているのだろうか。

……というか、さっさと通せよ。

何かが起こっているらしいことは、周囲の反応で分かる。変異に群がってしまう人間の習性も分かる。

しかし、それとこれとは話は別。そんなことよりも学校に入れな
いことのほうが気がかりだった。

埒が明かないと思い、「裏門に回るぞ」と歪にいった。

「その必要はないっすよ」と。

俺でも歪でもない声が返ってきた。

それはどこか幼げな調子で、なぜか聞き覚えがあった。

「あれの正体、知りたいっすか？」

声のするほうに体を向けると、昨日の少女が立っているのが視認
できた。天真爛漫とした様子で、同じ制服を着ている。

少女はニコニコと絶えず笑みを浮かべていた。

対する歪は輪にかけて無表情だった。唇をきつく閉ざし、鵜の目鷹の目で少女を睨みつける。含むところがあるのか、なんとなく不
機嫌そうだった。

「白夜様」

「なんだ」

「この子とは、どういう関係なのですか？」

歪の視線は少女に固定されている。この子とはつまり、眼前の少女のことを指すのだろう。

……なんといえはいいのだろうか。

少女との関係が曖昧だったからだろうか。答えらしい答えは出ない。そもそも少女と出会ったのは昨日だ。少女に関する情報は皆無とっていい。

どう答えればいいのか考えあぐねていると、先刻の少女が一步前に出た。「お久しぶりっスね、先輩」

「……昨日会ったばかりじゃないのか」

「それはごもつともっス。私、忘れっぽい性格なんスよ」

「それは極端だな。病気が否かのレベルだろ」

「それはひどいいいかたっス！ 人を人とも思っていないような、悪鬼羅刹のようなものいっスよ！ 私をなんだと思ってるんスカ」とものすごい勢いで、罵言をあびせかけた。ポカポカと殴りかかってくる。

と。

ぐいと少女の体が浮遊する。ふわりと浮いたかと思うと、引きはがされるように後ろに退いた。何事かと小動物のようにきよるきよると周りを見渡す。

その視線は歪のとかち合った。

「白夜様から離れてください」と能面のような表情でいう。

「いいじゃないスカ。別にへるもんじゃないし」

「白夜様がお疲れになります。これ以上白夜様に近づかないでください」

「これくらいで疲れたら、病気が否かのレベルっスよ」

「ふざけないでください」

「ふざけてないっス。私は大真面目っスよ、佩刀先輩？」

「そういう態度がふざけているんですよ、棗ちゃん」

ラリーの応酬。歪はいつにも増して無表情。転寝とかいう少女は、やはり朗笑していた。

しかし。

なんだか尋常でない雰囲気である。両者とも妙な気配をほとばしらせている。そのせいか周囲の生徒も、両名を避けるようにして通っていた。名状しがたい表情で、対峙する二人を遠巻きに眺めていた。

学校の玄関前と正門前。

奇妙なことに、この二か所に人が集まっていた。

いうまでもないが、俺は蚊帳の外だ。

驚いたことに、歪はこの少女を知っているらしかった。ということとは、少女はやはり転寝の人間なのだろう。

転寝。

転寝家といえば、耳朶たじに触れた名だ。四月の中旬。ちょうど練絹の凶行にまで遡る。練絹玉梓の凶行を隠蔽した家系だ。

「歪」と声をかける。

「なんででしょうか」

「その、知り合いなのか」

「知り合いというより、親戚のようなものです」

「親戚、なのか」

「親戚というより、同朋 でしょうか。名伽、佩刀、転寝とくれば、日和見村の礎を築いた三大名家。とくれば、ある程度の繋がりがあります」

「そういうことなんですな」と転寝が合いの手を入れた。

正門の前。俺たちはいつの間にか鼎談する形となっていた。

篝火白夜。

佩刀歪。

転寝棗。

「転寝」と場を改めるつもりで声をかける。「その必要はないってどういうことだ？ おまえ、何か知ってるのか」

「勿論知ってますよ。あれはですね、怪異っス」

「怪異？」

「そうなんスよ。あれはどこからどう見ても怪異っスよ。百パーセント怪異、みたいな」と笑った後、「正門の近くにある桜は知ってますよね」と尋ねた。

「一応な」

「その桜にですね、吊り下げられてたんスよ。人の形をしたものが」

転寝は暫時時間を開けた。唇には薄ら笑いを浮かべ、上目遣いで俺と歪を見た。やけに大仰な口ぶりだったので、わけもなく構えてしまう。

人の形をしたもの。

嫌な予感がする。学校の敷地内。桜の木に吊り下げられた何か。

人の形。人間。

「死体 です」

「なっ、んな」

「嘘ですよ。そんなわけないじゃないっスか」と転寝は舌を出して悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「ま、紛らわしいこというな」

「すみません。けどあながちはずれてるわけでもないんスよ。なんでも桜の木に人体模型がぶら下がってあったそう。たぶん生物室の奴だと思っス。で、それは真っ赤なペンキで塗りたくってあって、それはもう血まみれといったあたりさま。本当シユールな光景だったっス。なんだって血だらけの人体模型が桜に自殺者よろしく吊り下がってたんスから。それは騒ぎにもなりますよねえ。無理もないっス。普通、樹木にぶら下がった人体模型なんて拝めるもんじゃないです。後ですね、先輩」と転寝は声のトーンを下げた。

転寝の膨大な会話量に押されながらも、「なんだ」とかろうじて返答する。

転寝はふざけるような様子で、「佩刀先輩とはできてるんスか？」

といった。「だとしたらスクープっスよねえ。なんかその、現実味に欠けるっス。それで佩刀先輩は篝火先輩をどう思ってるんスか？」
「そういうことを訊くのは無粋だと思いますが」と思いのほか普通な受け答えをしたが、「それ以前に私と白夜様は心から愛し合っています」と突飛なことをいった。

「……………」
「そんなこと訊くまでもないことでしょう」

「はーん。篝火先輩に首ったけのようっスね。よかったじゃないですか、こんな美人な彼女がいて」

「あのかなあ……………」

「二人の噂は入学当時から聞き知っていましたけど……………。あはは、ラブラブなんスね、ご両人！ まさか、数ある男をことごとく粉砕してきた、あの身持ちの硬い佩刀先輩に恋人が出来るなんて！」

「恋人ではありません」と首を横に振る。「夫婦です」

「……………ふうふう？ うおおお、お二人の関係はそこまでいつちゃったんスか！ 大人っス！ 大人に階段上っちゃったっス！」

「これから上る予定です。後は白夜様がゴーサインを出すだけですよ」

「いや、上らないから。そんなわけないからな、二人とも」と静止を掛ける。文字通り、生死を賭ける。

正門のほうに目を凝らす。生徒の隙間から高松先生が出張っているのが見えた。それと 生物の先生だろうか。転寝の証言通り、赤く染まった人体模型を抱えていた。白衣を着ているので、返り血を浴びた殺人鬼に見えなくもない。

高松先生はかくしゃく豊鑠とした動作で、生徒に解散するよう呼びかけている。それを受けた生徒たちも、だんだんと散っていった。

歪と転寝棗は相変わらず漫才のような会話をしていた。しきりに愛だの、夫婦だのといった。てつきり仲が悪いのかと思っていたが、そうでもないらしかった。

愛。

愛がなければ人生は空虚なもの、なんていう。小説やドラマで愛を扱う作品も多い。だから愛というのは大切な概念なのだろう。生物学的に見えても、人間しか持ち得ない感情の動きだ。

誰かを愛せない人間は誰かに愛される資格がない、ともいう。

愛には資格がある。

だとすれば、自分はどうかだろうか。

餌を待つ雛鳥に相違ない。口を開けて、色々なものを待つ。待っているだけで何もしない。

結果 地を這う。脆弱な翼では空も飛べない。空を飛ぼうものなら、すぐに墜落して、地面に叩きつけられる。かろうじて生き延びても、狼や鷲がその肉を貪る。翼はもがれ、嘴は折れ、羽は砕ける。そうして人生の幕が閉じる。あつけない。這いつくばって死ぬ。あるいは。

永遠に籠の中、という場合もある。この場合、飛ぶことすらできない。羽ばたけない。一生を籠の中で過ごす。

ただ、いらぬ刺激も衝撃もない。それは日々が安泰ということだ。取り繕われた安泰。穴だらけの楽園。きつとそういうことなのだろう。

それも悪くない。そういう人生も悪くない。きつくなさそうだ。

無気力。

無感動。

無意義。

無鉄砲。

篝火白夜は、そんな人生を送る。

そんな予感はいつでもあって、同時に予定調和であることにも気づく。

朝が来るのは嫌だ。

起床するたびに思う。悔恨と諦念。そういった感情が自然と湧きあがる。なぜだろうか。

篝火白夜の今日は昨日だからだろうか。

昨日と今日と明日。一次元的に連続しているそれは、一本の道に例えられる。人にとっては狭い道もあるし、広い道もある。目の前に枝分かれした道もあれば、一本道のままの場合も多々ある。そもそも地質や周りの光景が違うことも多い。十人十色。百態だ。

ただ篝火白夜の場合、それは道ではなく一つの輪だった。輪には始点も終点もない。繋がっているだけだ。

まっすぐ歩いているはずなのに、元いた場所に戻る。風景もいつの間にか見覚えのあるものになっていく。そしてなぜか、目の前に足跡がある。それも自分の足跡だ。

はて、どうしたものか。そう思いながらも、特に気にすることなく進む。少なからずの疑念や懸念はあるものの、そういつた思考を棄却していく。考えるといふ行為は、存外エネルギーを使うものだ。無駄遣いをしてはいけない。黙々と歩き続ける。

そうした無為な繰り返しで、俺の人生は作りあげられる。

昨日は今日で、今日は昨日で、明日は昨日。

厳密にいえば違う。けど、大局的には変わらない。そうした日々を送っている。毎日の反復作業。明日はベルトコンベアーのように流れてきて、使い終わった昨日は明日のために再利用されていく。麻特有の倦怠感も、感じ慣れたものだった。

日輪の光を浴びて、のっそりと起き上がる。洗顔して歯磨きして、朝飯を食べる。その折にテレビをつけて、ぼーっとする。それが篝火白夜の朝。

朝食はジャムを塗ったトーストという、お粗末なものだった。か

れこれ一週間近く、それだ。

不満はない。俺にとって、食事は娯楽を伴ったものではなく、生命活動のために作業に過ぎなかった。

それでも時々　　というか毎日、歪が朝食を作りに来てくれる。それはあんまりだと思っから、最近は自分で作っている。それでも、歪の料理が恋しくなるときはある。歪の手料理は例外なくおいしい。耳から雑音が飛び込んでくる。内容は頭に入らない。耳から耳へとすりぬけていく。開きもせず毎朝テレビをつけるのは、なんとなく。というより習性だろうか。

パンを食べ終わる。暇になったので耳を澄ますことにする。聴覚がニュースキヤスターの声を拾った。

それは聞き馴染んだニュースだった。

鬼隠しのことである。

朝の情報番組は鬼隠しが鳴りを潜めつつあることを伝えていた。

その旨をニュースキヤスターが抑揚のない口調で読み上げる。

「それもそうだろう」と。

思わず口にする。俺はこの事件の顛末を知っている。

……顛末といっても、犯人の正体くらいだが。

練絹玉梓の輪郭や性格。それが脳内に想起される。初めは曖昧模糊のように思われたが、ことのほか明瞭だった。

本来記憶というものは劣化していく。月日がたてば忘れもするし、それが不快な記憶だったら無意識に封印もされる。忘れるという行為は人間に残された防衛本能の一つでもあるからだ。

けれども、彼女のことを完全に忘れ去ることは出来なかった。印象が強烈だったからだろうか。それともメモリーが余っているからだろうか。忘れようにも、いまだ記憶の貯蔵庫は有り余っている。忘却というのは多すぎる記憶を刷新するために行われるものだ。しかし、俺の場合、記憶の積載量はそれほどない。刷新されることなく、保存されていく。空白の部分が大量にある。だから忘れない。

記憶力がいい、というわけでもない。博覧強記とも違う。たぶん、忘れたくないんだと思う。

彼女のことか。

生きた証が人の胸に残る、なんてキザな言葉を吐くつもりはない。しかし、共感はある。いかにして人の心に何かを残せるか。

……付言しておくが、練絹玉梓は死去したわけではない。詳細は不明だが、精神病棟にいるらしい。夭折して墓の中にいるわけではないのだ。

そうして夢想到に耽っていると、またまた聞き覚えのある名がテロップとして出てきた。

前日未明、名伽家の長姉である名伽狭霧氏なしかたぎりに搜索願が提出されました。警察の調べでは、これといった手がかりは発見されておらず、早くも行方不明が危ぶまれている模様。これまでの名伽氏の行動に不可解な点はなく、捜査は暗礁に乗り上げているようです。一時期流言飛語りゅうげんひしこだと思われていた神隠し。よもや神の怒りに触れたのではと、巷間で囁かれています。これは人為的な策謀なのでしょう。それとも人知の及ばぬ神の悪戯なのでしょう。それでは専門家のご貴意を仰いでみましょう。専門家の

画面には初老の域に達した男が長広舌をふるっていた。それに対して別の専門家が冗漫な意見を垂れる。議論は四方山話よもやまばなしのように雑然としていた。

リモコンを手に取り、テレビの電源を切る。無性に心がざわめいた。

名伽狭霧。

艶然たる華人でもあり、毅然たる武人でもあり、超然たる才人でもある、才色兼備な女。

名伽狭霧とは四月に一度会って以来、顔を合わせていない。なんでも高名な美術コンクールに自作を出展するのだそうだ。特に四月

下旬から五月上旬の間に、作品の最終調整に忙殺されているらしい。歪の言によれば、ろくに生徒議会に出席できていない。それだけ心血を注いでいるのだろう。

俺は神隠しといった眉唾物は信じない性質だ。なので名伽狭霧が魑魅魍魎の類にかどわかされたとは思えない。

ならば自発的に行方をくりましたのだろうか。こんな大切な時期なのに。いかにも奇態だった。

なんだか嫌な予感がした。

と。
インターホンが鳴る。歪だろう。手間だろうに毎日迎えに来てくれる。

立ち上がって玄関へと向かう。嫌な予感は雲散霧消していた。しかし。

くしくもこの嫌な予感是最悪な形で実現する。

名伽狭霧は一週間たっても帰ってこなかったのだ。

「どうしちやったのかなあ、ほんと。わけ分かんないよ」

梅雨利東子はそううそぶいた。

五月十八日。

名伽狭霧が韜晦とっかいして一週間たった日のことである。

店内は一切の雑音がなかった。普段ならば回っているであろうシーリングファンは稼働しておらず、テレビもついていない。物寂しい静寂があるだけだ。

「よりによってこの時期じゃなくてもいいのにさあ。神様も因果なことするよ」

制服姿の梅雨利東子はほろ酔い状態だった。テーブルに突っ伏すように体を預け、酌飲している。コップはたちまち空になった。頬はほのかに赤い。

まあ。

中身は。

オレンジジュースだが。

オレンジジュースで酔いしれた梅雨利東子は延々と管を巻き続けた。「こういうときには神様に祈りを捧げるもんんだけど、今回は複雑だよねえ。なんたつて先輩を奪ったのは 神様なんだから。これじゃあ、本末転倒だよねえ。己が惨めになるだけだよ。神様なんていなくなればいいのにね。しょせん神様なんて人類が作り出した都合のいい道具なんだからさ、創造物としての立場をわきまえてほしいよ。創造物が創造主に仇をなすなんて、三文芝居もいいことだつて。にしても。本当、なんでかなあ」

おかわりいー。

梅雨利は空のコップを差し出した。是非もなく洋卓の角にあるポットに手を伸ばす。ポットの中にはオレンジジュースが充填してある。それを中身のないコップに注いでやった。

ありがとー。

梅雨利は盛大にラッパ飲みした。ごくごくと恥も外聞もなく嚙下する。あつという間にコップが空になった。

「警察なんて信用ならないよ。国民のために粉骨碎身するのが公僕の役目でしょうが。さっさと狭霧先輩を探し出してみせてよ。……と、思い出してみれば。そういえば学校も、玉梓に関する供述を伏せてるっぽいよねえ。警察は警察。学校は学校。結局のところ、両方とも国家の走狗そくこってわけ？ 私たちが納得いくようなきちんとした説明をしてみろっつーの。……けどどうなんだろ。玉梓は今どこにいるのかな？ 玉梓の家に行ってみても誰も何も教えてくれない

し……。それに学校も警察も委曲を尽くして説明してくれないし……。どうなってるんだか。最近不幸続きだよ、もう」

篝火君もなんかいつてみてよお。

梅雨利の目は完全にすわっていた。酩酊しているらしく、カクンカクンと首を上下させている。それに準じて、純白のリボンが揺れた。

……できあがってやがる。

というか、よくオレンジジュースで酔えるな、と思う。アルコール分は入ってないはずだが。

「ただでさえ私、友達が少ないんだからさあ。もつと私をいたわってよお。このままじゃあ、保健室登校の一人ぼっち野郎になっちゃうよお。いや、この場合は野郎じゃなくて 女郎？ なんか遊女みたいで嫌だなあ。妓楼の花魁おいらんじゃないんだからさあ。 って、そうだよねえ。花魁ちゃんも意味いみな奈ちゃんもどう思うかなあ。悲しむだろうなあ。葬式はやるのかな？ けどその死体がないんだからどうしようもないか……。鬼隠しもやっと沈静したのにさあ。今度は本家本元の登場ってこと？ これまでの鬼隠しは前座 余興だったってわけ？ ならさつさと幕を閉じるのが筋ってもんでしょ」

早く注いでえー！

酒豪（？）の梅雨利は次なる一献いっしんを注文した。もはや酒林とかしたガラスコップにオレンジジュースを注ぐ。梅雨利は油脂に火がついたように云々した。赤ら顔であれやこれやと意見を述べては、喋り続ける。俺の存在など全く無視である。酒 というかオレンジジュースを飲むなら静かに飲んでほしい。

時計を盗み見てみれば、もう七時半を回ってるところだった。五時ごろに入店したから、すでに二時間以上もの間、梅雨利の無駄話に付き合っていることになる。

梅雨利東子に喫茶店『フィート』に誘われたのは、放課後のことだった。

ちよっと付き合って、といわれ半強制的に連れてこられ、今に至

る。こうして益体もない愚痴に付き合っている。

幸い　　というか偶然というか、歪は生徒会で忙しいようだった。名伽狭霧の出奔についての事後処理に追われているようだ。そのせいか近頃は一人で下校している。あるいは、今日のように『フィート』で一日を潰すことが多い。

主題はもっぱら、名伽狭霧と練絹玉梓の不可思議な出奔に絞られた。

前者はともかく、後者に心当たりはメチャクチャあるわけで、梅雨利の誘いを断るに断りきれずにいたのだ。

「それにさあ、それとは別にもう一つの噂が立ってるの知ってる？ん、知らない？　そりやそうだよねえ。篝火君、友達いないもんね。私とおんなじで。ほんと嫌になっちゃうよなあ。私って社会不適合者？　デイスコミュニケーションだよねえ、それ。　って、

それよりも。それよりもあれだよ、あれ。吊るされた人体模型のことは知ってるよね？　それくらいは知ってる？　それもそうだよね。いや、待って。そういえば君、佩刀さんと一緒に登校してきたけど、もう一人の可愛い子誰？　不潔だねえ。そういうところは尊敬するよ。あと自分の無能加減を自覚しているところとか、評価に値するね。今のご時代、バカな男が多いから。低俗クス野郎が跳梁跋扈してるもんねえ。それに関しては玉梓の兄貴はすごいわ。顔はいいわ、頭はいいわ、運動できるわ、なんでもできるわの完全人間だもん。けどまあ、彼女いるし。それに欠点がない人間ってというのは、それ自体が不気味だもんねえ。存在自体が虚構じみてる。狭霧先輩もしょせん虚構だったのかな？　あるいは私の幻想、なのかも」

どうやら梅雨利は予想以上に参っているようだった。ついには失ったものを虚構として処理しようとしている。人間の防衛本能の発露か。だとすれば相当弱っている。

梅雨利東子は　意外と脆い。

俺も似たようなものだ。悉皆愚かなのだろう。何もかも。

「信じていたものが実は虚構だった、なんていう話はよくあるもんね。自己と世界の境界線なんて自分で引くしかないんだし。なら私がしたいように世界とやらを作り変えるしかないよ。君だってそうでしょ？　けどまあ、そんなことどうでもいいか。そんなことよりも、私は狭霧先輩のことで頭が一杯だよ。ペンキで真つ赤だもん。ひどいなあ、もう。学園はその噂でもちきりだよ。狭霧先輩はキャンパスの中に呑みこまれたって。　ああ、キャンパスっていうのは先輩が出席するはずだった絵のことね。私も確認したけど、それがペンキで赤く染められてたんだよね。人体模型の件もあるし、なんだかメチャクチャになっちゃうよ」

梅雨利東子は美術部員だそうだ。前に電話で聞いた。

「ほんと、どうしてなの？　どうして二人も消えちゃうの」
派手な音がする。

視線を前に向けると、梅雨利は寝息を立てていた。先ほどの音は、テーブルに頭をぶつけたときの音のようだ。さすがに疲れたのか、コップ片手に寝入っている。虎になるとうるさくなるが、寝てしまふと静かになる。

「さて」とソファから腰を上げる。梅雨利の横に体を移動させた。これからが俺の仕事だった。

机に両手を投げ出している梅雨利の肩に腕を滑り込ませ、華奢な体を持ち上げる。そうして背中に梅雨利の体を引っかけた。俗にいうおんぶという奴だ。梅雨利は軽いのでさほど負担にはならない。面倒なこと吹っかけやがって、なんて思わないし、不満とも思わない。

梅雨利は梅雨利で不満はないらしく、この体勢のまま家に運送している。名伽狭霧の出奔を嚆矢に、ずっとこうしている。

梅雨利をおんぶして、喫茶店を後にする。

看板の横には梅雨利の自転車がとまっている。さすがにこの状況で自転車を押すことは不可能だ。

梅雨利の家はここから一五分程度だから、自転車を使わず徒歩で

も、十分に行ける。

看板には『準備中』の但し書きがかけてあった。こうなることを見越してなのだろう。如才ないというか、確信犯というか……。

背中からは柔らかい感触がする。いくら大酒飲みでも、女は女だった。寝顔も本人の前ではいわないが、かわいかった。性格のほうをどうにかすれば、友人でも恋人でも、できそうな気がする。

夕焼けに染まった畦道を脇に、歩を進めた。

「いつもいつもすみません。こうやってお姉ちゃんを運搬してもらって」

梅雨利の家は開豁かいかつとした地形にあった。小高い丘の上に建てられていて、見晴らしがいい。奥深い森や散在する住宅が見える。

「まったくもってダメなお姉ちゃんです。いつも誰かに迷惑かけるし、言動も破天荒だし、色々なところでメチャクチャだし……」

「けど、人間らしい奴だよ」とフオローを入れる。それ以上というのはかわいそうだった。

俺もそう思うけど。

「人間らしい人間ってことですか？ それじゃあ、本能に忠実な人間になっちゃいますね。こういう人が放蕩娘になっちゃうんですよ。ギャンブルにのめり込んだり、酒におぼれたりするんです」

俺は小さく笑った。「酒といってもオレンジジュースだけだな」

目の前の少女は不思議そうな表情をした。「オレンジジュース？」

「いや、こつちの話だよ」というと、少女はますます小首を傾げるだけだった。

小学校上級生だろうか。梅雨利東子の妹を名乗る少女は見覚えのある制服を着ていた。俺の卒業した小学校と同じ代物だ。

梅雨利家の女性はみなそうするのか、髪をリボンで結えていた。

梅雨利東子は純白で、この子は深紅だが。

釣り目に金髪という奇怪な風体に慣れたのか、少女の顔にはうつすらと笑みすら浮かんでいた。もっとも、初めに訪れたときでさえも、さほど驚いた様子はなく、また恐れてもいなかった。胆力が常人とはケタはずれなところは姉譲りらしい。見知らぬ怪漢が身内をおんぶしても、眉一つ動かさない辺り、超然としたものを感じる。

「時間のほうはいいんですか。その、部活とかは」

「帰宅部だ」と断る。「だから、その心配はない」

「そうですね。この村は物騒ですから、気をつけてくださいね」と目を細め、仰視した。釣られて、天を仰ぐ。

空はほのかに暗くなっていた。

夜道に気をつける、ということなのだろうか。だったら心配は無い。むしろ、あちらのほうから避ける。少なくとも、俺が通り魔に襲われるシーンを思い描くことは出来なかった。

すると少女は、俺の考えを読んだかのように、「そうじゃありません。神隠しのほうですよ」といった。神隠し。

響きはいかにも旧弊的な風ではあるが、この村の死活問題と呼べるものである。日和見村の神隠し遭遇率は、常軌を逸している。何カ月に一回のペースで誰かが音信普通になっているのは真実だ。

そのせいで、過疎化が進んでいるという見解も出ている。事実、村民はわずかながら減っている。

原因ははまだ分かっていない。この土地の風土なのか、本当に神の怒りに触れたのか。あるいは、何か作為的な動きがあるのか。

日和見村。

なんにもない、旧態依然とした僻村。日本海に面しており、第一次産業が活発。しこうして、表と裏合わせて、六つの名家に統治された奇妙な村でもある。俺はこの村の出身ではないものの、この村が現代に取り残された、因習だらけの場所であることは分かる。今のご時代に、いまだ鬼払いの儀式である追儼ついなや、穢れを取り除く大被おほひなどの習慣が深く根付いているのだ。それらは平安時代の宮中の年間行事である。それを執り行うのは神主の家系である佩刀家と、素封家そほうかの雜道家ひなみちだ。

この村に住んでいる以上、それらの加持祈祷の類は知識としては知っている。ただ、参加したこともなければ、見に行ったこともない。過去に一度だけ行ったような気もするが、それがなんだっのかはよく覚えていない。しかしながら、儀式の最中に感じた異様な雰囲気、背筋を寒くしたような。

「誰やたぞ 我が名を知らで 呼ぶ人は いくくの誰や こゝはかみやぞ なんていいますからね。家の門にお札を張っておくと、妖怪は近づかないらしいですよ」

「それでも、相手が神様なら、お札程度じゃ分が悪い。だろ？」

「ですね」と少女は、にっこりと笑う。

小さく笑みを返して、少女に背を向けた。そのまま帰路につく。

夜気が迫って来ていた。

薄暗い。数少ない街路灯がぼつぼつと明滅している。夕日は完全に傾いていた。

わずかな光を頼りに道に行く。

すると。

公園があった。

キィキィ。

音がする。ブランコの音だろうか。金属がすれる音だ。

頭上では皓月こうげつが鮮やかに輝いている。

月光が陰影を切り取る。

白と黒。

その間に。

誰かが。

「こんばんわ」

少女は笑った。

闇に混じるような黒髪。月夜にひとときわ煌めく漆黒の双眸。服装もまた黒一色で、ピロードのようなワンピースを着ていた。

ブランコが緩やかに動きをとめていく。やがて停止。少女の輪郭が明確になった。

どこか浮世離れた光景だった。現実と乖離している。少女の存在は明らかに異質なものとして映った。

「どうかしたのかしら？」

と。

少女は問う。

音はやんでいる。何も無い。無音。

少女はブランコに座っていた。整った容顔が俺のほうを向いている。頭がかき乱される。少女の視線は魔性だった。何かを歪ませた者の目。世を厭い、今を憂い、人を倦む者の。

少女の目には何も映っていなかった。無機質で非人間的な眼球は、ただの水晶玉だった。それには感情らしき情動も、人としての脆弱さも、何も窺えない。人形に生を与えたら、きっとこの少女のようになるだろう。という予想が芽生えた。

人は、弱い。

エセ占い師の実母は、いつもそういう。人間の嫉妬や、害意や、恐怖や、偏見は、全て無意識のうちに行われる。人は生まれながらにして、何らかの欠陥を抱えて生きている。周囲の人間はおろか、当の本人も気づき得ないそれは、確実に人を誤った方向へと導く。

愚かしい人生。

くだらない人生。

その行く末を決めるのは、本人の意識でも見識でもない。まして、運命や因果なんていう、眉唾物でもない。

それは、弱さだ。弱さは人を変える。悪しき者へと変貌させる。

弱さは悪の象徴だった。

根本にあるのは、生物としての弱さ。

そして。

人格としての弱さ。

パーソナリティーとして定着してしまった、その人特有の欠陥。様々な負の感情として発露し、恒久的に曲がり続ける不定形のもの。ただ。

この少女には、ない。無意識に潜む、何かがない。

それは異常なことだ。

それは。

やはり、目を見れば分かることだった。

魔女のような風貌だからか、年齢はよく分からない。少女にも見えるし老婆にも見える。年齢不詳。

「おまえ」と問いかける。「誰だ？」

「夜」

キィキィ。

ブランコの音。

月影が揺れる。

「夜？」

「そう、夜」

少女の折れそうなほどに細い手が、ブランコの鎖を掴んでいる。カラスの濡れ羽のような黒髪が空を切った。

それはお伽噺のように不自然な光景。どこか嘘の香りがする、日常とは遊離した世界。

その中心には夜と名乗る少女。彼女がこの世界を顕現したのか。視ようとしても、見えず。

聴こうとしても、聞こえず。

幼稚な作りの滑り台や水飲み場、鉄棒はいつの間にか視界に消えていた。知覚できるのは少女と軋むブランコの音。

「あなた、変わった髪の色をしているのね」

「金髪が珍しいか」

「そうじゃないのよ。ただ、不吉な色だわ」

「なぜ、そう思う？」

少女は己が髪の手をいじりながら、答える。「金はすなわち、黄昏。夜が始まる少し前の、一刹那。そうだとしたら、それは老化を象徴する色。終焉へと向かう兆候だからよ」

「だったら、黒はどうなるんだよ？」

「思うに、死の色だわ。あなたが時間を暗示させる老化の化身だと

したら、私は死を啓示させる死神になるでしょうね」

少女は興じた。長い眉毛が添えられた瞳は、下を向いている。どうやら笑いをこらえているらしかった。

今どの箇所にも笑う要素があるのか、俺の関知するところではない。というより、意味が分からない。

だからか、「どっちだつて一緒だろうが」と思ったことを口にす。それでは身の蓋もないと、分かっているながらも。

「そうね。そういう解釈も一理あるわ。あなたのいうとおり、終着点はやっぱり同じよね。この設問に結論を与えるとすれば、その回答が一番しっくりとくる。当たり前のようにだけど、やっぱり答えはシンプルなほうがいいわ。何事も簡潔に。老いも死も、無意味な人生を削ってくれるものね」

少女は狐のように、妖しげな笑みを浮かべた。

「春の季節になると、雨後の筍のごとく、大量発生するんだな」と同じように、笑う。「命を粗末にすると、それ以上のものを失う破目になる。そしておまえは、それを分かっている。違うか？」

「違うんでしょね」と再度笑った。

白皚々たる雪肌。肢体はしなやかで贅肉がまったくない。身長は思いのほか高いようだ。

公園の入り口で立ち尽くしていた。

少女との距離はそれほど、ない。

名月の赫灼。おぼろげに辺りを照らす。

「世のなかには空しきものとあらむとぞ この照る月は満ち欠けしける 万葉集の一首よ。歌意は分かるかしら？」

今日はやたらと和歌を聞く日だと思いつつも、「世の無常を説いた句だな？ 世の中の虚しさを教え諭すために、月は満ち欠けを繰り返すのか そんな意味だろ？」と答える。歪に薰陶されたのか、古典文学に対する造詣が、日に日に深くなっているような気がする。「おそらく、僧が詠んだものなんじゃないか？」

「私も同意見ね。外見の割には博識じゃない」とからかうようにい

われる。

「最近の不良は勉強も出来るんだよ」と無駄口を叩く。

公園の壁に背を預ける。上を向いてみると、早くも星が出ていた。田舎はあつという間に夜が更ける。空気は清澄で、清々しい。

「なかなか面白い話を聞けたわ。でも、そろそろお別れね」

視線を下げる。

すると。

いなかった。

少女は忽然と姿を消していた。

キィキィ。

ブランコの揺れる音だけが聞こえる。

夜の帳はおりつつあった。

何かが抜け落ちた世界。落剥した何か。

はあ、吐息をついて、公園の壁から背中を離れた。

幸福とは何だろうか。

ふと、思う。

幸福とは極めて主観的なものだから、定義するのは難しい。だからといって、客観的に見てみても、解明することはできないと思う。本人にとっては嬉しいことでも、他人にとっては些細に感じることもある。

幸福や不運は個人の価値観に委ねられる概念だから、厳密に言えば狭義はない。あるとしても、精神的なものを依拠させて成立するでは。

俺は 篝火白夜は？

人の人生は悲喜交々ひきこもも、なんていう。

嬉しいことと悲しいこと。

悲しいことと嬉しいこと。

交互にやってくる。緻密に交錯する。

ただ。

篝火白夜の人生に特筆するべき項目はない。表立って誇れることも、ない。

嬉しいこと。

悲しいこと。

あるにはある。けど、常人に比べれば、恐ろしく、少ない。

それでも生まれてこのかた、いいことなんてなかった、と憤慨したことはない。不幸なことだとも思わない。

何もしないことこそが最大の失敗だ。

その典型的な例が篝火白夜だった。篝火白夜はこの世に生を受けてから、生産的な行動をとったことがない。積極的に物事をしない。何もしない。墮落しきった生涯を送って、夢もなく愛もなく、死に絶える。

何かを成し遂げることもなく。
何かをやり遂げることもなく。

近道も遠回りもすることなく、終息を迎える。
けれど。

だからといって、全てのものが無価値だとは思わない。何もかも無意味だから、何もしない、なんてバカなことはいわない。

無意味だから無価値だとか。
無価値だから無意味だとか。

そういった思考は現実逃避だと、自分では理解している。少なくとも無駄であるとか、無益であるとか、そんな帰結にはいたっていない。

今まで自分の行動を悔いたことはない。

無意味だとか。

無価値だとか。

なんて思ったことも一切合財ない。無駄であるとか無益であるとか、やっぱり思わない。何かすべきだった、と後悔もしてないし、何もしなければよかった、なんて絶対に思わない。

それだけはいえる。

図書館は紙のにおいがした。四方八方、群書で埋め尽くされている。

内部は木造で、中央には長テーブルがいくつか並んでいる。人気はあまりない。

二階にあるせいか、窓からは西日が深々と入っていた。それが机

やら本棚などを鮮やかに照らしていた。

「ジャンル等の」希望はございますか」

「特に、ない」

「私の一存で決めてよろしいのですか？」

「構わない」

「分かりました。では、白夜様」

歪はゆっくりとした動作で前に進み出た。そのまま数歩先に行く。光彩陸離とした黒髪が艶やかに揺れる。

その後ろ姿に随行する形となる。

歪は奥のほうへと向かった。悠然とした所作。涼やかな存在感が充溢している。それは後ろ目にも分かった。

本が立ち並ぶ棚の前で立ち止まる。歪はしばし黙考した後、おもむろに一冊の本を引き抜いた。「これはいかがでしょうか。それほど厚さはありませんし、中身も簡易なものです」

受け取る。パラパラとめくってみた。「これにする」

「……それでいいのですか？」と歪は困惑した声を出した。至極あっさりと決めるものだから、拍子抜けしたのだろう。

これといった憑拠よんこはない。歪の説明通り、この本はさほど厚くない。百何ページくらいだろうか。枕本の『壺中の天』と比較してみても、その違いが分かる。中身も簡略としたものなのだろう。

何より歪が推す本なのだから、充実した内容なのだと思う。それだけで一読の価値はある。

ではなぜ、歪が書籍を薦めるのか。

その理由は本日の午前中にまで遡る。

杜若かきつばたが萌え出る砌みぎりであった。

隣には川が通っている。その河畔に沿って、俺と歪は歩いていた。家を出たのは八時くらいで、後数十分もすれば、学校に到着する頃

合いである。

もはや通例とかした行動。いつものように隣り合って登校する。

「そういえば、白夜様」と歪は声をかけた。「あの本は読み終えましたが」

あの本とは『壺中の天』のことだろう。「まだ」

「まだでございませうか」と歪はいった。

『壺中の天』というのは、柚子原堂なる店で仕入れた古書だ。奇妙なことに購入 というか、店主らしき老婆に譲渡された。譲渡の字義通り、代金は払っていない。

前回歪に貸したことがあったが、歪は一週間程度で読み終えてしまったらしい。それに子供っぽい敵愾心を燃やして、読了に励むも断念。本を読む習慣がないからだろうか。通読は困難を極めた。一応五割ほど読み進めることはできた。できたが、それ以上は無理そうだった。

「随分とお時間をおかけしているようですね」

「読めない」と素直にいいぞ」

「ご冗談を。けれど確かに、あれはいかにも難読な書物ですから、無理もございませぬ」と優しくいって、「あれは難しすぎます。まずは簡単なものから読み進めるのが上策かと」と付け加えた。

そう思う。せっかく読書を趣味にしようと決めたのだ。ここで挫折しては、なんだか歪に申し訳がない。

しかし。

だからといって、どういった本が簡単なものなのか、判断がつかない。何事にも食わず嫌いだっただからか、音楽同様に文学という分野にも暗かった。今何が売れているのか、どういった本が流行しているのか、杳として知れない。

「何がいいと思う？」

「そうですね……。正直に言えば、私も詳しくは知らないですね。

白夜様がよろしければ、放課後に図書館にでも出張するというのはどうでしょうか。ある程度の蔵書はあるでしょうから、そこから本を

選んでいくというのは」

「なるほど」

「いかがでしょうか」

さほど逡巡することなく、「そうする」というと、「了解いたしました」といった返事が返ってきた。

そういった流れを汲み、今に至る。

俺は歪が薦めてくれた本を片手に、図書館の本を物色していた。面白そうな題名の本があれば手に取り、紐解いていく。歪の言葉通り、蔵書量は並ではないようである。

二メートルほど前方では、歪が分厚い本を興味深そうに読み込んでいた。立ったままの姿勢で読み耽っているようだった。俺にはとても手に負えそうにないレンガ本である。

どうやら歪は重度の読書家のようなだった。

引き出した本を元に戻す。そうして食指を動かしていると、横から手が伸びてきた。

左側に視線を向けると、一人の少女が爪先立っていた。欲しい本が高いところにあるのか、必死に手を伸ばしている。あと数センチほどで届くのだが、届く気配はない。それでも懸命に足の先を立てて、伸びあがるうとしていた。

少女は小柄で、長袖を着ていた。制服の袖が細い腕を覆っている。その横顔には見覚えがあった。

体を少し移動させて、すうと本を取る「これか？」

「あっ……」

少女は気の抜けたような声を上げた。その後、俺のほうに顔を向ける。するとその表情は痙攣したように引きつった。

それがあまりに予想外の反応だったから、面喰ってしまった。目の前の少女はひひい、と呻き声を上げて後ずさった。眼鏡越しに涙が

あふれている。

「……あれ？」と変な声を出す。「おまえ、転寝じゃないのか」

なるべく威圧しないように優しく問いかけたつもりだったが、ますます少女はおののいた。しきりに、「ごめんなさいごめんなさい私がいけないんです許してください許してください」とうわごとのように呟いている。目には恐れと不安の色が浮かんでいた。足は小刻みに震え、弛緩しきった筋肉は、その役割を放棄したように動かない。

「ダメ許して許して私を助けて助けて助けて私が悪かったから何もしないから抵抗しないから何もしないでやめてやめて」

瞳孔を拡大させて、少女は早口でまくし立てる。

その尋常でない雰囲気と、頭の中の人物像は明らかに乖離していた。しかし、身体的な特徴は驚くほど類似している。身長も体型も容姿も。ほぼ一緒。

ただ。

眼鏡という点だけが違う。記憶の中の転寝棗は裸眼だったが、目の前の子は眼鏡をかけている。

転寝棗じゃない？

他人の空似、というレベルではない。眼前の子は前に出会った転寝棗とそっくりだった。

まじまじと凝視する。少女はなおのこと後退した。その拍子に尻もちをつく。スカートから覗く足はあられもない。そのままずると後ろに下がった。

ひどい狼狽ぶりだった。

「あーあ、何やってんスカ。そんなに鈴蘭すずらんを驚かさなてください

よ。

と。

やけに能天気な声が聞こえた。

「お姉ちゃん！」

泣き崩れた少女は、脱兎のごとく音源のほうに飛んでいった。た

ちまち紅涙を絞った少女が、別の少女の腰にすがるという構図が
来上がる。

図書館。本。転寝。鈴蘭。お姉ちゃん。

……お姉ちゃん？

「そういうことっす。先輩のご想像通りっすよ」

転寝棗は赤子をあやすように少女の頭を撫でた。そして、安心させるような口調でいう。「もう大丈夫っすよ。お姉ちゃんが来たからには、もう大丈夫っす。誰も鈴蘭を傷つけさせる真似はさせないっすから、安心してくれっす」

鈴蘭と呼ばれた少女は、恐る恐る顔を上げた。

「……本当？ お姉ちゃん……」

転寝棗は少女に微笑みかけた。慈しむように黒髪を梳く。まるで聖母のようだった。

「本当に決まってるじゃないスか。お姉ちゃんが鈴蘭に嘘つくと思っスか？ そんなこと、天地がひっくり返ってもありえないっす。それにこの人も、見た目は金髪で釣り目のどうしようもない男っすけど、意外に優しく割といい人だったりするんすよ」

「……違うよ」

そう反駁した。気がついたら口にしていた。

自分にそうした甘い認識を持ったことはない。転寝棗の証言は準拠のないものだった。

そもそも篝火白夜と転寝棗を結ぶ系は限りなく細い。出会いもまた、やや一方的なものだった。そのせいか、転寝棗は篝火白夜の本質が見えてないのかもしれない。

篝火白夜は濟度しがたい愚か者だと、自分でも思う。純粹にそう認識している。

その上平凡だった。それらしい取り柄もない。

風体はもはや不良のそれだが、どこか中途半端だった。不良にすらなりきれない。不良とははぐれ者。悪くいえば不良品だ。

ならば、篝火白夜は不良品にすらなれないということなのか。では、篝火白夜とは何なのか。

欠陥品なのか。

初めから何かが欠けている欠陥品なのか。

「……そんな、屈折してるっスねえ」と転寝棗は少女の頭を撫でながらいった。「そんなに自分を苛めなくてもいいと思うんスけど」
転寝棗は片目を釣り上げて、俺を見た。なんだか思考を読まれて
いるように感じる。

「……おまえたちはその、姉妹なのか？」

「というよりあれっスね。双子って奴っス」
双子。

その一言で全てのこと感得できた。どうやら転寝棗と少女
転寝鈴蘭は双子の間柄であるらしい。

「……どうりで背格好が似ているはずだ」

「そりゃあ、双子なんスから、似ていて当たり前でしょうに」と転
寝棗は澆刺とした笑みを浮かべた。

転寝鈴蘭のほうも落ち着いたようだった。転寝棗に断って、やお
ら立ち上がる。
そして。

こちらのほうに向いた。目には相変わらず怯えが混じっていたも
のの、毅然とした表情だった。

「そ、その……。すみません。いい、いきなり、泣いちゃって……」
転寝鈴蘭のような反応をする奴は少なくはない。目性の悪い目めしやうで
注視されれば、誰だって怖い。さすがに転寝鈴蘭の反応は行きすぎ
てはいる。いるが、俺にそういう意志がなくとも、そう勘繰らせて
しまつのかも知れない。

一步、進みでる。転寝鈴蘭は唇を噛んで、顔を伏せた。その際に
眼鏡が少しずれる。

やはり怖いのだろう、と思う。一般人にとって、俺のような理解
不能な存在ほど恐ろしいのはない。それは本能的な恐怖に訴えるも
のだった。髪を染めたり、授業をボイコットしたり……。そんな奴
の気が知れない。という思考に帰趨するのはやむをえぬことだ。

理解できないということとは、枠組みから外れているということだ。篝火白夜は、常識の範疇外にいる存在なのだ。

論外。

例外。

埒外。

篝火白夜は外の人間なのだろうか。篝火白夜とその他大勢が共有できる領域はほとんど、ない。そういう意味では相互不可侵が望ましい。互いの異なる領域に足を踏み入れるべきではない。だから、他人は篝火白夜に干渉してこない。

理にかなった道理　その裏側に篝火白夜は住んでいる。

「これ、読みたいんだろ」

「あつ、はい……」

転寝鈴蘭は戦々恐々と、一冊の本を受け取った。小動物のように身をすくめながらも、小さな笑みを浮かべる。よほど読みたかったのだろう。転寝鈴蘭はその本を胸の前で抱きしめた。

「ああ、ありがとう、ございます……」

「どういたしましてって奴だよ」

そう言つと、転寝鈴蘭は呆気にとられたような顔をした。不思議そうに俺を眺める。珍妙な生物を見たかのように首を傾げた。

「……なんかおかしいか」

「いつ、いや、その……。なんでもない、です」と転寝鈴蘭は再度俯いた。それでも大事そうに本を抱える。前髪で表情を視認することとはできなかつた。

ただ。

転寝棗だけが、気味の悪い笑みを浮かべていた。

「なんだよ？」

「なんでもないっすよ」

何かあるだろ、とは思ったが、特に詮索はしなかつた。と。

「……これは一体、どういう状況なのですか」

佩刀歪のやけに低い声が聞こえたのは、その折のことである。

「けどまあ、立ち話しもなんスから、とりあえず、座りましょうよ」
転寝棗はなだめるような口調でそういった。

図書館は静寂に包まれていた。それも緊張感を伴う静寂だった。
盲滅法めくつほう静かだった。

「……そうですね」と歪は不承不承頷いた。その後、俺のほうに視線を投げかけた。

首肯すると、何とも言えない表情を作った。

「鈴蘭もいっスね？」

「……うん」

転寝鈴蘭は視線を下げた。取り残された迷子のように周章する。
第三者ならぬ、第四者の介入に戸惑っているらしい。それは転寝棗もそう思っているようだった。

俺と佩刀歪、そして転寝棗と転寝鈴蘭は、長テーブルに向かい合った。俺の隣には佩刀歪。向かい側には転寝姉妹といった図だった。テーブルの上には大量の本が積み重ねてあった、年代物なのか、すえたようなにおいがする。それは能楽や歌舞伎のような、日本芸能の書物だった。転寝鈴蘭の近くに置かれている辺り、どうやら転寝鈴蘭のものらしかった。

「転寝家は日本舞踊の名家です」と歪が小声でいった。

佩刀歪はやはり、転寝鈴蘭とも面識があるらしい。対人関係が苦手そうな転寝鈴蘭は、最初こそ困惑したものの、今は落ち着きを取り戻していた。

篝火白夜。

佩刀歪。

転寝棗。

転寝鈴蘭。

時計を盗み見れば、五時半を過ぎた頃だった。日も落ちかけている。図書館はオレンジ色にくすんでいた。

歪はいつも通り、無表情だった。ただそれは、いつてみれば能面のようなものだった。能面には筋肉の動きはない。けれど、陰影や見る角度によって表情が現出する。

そんな歪は開口一番、「最近よく会いますね」と転寝棗に向けていった。

「そうっすよねえ。よく会いますね、佩刀先輩にも篝火先輩にも」それは俺も思うところだった。よく、この子と会う。

転寝棗は軽薄な表情を張りつけていた。一年生だから俺よりも一個下。十五歳。そして転寝鈴蘭も十五歳くらいだろう。

対する転寝鈴蘭はというと、虚ろな瞳で卓上を凝眸していた。机には無数の原稿用紙があった。それには端麗な筆致で文字が綴られている。脇には筆記用具があった。

何かを書いていたのだろうか。

「白夜様はどうして、棗ちゃんと知り合ったのですか？ 私の知る限り、白夜様と棗ちゃんは初対面のはずなのですが」

「なんでそう思うんすか？ そうとも限らないと思いますけど」

「私は四六時中、白夜様に付き従っていますから、変だと思っただけです」

「……それって軽い惚気おぼけっすか？ 本当、仲がいいんすね、お二人とも」

「愛が深いだけですよ」

さらりという。真顔でいうから、なんだか怖い。

「確かおまえが来たの、昼休みだっただろ」と転寝棗を見て、「多分、歪は生徒会活動をしていたから、知らなかったんじゃないか」

と歪を見て、いった。

「……そうかもかもしれません。そういえば、最近は昼休みの活動が多いように思います。しかし、その、感心しませんね。私以外の女の子と会うのは」と歪は横目で睨んだ。むすつとしている。「できれば、私以外の人間との会話量を減らしてくれると助かります。その分、私が白夜様を独占できますから」

「……うわぁ」と小声で呻く。それは転寝鈴蘭の声だった。歪の発言に、異常なものを感じたのだろうか。若干、怯えている。

歪はそれに気づいてないのか、淡々とした口調で問うた。「それで、どういった経緯があるのですか？」

「……分かりました。そうですね」とある昼休みのことつスね。

鈴蘭にちよつと話したいことがあったんす。鈴蘭はここ毎日、図書館で演劇の原稿を書いてたんすよ」と転寝棗は、一旦話を切って、

「ああ、あらかじめ断わっておきますけど、こう見えて鈴蘭は演劇部っすから」といい、転寝鈴蘭のほうに視軸を合わせた。転寝鈴蘭は恥ずかしそうに体を縮こまらせた。

どうやら、テーブルにある原稿用紙は台本の草稿であるらしかった。「おまえ、脚本家だったのか？」

「はっ、はい……。そうですね」

俺への恐怖心はいまだ払拭しきれていないようだ。目を合わせようとしない。視線は常に下を向いている。

不快だとは思わない。別にいい。慣れる。

「けど遺憾なことに私、図書館の場所が分からなかつたんすよ。痛恨の極みっスね。それで学園内を東奔西走してたんすよ。先生に聞けばすぐに分かるんすけどね。けど私、バカですから、その考えを失念してたんす。で、走り回って、気がついたら中庭にいたんです。そのとき偶然いたのが 篝火先輩だった、というわけっス。篝火先輩の噂はかねがね拝聴してましたから、一発で先輩だと分かりました。金髪で釣り目で細身。悪魔のように凶暴で、手のつけられない悪漢。そう聞いてましたから。それでこれも何かの縁だ

と思って、声をかけたわけっス。というより、図書館の場所さえ聞ければ、誰でもよかつたんですけどね」

「そうだったのか。それでよく声、かけたな」と左側に視線を向ける。歪は難しそうな表情で、転寝棗と転寝鈴蘭のほうを凝視していた。

「そうして知り合ったわけですか？」

「知り合った、手ほど大層なものじゃないとは思っつスけど、それが始まりではあるようですね」

歪は不機嫌そうに唇を曲げた。それは普段の歪ではなかなか見られない表情だった。

目が合うと、「うう」と歪は変な声を上げた。獵師を前にして悲しく鳴く小鳥のよう。

「おまえは何か部活動をしてるのか？」と気になって、訊いてみる。

「してますよ。私は“天体観測部”っス」と転寝棗は答えた。「天体観測部は演劇部とは違って、適当っスからねえ。一週間に一回あるかないかっていうレベルっスから。それでも夜の屋上がい放題っていうのはいいっスね。お買い得っス」

脳内で綺麗な黒髪が再生される。

「白夜様。そろそろ行きましょう。あと少して図書館も閉まることですし」

「何時に閉館するんだ？」

「六時でございます」

「あと三十分もないな」といって、立ちあがる。「転寝たちも、出たほうがいいんじゃないか」

「私たちはもう少し粘るつもりっス。それと佩刀先輩」

いきなり自分の名を呼ばれたからか、歪は眉をひそめた。「なんですか、棗ちゃん？」

転寝棗はふいに淫靡な表情で、「二人はどこまでいったんスか？」と禁断の質問をやらかした。

歪のほうを見る。無表情ではあるが、わずかに口角が緩んでいるのが分かる。ずっと傍にいたためか、表情に乏しい歪の機微がなんとなく分かるようになっていた。

「それは」
と。

歪が何かをいいきる前に、その口を手で塞いだ。「バカか、おまえは」と耳元でいって、歪の体を引っ張る。先手を打った俺は、歪を強引に図書館からエスケープさせた。

図書館から出て、夕日が漏れる廊下まで逃げる。

歪は特に抵抗しなかった。おとなしく引きずられている。

それでも不満はあるのか、「何をされるのですか」と口を尖らせる。「別に隠すほどのものではないと思いますが。セックスもまだ未経験なのでし、したことといえば、舌を入れた接吻くらいでしょうに。それともあれでしょうか。したいのですか、白夜様？ 棗ちゃんさくの質問を聞いて、今すぐしたくなかったから、こんな人気のない廊下に私を誘ったのですか？ そうであるなら喜んで、して差し上げます」と首に手を回す。歪は卑猥な音を立てて、舌舐めずりをした。「バカか、おまえは」と再度、額を小突いた。

今日は土曜日の朝である。

いつものように蒲団の中にいる。睡眠時間は多いはずだが、依然として眠い。寝すぎて眠いという奴だろうか。

寝返りを打つ。窓からは啾々と虫や鳥が鳴いている。

今日も平和な朝だった。

平和はいい。このままの状態がずっと続く。それはすごくいいこと。考える必要がない。ただ。

長期的な平和は奇妙な変貌を遂げることがある。平和ボケ。停滞することに慣れてしまうと、変化に弱くなる。恐竜と同じだ。環境に対応できない奴は死んでいく。それが世の常。

もう一眠りしたい衝動にかられる。頭の中がぼんやりしてきて、睡魔がすぐ傍まで迫ってきた。

携帯電話が鳴ったのはその折のことである。

初期設定のままの、無機質な機械音。設定を変えるのが面倒で、買った当初から変えていない。

出るかどうか迷う。

出ることにする。「もしもし」

「汝が大陸随一の使い手か？ ならば我と拳を交えよ」

「……………」
「その様子だと怖気づいたのか。嘴の黄色い若造よ」

「……………」
「名高い誉も所詮は虚聞であつたか。口調法な童蒙である」

「……………梅雨利か」

「あつ、ばれた？ 私って演技下手なのかな」

「……………朝っぱらからホラ吹いてどうする」

「うわあ、非情。態度が非情だつてば、君。もうちょっとましな反

応してよ、もう。少しくらい構ってくれないじゃん。ただでさえ傷心気味なのにさあ、ぼっかりと心に穴が空いてるのにさあ、篝火は冷たいなあ。篝火なだけに、みたいな』

「うまくもねえ」

『む。ばつさり一刀両断。そういう素直さは買ってあげるけど、もう少しレディーを持ち上げるようにしてよ。切り捨てられるのが一番嫌なんだからさ。私は兎なのよ。寂しくなったら死んじゃうんだよ。私が自殺したらどう責任とるつもりなの？』

よく喋るな、と思う。口を衝いて言葉が出る。

それが悲しみの裏返しであることは分かる。空しくなったら無性に饒舌になるのは人の性だ。ただそれを差し引いても、梅雨利東子はやたらと喋る。

ある意味で佩刀歪とは対極をなす。佩刀歪は無口な俺に合わせてくれるから、駄弁を弄することはほとんどない。それでも口を開けば、整合性のある言葉が飛び出る。歪は賢いのだ。それを表に出さないだけ。それでも話しぶりから、聡明であることが窺える。無駄なことはないわいな。知識も豊富だ。と。

考えれば考えるほど、歪は完璧だった。欠点が皆無。神からの恩恵を全身で受けた、美の結晶のような人間なのだ。

一方の梅雨利東子は、前述のとおり、喋る。とりあえず喋り、のべつ幕なしに喋り、ひたすら喋る。しかし時々確信を衝くようなことをいったりもする。頭が良いのか悪いのか、悪いのか良いのか、よく分からない。

聡明な点や博識な点は歪と遜色ないが、そのベクトルが違う。容姿も整ってはいる。ただ、性格は面妖である。

気性もまた希少。こういうふざけたことを真面目に行える人種はそうそういない。人並みの弱さを持ってはいるものの、窮鼠猫を噛み殺す、といった人格破綻者だ。

「おまえは自殺する性質じゃないだろ」

『……私もそう思う。私が自ら命をたつたら、天地がひっくり返って、後方宙返りでも何でもして、地球は滅びるだろうね。うわあ、目が回るう、みたいな。それ以前に死んでるから、目を回す暇なんてないけど』

「それで何か用か」

『私と付き合いなさい』

「は？」

『だから、私と付き合いなさいよ』

……なんだそりゃ。

渋面を作る。梅雨利の言葉は奇妙な余韻を作った。

「……なんで」

『なんででもないの。私と付き合いなさいよ』

「付き合っつてその……どういう？」

沈黙。

梅雨利は完全に黙したと。

『ははははははははは！　もしかして篝火君、勘違いしてるんじゃないの？　付き合えっつていうのはそういうニュアンスじゃないから単に用事に付き合っつてことだよ。私が君にそんなこというわけないじゃん。それに、君には愛しの佩刀さんがいるでしょう？　縦しんば私がそんなことしたら、佩刀さんにぶっ殺されるってば、君あいかわらずちゃんぽらんな頭、してるねえ』

「……そうか」

『あわわわわわ、ごめんごめん。君を傷つけるつもりは毛頭ないから。そこんとこ誤解しないでね。まあ、君は確かに容姿は悪くないけど、私のタイプじゃないし、髪が金髪ってわりには顔、全然ワイルドな感じじゃないし、そもそも私、男に興味ないしい。　で、そういうことだから、明日の午後一時にバス停前集合ってことでよろしく！』

「っつて、おい！」

『それじゃあ、ばいばいきーん』

「……………」

電話はそこで切れる。

理不尽な奴だ、と思う。はあ、と溜息をついた。

最近、色々な人種と会う。四月に続き、五月もまた、ネジの緩んだ奴と出会ってばかりだった。

佩刀歪は勿論、転寝棗や転寝鈴蘭。梅雨利東子だって何かと面倒事を起こす。

再度溜息をつく。疲れるのは嫌いだ。

俺は蒲団から起き上がる。

「ちーす」

梅雨利東子が来るのと、バスが到着するのはほぼ同時刻だった。

五月だというのに、結構熱い。そのせいか梅雨利は半袖にジーパンとラフな格好だった。俺も似たようなもので、無地のＴシャツに同じくジーパンといった身なりだった。

白いリボンを揺らして、バス停のベンチに座る。梅雨利は大欠伸をした。

「バス、来てるぞ」

「分かってるよー、そんなこと」といって、寝る。梅雨利は昏々と寝入った。

「……………起きろよ」

「寝たいよー」

「バスの中で寝ろ」

「りょーかい」と梅雨利は千鳥足で立ち上がった。ふらふらと体が左右に揺れて不安定だった。そして、予想通り、路傍の石につまづいた。ちょうど俺のほうに向かって転倒したので、受け止めてやる。梅雨利はそのまま瞼を閉じた。

その姿に苦笑する。「寝てないだろ、おまえ」

「君に電話してからずっと、寝ずに起きてた」

「夜更かしは体に悪いぞ」

「禁じられたことは何でもしたい性質なの。ボーイズラブとか、近親相姦とか萌えだよな」

あまり意味が分からなかったので、曖昧に頷いておいた。

そうして有耶無耶にしたまま、乗車する。先に窓際に座ると、その隣に梅雨利が座った。

「どこに行くんだ？」

「商店街」

それも当然か、と思った。基本的にバスが停留する場所は日和見商店街か、深山の手前くらいしかない。わざわざ公共交通機関を使つてまで、場末の土地に行く道理もない。

コテンと肩に何かが当たる。それは梅雨利の右頬だった。どうやら寝ついてしまったらしい。

窓際に頬杖を突く。窓から見える光景は山気で充足していた。

三十分ほどして、バスがとまる。梅雨利の肩を揺さぶって、下車。「うーん、よく寝たなあ。やっぱり睡眠は重要だね」

あまりにも分かり切ったことをいうので、特に反応はしなかった。それが不満だったのか、梅雨利は怒気のコもった目を向けた。しかしすぐ柔和になる。梅雨利はコロコロと表情が変わるのだ。「かくして勇者一行の冒険は始まる」

「……なんだ、それ？」

「寝る間を惜しんでやったゲームの冒頭句。やたらと魔王が卑怯なのよ、あれ」

興味があるなら貸してあげてもいいよ。

といつてきたが、当然断る。そもそも我が家にゲーム機はない。なのでできない。

「ならゲーム機ごと貸してあげるけど」

「……いいのか？」

それならば梅雨利はゲームをプレイすることが出来なくなる。

しかしその心配は杞憂だったようで、「大丈夫。二つあるから」と梅雨利は自慢げにいうが、不意にしょぼくれた顔つきになった。

「けどあれだよ。一人で通信プレイやるってのも乙なもんだよね。心が荒みそうだよ。もう荒んでるから、その心配はしなくていいけど」

梅雨利は、「むー」とか、「いー」とか、変な鳴き声を上げて、虚空を睨んだ。周りの人は、奇異なものでも見るかのように、眉をひそめた。加えて、隣に俺がいるものだから、脱兎のごとく逃げていった。

「あー、今何か変なこと考えたでしょ！ こいつ、さびしい奴だな、青春してない奴だな、とか考えたでしょ！ そうよ、友達なんてほとんどいないのよ。そもそも友達なんているの？ 喜びに二倍、悲しみ半減なんて、バカじゃないの？ 友達がいて人生が豊かなものになるの？ ……なるに決まってるじゃない、もう！」

梅雨利は勝手に自己完結した。

「そんなことよりも早く行きましょう。そんなに長くはかからないから」

そんなことをいわれて連れてこられた場所は、見覚えのあるところだった。

薄暗い路地裏。よどんだ空気。湿気た壁。

「さて、今日はどんな掘り出し物があるかなあ」

そこは。

柚子原堂だった。

入店を躊躇していると、梅雨利は不思議そうな顔をした。「どう

したの？ 入らないの？」

「……遠慮する」

「分かった。怖いんでしょ？ 篝火君って意外にお化けとか苦手なタイプ？」

確かにお化けは苦手だ。けどここはもっと苦手だ。少なくともこの身ぶるいは武者振りなどではない。

「ふーん。まあいいか。なら外で待ってて。結構時間がかかるかもしれないけど」

小さく頷く。すると梅雨利は、俺を一瞥することなく店に入った。興味の対象は俺から柚子原堂に移ったらしい。

……怖いもの知らずか、あいつは。

過去に柚子原堂に入店したからこそ分かる。

この店は危ない。

それは虫の知らせでもあるし、第六感のようなものでもある。

いそいそと路地裏を出る。そうして遊歩道へと向かい、そこら辺の壁に背を預けた。右手をポケットに突っ込んで、無気力な瞳を前に向ける。

眼前では多くの店が軒を連ねていた。繁盛しているのか、客の往来が激しい。轟然と客引きの声が行きかっている。

その異変に気づいたのは、多分俺が初めてではない。

俺の立つ壁のはす向かいにある書店。その脇にある路地裏からくぐもった悲鳴がした。

何かが引きずり込まれていくのが見える。

それはロングスカートと長袖のワンピースを身に纏った、矮躯の少女だった。長めに切りそろえられたショートボブは乱れ、苦悶と恐怖の表情を浮かべている。

そして。

消えた。

周囲に視線を送る。数人氣付いているようだが、助けるような素振りはない。それに耐えがたい憤怒を覚える。

しかしながら、誰だって厄介事に巻き込まれるのは嫌だ。好きで首を突っ込むバカは、そうそういるものじゃない。大体の人は、他人のことを顧みずに、今を生活している。それはきつと、賢い生き方なのだろう。

それでも。

そんな思考が罷り通る社会はどこか間違っている。そして、人々はそれを悪だとは思わない。仕方のないことだと理解する。そんなのは正義じゃない。誰かを傷つける正義は正義とはいわない。そんな正義は掃き溜めにでも捨てておけばいい。自己保身ほくくならぬものはない。

舌打ちして、路地裏へと駆ける。

なんでこういうことになるんだ、と神か悪魔か、はたまたそれに類する万能な何かに問いかけながら。

狭隘な路地裏。壁が隣接しているせいか、日光は届かない。ただ何か蠢いているのが分かった。それも悪意に満ちた、獰猛な気配だった。

男が少女の口を塞いでいる。傍らには小さなバツク。中からビニール袋や財布が覗いている。しかし金品に構わず、男の一人が少女のワンピースに手をかけた。抵抗するも、別の男が拘束する。周囲の男たちはそれを卑下たる表情で見っていた。

目的は明白だった。

強姦か！

「やめろっ！」

男達は慌ててこちらのほうに視線を向ける。五人くらいだろうか。どいつもこいつもクズみてーな面をしていた。

「たっ、助けてくだ」

「黙れ」

男は少女の腹を殴った。背後にいるもう一人の男も、少女の背中を思いきり押した。その衝撃で少女は、地面に突っ伏す。意識はあるようで、必死に痛みと戦っていた。表情は恐怖からか、暗澹たるものをたたえている。

翩なびるという字は、女の両脇に男と書く。この状況はまさに字面通りで、見ているだけで吐き気がする。そんなことをして楽しいのか。人をいたぶって面白いのか。

なんとという。

陰湿な。

俺は男たちをねめつけた。こちら辺の不良たちだろう。髪の毛の色がやたらと派手だ。ピアスをつけている奴もいる。

対する男たちは、眉間にしわを寄せて、不快そうにいった。「誰だ、お前？」

答えない。

男達は不愉快そうに頬を歪めた。険のこもった視線を俺にくれる。暫時して、不良たちは口々にわめいた。

「あーあ、何してくれてるんだよ」

「よくも邪魔してくれたなあ、俺たちの楽しみを台無しにしやがって」

「死ねよ、クズ野郎」

「ヒーロー気取りのバカが。調子乗ってっと、痛い目見るぞ」

男たちは唇を釣り上げて嘲笑した。各々俺を罵って、嘲って、諷って、優越感に満ちた表情を浮かべる。

「それでおまえ、何するわけ？俺たちをどうするつもりなの？」

「そうまでしてこのヤリマンを助けたいわけ？女なんてなあ、男のいうとおりにしときゃいいんだよ」

「それともあれか？こいつ、おまえの彼女か？そろいもそろってスペックが低いんだよ、バーカ」

「このクズ女が、さっき、俺に爪、たてやがったぞ。殺してやる」

「救いようがねーな」。こいつもおまえも。頭ん中スカスカの、ア
「ホ」

少女はぶるぶると身を震わせている。理不尽な暴力、暴言を受けて、心が折れている。当然だ。女の子がこんな卑劣な手に耐えられるはずがない。恐怖で身がすくむに決まってる。蹂躪されそうになっ
たんだ。当たり前前の反応だ。

救いようがないのはおまえらだよ。

一歩、前に出る。

「おまえら」

「あん？」

「骨も残らないと思え」

バキ。ゴキ。バキバキ。グチュグチュ、グシャツ、ゴフグフ、又

チユ、ウング。ゴチャ、キチャグチユ。

辺りは阿鼻叫喚の様相を呈していた。

軽く見積もつても、五、六本くらいは、骨が折れているだろう。

世直し活動をした俺は、心の中に嫌なもやもやを抱えながらも、少女のもとへ歩み寄った。

くだらない。

本当にくだらない。

男たちを壊している最中に、そんなことを思った。俺のやっている行為は、本当にくだらない。ただの腹いせ。男たち同様、暴力の行使と何ら変わりがない。

愚拳だ。浅慮で、短慮で、何も生まない。

暴力は何も生まない。

それでも、篝火白夜は男たちに制裁を加えた。くだらないと分かっているながらも、何も生まないと分かっているながらも、暴力の限りを尽くした。

篝火白夜個人に、正義という錦の御旗は、多分、ない。悪を糾弾したいから、悪を是正したいから、暴力を加えたわけではない。

ただ、許せなかった。バカの一つ覚えに、よってたかって女を犯そうとするのが許せなかっただけ。軽い気持ちで人の人生ぶっ壊すゲスな心意気が許せなかっただけ。

そういう俺とて、連中と相違ない。なんであれ、暴力は許される行為ではない。

そうであっても。

そうであっても。

批判や鬨聲を買っても、別に構わない。自分の意志を曲げてまで、世間に迎合したくない。自分の行いにいちいち後悔するほど、俺の頭は賢くない。後から振り返ってみて、あんなことしなけりゃよかった、とも思わない。

だから、こんなバカげた考えを持っているのかもしれない。

だから、平気の平左で他人に暴力をふるうのかもしれない。

なるべく威嚇しないように、ゆっくりと進む。俺は少女の少し手前でしゃがんだ。

「大丈夫だ。あいつらはもう、動けない」

「……………」

黒髪の少女　　転寝鈴蘭は、がくがくと体を痙攣させていた。足
の先から頭のとっぺんまで、至るところが震えている。

俺の声に反応しない。転寝鈴蘭は突っ伏したまま、頭を抱え込んだ。眼鏡から見える瞳孔は大きく見開いていた。

なんだか異常な状態だった。

……………無理もないか。

俺は転寝鈴蘭の肩に手を乗せようとしたが、やめた。今、この子
にとって、男は遍く敵のはずだった。この段階では、強姦しよう
とした男たちも、その男たちを暴力で駆逐した俺も、それほど変わら
ない。むしろ、俺のほうがか心証が悪いのかもしれない。圧倒的とも
いえる暴力は、見るものの心に多大な澱を落とす。

「バックの中見、拾おうか？」と提案。少女の私物は、汚い地面の
上に散乱していた。

誠に勝手ながら、辺りは血の海とかしている。当然、少女の私物
も、生々しい血痕が付着していた。なので、跡を残さないためにも、
早く拭う必要がある。

事の発端は俺でもあるのだから、せめてこれくらいはしないと、
示しがない。誰か、考えなしの自分を思いきり殴ってほしい。

少女はかすれた声を出した。多分、「はい」といつているのだろ

う。数センチほど、首を上下に動かしている。

本当にいいのか、と再度確認して、もう一度許可をもらって、散らばった財布やらを拾った。少し躊躇うも、バックに入れる。その際に、ポケットからハンカチを出して、それらを丁寧に拭いた。なんか、色々な部分で申し訳がない。男のハンカチで拭くなんて、絶対に嫌だろう。無神経で無調法、つくづく俺はバカだと思う。

書店で買ったのだろうか。ブックカバーのついた文庫本がある。律義な奴なのか、生徒手帳まであった。それらの血を拭いてから、バックの中に押し込む。

それを少女の近くに置く。少女が怖がらないくらいのギリギリの位置に。

それからもう一度、「大丈夫か？」と声をかけた。

少女は悲愴な顔つきをした。そして、痛々しいくらいに表情を歪め、無理に笑った。そうして小さく謝った。ごめんなさい、と恐怖を押し殺した声でそういつてくれた。

優しい子だと思う。こんな状況になっても、他人のことを気遣える。心の温かい子。それはとてもすごいことで、柄になく嬉しくなる。

「……何やってんの？」
と。

後ろから声が聞こえる。

こつべを回らす。

声の主は梅雨利東子だった。

梅雨利は初めきよんとしていたが、うずくまる少女と、気絶した男たちを見て、全てを悟ったらしい。ビニール袋らしきものを投げ捨て、急ぎ足で少女の足元に駆け寄った。「君、怪我はない？

どこか具合でも悪いの？ 体調がすぐれないならすぐに病院に行かないと。

篝火君！

俺は手招きをした。梅雨利の耳元で、事の顛末を伝える。こういうことは本人の耳に入れるべきではないと、そう思ったからだ。不

用意にこれまでの状況を再確認しては、いらぬ恐怖を思い起こさせることになる。

「……分かった。とりあえずここから離れましょう。君、立てる？」
転寝鈴蘭はこくと頷いた。

梅雨利の補助付きで立ち上がる。その際眼鏡が下に落ちようとするが、落ちる前に梅雨利がものすごい反射神経でそれを拾った。その眼鏡を持ち主に返す。

転寝鈴蘭は戸惑ったような、嬉しいような表情をして、手を差し出した。ただ手を出す方向が微妙に違う。梅雨利東子との距離は極めて近いはずなのだが。

……弱視なのか。

それも当然か。眼鏡を着用しているということは、大なり小なり目が悪いのだ。しかしどうやら、転寝鈴蘭の場合、弱視の度合いが顕著のようだった。

転寝鈴蘭は手探りのようにして、梅雨利の手に触れた。梅雨利は小さく笑って、眼鏡を持ち主につけてやった。

……意外といいところ、あるじゃないか。

俺の中の梅雨利東子の株が、一気に上昇した一瞬だった。今まで型に囚われない変人から、いざという時に人を慮れる変人へと昇格する。梅雨利の顔には、静々とした優しさが浮かんでいる。

その際に、転寝鈴蘭の腕が見えた。

傷？

少女の腕には切り傷というか、奇妙な傷があった。それはなぜか縄のように少女の腕に創痕を残している。それもナイフで抉ったように深かった。黒ずんでいる。

それはワンピースの袖で隠された。

……打撲傷、じゃないよな。

打ち傷でもない。

ならなんの傷なのだろう？

古傷、というわけでもなさそうだ。やけに生々しい。最近おつた

ものだ。

そもそもこんなに暑いのに、どうしてかあの子は長袖だった。勿論、服装なんていうのは個人の嗜好だ。だから格別変だとは思わない。それでも、違和感があった。

転寝鈴蘭と梅雨利の姿が見えなくなる。表通りに出たのだろう。俺は梅雨利の落としたビニール袋を拾って、路地裏から脱出した。

転寝鈴蘭を病院へと送った俺と梅雨利は、日和見病院にいた。

幸い転寝鈴蘭は軽傷で、それほどの傷ではないようである。ただ、心の傷は相当なものだと聞いている。

私物のバックには、生徒手帳があったので、家族に連絡をつけることができた。連絡すると、鈴蘭の母だと名乗る女性と、転寝棗が到着した。

転寝棗は顔面蒼白で、俺や梅雨利に泣きついてきた。大丈夫だと何回いつても、不安はぬぐえないらしい。俺たちは母親と転寝棗に詰め寄られた。

しどろもどろになりながらも、二人に事の経緯を説明する。時折梅雨利の合いの手もあり、話はスムーズに進んだ。

その後母親とその娘は医師に呼ばれ、その場を中座した。気がつけば夕刻だった。

待合室で、ひたすらに落ち込んでいた。

病院は嫌いだ。消毒液のにおいも嫌いだ。何より嫌いなのは、病院特有の死のにおいだ。それは、妖気に似ている。

病院はいつ誰かが死んでもおかしくないという、非現実的な空間

である。だからか、一度入ったら死体でしか出られない、といった妄想が、頭の中にある。

本来ならば、ここにいる必要はない。転寝鈴蘭を病院に連れていったし、家族にも連絡した。これ以上ここに留まる必要はない。それでも。

気になる。やっぱり気になる。

それは梅雨利も同じなのか、沈痛な面持ちで虚空を睨んでいる。同じ女として、含むところがあるのだろうか。だとしたら、その、立つ瀬がない。

「……篝火君」と隣に座っていた梅雨利がいった。

「なんだ」

梅雨利は愁容を浮かべていた。「いや、その……なんだろうね。

ごめん。なんでもないや」

梅雨利にしては歯切れが悪い。言葉にしにくい感情なのだろうか。重苦しい沈黙が流れる。

「先輩。……いいつスか？」

前方で転寝棗の声がした。沈んだ口調だった。

「その、どうだ？」

「はい……。先輩たちがいてくれたおかげで、大事にはいたってないようです。その節はありがとうございます」

「礼なんていらさない。そんなもんいらさないから、元気出せよ」

「そうつスか。その、はい。元気、出しますね」

「篝火君のいうとおり。君も私たちなんかには構わないで、妹さんのほうに力を注いで上げて」

転寝棗は感極まったといった表情で、深々とこうべを垂れた。

気恥ずかしいのか、梅雨利は誤魔化し笑いを浮かべた。「そ、それよりも、鈴蘭さんのご容態のほうは？ 軽傷って聞いてるんだけど」

「そうつスねえ。確かに体の傷は大したことないんすけど……。ちよつと精神的に参っちゃったみたいで。今、精神科医のお医者様が

診断しているとこっス」

「そっか……」

梅雨利は口を噤んだ。

「もう遅いですし、先輩たちはお帰りになったほうがいいんじゃないスか？ これ以上待ってもらうのも忍びないですし」といって、ポケットからお金を取り出した。「お母さんから先輩たちのバス賃を預かってるっス。色々迷惑かけてすみません。お二人は本当にいい人っス」

「そんな……。受け取れないよ、そんな大金」

転寝棗が差しだしたものは、はつきりいえば、札束だった。とてもバス賃なんてものではない。

「いいっスから、受け取ってください。薄謝ながら、せめてもの気持ちっス。先輩たちには感謝しきれないほど感謝してるんスから」と強引に札束を持たせる。「お母さんはお医者様の説明を受けていますから、代わりに私がお見送りするっス」

転寝棗は着席を促した。そのまま待合室を出て、正面玄関を出る。外の空気はひんやりとしていた。暑さは鳴りを潜め、冷風が吹いている。それが植樹された木々の葉を揺らした。

「ここまででいいよ」と梅雨利がいうと、転寝棗は不服そうな表情をした。「もう少し先まで送ります」

すると梅雨利はこころ辺でいいって、と断り、今度は転寝棗が、もう少しだけっスよ、とせがむ。そうすると梅雨利がまた申し出を断り、再度転寝棗が申し入れる。そうしたやり取りは循環していき、さながら禅問答の様相を呈していた。

二人の様子を横目で眺める。相変わらずの問答が飽きもせずに行っている。

病院から遠くなっていく。

「こころ辺まででいいんじゃないか」

「うえっ、いつの間にかここまで来ちゃったっス！ 誰か、ワープでも使えるんスか？」と転寝棗は周囲を見渡した。そして静かに溜

息をつく。「そろそろお別れっスね。早く鈴蘭のところに行かないと……。しっかりと看病してやるっス！」

転寝棗の双眸に強い意志の火が灯った。それは慈愛や優しさに溢れていた。

ああ、と思う。この子は強い子だ。それはとてもいいことなのだ。転寝棗の頭に手を置く。そして、軽く撫でた。

「ふえ？」と間拔けた声。転寝棗は不思議そうに上目遣いを向けた。構わず頭を撫でる。転寝棗はくすぐったそうにした。「なっ、何するんスカ」

「おまえ、いい奴だな」

「そ、そうっスカ？」

「ああ。おまえみたいな奴は好きだよ」

自然と笑みがこぼれる。大切な人がいて、その人を愛することができる。なんて幸せで尊いことだろう。

転寝棗は少し顔を赤くした。「もう、なんスカ。変なこといわないでください。かかか、勘違いしちゃうじゃないスカ」

「篝火君もいうねえ。私、惚れちゃう。いや、分かったよ。君、最近美人な彼女ができたから、調子に乗ってるでしょ。そんな恥ずかしいセリフ、こっちが恥ずかしくなるって」と苦笑とも失笑ともつかぬ笑みを浮かべる。「それと棗さん。篝火君はどうでもいいとして、あの子のことよろしくね。鈴蘭さんをケアしてあげれるのは、君だけだと思うから」

「鈴蘭のことスカ？ 任せてくださいっス！」と勇ましくいつて、

「だって私と鈴蘭は 家族なんスカ」と事の葉を結んだ。

家族。

なんてことない。この子はただ、自分の妹が心配なだけ。実妹の身を案じ、心を想い、気にかけている。大切なものが壊れないように、必死に守り抜こうとしている。

憧憬を覚える。幼いころから家族愛が欠乏していたからだろうか。家族と死別した喪失感が作用しているのか、世間の荒波に負けたか

らなのか、それとも自分にはないものを持っている眼前の少女が羨ましいからなのか。

他人を羨むということは、自らを貶めておとしいるのと同義だ。自分から天秤の均衡を崩しているだけ。自分を見失い、真理を見過こし、世界を見誤り、全部を見落とす。

盲目で聾ろう啞あ。目も見えず、耳も聞こえず、物もいえず、何もできない、愚か者。

だからだろうか。

醜いものは光に集まる。美しいものに群がり、清らかなものに集い、自らの存在を肯定する。綺麗なもの、秀麗なものに身を寄せ、間接的に自分の存在価値を高める。

代替行為だ。己の欠点、欠陥を誰かに埋めてもらっているだけに過ぎない。勝手に拡大解釈して、勝手に自らの無能加減に気づいて勝手に我が身を焦がす。

度しがたい、なんて思う。篝火白夜の生き方はあまりにも滑稽だった。

度を越した理想を持つことは、それ自体が不幸を呼ぶと、前に梅雨利がいつていた。行き過ぎた技術や知識は、時として破滅を生む俺とて、いまだに進化と退化の区別はつかない。どちらにしたって、何かが変わるということだ。変わるということは、すなわち、嫌なことだ。どういう風に変わるのかなんて、どうでもいい。とにかく、変わるのが、嫌だ。

走る音がした。

拙い呼吸音。嗶かれた声。準じて、走ってくる誰かの輪郭が浮き彫りになる。

それは。

「 鈴蘭！」

病院にいるはずの、転寝鈴蘭だった。

必死に駆けてくる。荒い息を肩で整え、膝に手を置く。頬は赤く上気していて、息切れを起こしていた。

「だっ、ダメっスよ、走ったりしたら！ 鈴蘭は怪我してるんスカら、安静にしてないといけないじゃないっスカ！」と怒ったようにいう。それでも妹の背中を優しくさする辺り、心配なのだろう。転寝糞は思い悩むような表情をしていた。

ある程度心拍数が落ち着いたのか、転寝鈴蘭は膝に手をつくのをやめた。決意のこもった目を俺に向ける。伏し目がちだった双眸は、凜々しく泰然としたものになっていた。

少し。

たじろぐ。

こういう目をした奴は苦手だった。不純物のない虹彩。澄み切った眼球。可否なく全てを検出させる網膜。それは鴻鵠こうくの志を汲むような、明鏡止水を体現した瞳だった。

「お姉ちゃん。この人が」

「そうっス。この人が鈴蘭を助けてくれたんスよ。ですよね、篝火先輩？」

曖昧に頷く。

それどころではなかった。

そいつの性格や性質は、目を見れば大体分かったりする。目は心の窓、という名言はあながち嘘ではない。まさにその通り。目は心そのもの。目でそいつの本質を読みとることができる。

過去に色々な人間の目を見てきた。

煌々と光る目。

凜々と輝く目。

競々と泳ぐ目。

陰々と沈む目。

翼々と倦む目。

篝火白夜の短い人生の中で、鷄群の一鶴いっかくたる目を持つ奴は三人ほどいた。

一人目は 名伽狭霧。

二人目は 佩刀歪。

三人目は かがりびけんさく 篝火建築。

名伽狭霧は異質な存在だった。いかなるものにも通曉して、あらゆるものに造詣が深い。どれもがどれも得手で、何から何まで完璧。性格も恐ろしくらいに真面目で、鋭い眼識も持ち合わせていた。それでいて容姿も明眸皓齒なのだから、始末におえない。

佩刀歪もまた、特異な人間だった。名は体を表すとはいったもので、人としての根幹が歪んでいた。一見すれば、博識な常識人なのに、たちどころに狂っている。否。そういう点も含めて、佩刀歪はデタラメな佳人だった。

篝火建築は、俺の父に当たる人だ。すなわち 連続轢殺犯その人である。父が人を轢き殺す時の目は、今も忘れない。無邪気な愉悦と快感に充ち満ちた、あどけない瞳。禁忌的な欣喜きんきを無意識のうちに許容する、幼稚でいて老獪な頭。そこに理由や動機は立ち入らない。父にとって、人が死ぬということはその程度の意味しか持たない。そんな面倒なことはどうでもいいのだ。父は人を殺すことができる、それで十分なのだから。

もつとも。

今は刑死してこの世にはいない。それでも、篝火建築の存在は、俺にとって多大な影響力を持つものだった。

血縁関係にあることも要因の一つだが、それ以上に篝火建築は篝火白夜の人格形成に大きく関わった人間だ。俺の性格がどこかおかしいのも、父のせいかもしれない。猟奇殺人を起こした奴なのだから、それは当然なのかも知れない。そういつた血は遺伝するのも分らない。だとしたら、今すぐ体中の血を献血に回したい。

他にもバカみたいに狂ってる奴は結構いた。

食人嗜好の練絹玉梓も異常だった。

また、梅雨利東子に限っては、論じなくてもいいような気がする。そもそも梅雨利にとって、他人の評価など歯牙にもかけない。我が道を行く。梅雨利東子は日常を謳歌する、普通の異常者だ。

転寝鈴蘭は何かを訴えるような表情を作った。ひどく悲しげで、どこか物寂しい。それでいて、頬には朱が混じっている。

……走ったからなのか。

瞬き一回分の空白。不意に梅雨利は背中を向けた。「先、行つとくね」

「……は？」とほつけた声を出す。それくらい梅雨利の言動は予想外だった。

「もう、察しなさいよ。君、呆れるくらいバカだよ。私、君みたいな奴、嫌いだよ。さっさと死んだほうが世のため人のため、だよ」「それは」と自嘲気味に切って、「それはおまえにとって、俺がどうでもいい存在だからだろうな」といった。

「……へえ。自覚はあるんだ。アホなりに頭、しっかり使ってるねえ」と肩越しにいつて、悠然と歩いていった。

にしても。

何を察しると？

「お姉ちゃん」

「ん？ 何？」

「席、はずしてほしい」

転寝棗は、遠ざかる梅雨利の背中を瞥見し、わずかに黙考。一転、花開いたようにすっきりとした表情をした。「分かったっす！ 先に病院に戻っておくから、早く帰るんすよ」
そういつて。

転寝棗もまた。

背中を向ける。そのまま通ってきた道を逆走した。

……なんだ、あいつら？

名状しがたい。あいつらの意図はなんだ？

転寝鈴蘭のほうを見る。目が合つと、転寝鈴蘭は座りませんかと提案して、低いレンガブロックを指差した。

ここに座れ、ということなのか。

転寝鈴蘭は行儀よく座った。体を横にずらし、スペースを確保。上目遣いを向ける。

肌寒い。

五月なのにやたらと寒い。冷気の混じった風は、身を切るようだった。

周囲を見渡す。そうしていると、文明の利器が網膜に映った。

「おまえ、コーヒーとお茶、どっちが好きだ？」

「……はい？」と驚いたような表情をする。「あつ、えつ、その…

…お茶のほうが、好き、です……」

「そうか」といって、走りだす。

数分後。

自販機で買ったお茶を、転寝鈴蘭に手渡す。転寝鈴蘭は初め固辞したが、無理やり渡した。

横に座る。俺は自分用を買ってきたコーヒーのプルトップに手をかけた。表裏をなすように、転寝鈴蘭もお茶のプルトップを掴む。

どうやら、タイミングを図っていたようだった。

「その、ありがとうございます……」

「これくらい普通だろ」

転寝鈴蘭は頬を緩めた。「後でお金、返しますね」

「金はいい」

「……いいんですか？」

「釣りは受け取らない性質なんだ」というと、転寝鈴蘭は例の困ったような、嬉しいような表情をした。

「……でも、その、お金、ですし。返さなくちゃ、だし」
頑固だった。

別にお金は、どうでもいい。そんなに義理立ててもらふ必要もない。

それならば、と思い、「おまえ。読書、好きか？」と尋ねる。

「……読書？ 読書ですか？」と小首をひねる。これだけ風貌と言動が遊離しているのだ。少なくとも金髪男が口にするには、あまりにも不釣り合いな言葉である。「一応、好き、ですよ。けど、その、なんで？」

「面白い本を探してるんだ。前に一冊借りたんだが、もう読んだ。何かないか？」

ますます奇妙に思ったのだろう。珍獣でも見るような表情をしている。「はあ。面白い本ですか……。その、ジャンルは？」

「問わない。怪談でもミステリーでも古典でも、なんでもいい」「古典なら……。私、結構詳しいですよ」

転寝鈴蘭と初めて会った時を思い出す。そのとき長テーブルには大量の日本舞踊の書物があった。能楽や歌舞伎などの古めかしい本脇には神道関連の本や、仏教や修験道しゅげんどうの類まであった。

どうやら転寝鈴蘭は国学が趣味らしかった。日和見村の風土故か、やたらと国学者然とした奴が多い。

「例えば？」

「篝火さんは伊勢物語をご存知ですか？」

「ああ、から衣 きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる たびをしてぞ思ふ」という奴か？」

「……なんか印象とは違いますね」と嘆息のような、驚嘆のような声を上げる。「見た目ほど無学 でもないです。話に聞いていたのとは全然違う」

悪評のことだろう。

転寝鈴蘭は前回とはうって変わって、偏見のなさそうな目を向けた。やや体が強張ってはいるものの、目に恐れの色はない。

「そんなにおかしかったか？」と試してみる。すると転寝鈴蘭は慌てたように両手を顔の前で振った。すみませんいすぎましたそんなつもりは毛頭なくて、と謝意を表す。どうやら怒っていると思われたらしかった。

「いや、その……変わった人だなんて。 あ、いえ、そういう意味じゃなくて」

「いい。分かってる」

「……はい」と顔を伏せた。しょんぼりとしている。

……そんなにおかしかったらどうか。

伊勢物語は過去に、歪から膳本とうほんを借りたことがあった。結論からいえば読破はできていない。ただある程度の内容は頭に入っている。先ほどの和歌もそのときに覚えたものだった。

「金の代わりだ。何か面白い本を貸してくれたら、なんてな」

転寝鈴蘭はゆっくりと顔を上げた。「ああ、そういうことですか。分かりました。秀逸なものを揃えておきますね」

転寝鈴蘭はしきりに古典について話し続けた。寡黙な奴かと思っていたが、話しだすと止まらない性質らしい。素直に傾聴すると、それなりに興味深かった。やはり博識な奴と話す楽しい。俺も薄っぺらい知識を総動員して、話についていった。幸い、こういった話は歪から聞いたことがあるものだった。そのおかげか、転寝鈴蘭の趣意は大体理解できた。

空は暗い。

気がつけば、結構話し込んでいたらしい。辺りは薄暮だった。

「すっかり暗くなっちゃいましたね。時の流れなんて、あつという間です。それだけ楽しかったのだと思いますし、篝火さんも博学だから、私が口下手なのにもかかわらず、私のいいことも察してくれましたし」

「最近、この手の話をよくするんだよ。それでも、かなり話し込んだ」

「その、私もです。お姉ちゃん以外の人とこんなに話せた人は、篝火さんを入れて二人目くらいです」と再度、頭を下げた。綺麗な黒髪がバサバサと、鳥が羽ばたくような音を上げる。眼鏡から見える瞳は、どこか折れてしまいそうな儚さをたたえていた。

「そうか」

転寝鈴蘭は視線を下に落としたまま、「変ですよ、私」と呟いた。

「……変？」

転寝鈴蘭は迷うような素振りを見せる。長い睫毛を伏せ、優艶な唇を曲げる。そして、憂うように仰視した。

「……やがて。」

何かを決心したらしく、転寝鈴蘭は口を開いた。

「変だと思いませんか？ 本ばかり読んで、不健康だと思いませんか？ 本ばかり読むから友達もほとんどいないですし、性格もお姉ちゃんみたいに明るくないです。こうやって男の人と話したのも

すごく久しぶりです。私って寂しい人ですよ。つまらない人ですよ。なんか、不意に、そう、思いました」

「……………」

「毎日が無駄だなんていつも思います。本を読んでも。そんな本を読んで楽しいの。っていわれたこともあります。楽しいことは楽しいし、充実してるな、とも思います。けど、どこか空虚に思います。こんなことで人生を無駄遣いするのかな、なんて気がつけば考えています」

まじまじと見る。表情は前髪に隠れていて、見えない。

「本を読むことで、知識はつきます。けど、それだけだったら、社会は生きていけないです。やっぱりそれなりに外に出て、友達と遊んで、日々を楽しまないといけないです。けど、休日は、私……。ずっと家に閉じこもって本を読むか、市立図書館に行つて本を読むかのどちらかです。本。本本。本ばかりです。だから遊び友達も気の合う友達もあまりできないです。男の子も苦手だから、余計にできないです。みんないうんです。おまえは根暗だから、本しか読まないのか、本しか友達がいらないのか。って。私、嫌いです。こんなつまらない自分が大嫌いです。 篝火さん」

と。
転寝鈴蘭は口を閉じた。

たつぷりと間が空く。

「いや、すみません。なんでもないです。さっきのこと、忘れてください。なんか私、勘違いしちゃったみたいなんです。私を助けてくれた篝火さんに親近感なんか感じちゃって、一匹狼の篝火さんに同族意識を覚えて、私のことを気にかけてくれるのが嬉しくて、お茶がものすごくおいしく思えて、その、錯覚しちゃって……。けど、ダメですよ。孤独な者同士、仲良くしようなんて、思っちゃいけませんよね。篝火さんには佩刀さんや梅雨利さんみたいな素敵な人もいます。それにお姉ちゃんもいますし、私みたいなダメ女が入っている隙間なんて、ないですよ。私、男の子に免疫ないから、ちよつとも優しくしてもらえると、ころつといつちやうんだと思います。私、弱いから、友達いないから、さびしいから、その……。ごめんなさい。ただの独り言です」

転寝鈴蘭はブロックから立ちあがった。病院の方角に足を向ける。小さく一礼して、振り向きもせず歩きだした。

その後ろ姿をぼんやりと見る。その背中は寂寥感に溢れていて、愁いすら帯びているものだった。

「……待てよ」

ピタリ、と足が止まる。少女の体はわずかに震えていた。

「俺でよければ、話し相手くらいにはなるぞ。だから、そんな悲しいことというな。他人の目なんて、気にするな。他人のくだらねえ価値観なんかには惑わされるな」

手足が力む。固く拳が握られている。ギギイ、と軋む。

「共同体は価値観の共有を強制する。それに漏れた奴は、排除される。そんなのいかれた共産主義だ。あらかじめ存在する価値を分配するだけして、何も創造しない。誰かの摘発にびくびくして、身の保身を考えてるだけなんだ。おまえはただ 寂しいだけなのに。悲しいだけなのに、そんな吐き気のする考えに押し潰されてるだけなんだ」

過去の記憶が奔流のように、押し寄せる。トラウマになった遠い

残像が、よみがえる。それは、不快な感情とともに現像されていく。大人の意見正しいものとして、過大評価しているだけ。少数意見を圧迫していることにも気付かない。ただ、自分が安泰であることに優越感を覚えるだけ。

それは、無意識に虫を踏みつぶすのと、よく似ている。

「自分を嫌いになるな。でないと、自分くらい、自分で好きになつてあげないと、自分がかわいそうに思えてくるだろ。まず、自分を好きになってやれよ。けど。けど、それでも自分が嫌になったときは、俺がおまえを好きになってやるから。もうダメだと思つたら、いつでも頼つていいから。俺でもいいし、姉ちゃんにでも泣きついてもいい。だから、そんな悲しいこと、いわないで、ほしい」
転寝鈴蘭は走つていった。目頭を押さえて、ひたすらに疾走していった。

雨は降っていない。なのに、舗装された道路には小規模の水溜りがあった。

……何をいつてるんだらう、俺は。

ふつと脱力して、そこら辺の壁にもたれかかった。

しょせん自己弁護か。

誰が自分を好きになるのか。

俺が自分を好きにならないと、どうしようもない。でないと、篝火白夜を愛する者はいなくなる。地球上で篝火白夜を理解しようとする奴はいなくなる。

篝火白夜は創造は勿論、分配すらしない。何もやらない。拱手傍観を貫く。そうして自堕落になつていく。

よく友達が多いことを自慢する奴がいる。自分のコミュニケーション能力を鼻にかけた奴らだ。自分はこんなに友達がいるんだぞ、と豪語する。反面おまえはどうだ、とも問いかける。なんだ、全然友達がいないじゃないか、つまらない奴だな　ともいわれる。そうして自分に酔う。自分は周囲に認められていると、選民意識に陶酔する。

エゴだ。他人の椅子を奪って、自分の椅子に作り替えているだけ。必死に自らの居場所を作って、自分の存在価値を確保する。他人なんて勝手知るところ。一方では友達面して、一方では冷たく突き放す。そうすることで、自らの地盤を堅固なものにする。

くだらない、とは思わない。それも生き方の一つだ。俺も小さい頃、そんなバカげた生き方をしていた。けれど、どんなに媚びへつらったところで、真の友好関係なんか、築けやしない。自己の欠陥を補えるはずもない。

けど。

あいつは違う。転寝鈴蘭は違う。あいつは自分という確固たるものを持っている。きちんとした個を所有している。ただ、自信がないだけだ。その不安さえ取り除けば、転寝鈴蘭はかっこいい奴になれる。そういう素質を、あの子は持っている。

携帯は振動している。どうやらメールが来たらしく、梅雨利からだった。

それを無視して、バス停まで一人で歩いていった。

転寝鈴蘭はなんで病院を出たのだろうか、と思う。礼をいいに来たのだろうか。それとも別の理由があったのか。

今となつては分からない。

それと梅雨利と転寝棗の行動も同じで、いまだに真意が読み取れない。

梅雨利のメールはバスの中で見た。中身は先に帰るね、といったものだった。バス停にはすでに梅雨利の姿はなかったから、予想はできた。だからか、さほど驚きはしなかった。

バスから降車した俺は、しばらくベンチに座ってぼーっとしていた。それで十分間くらい使った。

宵闇は凜冽とおりている。

田畑は茫漠と広がっている。俺は耕作地に沿うように歩いた。

虫の蠕動する音や、木々のざわめく音が聞こえる。菖蒲あやめや杜若かきつばたが清楚にそよいだ。

空気は虚ろ。

頭上では月がさめざめと煌めいている。それと相克するように、道の橋に篝火が焚き上がっていた。

虫送りだろうか。

夜に篝火を焚いて、寄ってくる虫を駆除するのだ。またその際、一切の光を灯してはならない。虫が篝火の一点に集中して集まるようにするためだ。

そのせいか、月光と篝火以外に光源はない。

否。

消し忘れていたのか、誘蛾灯が何本か灯っている。

月の帳と火の粉。そして、誘蛾灯の焰はが夜を見事に彩っている。風は地面を滑空する。それがざわざわと草木を揺らした。

誘蛾灯には蛾が群がっている。

灼々と揺らめく火。倏々と飛ぶ羽虫。

光に近づきすぎた蛾は、灼熱に我が身を焦がした。

そして。

墜落した。

「憐れなものね。憐れ憐れ憐れ。なんて憐れな生き物なのかしら」

弱いことへの憐憫。

醜いことへの同情。

儂いことへの哀惜。

夜色の少女は溜息を漏らした。

満月。

月の光が暗黒を照らした。

寂々たる静謐。

少女は視線を下に移した。

妖しげな誘蛾灯の光に照らされ、蛾だったものがもがいている。

空を飛び立つはずだった羽は焼け、子を宿すはずだった腹を無くし、神から賜った体を失い、その命の灯火は消えかかる寸前だった。

それでも。

全てを失うはずだった蛾は、篝火のほうへと触覚を向けた。光を察知した触覚は淫猥に蠢き、ゆっくりとだが、痛んだ体を前進させた。

そして。

もうひとつ。

蠢動する。

何か。

それは黒蟻だった。

蛾同様に触覚を動かし、獲物の気配を推し量る。大群をなした蟻たちは、洪水のごとく、瀕死の蛾に押し寄せた。

羽交い絞め。

蛾の体を貪る。

地を這う蟻にすら、己の体を食われる。
それでも。

「愚かだわ。己が肉体を犠牲にしてまで、暗闇の中に光を求めるのかしら」

蛾は篝火に向かおうとしていた。

節々の肉は蟻に蹂躪されている。羽の繊維から、肉の一筋まで、
全てをむしり取られている。

なのに。
なのに。

「本当に救いようがないわ。自らの死期を早め、自らの死地を求め、自らの死没を選ぶ。度しがたい。くだらない結末ね。初めからこういう風にできているのかしら。種の属性として甘受して、己の属性だと諦念して、我の発露だと興奮して、全ては予定調和じみている。結局のところ、死ぬことに変わりはない。ふん、己の死すら変えられないなんて、報われない生き物ね」

蛾の肉体の半分は崩壊している。炎に焼かれ、蟻に食われ、体の器官は完全に引き裂かれ、朽ちている。その姿は無様で無益で無意味だ。

やがて。

蛾は。

死んだ。

この世界から消えた。

徒勞なのか。しょせんは無意味なのか。蛾は光に辿り着くことなく、志半ばに死んだ。

変わらない。どちらとも死ぬことに変わりはない。だから結末は不動。終わりは概して 死、だ。

我が命脈を賭してまで得られるものはあるのか。

得られたとしても、それで何かが救われるというのか。

いや。

そんなはずは。

「救われるに決まってるだろ。こいつは愚かでもないし、くだらなくもない」

「へえ。意見の相違ね。私には玉砕の美学は分からないわ」

「考えてもみるよ。もし世界が今みたいな暗闇で、この光が唯一の光だったとしたら。たとえ自分という存在が業火で焼かれようと、この炎に飛びこむ。そうして火の穂で体が燃え尽きて、汚れた存在に落ちぶれて、自分が自分だという存在が消えようと、地面に這いつくばって光を追い求める。羽をもがれて、泥まみれになって、我が身が減じようと、炎の中に辿りつく。それが生きるってことだろ」

「なるほど。あなたって結構詩人なのね。よくできたお伽噺じゃない」

パチパチ。

火が弾ける音。

「けど、光なんて世の中には腐るほどあるわ。あなたはただ盲目なだけよ。世界が今みたいな暗闇だとしても、目を開ければ案外、光はあるわ。勿論毒々しい光もあれば、楚々とした光もあるわ。あなたは現実が嫌なだけ。中途半端で役立たずの自分がふがないだけ。早く自分の体を焦がして、現実から逃げたいだけなのよ。そもそもあなた。そんなかつこいい生き方ができるほど高尚な存在なのかしら?」

首を振った。

そういう生き方もあるかな、と思ったただけだ。実現するつもりはない。それにその言葉は、名伽狭霧がいつていた言葉だった。

名伽狭霧は光に溢れていた。だから、その言葉には力強いエネルギーがあつて、それは自然と心のどこかに刻まれていた。それはきつと、俺もこういう生き方をしてみたい、という願望の表れだったのだろう。

できるはずなのに。

いつだって理想と現実とは離れている。理想が現実に追いつくことはない。現実には理想を待つてはくれない。

朽ち果てた死骸は嫌おうなく死を連想させる。茶毘たひに付し、体を犯され、惨たらしく死んでいく。それはひどく嫌なことだった。

篝火白夜の場合、はたしてどうなるだろうか。

老死か、病死か、横死おつしか、自殺か。

全部ありえる。可能性は、ある。

篝火白夜最大の目標は、楽に生きる、である。何事にも無頓着に生きていたい。何事にも縛られずに生きていたい。悲しみも痛みもなく、平穩に生きていたい。

望みや願いが叶わなくとも、いい。野望や希望を掲げることもしない。ただ、生き続ける。それが人生の理想。

なぜそうまでして無味乾燥とした生き方を好むのか。それは一重に、篝火白夜が弱いからだろう。

弱ければ弱いほど選択の幅は狭まる。世相の公衆はそれを不幸なこと、悲しむべきことだと認識している。そして、社会はそういう奴を唾棄し、発破はつぱにもかける。

ただ。

篝火白夜においては、残された道と望んだ道が、偶々合致していただけた。

単調な人生。

望むところ。

なし崩れに応じた結果、自堕落に生きた結果、篝火白夜は今の廃れた生き方を選んだ。不良になったのも、そうしたほうが楽だったからだ。社会に反抗したいだとか、大人が気に入くないだとか、そういうことではない。そんな思春期特有の、無邪気でいてすねた考え方が根底にあるわけでもない。

多分、自分の弱さと不良の無粋さが合致しただけなんだと、思う。墮落した毎日を送っても咎められない。そうした一つの形態が不良だったというだけの話だ。

しかし。

そんな俺でも、平和な家庭を築く未来があるかもしれない。所帯を持って、子供を持って、それなりに幸せな日々を送れるかもしれない。

ああ、と慨嘆。そりゃ無理だ、と否定。ありえない、と否認。そんな未来はやってこない。それを知ってる。だから、そんなことはありえない。それは絵に描いた餅のように不確かで、現実性を欠いている。

この蛾のように死んでいく。泥や土にまみれて、死ぬ。少女のいうとおり、世界には光が満ちている。ただ、それに気づけないでいるだけ。篝火白夜は光を見ることもなく、死に絶える。光を追い求めたところで、それは純然たる死に過ぎない。そもそも光とは、人生の終着駅のようなものなのだ。

地面に残った、何かの残りカス。それは不穏な瘴気を放っている。死。

誰にでも訪れるもの。

なぜか寒気がした。

不快な何かが、背筋にまで迫っているように感じる。

その様子を見た少女

夜は

くすりと笑った。

「死を恐れることはないわ。死はもつとも原始的な生産行動なのよ。木・火・土・金・水。すなわち、陰陽五行の理。その五気によつてありとあらゆる事象を説明できるわ。盛衰消長。その中でも、死という概念ほど蠱惑的で退廃的なものはない。死と生は相反するものではないわ。むしろ逆。相生しているのよ。けど、愚昧なる人間どもは、それらの森羅万象をまったく異なるものとして解釈しているわ。木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生ず。木は燃えて火になり、火が燃えた跡には灰。土が生じ、土が集まった場所は山となりて、鉱物。金が産出し、金は腐食して、水に帰り、水は木を成長させる糧となる。あるいは、水は火に克ち、火は金に克ち、金は木に克ち、木は土に克ち、土は水に克つ。水は火を消し、火は金を溶かし、金で作られた刃は木を切り倒し、木は土を押しつけ成長し、土は水の流れをせき止める。五行相生・五行相克。死はその一部分でしかない。そう思うとぞくぞくするわ。あなただつて感じるでしょう？ この背徳的な法悦。後ろめたい歡喜。反倫理的な愉悦。それは遍く人間が持っているもの。死を生へと繋ぎ、生を死へと繋ぐ、輪廻転生の輪を担う悦び。それは決して、不幸なことでも痛ましいことでもないのよ」

それとあなた

少女は小ぶりの唇を卑猥に曲げた。
篝火は炎々と燃え盛っている。叢生からは虫の色めきたった羽音が聞こえた。

「背中に死神を纏わせているわよ」

心臓がきゅつと締まる。まるで鎖で雁字搦めにされたみたいに。

濡れたような黒髪がはためく。

夜はくるりと背を向け、去っていった。

何やら不吉な言葉を残しながら。

転寝棗が自殺したという連絡は、あっという間に学校名に伝播した。

当然校内は騒然となり、様々な憶測が飛び交った。喧々囂々けんけんごうごうと物議が交わされる。転寝棗の死を悼む声がどこかしこから上がった。ただこの文には語弊があつて、何も自殺したのは転寝棗だけではない。

どういった経緯があるのかは関知しえないが、転寝棗はどうやら集団自殺に巻き込まれたらしかった。そのメンバーは『天体観測部の部員で占められており、その人数は五、六人程度。その中の一人に転寝棗が含まれていたらしい。』

集団自殺が行われたのは、今秋の日曜日 昨夜のことである。その晩、天体観測部は夜の屋上で天体観測をしていたらしい。学校のほうにも天体観測部から、屋上の使用許可が出ているから、間違いない。

そして、何を血迷ったのか、天体観測部の部員は屋上から飛び降りたのだ。

六人の死体が発見されたのは、今日の早朝。いち早く学校に着た職員が第一発見者だとか。

本来ならば校内で死体が発見されれば、とりあえずは休校措置が取られる。しかし、発見したのが平日の早朝となると、これまた厄介だった。なんせ生徒達は続々と登校している。やむを得ず、先生たちはまず警察に通報。次いで、死体周辺の現場を通行禁止にした。

朝のホームルームでそれらの情報は生徒に伝えられた。しこうして、今日の授業はカットして、即下校しなさい、という旨も伝えられた。

生徒たちは困惑し、恐怖し、哀悼した。嗚咽を漏らし、潜々さんさんと泣

いた。

篝火白夜もその一人だった。

一滴だけ、涙は出た。それで体中の水分は枯れはてた。
なぜ。

なぜ転寝棗は自殺なんかしたのだろうか。

疑団は膨れ上がり、心を圧迫した。何度も何度もなぜだと繰り返した。無駄なことだと分かっているながらも、自問し続けた。

担任の眉村まゆむらによって、ホームルームは終了。みんな沈痛な面持ちでバツクをからった。

……本当に死んだのだろうか。

ポツン、と疑惑の芽が出る。現実感に乏しかったからだだろうか。その問いは形而下的な形を持ち、一気に膨張した。

しかし。

だからといって、そんなことがあるわけもない。学校や警察がこ
うやって動いているのだ。転寝棗を含む数名が自殺したのは間違
いないだろう。

それでも違和感が拭えなかった。あの豪放磊落な転寝棗が自殺す
るとは到底信じられない。あいつは自殺するような馬鹿じゃない。
それだけはいえる。

なのに。

自殺した。

なんなのだろうか。この変な感じは。

人一人の死。実感は、ない。悲しいだけで、中身が伴わない。前
まで普通に笑っていた奴が、いきなり死ぬなんて思えない。思った
くない。

夜の言葉が思い出される。

死は恐ろしいものではない。

業火に焼かれた蛾の死に様が思い出される。

実にあっけなく、実にくだらなく、実につまらなく、ただ光を求め、蛾。自らの死をどこかで理解しながらも、光を欲せずにはいられない性。^{さが}

望み。

願い。

実現せぬ望み。

成就せず願い。

その無常。

予測通りの死。

予想通りの死。

予定通りの死。

予告通りの死。

それが未来だと分かっているのに、その先にあるというのに、蛾はサイコロを振り直さなかった。

空は薄雲がかかっている。外は霧雨だった。それが窓ガラスに伝って、下に流れた。

「白夜様」

視線を前のほうに向けると、歪がいた。目が合うとにつこりと微笑みかけてきた。

弱々しく微笑み返して、視線を元に戻した。多分、転寝棗の訃報に参っていたのかもしれない。少なくとも、いつもとは違う倦怠感があった。それは喪失感という奴で、心底には澱が沈殿していた。

それを見抜いたのか、「棗ちゃんのことを気にかかるとはですか？」と歪は問うた。

凶星である。視線を歪に向けられないようにした。

その様子で察してくれたのか、歪は何もいわなかった。この場にそぐわぬ内容だったと、後悔しているようでもあった。

椅子を引いて、鞆を持つ。それを右肩にかける。「帰るぞ」

「はい」

いつも通りの恭順な返事をして、後ろに続いた。

玄関で靴を履き替える。そこで手元に傘がないことに気づいた。バックの中を漁っても、何も出てこない。

そういえば、と思う。確か折りたたみ傘を入れ忘れていたような気がする。朝に雨が降っていなかったからだろうか。天気予報のほうも、見忘れていた。

「傘をお貸ししましょうか」と歪は黒色の傘を示した。

「……準備のいい奴」と苦笑する。いつもながら、用意周到だった。

「ありがとうございます」

「でもいい。今日は濡れて帰る」

そういうと歪は悲しそうな顔をした。「そんなことを仰らずに」

「だったら、おまえが濡れるだろ」

すると歪はきよんとした。数秒して、得心顔を作る。「ご安心

ください。私と白夜様、両方が濡れない方法があります」

「……なんだ？」

歪は俺の手を引いて、近くに引き寄せた。「こうすれば、どちらも濡れません」

……なるほど。

歪は俺の手を握って、肩を近づけた。傘が大きいのが幸いして、ちょうどよく二人分の体が収まった。

周囲の視線が痛い。各々睨むような視線を向けている。

男は嫉妬のまなざしを。

女は軽蔑のまなざしを。

羞恥心が刺激され、離れようとする。しかし、歪の膂力は強く、

離してくれなかった。

「腕を離せ」

「嫌です」

珍しく拒絶する歪。歪は怖いくらい無表情で俺を見た。

歪の目はやはり魔性だった。ガラス玉を嵌めこんだみたいに澄んでいる。人形のような美しさがあった。

「……憎めない奴だよなあ」と屈する自分が情けない。最近歪と行動しているからか、こいつに関して甘くなっているような気がする。

「それだけ私のことを愛してくださっているのですね」とさらに体をくつつけた。

むすつとなる。本当にこの女の真意が読めない。

せめてもの抵抗で、できるだけ体を離れた。

しかし、そんなことはお見通しらしい。いつの間にかがちり腕を掴まれていた。肩と肩とを組んで、しっかりと固定。人の力では、多分、動かない。

「傘をさすのにわざわざ肩を組む必要はないんじゃないか」とは提案する。そして、それが無駄なことも分かっている。一応、女子としての節操を守ってほしい、とは思う。そう思ったので、遠回しに注意してみる。

「あります」

「なんだ」

「前にテレビでやっていました。仲のよい男女は、雨の日にこうして腕を組むのだそうです」

中のよい男女といった言葉が、別の言葉に変換される。

それは。

つまり。

「こういう話を知ってるか？」と前ふりを出す。「昔、どこの国では仲のよい男女は肩を腕を組んじゃいけないかったんだ。当時にはそれを罰する法則もあったし、厳しく制限されてもいた。それで職

を失った奴もいれば、社会的信用をなくした奴もいる。だから、腕を組んじゃ、ダメだ」

「嘘ですね。白夜様は嘘をつく時、鼻の頭をかく癖があります。したがってそれらは作り話　虚偽です」

「……嘘じゃない」

「間があつた、ということとはやはり嘘ですね。正直者が嘘をつくものではありません」と微笑ましそうにいう。

あしらわれている。そう思ったが、やはりその通りだった。

歪は目を瞑った。ゆっくりとした動作で肩に頬を当てる。「別に少しくらいよいではありませんか。減るものではございませんし。それとも、お嫌でしょうか？ 私と戯れるのがそんなにお嫌いですか？ 私のことがお嫌いですか？ だったらその……私、悲しいです。私には白夜様しかいらっしやらないのに。こんなに好きなのに私、首を吊ってしまいたくなります……」

「アホらしい」

「アホではありません。白夜様はいつも私を、こうやって煙に巻きます。イジワルです。あんまり、私をいじめないでください」と真顔でそんなことをいう。なんとも、庇護欲に駆られるセリフだった。そこら辺の男に比べてあげればいいものの。

なんともいえない気持ちになる。異性との会話経験が極端に欠如しているからか、どうしていいのか分からない。

「私はこんなにも白夜様を愛しているのに……。白夜様の体重も、身長も、視力も、聴力も、握力も、生年月日も、血液型も、生まれ故郷も、生活リズムも、家族構成も、好きな食べ物も、嫌いな食べ物も、性癖も、好みの女性のタイプも、全部知っているのに、本気で想っているのに　うう」

歪は呻吟した。すぎるような目で、見られる。

見返りを求めない愛というのは、どこかで異常な部分があるように思う。それは自分の存在を相手に委託するということ。つまり、自分の全てを投げ打つということだ。

何から何まで狂っている。いくら好きだからって、その態度というか、表情は狂っている。

愛やら情やらに淡白。

短い人生の中で、篝火白夜はそういった感情を持ったことは、ほとんどない。それは多分、他人なんてどうでもよくて、自分でさえもどうでもいいから、そういう帰結に至っているのだろう。幼いころに刷り込まれたトラウマは、他者とのコミュニケーションをことごとくダメにした。

腹筋に残った歯型は、九歳のころ、無理やり犬との決闘を強制されて、犬に噛みつかれてできた傷だ。

背中に残った切傷は、十歳のころの図工の時間で、遊び半分に力ツターナイフで刻まれてできた傷だ。

手首に残った火傷は、十一歳のころ、見ず知らずの不良が吸っていた煙草を押し付けられてできた傷だ。

中学の頃には、生意気だといつちやもんをつけられ、集団で金属バットの洗礼を受けたこともある。これまで何十回も人為的な骨折をしたし、二十人近くの不良に襲われて、内臓破裂した経験もある。体が異常に頑丈なものも、辛酸を舐めた体験によるのかもしれない。きつとイバラの道に耐えるために、肉や骨を作り替えて、頑健なものにしたのだろう。これも、一つの抵抗進化だといえる。

必要に駆られれば、人は割と変わるものだ。

しょうがないなど、歪の手を取って、落ち着かせるためにその口を塞いだ。とたんに甘い匂いがして、甘美な気持ちになる。

人は予想だにしない事象を目の前になると、思考がとまるという。また、これまでの鬱憤や怒りも、全部消し飛ばらしい。

歪は最初、目を見開いていたが、暫時すると、積極的に舌を入れてきた。入れてきたので、すぐに身を離す。

「ああ」と名残惜しげに、手が宙をかく。歪は上気した瞳で、軽く睨んだ。

「帰るぞ」とそっけなくいって、首をできる限り曲げる。頬は憎た

らしいくらいに赤くなっていて、なんであんなことしたのだろうと
思う。不相応な行為。正直、もう一回したい、と思ってしまう自分
がいる。

「……はい」

歪はいつもなら見られないような、すねた子供のような表情を浮
かべた。それでも、どこか嬉々としたものを浮かべている。

心のどこかで虚しさを覚える。篝火白夜特有の、浅ましい考えが
鎌首をもたげる。

しよせん、篝火白夜に力はない。人を愛する力も、人を繋ぎとめ
る力も、何も無い。

当たり障りのない人生を送る。無知で救いようのない日々を過
して、気がつけば、傷だらけの生涯が幕を閉じている。

それでも隣に誰かがいるということは、幸せなことなのだと思う。
今の時期はそうした小さな幸せを見つける時なのだ。それを袋の中
にためて、墓の中までそれを持って行く。そうすれば単調な人生で
も、悪くなかったと思えるかもしれない。それなりに楽しい人生だ
ったと思えるかもしれない。そうした錯覚を抱きながら、彼岸に渡
れるのかもしれない。

その時に篝火白夜の死を悲しんでくれる人はいるだろうか。

分からない、ということにする。死後のことを考えるなんて、非
生産的。意味のないことはしない。それが篝火白夜のモットー。

ただ。

彼女は悲しんでくれるだろうか。

なんて。

思う。

転寝棗の葬式は肅々と行われた。

転寝家の一家郎党総出で葬儀に参列し、大半の村民が線香を上げた。

葬られた転寝棗の骸は、遺族によって出棺された。勿論妹である、転寝鈴蘭の姿もあった。

重苦しい沈黙。どこかから咽び泣く声が聞こえた。

葬儀には俺や歪、梅雨利東子などが参加した。

さすがに金髪で出るほど不謹慎ではない。だから、あらかじめ黒髪に染めて、葬儀に参加した。それでも周囲の人々は非難するような目を向けた。

仕方のないことだと甘受。蔑視を向けられることくらいなんでもない。それよりも、葬式に参列することで改めて、転寝棗の死を思い知らされるようで、感に堪えないものがあつた。

何より。

転寝鈴蘭が心配だつた。

最愛の姉を失つた転寝鈴蘭。彼女はこれからどう生きるのだろうか。支えをなくし、悲愴に暮れているのかもしれない。そう思うといつてもたつてもいられなかつた。

しかし。

遺族は面会謝絶だつた。

それもそうだと、思う。

きっと昔日の感慨に耽つたり、亡き家族への哀悼に胸を苦しめているはずなのだ。そんな神聖な場に土足で上がることなんて、できるわけがない。

それに。

俺が行つたところでなんになるというのだろうか。いたずらに悲しみを増幅させるだけではないだろうか。

虚脱感というか、無気力感に囚われる。空しくなった俺は、一人でどことも知れぬ空き地でぼーっとしていた。その際に歪が慰めに来てくれたが、追い払った。一人になりたいというと、大人しく引き下がってくれた。

晴朗な空を見ても、気は晴れなかった。

視線を下にずらすと、庚申塚こうしんづかが見えた。像の下には雑草が生えていて、花か何かが供えてあった。

片膝について、木に背を預ける。癖遠へきえんの蒼穹は、やはり綺麗で、味気ない。

「篝火さん」

誰かの声がする。

声のしたほうに視線を向けると、庚申塚の近くに少女がいた。夢を見ているのか。

矮躯わいくの肢体。ショートボブの髪型。切れ長の双眸。鼻筋の通った面立ち。

転寝棗？

否。

そんなはずはない。あの子は死んでいる。現にあの子の葬儀は敢行されたではないか。ということとは。

「……って、おまえ！　なんでここに……？」

「来ちゃいました」

転寝鈴蘭は小さく笑って、俺の横に腰を下ろした。

転寝鈴蘭は和装だった。葬式の時もそれと同じだったので、着替えずにここに来たのだろう。藍色の簪かんざしや、黒色の着物。足袋たびに鼻緒の赤い下駄をはいている。

普段とは違う衣裳に、見慣れぬ簪。これが転寝家における葬式の正装なのだろうか。

それにしても。

似すぎている。

双子の姉妹という枠には収まりきれぬほど、転寝棗と転寝鈴蘭はそっくりだった。眼鏡の有無のみが、境界の役割をはたしているだけであつて。

それでも妙な違和感があつた。間違いのない間違い探し。そういった感じの、拭いきれない違和感。

「その、あんまり見ないでください。恥ずかしいです……」

どうやら転寝鈴蘭の顔や体を凝視していたらしい。

「いや、ごめん」と羞恥心交じりに謝る。

別にいいですよ、と転寝鈴蘭は僂げに笑つた。

和服の裾を丁寧に折つて、たおやかに座っている。研鑽けんさんされた美

しさ。木の根に隣り合つて座る俺たちは、ぼんやりと薄暑はくしよの空を見上げていた。

「髪、染めたんですね」と俺の髪を瞥見して、「黒髪も似合つてます」といった。

苦笑を浮かべて、「さすがに金髪で出る勇氣はなかつたんだ」とへらへら笑つた。

「この後、やっぱり染め直すんですか？」

「分からない。どっちにするかな」と苦悩するそぶりをする。

「いつ頃から金髪にしたんですか？」

「うーん、いつだろうな。三、四年くらい前か？ 多分中学の時からだ」

「なんで金髪に？」

「それこそ分からない。なんとなくだよ、なんとなく。けどそうだな……。多分、なりたかつたんだろうな。俺ではない何かに」

と自嘲気味に笑つた。「形から入るほうなんだろうな、俺は。弱い自分。愚かな自分。そういうのから逃避したかつたんじゃないか。

それに誰かから指図されるのも、規律に縛られるのも嫌だつた。俺はそういう、型から外れた人間だつたんだ」

「……………」

焦燥を思わせる風。

転寝鈴蘭は口を噤んでしまった。
なんでなんだろうな、とかいって、体を少し傾けて、いう。

「きつと少しだけの、矮小で小物っぽい悪になりたかったんだと思う」

「……………」

「それなら、不良が手っ取り早い。それには髪を染めるのが一番簡単な方法だろ。不良といえば、金髪にピアス。まあ、ピアスには抵抗があつたから、髪を染めるだけにしたけどな」

何もできない自分。

誰も救えない自分。

それから逃れたかったのか。

それから逸したかったのか。

それから隠れたかったのか。

自分の脆弱さや醜悪さ。砕けた人形を無理やり取り繕って作り上げたような、不格好な自分から目を背けたかったのか。

篝火の血は争えない。

篝火白夜の父は誰かを殺して満足する男だった。

篝火白夜の母は死など気にも止めない女だった。

篝火白夜本人は殺人を容認するような男だった。

壊れていた。間違いなく壊れていた。人としての倫理や、道徳。

それらとはほど遠い人種だった。

転寝鈴蘭は静かに笑った。退廃的な篝火白夜とは正反対の、生産的な笑み。

「痛そうですもんね、ピアス。あれは私も理解不能です。親から貰った大切な体を傷つけたくはないです」

「同感。俺もピアスだけは嫌だ。自分の体を否定してるみたいで、気が滅入る」

過去にピアスを試してみようと思ったことはある。しかし、耳に穴

を開ける段階でやめてしまった。なんだかバカバカしいと思ったのだ。

金銭的な問題もあったし、転寝鈴蘭のように大切に扱うべき体をお粗末にしているようで嫌だったのかもしれない。あのバカな両親が唯一残してくれたものだ。

大切にしないと罰が当たる、なんて思ったのだろうか。

「なんか、平気でピアスをつけている人とか見ると、変な気分になりませんか？ まるで無理やり自分の体を加工しているみたいで……。刺繍を体に施すのも、意味が分からないです」

「人には銘々、主義主張があるんだよ。ピアスとか刺繍とかが、カッコいいと思ってる奴なんてたくさんいる。人はそれに高尚性や崇高性を付加して、自分を正当化している。それがどんなにバカバカしいものであっても、だ」

転寝鈴蘭はしげしげと俺を見た。

「篝火さんって本当に不思議な人ですよ。思ったほど粗雑でもないし、頭が悪いわけでもないですし……」

「そんなわけないだろ。俺は粗雑だよ。それに、頭も悪い」

転寝鈴蘭は困ったような顔をした。窮屈な箱に閉じ込められたような表情をしている。どういう言葉をかければいいのか分からないようだった。

「そつえばおまえ、なんでここに来たんだ？ もしかして、抜け出して来たのか？」

「はい。なんだか、沈んだ空気が嫌で、抜け出しちゃいました」と転寝鈴蘭は舌を出した。

「あのなあ」とあきれる。

「けど、それにもちゃんとした根拠があるんですよ」と転寝鈴蘭はいった。「確かにお姉ちゃんが死んじゃって悲しかったです。なんかもう、わけが分からなくてずっと泣いてばかりでした。けど、こつやって泣いているだけじゃ、天国にいるお姉ちゃんは喜ばないと思うんです。もっと笑って、悲しまないで、なんていわれそうない

がします。その、不謹慎かもしれませんが、お姉ちゃんに涙は似合わないと思います。それにお姉ちゃんは私たちに泣いてなんか欲しくないんだとも思いますし。だからでしょうか。あんまり泣いてばかりいるのもどうかなくて」

変でしょうか、と問うて、転寝鈴蘭は空っぽの笑みを浮かべた。目には陰りがあって、どんよりとしている。

「お姉ちゃんが自殺しちゃったのだから、必ず何かの理由があるはずなんです。ほんの弾みで死んじゃえるほどお姉ちゃんは弱くもないますし、命をないがしろにするほど愚かでもないです。だから、絶対に理由があるはずなんです。それも、人にいえないような、重大な理由があるはずなんです」

ゆっくりと顔を伏せる。転寝鈴蘭は何かをこらえるように、嗚咽を繰り返した。くぐもった声が、雑草の繁茂した更地まきちに残響する。

木の幹に体を預けて、地平線を眺めた。

俯く。その際、眼鏡が光に反射したように見えたが、そうではなかった。眼鏡は日光を跳ね返すことなく、ただ受け入れている。そこでまた。

違和感を覚える。

地面に土を穿つような水溜りができる。少女は小刻みに震えた。何かに怯えるように暗涙あんるいに咽ぶ。眉尻に手を当てても、感情の波は押し寄せ、理性の籠たかは決壊した。

俺はただ、茫洋とたゆたう五月空を視界に映すだけだった。

背中に死神を纏わせているわよ。

恐怖にかられて、後ろを向く。

勿論。

何もない。

背後にはいつも通り、変わらない田園風景が広がっているだけだった。

四時間目の授業が終わる。今日は昼食を持参していないので、購買部へと向かう。

その途中で、聞き捨てならない言葉を聞いた。

階段を下りていると、脇を通っていた男子生徒の一人が、「天体観測部」という単語を口にしたのだ。

耳をすませる。

「それでな」と男は続ける。「それでな、おまえ。天体観測部の員が自殺したのは知ってるだろ？」

男の隣にいた男は、「知ってるに決まってるだろ」と返答した。

「それがどうかしたのかよ」

「どうしたもこうしたもねーよ。これはまあ噂だが いるんだよ」と話題を振った男はたっぷりと間を開けた。

何がいるんだ、と疑問に思う。引き続き、男たちの会話に耳を尖らせた。

「何がいるんだよ」と俺の心の声を代弁したかのように、もう一人の男が問う。

「やっぱり知らねーよな」

「焦らすなって」

「分かったよ」と男はニヤニヤと笑い、「どうやらいるらしいぜ。例の集団自殺の生存者が」と自信たっぷりにいった。

男は呆氣にとられたようだった。「マジ？ 確か全員死んだはずだろ」

「違うな。確かに部員のほとんどは自殺しちまった。けど一人だけ自殺しなかった部員がいるんだ」

「誰だよ？」と男が訊く。それは俺も知りたい。

「斗米憐乃ひまごめんの っていう生徒、知ってるか？ ほら、生徒会書記の、メチャクチャ綺麗な色白の女」

それを受けた男は顔をにやけさせた。「そういえば、そんな人がいたような……。思い出した。あの、神秘的な感じの姉ちゃんだろ？　一つ上の先輩の」

「そうだよ、それぞれ。で、斗米憐乃っていう女子生徒は、天体観測部の中で唯一自殺しなかったんだ」と満足そうに男のほうを見て、「もしかしたら、あの集団自殺について何か知ってるかもしれない」と会話を締めくくった。

ピタリと歩くのをやめ、二人の男子生徒に近づく。できる限りの鋭い視線を心掛け、「ちょっといいか？」と問いかけた。

二人組は俺の姿を認めると、小動物のように体を縮こまらせた。視線をせわしなく泳がせ、周囲に助けを求める。しかし、周りの生徒たちは見て見ぬふりをして、速足でこの場から去った。

「ななな、なんだよ、俺たちになんか用かよ」と挑みかかるように口を尖らせる。ただ自ら近寄ろうとはしない。顔も引き攣っている。

「その話、詳しく聞かせてくれないか」

「……話？」

「その、天体観測部の奴だ。おまえ、知ってるんだろ」

男は不服そうに顔をしかめるが、一睨みすると、恭順な態度を見せた。もう一人の男も腰が砕けている。大声で一喝すれば、尻尾を巻いて逃げそうな怯えようだった。

「それで」と男の胸倉をつかみ、「どうなんだ、それ」と脅すようにいう。

男は小さく呻き声を上げて、「わわ、分かった。いえばいいんだろ、いえば」と不承不承にいった。しきりに胸倉の辺りを気にしながらも、それについて話した。「天体観測部の部員が集団自殺したのは知ってるよな？　休校したからさすがに知ってるとは思っけどな。でな、けど斗米憐乃っていう三年生の女子だけが自殺しなかったんだ。おまえは知らねーと思うけど、生徒会の人だ。んで、ひよっとしたらその斗米憐乃が集団自殺を引き起こした黒幕なんじゃないかって、もっぱらの噂。一応学校には来てるらしいけど、俺

も詳しいことは知らん。これでいいか？」

噛みつくようにいわれる。手負いの獣のようで、猛々しい。そんな様子に変なところで感心してしまった。見た目によらず、胆力があるのかもしれない。

男を離す。

男は苦しそうにうずくまり、胸の辺りをさすった。そうしてこちらのほうを軽く睨んで、その場を去った。もう一人の男は既に逃走していたので、この場にはいなかった。

その後ろ姿を眺める。やっぱり嫌われてるんだな、と改めて思う。もう覆らない。篝火白夜は完全に忌避される存在に落ちていた。

斗米憐乃。

天体観測部の人間でもあり、歪の所属する生徒会の人間でもあるらしい。あまり学校に近づいたことがないからか、全然知らない名前だった。そもそも名伽狭霧が生徒会の一員であることを知ったのは、つい最近のことなのだ。

さて。

どうするかな。

なんて思っ、足を動かした。

購買部でパンをいくつか購入。その後に向かった先は、中庭ではなく、二年一組の教室だった。

教室にはスライド式のガラスが嵌めこんである。熱いのかガラスの窓は全開だった。この学校にはいまだ、冷房機具が充実していない。だからか、二年一組に限らず、全ての教室の窓は開け放たれて

いた。

当然。

知り合いはいない。周りは訝しげな視線を向けて、避けていく。他クラスに入るのは初めてだった。そういう躊躇いもあってか、教室のドアの辺りで立ち止まった。

……いた。

小さく嘆息。眼下にはとある女子生徒が映っていた。

その女子生徒は鞆から弁当を取り出そうとしていた。移動教室だったのか、科学の教科書が机に出ている。椅子に座っているので、長い黒髪が床につきそうだった。

科学の教科書を片付けた女子生徒は、示し合わせたようにこちらに目を向けた。すると無表情だった顔に感情の色が浮かび上がる。女子生徒はいつも通りの優雅さで、こちら側に向かってきた。

「どうかいたしましたか。白夜様？」

「ああ。おまえ……暇、か？」

「暇、というわけではありませんが、白夜様のためとあらば、なんなりと」

「一緒に食べないか」といって、菓子パンを掲げる。

「喜んで」

歪は自分の机に戻り、弁当を取りにいった。そのままとんぼ返り。「どこでいただきましたでしょうか？」

「中庭」

「承知いたしました」とこれといって不満もないのか、あっさりと申し入れを受諾した。

俺と歪は中庭へと向かった。

相変わらず人気はない。時折生徒がそばを通るくらいだった。少なくとも何もない中庭で食事をする物好きは、いないらしい。

取ってつけたようなベンチに腰を下ろす。歪もその隣に座り、弁当を広げた。中身は色とりどりで、種類も豊富。

「ほしいのですか？」と問いかけられる。どうやら歪の弁当をずっ

と見続けていたらしい。「でしたら差し上げますが」

首を振る。なんだか、恥ずかしい。

「そうですか」と無感動に呟いた。

静寂がこの場を支配する。一緒に食事　とはいっても、ほとんどしゃべらない。

よく二人で昼食を共にすることは、割とある。ただ、そこで話が弾んだこともないし、大声を上げて笑った記憶もない。それは登下校の時も同じで、何かの話題で盛り上がったことはなかった。歪はこちらから話をふらない限り、無口だった。

ただ。

歪の性格が暗い、というわけでもない。たんに俺が寡黙なだけで、歪はそれに合わせてくれているのだと思う。それに基本が無表情だから、ひよっとしたら、これが素なのかもしれない。それでも、無駄なことは一切いわないし、憤み深い。

佩刀歪はそういう人間で、やはり摩訶不思議だった。

俺といて楽しいのだろうか。

なんて思うが、口には出さなかった。

「歪」

「なんででしょうか」

切り出すかどうか迷うも、「斗米憐乃っていう女子生徒を知ってるか？」と尋ねた。

不思議そうな表情をする。「斗米さん……ですか？　斗米さんがどうかしたのですか？」といった後、考え込む。「いや、なるほど。そういうことですか。分かりました」

「……歪？」

「転寝棗のことを引きずっておられるのですね。確かにあれは凄惨な事件でした。心中お察しします。しかしそんなことをしたところで、無意味なものは無意味なのですよ、白夜様」と歪は静かにいった。

理解が遅すぎるのは勿論、早すぎるのも困る。歪は早くも俺の意

図を理解したようだ。

「それは過去の幻影ではないのでしょうか。転寝棗はすでに死
去いたしました。いまさら原因を求めたところで、結果は不動です」
と諭すようにいう。「死者は二度と帰ってきません。お分かりです
ね？」

それは。

たぶん。

分かっているのかどうか、分からない。

ただ。

奇妙だった。

転寝棗の自殺が、奇妙だった。

その小さな違和感は、悲しみと呼ばれるものなのか、怒りと呼ば
れるものなのか、分からない。涙こそ出たが、だからどうだとも心
の中で思った。閉塞感こそあったが、むしろ一抹の疑問のみがある
だけ。

それはすれ違いざま、無知らぬ人に殴られるような感覚だった。
まず思うのが、なぜという疑問である。どうして自分を殴るのか、
といった理不尽な行いに対する問い。それが先行する。

転寝棗の死も、それに似ている。名伽狭霧の出奔も、似たような
ものだ。この二つの事件に関連性があるかどうかはあずかり知らぬ
ところではある。ただ、両方とも、妙な因果を感じる。

その時に掴んだ、転寝棗への手がかり。俺は自分の中でくすぶっ
ているものと決着をつけるために、それにすがった。

うまくいえない。

きつと言葉にすればとたんに意味を無くすものなのだろう。それ
はひどく観念的で、恣意的な感情だからか。あるいは言葉にするだ
けの整合性がないからなのか。

「斗米憐乃から話を聞きたいのですね？ 天体観測部の集団自殺に
ついて、何か知ってはいないか、と」

その通りだった。やはり何でもお見通しらしい。

首肯すると、歪は慨嘆した。それは聞きわけの悪い子供を目の前にした母親のような溜息だった。

それでも、頼んだ。

無理をいって、頼んだ。

身勝手だと思いつながら、頼んだ。

他力本願。

畢竟、他力本願だった。

歪はふつと笑った。

優しく包み込むような笑みだった。

「分かっていきます。私は白夜様の奴隷。あなた様のためならば、どんなことでもする僕です。ですから、そんなに気を落とさないでください。斗米憐乃には私が話をつけておきます」

「……いいのか。本当に、それで」と尻すぼみになる声。「さつきは無意味だった」

「あれは一般論であって、私の考えではございません。私の考えは常に白夜様に根差します。白夜様が斗米憐乃との面会のお望みなら私はできる限り、それが実現するよう尽力します。白夜様の願いは私の願い。白夜様の幸せは私の幸せ。白夜様に尽くせることは、何物にも代えがたい幸福。白夜様のお力になれることは、どんなことにも勝る名誉。白夜様と添い遂げることは、無上の喜びなのでございます。ほかにもご所望があたりでしたら、遠慮なくおっしゃってください。なんでもいたしますので」と歪は俺の手を握った。柔らかな指が絡みつく。それは穏やかな安らぎを生んだ。

理解者や味方がいると、一人でいるのが怖くなる。今まで一人でできたことが、一人ではできなくなる。

それはどういう意味なのか。

弱くなっている、ということなのか。

孤独を苦行と捉えるか、安らぎと捉えるか。

その認識の差で、変わるものがあるのか。

「好きです」と彼女はいう。

無表情なのに、甘えるような声で、そんなことをいう。

「白夜様は私のこと、好きですか？ どれくらい好きですか？ 私
といて幸せですか？ 幸福に感じてくださっていますか？ 私は幸
せですよ。今この瞬間が、肌と肌が触れ合う時が、すごく、すご
く、幸せです」

うわごとのように呟いて、濡れた瞳を向ける。

それはぞっとするくらいに深い、果ての見えない奈楽。

午後五時半。

俺と歪は体育館の裏にいた。遠くからは部活動生のかげ声。それ以外に音源はない。ただそよそよと木々がなびくだけである。夕焼け色に染まった樹林は五月の趣を感じさせる。

無造作に置かれたレンガに腰を下ろす。歪は壁にもたれかかっていた。これも斗米憐乃とまいあわのから話を聞くためだ。

今日の授業は七時間。学校が終わるのは午後五時である。幸い生徒会活動はなかった。なので、比較的早い時間で、会見の場をセツトすることができた。

まあ。

これも歪のおかげだが。

歪の尽力で、放課後の体育館裏で斗米憐乃と話す機会を得ることができた。歪に頼み込んだのは今日の昼休みだった。にもかかわらず、今日の放課後にセツトできたのは、一重に歪の行動力に起因する。本当にすごい女だと思う。

顔を俯かせる。地面にはいくえもの凸凹こぼこが確認された。

「……遅いですね。もう時間なのですが」といって、歪は腕時計を無表情で眺めた。

さらさら。

音がする。

さらさら。

風の流れが変わる。それは小さな変化であったが、何か近づいてくるのが分かった。

「古いにしえに転地あまじち未だ割れずわか、陰陽分れざりとき、混沌まろかれたること鶏とり子の如くして、溟幸ほのかにして牙かみを含めり」

朗々とした声が聞こえる。それはどこかで聞き覚えがあるような声だった。

少女のような、老婆のような。

少年のような、老翁のような。

青年のような、夫人のような。

ひどく。

曖昧で。

明確な。

声。

「日本書紀第一段、神代七代章、てんちかいびやく天地開闢の冒頭の言の葉よ。知っているかしら？」

絹のように艶やかな黒髪。

紅い唇。

切れ長の瞳。

全てを達観した表情。

「かみよのかみのまゆ神代上こころのく国常立尊でしyouか。古事記でいうところの、別天神五柱の後に現れた、神代七代の神の一人だと思えますが」

「ご名答。よくご存じね」

夜色の髪をした少女は、唇を吊りあげた。満足そうに相好を崩すと。

視線をスライドさせる。黒真珠のような目が俺を射すくめた。

そして。

ふふふと、ふふふと、笑う。

「あら、これも巡り合わせかしら。あるいは、運命の皮肉」と楽しそうにいう。「そう、あなたは幸運な人だね。なんせ夜ではない私と会うことができたのだから」

「おまえ……」

少女 夜 はくすくすと怪しげな笑みを浮かべた。

「……白夜様。斗米さんとお知り合いなのですか？」

どう答えるべきだろうか。まさかこういう展開が待っているとは

思わなかった。これは俺の想定範囲外の出来事だ。「いや、知り合
いってわけじゃない。なんというか、その」

「私と彼は初対面よ。私は斗米憐乃。どこからどう見ても斗米憐乃
で、全てが斗米憐乃で、やっぱり斗米憐乃その人で　夜ではない
表向きの　昼の私。そうでしょう?」

仰視する。見上げてみれば、美しい夕空があるだけだった。

何がそうなのかは分からない。この女の真意が読めない。

そもそも。

俺とこの女は、初対面なんかじゃ、ない。一度ならず二度も、顔
を合わせた。いつかの夜空で邂逅したはず　。

表向きの　昼。

裏向きの　夜。

昼と夜。

夜と昼。

「　あなたは今朝、目を開けて、“白色”の制服のボタンを、
視線を下げて”かけたわね。そして朝食を食べて、履き慣れた“黒
い”の靴を履いて、登校した。“目の前”には延々と広がる田畑。
じりじりと照りつける太陽を、あなたは思わず、“仰ぎ見た”でし
よう。その時にきつとあなたは、自らの腕を“目の近くにかざした
”でしょうね。しばらく歩くと、“正門が見えた”ことでしょう。
そこには“たくさん生徒たちがいるのが分かります”ね。そうし
てあなたは、葉を落とす桜を、“目を細め”て“眺めて”、玄関ま
で歩いたでしょう?」

何を。

この女は。

何をいつている?

なぜ急に、そんな当たり前のことを。

そうです、としかいいようのないことを。

この女は何をいいたい？
この女はどうしたい？

「あなたは“視界いっぱいに壮大な校舎を見納めた”のじゃないかしら。学び舎を“背景”に、生徒たちが行きかう様子を“見た”でしょう。ひよつとしたら先生方や、保険教諭の姿を“視認”したかもしれないわね。そうしてあなたの日が始まるわ。まずは一時間目。あなたはきつと、退屈そうに黒板の文字を“追っていた”でしょう。“緑色をした板”に、色々な記号や文字やらが“書きこまれて行く様”に、変わり映えのない日常性を感じたに違いないわ。そうして諸々のことが終わった後、佩刀さんと一緒にここで私を待っていたのね。“頭を下げたまま”。ふふふ、だったら、あなた。そんなことじゃ “頭を上げることができなくなるわよ”」

なんだか。

変な気分になった。

斗米憐乃の語り口調は異様だった。直接脳に語りかけているようで、違和感を覚える。それは手品師が詐術をかけているような感覚だった。

斗米憐乃の意図は分からない。今頃になって、そんな分かりきったことをいうのか。なぜ、確認作業を行うのか。

「あなたは」何をいいたい？

夜色の斗米憐乃はたおやかに艶笑した。目は妖しくたわんでいる。「それで私に何か用かしら。私、これでも忙しいのよ」と落ち着いた口調。それほど急いでいるようには見えない

斗米憐乃は華奢な体を自分で抱きしめて、不敵な笑みを浮かべる。それは獲物を捕らえる蜘蛛のような、そんな不吉な気配をたたえている。

「あんたに訊きたいことがいくつもあるんだ」と一歩進んで、切りだす。

すると。

頭が。

重い。

頭が重い。重く感じる。重力が倍増したような感覚。

頭が。

上がらない。

「何かしら」

「て、天体観測部のことだ。あんたは 何か知ってるんじゃないのか？」

「それは」と斗米憐乃は口を嚙み、「私がみんなを自殺させたって そういうこと？」といった。

うう、と言葉に詰まる。視線は情けなく下を向いている。

「誰もがそういうわ。そんなはずなのに。そんなバカげたことできるわけがないのに。みんなそういうのよ。愚かだわ。愚か愚か愚かこれといった論拠もなく、頼りない己の勘と無知な頭で私を悪だと決めつける。おまえがみんなを自殺に追い込んだ、なんていう。くだらないわ。そういうあなたたちこそ 悪だわ。衆愚なのよ。周りに流されるだけの、主体性のない愚民。行きすぎた妄想 それ自体が罪。そんな過ちを許容してのうのと生きるつもりなのかしら。それ相応の罰を受ける覚悟は果たして、あなたたちにあるのかしら。疑問ね。だから、みんな 蛾よ。暗黒の中に光を求めるだけの 惨めな蛾虫よ」

「この場にいるものは誰一人として、そんなことを思っではいません。白夜様はただ知りたいただけなのです。事件の真相を。その真相を」

「何をいうかと思つたら 佩刀歪。狭霧もいつてたけど、常軌を逸した何かを持っていてるようね。なぜそこまでして一人の人間に尽くせるのかしら。それと、篝火白夜。あなたもあなただわ。決定的に歪んでいる。それはあなた個人の性質なのか、はたまた篝火の血筋故なのか。興味深いわね」

さらさらと漆黒の髪がなびく。
くすくすと赤色の唇が曲がる。

心の中の敏感な何かにひびが入る。それは済度しがたい亀裂を生み、赤い感情の嵐を巻き起こした。

「あんた　なんていった？　血筋？　もう一回行ってみるよ、おい！」

「裏御三家の一角、斗米家を侮らないでほしいわね。斗米は情報収集の名家よ。外道剣術と擲揄された武門　しとみ部家よりも狡猾で、旧華族の素封家　雑道家よりも老獪。今の政界を裏で支配しているのは間違いなく斗米家。個人情報の一つや二つくらい、手に入れるのは簡単だわ。あなたの手は血で汚れている。そう、それは佩刀歪にもいえること。あなただって、叩けば埃が出る体でしょう？　獰猛な獣のような、不穏で嫌な臭いがするわ」

斗米憐乃は。
妖艶に笑って。

「佩刀さんだつて人　殺したこと、あるでしょう？」

「おつ、おまえ……！　そんな、バカなこというな！　……謝れよ。歪に謝れよ。くだらない嘘だったこと　謝れよ！」

拳を作る。

崩壊する自我。

発狂する脳髓。

しかし。

「白夜様！」

歪が俺を羽交い絞めにした。後ろから抱きすくめられる。柔らかい感触。すうーと力が抜けていくのが分かった。

「おやめください」

「バ、バカかおまえは！　そんな根拠のないことを、人を殺したと、この女はいったんだぞ！　人の命の重さがおまえには分かるか？」

殺すなんて、そんな非生産的で、利己的で、恣意的で、くだらない、負の連鎖しか生まない、バカバカしいことを

唸るエンジン音。明滅するライト。飛び出る血。転がる頭。別れる胴体。突き出た骨。悲鳴。絶叫。歓喜。喝采。

もう二度と私たちに近づくな。

人殺しの子供など預かれるか。

おまえのせいでみんな死んだ。

連続猟奇殺人鬼の子。世紀の大犯罪者。呪いの胤たね。悪魔の生まれ変わり。

何様のつもりでおまえ、生きてるんだよ。

さつさと死んだほうが世の中のためなんじゃないのか。

誰にも愛されずに、死ね。

誰かにとつてのおまえは大事な存在になりえない。

被害者の遺族に死んで詫びろ。

もうおまえ、どうでもいいから、消えろ。

ぶっ殺してやる。

「私のために怒ってくださっているのですね。けどもう大丈夫です。矛をお納めください。私は大丈夫ですから」

「……歪」

「分かっています。白夜様が過去にどれほど辛い経験をなされたのか。白夜様にとって、『血』や『殺す』はいつてはならぬ言葉でしたね。さぞかし嫌な思いを味わったのでしょうか。けれどご安心ください。私がいいます。私がおなた様をお守りしますから。あなた様に仇なすものは全て、私が葬ります。ですから、怒りをお鎮めになられてください。白夜様は悪意が誰かに向かうと、その人を守ろうと身を挺して下さる優しいお方です。ですから、これ以上自分を責めないでください」

歪は子守唄を歌うように、ゆっくりとしたテンポでいった。後ろから両手を回され、優しく抱きしめられる。

その腕は所々すりむいていた。木目細かい肌から血が流れている。

思わずその手を握る。よく見れば、歪の腕には打撲傷のようなものがあつた。醜くはれあがっている。歪の頬にも、一筋の血が流れていた。

……そうか。

発作か。

よく見れば、俺の服は至る所に土や、凝固した血が付着していた。それが俺の血なのか、歪の血なのか。前者であることを願っていた。痛みが一気に襲ってくる。現状を認識した瞬間、猛烈な痛覚と、深い懺悔の気持ちに見舞われた。

「ごめん。こんな痛い思いさせて……。おまえは悪くないのに……。俺が悪いのに……。一方的に傷つけて、苦しい思いさせて……」

「苦しくはありません。白夜様の痛みは私の痛み。白夜様の苦しみは私の苦しみ。私はむしろ、心苦しい。私が愚かなばかりに、白夜様に辛い思いをさせているのだと思うと、胸が苦しいです。もっと早く気づけば、白夜様をよく見ておけば、と後悔の念にさいなまれるのです。ですから、辛いと感じたら、ぜひ私を頼ってください。

私が何を犠牲にしても、その傷を癒して差し上げますので。なにせ、私は白夜様の妻なのですから」

歪はにっこりと笑った。そして、首筋に腕を回して、その赤い唇を近づけた。

唾液と唾液が混ざり合う。歪は唇を深く押しつけて、舌を入れた。歯の裏筋や、口蓋の隅々まで舌を這わせる。歪は卑猥な音を立てて、唾液を飲みほした。

発作。

年に数回、起こる。

気持ちかたかぶった時、過去のトラウマとがリンクした時、それは起こる。

監禁された子供が、暗闇を怖がるように、篝火白夜という人間は、トラウマとリンクした状態で、『血』や『殺す』とかい言葉で聞く、箍が外れる。

三分間程度、鬼になる。

ウルトラマンじゃないんだから、なんて思いながらも、髪をかきむしった。金色の髪の毛が、はらはらと落ちる。

歪は何もいわず、ぎゅっと抱きしめた。

その様子を、斗米憐乃は興じるように眺めていた。

「意外と脆いものなのね。ちょっと刺激しただけで壊れる。夜のあなたはそうじゃなかった。どこか非人間的で、無機質だった。いや、違う。佩刀歪がいるから、かしら。愛の力？ 愛は人を弱くする

なんて。ふふふ。これだったら、壊し甲斐がないわね。あなたはもっと強靱で孤独で冷やかで鋭い人だと思っていたのに。中身はただの弱いだけの人間か。拍子抜けもいいところ。あなたなら、楽しく、愉快に、死んでくれるとばかり思っていたのに。あどけない処女をレイプするように。男を知らない少年に売春させるかのように。人の禁忌を犯して、この世のものならぬ快感を得られると思っていたのに。禁断の果実はとくに腐っていて、すでに収穫済だったわけね」

「斗米さん」

「何かしら？」

歪は斗米憐乃のほうに顔を向け、「続きを、よろしいでしょうか？」といった。言葉は震えている。歪のほうに首を回転させると、下唇がつり上がっている。

俺はこの表情に見覚えがあった。

表面上はわずかな変化だが、これは歪が怒りを抑えている時のサインだ。憤りを感じているが、優先すべきものが別にある。

歪は穏やかにも見える瞳で、斗米憐乃をみつめた。

何に怒っているのか。

誰のために怒っているのか。

「いいわ。私の知る範囲内なら」

「お願いします」

「随分と脱線しちゃったものね。そもそもそれが用件でしょう。ふ

ふふ。そうだったわね」と頬に手を当てる。

歪の手を取って、立ち上がる。

自分の掌を見る。血で汚れた汚い手。あの時の感触が鮮明に頭に浮かぶ。

肉をえぐる音。

骨が碎ける音。

体を壊す音。

気に入らない奴は殴って。

気に食わない奴は蹴って。

気に障る奴は潰した。

向かってくる敵は例外なく返り討ちにした。売られたケンカは全て買った。買ってポロポロになりながらも、勝った。勝って、より敵を増やしていった。結果、ほとんどの人間と敵対した。

けれど。

それでも暴力をやめることはできなかった。

それは中学校のころに顕著で、後先構わず力行使した。

篝火白夜は、おそらく、強い。

しかしそれは、守るものを持たぬ者の強さだった。

……しっかりとしよう。

叱咤。軽拳妄動を慎むよう、自戒。ちゃんとするんだと、自分にいきかせる。

「まず一週間ほど前の集団自殺について説明するわ。なぜ天体観測部の部員が夜の屋上に集まったのか だけど。いいかしら？」

首肯、先を促す。

「その日は天体観測部の屋外活動だったの。内容は夜の屋上にいつて、天体観測をするというもの。そのための許可はすでに学校から下りていたわ。そして集まったのは、私を覗いた六名の部員よ」「

「なぜ斗米さんは参加しなかったのですか？」と歪が質問。それは俺も気になるところだった。

斗米憐乃は自嘲気味に笑った。「風邪よ。私は幸運 かどうか

は分からないけど、病に臥していたのよ。だから集団自殺に巻き込まれなかった」

「なるほど。ただ、思うのですが、集団自殺はあらかじめ計画されていたものだったのでしょうか。だとすれば、その中に斗米さんは含まれていたのですか？」

「……どういう意味？」

「つまり斗米さんにも自殺の意志はあったのか　ということですが、斗米さんが屋外活動に参加しなかったのは、自殺開始日に急に死ぬのが怖くなったから。そういう解釈も可能です。だから、あなただけ自殺をしなかった」

斗米憐乃は感心したようだった。「ふーん。確かにそういう考え方もあるわね。けどそんなことないわ。私に自殺の意志はなかった。それだけはいえる」

「分かりました。ということは、屋外活動に参加しなかったのは、単純に体調がすぐれなかったから。そういうことですね？」

「ええ、そうよ。私は集団自殺には関わっていない。みんな勝手に死んじゃったのよ。おかしな話でしょう？　昨日まで普通に話していたのに、一日たったらもう会えないなんて」と儂げな表情で、歪を見た。

「集団自殺は誰かの手引きなのでしょうか」

「分からないわ。そうなのかもしれないし、そうでないかもしれない。今となつては誰にも分からない。そうでしょう？」

斗米憐乃は酷薄な笑みを浮かべた。

「転寝棗は」ぼそりと呟く。「どういう奴だった？」

「転寝　棗？　ああ、あの子ね。あの子は快活な性格だったわ。

その分信じられないわね。やっぱり表向き元気そうでも、内側には重いものを抱えているんでしょうね。それは大なり小なり、誰でも持っている心の暗部。あの子は　転寝棗はその闇が大きく濃いものだったのよ。だから　」

「死んだ、のか？」

「さあ？　そこまでは私も関知しえないわ。けどまあ、手首くらいは切ってたかもしれないわね。自殺志願者は自傷か他傷かして、今を繋ぎとめているケースが多いから。その発展形が自殺。取り返しのつかない、究極の、自己実現行為」

転寝棗が。

リストカット。

あまりにもかけ離れた二つの言葉。それでいて、妙にじっくりくる。

昼と夜。

転寝棗にとって、元気な姿が昼で、その裏にはもう一つの時間帯

夜が眠っているのかもしれない。

それが転寝棗に自殺をそそのかした。

夜が昼を覆う。

月が太陽になり替わる。太陽が隠れてしまう。

では。

どちらが本当に転寝棗だったのだろうか。

斗米憐乃と別れた後、俺と歪は帰路についていた。

特に言葉を交わすことなく、畦道を通る。頭上には灰色に塗り潰された空が広がっていた。気が滅入るような曇天。さっきまでは西日が射しこんでいたはずだが、雲に遮られたらしい。くすんだ暗雲は空に蓋をしていた。

天体観測部の集団自殺には不可解な点が多かった。その動機もだが、何より変なのが自殺することを誰にも悟られなかったことだ。

自殺という行為は多大な勇氣と氣力と必要とする。そういう氣配は表情やしぐさに出るものだ。やけにふっ切ったような表情。憂鬱としたしぐさ。そうした躁鬱は日常生活とは違った違和感として表出するはずだ。

しかし。

集団自殺したのは六人。それなりの人数であるにもかかわらず、周囲の人間は自殺の雰囲気を感じ取っていないようなのだ。歪もそう思っているらしく、気がついたら自殺していたような、そんな突飛かつ唐突なものだったらしい。

それくらい予備動作が皆無だったということなのだろう。事実俺も、転寝棗の言動に不審なものを感じたことはなかった。知り合っ
て間もないが、あれが転寝棗の常態だったと思う。

無邪気で元気。

それが転寝棗の印象だった。

加えて遺書もない。誰一人として書いていなかったのだとか。それが事態の不気味さに拍車をかけていた。

……何か裏がある。

そう踏んでいる。この集団自殺は明らかに奇妙だ。しかし、それ以上の結論は出そうにない。

視点を変えてみる。

なぜ自殺を決起し、断行することができたのか。

自殺とは生命活動上、俎上に上がることのない行為だ。自ら命を絶つ。そういう風に生物はプログラミングされていない。

自殺に生産性はない。何も生まない。悲しみだけが生まれる。負の連鎖。

自殺を考えたことはこれまでの人生の中で一度も、ない。苦しい、辛い、とは何度も思ったことはある。しかし、そこまで深刻化はしていない。胸底でくだらないことだと思っっているのかもしれない。自殺なんてバカだ。残された人はどうするんだ。その悲しみを誰かに背負わせるのか、なんて思う。

ただ俺が死んでも、誰かが悲しむとは思えないが。

「……自殺か」

ぼつりと漏らす。それは思春期の初々しさのような、安定しない危うさを持つていた。生と死の垣根をあつさり、それも自分から踏み越える。それはひどく背德的で、決定的な何かに背いている。それは倫理観や人権、そして生物としての欠陥を暗示させた。

「なあ、歪」

「なんでしようか」

「自殺って、どういうことなんだと思う？」

歪はさして間を開けずに、「代償行為だと思います」といった。

「代償行為？」

「はい。そうですね。例えばの話ですが　ダイエット中だからお菓子は控えたい。なので、お菓子は食べるべきではない。だから、代わりに祝詞（しよ）でも詠み上げて、その欲求を忘れよう　そういう心の動きが代償行為なのだと思います。本来の目的が達成できそうにない時、それに代わるものを用意して、実行する。そうして自らを納得させるのです」

「……例えばおかしいだろ」と所感が漏れる。普通、祝詞は詠まない。

「おかしくなんかありません。価値観の違いという奴です」といっ

て、ペロリと舌を出した。「それで、話を戻します。代償行為には、そうした転換は勿論、譲歩や妥協も当てはまります。それらしい理屈や理由をこしらえて、優先順位が一つ下のもので補うのです」

「……それが自殺とどう繋がるんだ？」と疑問に思う。鈍いからなのか、いまいちピンとこない。歪の説明は分かりやすいのだが、こちら側の理解度に問題があるのか、趣意を咀嚼することはできなかつた。

「自殺は自分を殺すと書きます。文字通り己を殺します。その行為そのものが代償行為なのです。現実を直視できない自分。全てが嫌な自分。弱い自分。それから逃げだすために、自分をこの世界から殺す。それなりに楽しい日々を送りたい。けど、色々なものが邪魔してそれができない。なら死のう。そんな実に単純で無駄のない、一連の思考によって自殺に至る。当然それに至るまでには、紆余曲折はありますが、基本的な流れはこういった考えに基づくものなのです」

「そんな簡単に人って死ねるのか？」

「死ねますね」とあっさりいい放つ。「人は思いのほか、逡巡も後悔もなく、死ぬことのできる生物です。自殺とは逃避ではないのです。自らを高みへと昇華させる、一種のイニシエーション。通過儀礼なのです」

自殺が通過儀礼……？

なら地球上の人間はみな、自殺を体験していることになる。だつたらとづくに人類は滅びている。

そういった趣旨のことを問う。すると、歪は淀みのない口調で答えた。「そうです。人はみな、自分を殺しています。自分を殺して今を生きているのです」

「そういうものなのか」

「はい。周囲と合わせるために自分を殺したり、高位次元にある欲求を満たすために、低位次元の欲求を我慢したり。自殺とはそれらの内面の動きが事象として観測されたもの。自殺は顕現化した事象

であり、自殺者本人もまた 事象そのものです。自殺するため
起動した、一つの運動。それは歯車にも似ています、自殺は歯車が
狂って起きることではなく、歯車が正常に稼働した結果、こうなっ
たというだけのこと。自殺は心の中で何度も起きています。それこ
そ日常的かつ恒久的に」

歪の持論は一般論のそれとは、一線を画していた。

自殺は通過儀礼。

一つの運動。

その日常性と恒久性。

「ただ、全てにおいて代償行為が当てはまるといっわけではありま
せん。代償行為とはあるものとあるものとを代替させることです。
しかし、世の中には代替不可能なものがいくつもあります。友情や
愛情と呼ばれるものですね。それらにおいて、代償行為を行うこと
は難しい。そもそも人間関係に『代わり』や『予備』を求めること
自体、ナンセンスでしょう。友情や愛情にそういったものは存在し
ません。存在しませんが、稀に友情や愛情を代替できる人種も
います」といって、「それはよく、偽善者などと呼ばれます」とも
いう。

斬新な意見だったが、正鵠を射ている、とは思う。歪はやはり聡
明だった。なんだかよく分からなかったが、納得してしまいそうな
勢いはあった。

代替不可能なもの。唯一無二の何か。

ない。脳内で何度か検索しても、それに該当するものはなかった。
それは己の中に大切なものを持っていないということなのか。大事
な物や大事な人がいないということなのか。

「友情も愛情も、ただ内面に投影する自殺とは向きが違うからでし
ょうか。これもまた、人間にしか持ち得ない感情の動きです。私に
とって白夜様がそうであるように、自分の中にある絶対的なものは
概して、友情や愛情を準拠にします。お金よりも確かで、権力より
も堅固で、名声よりも確固たるもの。それが愛です。私は常々思う

のですが、愛は地球を救うと思います。愛があれば戦争はなくなりますし、争いや争いも消滅します。みんな、運命の人を一人見つけるだけで、世界平和に貢献できます」

最終的には世界平和にまで広がった歪の話は、一旦そこで終了した。

自殺。

深く知りたい。転寝糞を死に追いやったものを、知りたい。その原因をつきとめたい。

そのためにはまず、自殺に関して知る必要があるように思えた。敵を知ることから始めるべきだろう。俺は自殺とか倫理とか、社説じみた話にこれまで興味を持ったことはなかった。

「おまえの家って、パソコン、あるか？」と問うと、歪は不思議そうな表情で、「ありますけど」と答えた。「それがどうかしたのですか？」

「ちょっと、知りたいことが、あるんだ」

「……そういうことですか。何かの調べ物でもするのですね？」と目をすがる。

何かを自殺とはいわなかった歪の優しさに感謝。

頷いて、「今からお前の家に行っていいか？」と聞いた。その際なんか嫌なセリフだな、と思った。無理やり彼女の家に上がりこむ彼氏みたいだ。

しかし歪は、「是非ともお越しく下さい」と快諾した。「喜んでおもてなしをさせていただきますので」

てつきり断られると思っていたので、拍子抜けした気分だった。それに今から行って大丈夫なのだろうか、といまさらながらに後悔する。

「今でいいのか、今で」と気がついたら、いつている。

「私は別に構いません。今日とは限らずに、気が向いたらいつでもいらしてください。歓迎しますので」と歪はにっこりと笑って、方向転換。田舎道を西する足は、日和見神社の方角に向いていた。

猩々緋の鳥井を抜けると、向拝こうはいの設けられた本殿が見えた。形式は床の高い春日造で、丹塗りが特徴的だった。

佩刀家の居住地は、境内の裏手にあるらしい。

歪の案内で、神域を通り抜ける。瑞垣みずがきの脇には、火のように赤いひなげしが咲いていた。

「こちらでございます」と歪は玄関の引き戸を開けた。「お入りください」

「入るぞ」といって、入る。踏んだ床は檜皮色ひわだいろに煤けていた。

物音は、ない。縁側からの風音が時折聞こえる程度。「誰もいないのか？」

「はい」と抑揚のない返事の後、「この時間、父上は本殿にいますので」と続ける。

「じゃあお母さんは？ いないのか？」

歪は珍しく苦虫を潰したような表情で、「死にました」とだけいった。

謝罪の言葉をいいたかったが、何か喉奥でつかえた。それは一ピース欠けたジグソーパズルをしているような、根拠のない違和感だった。

数秒の時間を要して、ようやく口が動き始める。「悪い。嫌な」と訊いちまって……」

「構いません。お気になさらないでください」

やはり無表情のまま、そんなことをいう。人形のように美しい顔が、冷凍保存されたように固まっている。本当に人形のようなだった。

歪は木造の階段を指差し、「足元にお気をつけ下さい」と注意を促し、「私の部屋は二階ですので」と重ねる。

「分かった」

「廊下の奥に私の部屋があります。それ以外の部屋は全て、物置ですから、一目でお分かりになると思います」といって、階段を上った。後続く。

足元にお気をつけ下さいといっていたわりに、階段の作りは頑丈だった。ギイギイと悲鳴のような音はしなかった。

歪のいつていた通り、それは一目で分かった。奥の部屋は人の残り香のような、そんな気配を滲ませている。奥の部屋以外は、固く閉ざされていた。すえたようなにおいがする。「なんだこれ」

「物置です」

「いや、中に何かがあるん」

「物置です」と遮られる。俺は黙した。

歪が部屋の扉を開ける。すると、中から妖しげな、甘い匂いが漂ってきた。前に練絹玉梓の家でかいだ匂いとは、種類の違うものだった。ただ女の子の部屋は、決まって、妖艶で芳しい^{かぐわ}。

歪の自室は、本人の性格が反映されているのか、無駄なものがあまりなかった。整頓された勉強机に、丸型のテーブル。簡単な調度に、隅には蒲団が畳んであった。装飾品の類はない。ただ本棚には、古めかしい書物が並べてあった。

「粗末な部屋ですが、おくつろぎください。お茶菓子を持ってまいりますので」と一礼して、部屋から退出した。

一人。

残される。

どうしたものか、と思う。なんだか妙な罪悪感が湧いた。勝手に女の部屋に不法侵入しているような感じ。

と。

ふと、思う。

これは佩刀歪という人間を知るチャンスなのでは？

歪は謎めいた女、という印象が俺にはあった。学校生活はよく知らないし、私生活もまた想像がつかない。この女は果たして、どういう風に生活しているのだろうか。
霞かすみを食っているわけでもあるまい。ただ歪の主食が霞でも、驚かない自信がある。

辺りを見渡す。茶色の箆笥たんす。大量の群書。鍵のかかった窓。羽毛の蒲団。年季の入った机。

立ちあがる。座っていて見えなかったが、机上に何かがあるのが分かった。

整理された机。その中でぽつんと、アルバムのようなものが机の上に置いてある。

……アルバム。

もしこれが、歪の小学校や中学校時代のアルバムであれば、少しは歪について知れるかもしれない。将来の夢だとか、その頃の思い出だとか、書いてあるかもしれない。

しかし。

題名やタイトルは記されていない。ということは、そういった類のものではないということか。

では、なんなのか。

分からない。分からないが、それでも面妖な気が滲んでいるのが分かった。

唾を飲み込む。躊躇や逡巡が駆け巡る。しかし、それ以上の好奇心が湧きあがった。それは現場の遺留品をこっそり盗みだすような不穏な探究心と、よからぬ冒険心が混合していた。ダメだとは思っても、体は脳からの命令を無視する。

片づけ忘れたのだろうか、と無関心を装って、手を伸ばす。

一ページ目はあらかじめ設けられた白紙だった。

一息ついて、パラパラとページをめくる。

連綿と、めくる。

すると、目の網膜が見知った少年を映し出した。それは無数の写真や切りぬきの中にいた。

少年は金髪に釣り目。百七十センチのやせぎすの体をだるそうに動かしていた。中学校の頃からスクラップしているからなのか、ページを進めていくごとに少年の年齢は上がっていく。それは実験用のモルモットの観察日記を見ているようで、不思議な気分だった。

一ページごとに、三枚の写真が貼付ちゅうぶしてある。それぞれの写真には数行のコメントが書かれてあった。

傘を指さずに雨の中を走っていく少年の写真には、「風邪をひくから次はちゃんと傘をさしてね。心配だから、後で熱を測りに来るから」とコメントが添えられている。その下の写真には、自室で蒲団にくるまる少年と、体温計を持った少女の姿があった。

コメントには、「どうやら熱はないみたいだね。けど、安静にしてなきゃダメだよ」と書いてある。それには日付が書き添えてあって、「1988年。6月4日。土曜日」とも書かれてあった。

今から三年前のものだった。さらにもう一枚。一番下の写真には、熟睡する少年の頬に口づけする少女が写っていた。「バイバイ。また明日ね」と書き記されている。

それらの写真の横には、中途半端に長い金色の髪の毛と、短いシートが張りつけてあった。「またコンビ二弁当？ そんなんじゃ、健康に悪いよ。もっと栄養のつくもの食べなくちゃ」と寄せている。他にも見てみる。

数秒して、後ろ側のページに行きつく。どうやら一日一ページと

決めているらしく、このアルバム自体が一年分の観察記録として機能しているらしい。最後の数ページには、何行にも渡って少年のフルネームが延々と綴られている。そして、少年の名字と少女の名前を組み合わせた名前もまた、膨大な筆力で紡がれている。

赤いマーカーで。

何度も何度も。

何ページにも渡って。

執拗に。

偏執に。

無言で閉じる。

と。

「お待たせいたしました」

数秒して歪が入ってきた。

歪はテーブルに顔を突っ伏す俺に不思議そうな視線をくれ、「どうかしたのですか？」と問うた。

その質問には答えず、「水羊羹か」と頭を上げた。「好物だ」

「そうでございますか。私も好物です」といって、静々と可憐な笑顔を見せる。「用意した甲斐がありました」

歪はテーブルにお盆を乗せた。二人分の水羊羹とお茶を置く。そのまま向かい側に腰を下ろした。

「……どうかなさったのですか？ 顔色が悪いようですが」

「なんでもない。それよりもパソコンは？」

「押し入れの中です。今取り出しますね」と歪はやはりたおやかに立ち上がった。一瞬、視線が机のほうに向かう。

無表情だった顔つきに変化はない。

歪は押し入れに向かう前に、机上のアルバムをさりげなく片付けた。そうして、体を方向転換させる。

腰まで届く黒髪。スマートな肢体。スカートから伸びる足は健康

的な肌色で、無駄な肉がない。

差しだされた水羊羹に手をつけず、注がれたお茶にも手をつけず、歪を待つ。ちょうどノートパソコンを棚から出しているところだった。

「旧式ですが、よろしいでしょうか」と確認を入れる。頷くと、歪も頷き返し、ノートパソコンを広げる。コードを繋げ、電源を入れた。

ディスプレイに青い光が点る。歪はこちら側に画面を向けた。「お好きなようにお使いください」

「使い方が分からない」

「まず検索エンジンを呼び出す必要があります」と嫌な顔せず、講釈してくれる歪。「eの形をしたアイコンにカーソルを合わせるのです。そしてマウスで右クリック。すると検索エンジンが表示されます。お分かりでしょうか？」

「アイコンってなんだ？」

「アイコンとは各種の機能を絵や図柄で画面上に示したものです。アイコンをクリックすることで、それに呼応した機能を扱うことができます」

「……クリック？」

「マウスのボタンを押してすぐに離す動作のことを指します。こう力ちつと指で操作します」

「……魔法の箱ってわけでもないんだな」と嘆息する。「ある程度の操作は必要なのか」

「科学は魔法の領域に近づきつつありますから、あながち嘘というわけでもないでしょう。続きをよろしいでしょうか」

「頼む」

「私を先生と呼んでも構いませんよ」と笑い交じりにいわれる。

三十分ほどでマスターした。

歪の講釈は明瞭で理解しやすかった。簡単な動作なら、どうにかできるようになった。

検索ボックスに「自殺」とタイプしても、歪はやはり無表情だった。意見するつもりはないらしい。黙って画面を見ている。

膨大な数のサイト。とりあえず一番上のサイトをクリックしてみる。

どうやらそのサイトは、心理学的な立場から「自殺」について考察するサイトのようにだった。やけに小難しい専門用語が乱舞している。

手に負えない、と判断し、サイトを閉じた。無知な自分に自己嫌悪しながらも、手当たり次第に次のサイトへアクセスする。「また心理学系か」

「白夜様」と呼びかけられる。「お言葉ですが、検索の仕方を少し変えてみてはどうでしょうか」

「どういう風に？」

「普通に『自殺』とだけ検索すれば、このように心理学的、文学的な立ち位置による情報が多数をなします。ですから、例えば 例えの話ですが、もし自殺志願者や自殺に苦悩する者の声を聞きたいのなら、自殺掲示板などを覗いてみるというのはいかがでしょうか」

例えばといってくれる歪は、やはり優しい奴だった。

「そうしたのであれば、『自殺掲示板』や『自殺志願者の気持ち』といった風に検索するのが上策かと」

「その策もらった」と検索ボックスにカーソルを合わせる。歪のいうとおり、「自殺掲示板」とタイプ。適当にサイトを選んだ。

ネットサーフィンを続ける。のべつ幕なしに自殺関連のサイトが登場。極端な厭世主義や、投げやりな享楽主義。破綻した楽観主義や、遊び半分のサイトなど、枚挙に暇がない。

しばらくの間、サイトを漁る。

すると。

奇妙なサイトに行きあたった。

背景はなぜか神社。

サイト名は「天岩戸」あまのいわと

なんだこれ、と思う。これが果たして自殺掲示板なのだろうか。

にしては背景がおかしいように思えた。自殺という暗澹とした雰囲気と噛み合っていない。

しかしそれは杞憂だったようで、トピックスには滅入ってしまった内容のものばかりあった。愉快的死に方。楽な死に方。一度はしてみたい死に方。お勧めの死に方……。

「……変な掲示板だな」と思わず、そう漏らす。死に方云々以前に、なぜ神社の神前を選択したのだろうか。「製作者の意図が分からない」

「白夜様は古事記をご存知でしょうか」と歪が尋ねる。いきなりの方向転換。歪の意図もまた、分からなかった。

当然のことながら、ほとんど知らない。ただ前に斗米憐乃と会った時、そんなことをいつていたような気もする。

分からない、という歪は古事記について説明してくれた。

「古事記とは、簡潔に言えば日本最古の歴史書です。稗田阿礼ひえだのあれが暗唱した帝紀や旧辞を元明天皇の勅によって選録されたものですね。

内容は日本の神々 天地創造の話でしょうか。このサイトにある天岩戸とは、古事記に登場する有名な地名の一つでもあります。これは宮崎県にある天岩戸神社ですね。天照大神を祭る神社です。天照大神とは那岐神いざなぎのかみによって創造された三貴子の一人です」

「……おまえ」と口ごもる。「やけに詳しいな」
歪はやんわりと笑って、「神社の跡取り娘ですから」とかわいらしく笑った。「これくらい知識はあつてしかりです」

転寝鈴蘭も日本の古典に詳しくったのを思い出す。前に何度か話したことがあるが、彼女はその分野に通暁していた。古事記やら日本書紀など、国学の造形は深い。歪にも劣らないのでは、と思う。

方や陰陽道の一派、方や能楽の名家。通じるものはあるのだろう。幼いころから古典常識を叩きこまれたに違いない。

「なるほど。サイト名が天岩戸とは。皮肉というか、滑稽というか。どちらにしる製作者のバカバカしくも禍々しい思いは汲み取れますね」

「どういう意味だ、それ」

「自殺とは非常にバカバカしい行為です。それでいて人々をひきつける。その禁じられたもののみが帯びることの許される神秘。悪に魅了される、思春期の子供のような純粹さを持っているからでしょうか。死というのは概して、民族や時代の壁を越えて畏怖や憧憬の対象となるものです」

歪は濡れたように艶のある眉を沈めた。

「話を戻しましょう。天岩戸とは、天照大神が身を隠した岩窟なのです。詳細をいえば、須佐之男命すさのおのみことの乱行に憤慨した天照大神が、怒りのあまり隠れた場所が天の岩戸です。天照大神は日輪を司る、太陽の神です。太陽の神が窟に身罷ったことで、太陽は沈み、光を失った世界は闇に包まれた。古事記ではそう記載されています」

太陽が沈むね、と心の中で呟く。神話ならではの荒唐無稽な話。

「光なんてない。この世に希望という光なんてものはない。てことか？ だからサイト名が天岩戸。明日への展望が見えないから、世相への皮肉も込めて、天岩戸だと、そういうことなのか？」

歪はパソコンの画面を見て、「これの真意は製作者にしか分かりません。ただ可能性は高いと思います」と静かにいった。

どうやらこのサイトの制作者は、明確な意図があつてこのサイト名をつけたらしい。

サイトの冒頭には、とある一文が記されていた。

魚心あれば下心。飼犬に手を噛み潰される。水清くなくとも魚棲まず。世界なんてこんなもの。社会なんてこんなもの、情があつても、恩があつても、志があつても、結局全ては無駄になる。そんな

腐った世界はこりこりだ　そんな人を歓迎しています。

それは無邪気な遊び心と、致命的な悪意が見え隠れしていた。軽妙で意向が凝らされた文辞。だが、どこかいびつだった。

掲示板をスライドしていく。人の数だけ悲愴と、後悔と、悪意と、善意が詰まったスレッド。それは果てのない地平線を思わせる。と。

見覚えのある単語が目端をかすめる。それはサイト主からの投稿で、スレッドの一番上にあつた。

指が勝手に、その箇所をクリックしていた。

来週の日曜日、　村の　高校の屋上で、集団自殺しちゃうぞはあと。自殺するのは全員部活仲間です。一人で死ぬのは怖いのでみんな仲良く、満天の星空を眺めながら、優雅にカツコよく死にたいと思いまーす。もしかして新聞で報道されるかも？ 私たちの活躍にこうご期待！

書き込まれたのは、今日から約一週間前だった。それ以来、作者の書き込みは、ない。よく見たらサイトの案内文にも、「サイト主は三途の川を渡りました」と書いてあつた。

死んだのか。

仲間を道連れにして、死んだのか。

「くだらねえ」とは思うも、同時に引つ掛かりも感じた。これと同じ状況が、前にもあつたような気がする。

スライドさせていく。何個かコメントや、それに対する返答があつた。

曰く、「がんばってください。応援してます」だとか、「私の分まで死んじゃってください！」だとか、「来世であなたたちに会えることを願ってます」だとか、「おっけー。私も便乗しよつと」だとか、そんな一切合財を履き違えた文がどこまでも伸びていた。

下のほうには、これとは別に集団自殺予告があった。仲間募集と書かれている。

またこのサイトの慣例として、自殺志願者を募って集団自殺を行う場合、一日限りの会合を開くのだそうだ。残り少ない余生に心残りはないか、みんなで話しあうのである。

悪意はどこにでも住みつく。本人がそれを悪意と認識しなくとも、自然と悪意に結びつく。それは人の頭の中にも、インターネットにもいえる。匿名性に加護された悪意は、拡散し、伝播し、他の悪意と相乗する。

それは篝火白夜の父母にもいえる。彼らはやはり、悪意の塊だった。悪意でのみ成り立ち、悪意のために生き続けるような、悪意の権化だった。

その所業は紛れもない悪だった。自殺を推奨するなど、社会の根幹を揺るがしかねない。

しかし。

悪意は混じり気のない無垢とした想いのような、そんなものが混合している場合もある。

そういう点では、篝火建策も何かに取りつかれていたのだろう。妄執は時として、あらゆるものに勝る。人間としての規範や範疇といったものから、たやすく乖離できる。妄執は違った意味で人を強くする。篝火建策が殺人を断行できたのも、あれが普通に狂っていたからだ。根本的なものを度外視しているものの、筋はちゃんと通っている。一見して脈絡のない行動原理にも、何らかの条件は存在する。

狂うということは思いのほか論理的で、理路整然としていたりもする。

それでも。

この掲示板は何かが違う。

サイトを読み進めていくうちに、そういった思いが強くなる。

この掲示板は、どこからどう見ても頹廢的。廃墟をネオンで裝飾

しているような、積極的な無意味さが窺えるのだ。見てみると嫌な気分になる。そして、得体の知れない恐怖をも感じられる。

サイトを閉じる。歪に教えられたとおり、しかるべき手順に沿って、シャットダウンした。

「もう、よろしいのですか？」

「まあな。あらかた情報は手に入ったし、後は」

食って、寝て、考えが醸成するのを待つだけだ。

「お帰りになるのですか？」

「時間も遅いだろ」

「お茶菓子を口にしておられないようですが」

「腹、減ってなかったんだ」

「一口くらいお食べになつてください。お手製の羊羹で、前々から白夜様にお食べになつてほしかったのです。ああ、勿論、変なものは入ってはいませんよ」

「変なもの？」

「……いえ、なんでもありません。それよりも、いかがでしょうか」

「いらない」

家に帰ってあり合わせのもので持ち合わせる。台所には不健康なインスタントラーメンしかなかった。

誰もいない部屋で一人、湯を沸かす。感覚が麻痺しているのか、それとも歪と顔を合わせたばかりだからか、寂しさはさほど、ない。テレビをつけて、ぼーっとする。視線は窓外を彷徨っていて、視界には黒で塗り潰された風景があった。

様々な出来事が頭の中に想起される。

名伽狭霧のこと。

転寝棗のこと。

転寝鈴蘭のこと。

斗米憐乃のこと。

そして。

佩刀歪のこと。

思う。

佩刀歪という奴は、色々な意味で規格外 埒外だった。常人には持ち得ない魅力や、ネジの外れた感性を持っている。

持っている奴は持つてるし、持つてない奴は一生持ち得ない何か。ベクトルこそ違うが、それは転寝棗だって、転寝鈴蘭だって持っている。周囲を魅了するという点では、相違ないのだと思う。

しかし双子の方割れは自ら命を絶ち、もう一方は暗涙に咽ぶ運命を辿った。

救われない。

なぜこうなったのか。

なぜ転寝棗は死ななければならぬのか。死ぬことに理由なんているのか。

あるいは。

殺されたのか。

そんなバカな　とは思う。　思うが、そうだとしたら、自分はどうするだろうか。その犯人に動機を問いたただすのか、鉄拳制裁を降すのか、自分勝手な復讐を断行するのか。

それとも。

何もしないのか。

死ぬとか、殺すとか、くだらない。

よく日常会話で、「おまえ、死ねよ」とか、「殺してやろうか」なんていうセリフを耳にする。それを聞いた俺は、心のどこかで、「それだけの勇気と覚悟が、おまえらにあるのか」と尋ねたくなる時がある。「そんな簡単に、乱雑に、一人の命を、あっさりと奪えるほど、おまえたちは強い存在なのか」とも思う。

冗談半分にいつているのだろう。しかしそれを冗談として聞きながせない自分がある。家庭環境のせい、周囲の偏見のせい、そういうことには敏感だった。

ただ。

そういうことを　冗談半分で人を殺せるような連中は、結構いる。俺も数人知ってるし、これから現れたりもするかもしれない。

カップ麺はとくに伸びている。気がつけば何分も長考していた。窓の縁に腰をおろして、うまくもないカップ麺を食う。眼下には固定された夜景と、満天の夜空があった。

ゆるゆるとだが、考えが収束していく感じはある。夜という時間帯は不思議だ。思考が緩慢になる。すると思ってもよらぬ考えが頭に浮かぶ。それは夜が、忘却と再生の時間だからだろう。流転する万物の分水嶺^{ぶんすいれい}。ある種の境界線を引く役割を、夜は持っている。

「……寝る」

寝ることにする。

憂鬱な今日も終わりだと、そう思いながら。

仲夏^{ちゅうか}。

緑滴る頃、五月は下旬の折へと至る。転寝棗の訃報から一週間がたった。

俺はいつも通りの仏頂面で、コンビニに居座っていた。時計の針は午後十時辺りを指していた。

いい加減立ち読みにも飽きた。さすがに二時間以上読み続けたからか、腰が痛い。

雑誌を本棚に戻して、適当に菓子パンを選びとる。そうしてレジに並んだ。立ち読みするだけ立ち読みして、何も買わないとは非礼だろう。と残りわずかな良心が訴えかけていたからだ。

人間には惰性という桎梏^{しごく}に縛られているので、立ち読みは一度始めると、なかなかやめられない。気がつけば続きを読んでいた。

もしかしたら、他にも自殺に関する記事や考察が記載されているかもしれない。

そう思って、転寝棗の自殺記事を読みふける。棚に並んでいる口カル雑誌全てに目を通し、時の流れを忘れている自分がいた。

なぜか前列の人に前を譲られ、店員は必死そうにレジ打ちをして平身低頭と一礼をされて、追い出されるようにコンビニから出た。

鮮やかな深更。

夜半の小川はそよそよと揺れる。打ち水がしてあるのか、涼身のある風が吹き抜けてきた。

レジ袋を片手に、夜道を歩く。ここは登下校の際に通る^{そよみち}岨道^{そよみち}だった。

しばらくすると雨稜高校の正門が見える。夜に見る学校は、どこか非日常の気配がして、やけに荘厳だった。

光が蠢く。

それは学校の屋上からだった。光が断続的に瞬いている。それは星の煌めきや、月の輝きでもなかった。

「……妙だな」と思う。屋上は例の集団自殺のせいで、立ち入り禁止のはずだった。

思い直す。考えてみれば、夜の校舎に忍び込む奴が、そんな約款を守るはずもない。一応学校側も警備員を雇ってはいるが、さすがにこの時間にはいないだろう。

だとすれば。

仮定が確信へと変わる瞬間は、人生で比較的多く存在する。

五月二十六日。

門の柵をよじ登り、校内に侵入。第二校舎の玄関に入り、屋上へと向かっていった。

誰もいない。静寂しかない。

窓からは月明かりが漏れていて、イタズラに影を伸ばす。

無人の校舎を無断で走り抜ける。

屋上へと続く鉄扉。本来なら鍵がかかっているはずだが、なぜか開いていた。

それは。

つまり。

解があるということだ。

扉を手で押す。たたらを踏みながらも、コンクリートのタイルを進んだ。

そこには。

「こんばんわ」

少女は笑った。

片手には消えそうな線香花火。鴉の羽のような黒髪は、夜風にはためいている。

それはお伽噺のような不自然な光景。どこか嘘の香りがする、日常とは乖離した世界。

俺はくしくも、死神然とした少女と再び出会った。

やはりこの少女には、夜が似合う。

少女は屋上の鉄柵の前で、深々とたたずんでいる。右手にはなぜか線香花火。燃え尽きたらしく、線香花火の芯はくすぶっていた。

「やっぱり、あなたには夜が似合うわ」とセリフの焼き回しのようなセリフ。「髪の色も倒錯的で、性格も実に頹廢的。加えて白夜っていう名前も、なんだか背德的だわ」

「夜がついてるからか？」とかいう。同時に、だからなんなんだとも思う。名前に「夜」のような妖しげな漢字が含まれているくらいで、背德的であるとは限らない。それともこの少女は姓名判断師となりわいになっているのだろうか。

名は体を表すとはよくいう。ただ、名が心を表すことは、ほとんどない。それが篝火白夜の本質、というわけでもないだろうに。

少女は頭をふった。「半分正解、半分不正解ってことかしら」

「俺の答えは五十点か……」

「ちなみに上限は二百点っていう設定よ」

「七割強落としてたのかよ」といって、なんだそりゃ、と呻く。理不尽な。

「そんなことはどうでもよくってよ。それよりもあなた、“白夜”という現象を知らないのかしら？」

それなら知ってる。ずっと昔、父親が苦笑交じりに教えてくれた。

白夜という現象は、南極・北極近くの地方で見ることのできる、特異な自然現象だ。

それは夏に起きる。その内情は、日没から日の入りまでの間、太陽の反映で空が薄明るいままになるのだとか。
つまり。

「夜がないってことよ、あなたには。ずーっとずーっと、昼のまま。闇を体験したことのない、純粹培養の輝かしい未来そのもの」

親父もそういつてたよ、とはいわない。父の言説に感動して、父のようになりたいと思ったことも。

夜がないということは、太陽が沈まないということである。植物は日の光を浴び、動物は昼の野原を駆け、人間は日輪の恵みに感謝する。太陽は森羅万象の根源であった。

では。

昼がない、と仮想してみる。太陽はやがて沈み、月光の暗い残影のみが地表を照らす。植物は月の光に枯れ果て、動物は夜の草むらに怯え、人間は月輪がちりんの影と共に生きる。

それは。

まるで。

あまのいわと天岩戸のようではないか。

白夜と天岩戸。

天岩戸と白夜。

正反対の。

事象。

「まるで」と呟く。「まるで、ここに来るのが分かってたみてーな口ぶりだな、斗米憐乃」

「確かにそうかもしれないわね。けどまあ、あれね。夜だからかしら」と少女は含んだような笑顔を浮かべ、「夜はどんなことでも許される魔法の時間。空想でも、幻想でも、仮想でも、妄想でも何でも許される」と童話のような言の葉を口ずさむ。

「俺の登板もまた、あんたの予想範囲内か」

「ふふふ、一つ上の先輩に“あんた”はないでしょう？ フルネームで呼ぶのもあれだし、あなたとか斗米さんとかにしなさい」とたしなめられるようにいう。目は異常に澄んでいる。

「誰かに指図されるのが嫌いなんでね」

「だから不良になったのかしら？ 無鉄砲で無軌道で、危うい存在にあなたはなりたかった。そうすれば他人の指示を受けることはなくなる。いや、単に人間関係が複雑になるのが嫌だったのかしら。だから、最大限他人とのかかわりを避けてきた」

……痛いところを突いてきやがる。

その通りだった。自分の内面を見透かされているようで、気分が悪い。

「あなたは耐えようのない閉塞感が怖かった。暗闇が、孤独が、怖かった。かといって、幸せもまた、怖かった。それなりの幸福が、自分には不相应に思えて、怖かった。あなたはそうした矛盾をいくつも抱えている」

「……矛盾のない人間なんかいない、くらいの弁解はするぞ。矛盾や葛藤のない人間は、人間とはいわない。人の皮を被った何かだろうが」

「それは暗に、佩刀歪のことをいつているのかしら？」

「……………」

なんだよ、この女。歪をバカにするな。虚仮こけにするな。けど。

あいつは。

あいつは。

どっかがおかしい。

「絶句　なんて年頃の女の前でするものじゃないわ。態度がなつてないわね、態度が」

「……余計なお世話だ」

「おまけに頭もやわい」とくすくす笑う。

「……だろうな。いつどこで、こんなにバカになっただんだか」

「安心して頂戴。元からバカだから。あなたは初めから、壊れて、狂って、どうしようもない存在だもの」と小動物を憐れむような声を向ける。

斗米憐乃の持つ線香花火を見る。残滓のような火の粉が、コンクリートの床に落ちた。「この時期に線香花火なんかするか、普通？」線香花火の季節といえば夏である。旧暦で換算すれば、五月は夏であるが、やはり七月や八月にするような印象はある。

そんな季節はずれな代物を、なぜかは知らないが夜色の少女は持っていた。しかも実際に使用している。その光景は幻想的ではあったが、ちぐはぐなイメージがまとわりつく。季節感が欠如しているのが主な原因だと思うが、斗米憐乃それ自体が、何やら、存在がまがいものみたいだからだろうか。

「好きなよ、花火」と穢れのない稚児のような笑み。「一瞬で燃え尽きるような、生と死を行き来するような、動と静が相反するよ。うな、そんな感じが好きなよ。そのわずかな時間を味わえるのは花火しかないじゃない」

「随分と刹那的だな、あんた」
「惰性と諦念で生きるあなたとは違うのよ。人生なんて点の集合体だわ。だから刹那的とか、そんな表現はデタラメなのよ。人生は順序。陸続きの過去とか、現在とか、未来とか、ない。そんなことから、一瞬の美が分からない。死の美学も、哲学も、陶酔も、見出せない。死ほど素晴らしい一瞬はないのに」

斗米憐乃は二本目の線香花火を出した。コンビニか何かで買ったのか、近くにビニール袋が置かれている。袋からはチャッカマンや数本の花火が見えた。

壁に背を預ける。ひっそりと深くなる夜を感じ取って、ふうと息を吐く。

炎々と花火が猛る。

煌々と火花が散る。

皓々と月光が差す。

啾々と羽虫が鳴く。

「……なあ」と一言だけ、声をかける。「なんであんなことしたんだ？」

斗米憐乃は小首を傾げた。意味が分からないと、顔に書いてある。

「あんなこと……？ はて、なんのことかしら？」

「なんだ。自覚がなかったのか」と呆れた風にいうが、実際のところさほど呆れてはいない。ただ無常感のような、儂い感情があるだけだった。「あんだだろ。集団自殺の首謀者は」

「……え？」と斗米憐乃はあっけにと取られたような、実にかわいらしい声を出した。それは先ほどまで聞いていた酷薄な声ではなく、無邪気な子供のようだった。

「だからな」と懇々と諭すようにいって、「天体観測部の集団自殺は、斗米憐乃。あんたが糸を引いてたつてことだよ」と語尾を荒げることなく、静かに述べる。「天体観測部の連中を自殺させたのも、転寝棗を自殺させたのも、全部あんたが一枚どころか千枚くらい噛んでたんだ」

「……突拍子もない話ね。いきなり何をいいだすかと思ったら」

「確かに突拍子もない話だな。それは俺も自覚している。けど」

「けど？」

「結構、自信、ある」と自信がなくて、片言になる。「だからこんな、探偵みたいなおことをするんだよ」

「ぜひ聴講願いたいわね。私も興味あるわ。あなたのくだらない、法螺話のような、与太話のような、荒唐無稽で稚拙な推理を」と冷静な自分を取り戻したのか、地を這うように安定した声色。「そして、観察させてもらうわ。私の舌鋒の前に、たやすく持論を論破されて膝が崩れるあなたの、愚鈍で、傲慢で、粗悪な自信が瓦解する様を」

「……性格悪すぎだろ、あんた。あれだけ長い文を舌を噛まずにいえたことが驚きだよ」

「軟弱なあなたとは鍛え方が違うのよ」

「違いない、と嘲笑して、「あんたのいうとおり、俺の推理は劣悪で、乱暴で、こじつけの暴論。状況証拠ばかりで構成されている。いってみれば空想の産物と変わらないんだが　今となつてはもう遅い。あんたは逃げられないぞ、この俺からな」とかいよいよ放つ。

「きっかけはとある自殺サイトだ。そのサイト名は 天岩戸。おそらく古事記からとったものだろうな。これは歪の請負なんだが、天照大神が一時隠棲した岩窟だ。これくらいはあんたも知ってる？」

「勿論。で、それがどうかしたのかしら」と斗米憐乃は問う。凜と澄み切った双眸は、無感動に俺を見つめていた。

それほど間をためることもなく、「あのサイトの製作者 あんただろ」と単刀直入にいった。

斗米憐乃は無表情のままだった。能面を顔にかぶせたような、そんな一切の色彩が抜け落ちた表情。

無反応ではあるが、構わず続ける。「そのサイト 天岩戸には、集団自殺をほめかすスレッドがあった。そしてそれは、雨稜高校における天体観測部の集団自殺を彷彿とさせるものだった。コメントに書かれた内容と、天体観測部の集団自殺には似通った点がいくつもあつたしな。部活仲間と死ぬとか、夜空を眺めながら死ぬとか。ほら、まさに天体観測だろ、それ。つまり、無理やり結論付けてみれば、あのスレッドは実は 雨稜高校天体観測部の集団自殺予告そのものだったんだ。いかにもバカバカしくくだらないだろ？ けど、違うんだよ。この妄想のような推測を現状に当てはめてみれば、ぴったりと符合するんだ。奇妙な個所が全て縫合されるんだよ」

「奇妙な点？」

「そうだ。この自殺サイト 天岩戸には不可解な点が多い」といって、「まず一点目」と人差し指を立てる。まさに探偵の動きそのものだ。「それはサイトに書かれていた地域の共通性だ」

「地域の 共通性？ …… そんな自殺サイトに何らかの規則性があるのかしら」と若干の間を作る。その間隙を慰めるように、一陣の風が吹いた。

「それがあるんだ。それもひどく簡単な　分かりやすい法則が」といって、「それは　日和見村を中心にサークルを形成しているということ」ともいった。

斗米憐乃は不思議そうな顔をした。漆黒の瞳が、闇にとける。服装も真っ黒だからか、彼女の姿は渾然と闇に紛れこんだ。

ただ。

それでも、火の穂は赤々と存在を誇示していた。それだけが斗米憐乃の位置を示している。

「日和見村周辺の地図を用意する。そこに天岩戸に書かれた自殺予定地や、サイト内で登場した場所を、マーカーで塗る。するとどうだ。県を一つか二つかまたいではいるものの、日和見村を中心にして、地名が展開されていたんだよ。それもそのはずで、天岩戸には製作者の住む県のみホームページが閲覧できるよう、検索サイトに登録してたんだから。天岩戸はいわば、地域密着型の自殺サイトだったんだ」

斗米憐乃もだんだん飲み込めてきたらしい。「あなたのいう天岩戸のサイト主は、日和見村か、あるいは日和見村の準じる　県の住人もかもしれないってことかしら」

「その可能性は高い。プラスして自殺の決行日は、ほぼ百パーセントサイト主が決定する。勿論場所もな。それは決まって休日。自殺志願者も提示された日にちや場所に不平を漏らすことなく、従順に集合する。当然だろうな。これから自殺するのにいちいち曜日だ場所だと拘泥する奴はなかない。仏滅だから死ぬのは縁起が悪いとか、笑えてくるだろ。自殺志願者にとって大事なことは、時間でも場所でもない。同じ志を持つ仲間と共に死ぬことと、それを温かく見守るサイト主が来ることだけだ。それ以外のことはどうだっていいんだよ。　ああ、いい忘れていたが、この自殺サイトの恒例で、決まってサイト主が集団自殺の前に会合を開くんだ。そこで自殺志願者は人生最後の愚痴をいったり、懺悔をしたり、苦しみや悲しみを吐露する。そういう自殺前の儀礼があるんだ。んで、死ぬ

わけだ。自殺志願者はそうやって、唯々諾々と、サイト主が用意したレールに乗っかって　死ぬ。そしてこの事実はある可能性を示唆している」

「……何かしら？」

「決行日が休日ってことは、サイト主は昼間に暇してるってことだよ。おそらく、サイト主は学生かニート、あるいは無職のフリーター。俺も突っ込んだところまでは分からない。天岩戸にはなんにも乗ってなかったからな、個人情報も何もかも。サイト主もそれなりに用心深いようなんだが、これである程度範囲を狭めることができた」

「日和見村在住で、学生か、ニートか、無職か　。まあ、特定はできるでしょうね。けど、それだけで　たったそれだけの情報で、私を犯人だと決めつけるのは時期尚早、けんきょうふかい牽強付会といわざるを得ないわ」

夜は鮮やかに暗黒を増してきている。姿なき声は、峻厳と言及の手を緩めない。影のように忍び寄る。そして余韻だけを残して去っていく。

斗米憐乃の反駁はもつともなものだった。それだけのことで犯人だと断定されれば、誰だって理不尽だと思っははずだ。

それでも。

斗米憐乃の追及をかわして、第二の点を述べる。「次いで第二の点。実はあんた　催眠術が使えるんだろ？　嘘だとはいわせない」「……はあ？　意味が分からないわ。催眠術が使える……？　繰り返しもいきすぎると、笑えないわよ」と苦言を呈する。火花で照らされた顔は、苦虫を潰したようだった。

催眠術。

まあ、繰り返言だろうね。

しかし。

「催眠術といっても大層なものじゃない。簡単なトリックみたいなものさ。それであんた。催眠誘導　という催眠法を知ってるか？」

「催眠誘導……?」

「何日か前に俺と歪で、あんたに天体観測部の集団自殺について訊いてたときの話だ。あのときあんたは 先刻の催眠誘導を敢行してたんだ」

「……なぜ、そう思うのかしら?」

「質問をされたときの視線で、その人の五感の中でもっとも優越する感覚を知ることのできるテスト ってのがある。元来人間には三種類の優位感覚があるんだ。 聴覚優位タイプ、視覚優位タイプ、触覚優位タイプ。個々の特性にあつた優位感覚を刺激することができれば、ある程度そいつを催眠にかかりやすくすることができ。それが感覚テストだ。そしてあんたは俺にその感覚テストを行った。まあ、感覚テストっていつても、目の動きで判断するだけなんだけどな。しこうして、そこであんたは俺が視覚優位タイプであることを見抜いた。その後、俺はまんまとあんたの術中に嵌まってしまったんだ。あああ、あんたには釈迦に説法かもしれないが、視線優位タイプってのは、映像を用いて過去を思い出すタイプの人間のことだ。そうして催眠術師は個々別々のタイプに合った催眠をする。この場合は視覚に訴えるタイプの催眠が有効であるというわけだ。実質あんたは、なんの脈絡もなく俺の一日の行動をおおざっぱになぞっていった。 視覚情報を大量に盛り込みながらな。そうしてあんたは、俺の潜在意識のガードを解いた。一方の俺は優位感覚を刺激されて、催眠にかかりやすい状態となった。だからああも簡単に、『頭が上がらなくなる』という命令を受け入れてしまった」

斗米憐乃は不可解そうな表情を作った。「あなたのいいたいことは、まあ、分からなくてもいい。けど、あなた。なんでそんなこと知ってるの? どうしてそんなに催眠に詳しいの?」

俺は苦笑を浮かべながら、「俺の母親がやたらとそういうのに詳しくかったんだよ」と皮肉げに唇を吊りあげた。「俺の母親はエセ占い師で、胡散臭い催眠術で生計を立ててたんだ。それで、その母親はやたらと俺に催眠術のイロハを教えるんだ。そのせいか、俺は妙

に催眠術についての造詣が深くなつちまつた。なんだかんだでこなす俺もバカだが、いざって時に役に立つって教える母親のほうも、相当バカやつてるだろ」

そういつて複雑な表情を浮かべると、斗米憐のは精巧な人形のような笑みを浮かべた。「別にいいじゃない。話を続けて頂戴。あなたの身の上話なんか、どうでもいいわ」

はいはい、と薄ら笑いを浮かべて、一転、真顔を作った。

「頭が上がらなくなる」。つまり視線を斗米憐乃から外さざるを得ない状況を作るために行われたもの。あなたは俺の勢いをそぎたかつたのさ。視線っていうのは存外、そいつの意志の強弱を表す。意志が強けりや、相手のいる方向にまっすぐ向けられるし、意志が弱けりや、前も見られない。あなたはそうやって心理的に俺を追いつめたかつたのさ。なぜなら、あなたにはある危惧があつた。それは――

パチパチ。

火のはぜる音が、清風に混じる。線香花火は己の短命を嘆くように、陰鬱にすすを落としていた。

「自分の正体がばれやしないかと、自分の罪状が露見するかもしれないと、あなたはそう思った。だから対策として、俺に詐術を弄した。歪にかけなかつたのは単純に、歪が催眠にかかりづらそうだと思つたからだ。しかし佩刀歪はどうやら、篝火白夜に付随しているらしいと、あなたはすぐ理解した。あなたは俺を封じること、聡明な歪の、都合の悪い横槍を避けたかつたんだよ。そして俺はまんまと罠に引つ掛かつた。あなたの思惑通りにな」

雲間から月明かりが漏れる。曖昧だつた少女の輪郭が明朗になつた。

少女は。

斗米憐乃は。

虚ろな空を背景に、やはり空虚な笑い声を上げていく。クスクスと、クスクスクスと、興じている。

浮世離れしている。この世のものとは思えない。

「なるほど。あなたの推理は実に非整合的で、非合理的。どう穿ったって、論理性を欠陥させているわ。けど、けどけどけど面白い。どうしてそんなに面白い推測を思いつくことができるのかしら？ あてずっぽうで偶然に頼り切った推測。基盤が緩すぎるのよ、あなたの推理は」

けど。

もういいわ。

そんなことは。

どうでもいいことだもの。

と。

少女は。

斗米憐乃は。

「死はね、一つの生存活動なのよ。あなた、分かる？ 死の定義を、死の性質を、死の本質を、あなた、分かる？」

死。

突然の方向転換。

押し黙る。

狸々は滔々と、陰々と、縷々と語りだす。

「死はね、現世での消滅ではない。かといって、来世への渡来でもない。ましてや、前世への懺悔でもない。では、死とはなんなのかしら。不思議よね。ごく当たり前の事象なのに、そのメカニズムは誰も知らない。死に意味はあるのか。目的はあるのか。意図はあるのか。それは残酷な神の引いた設計図なのか、運命という一繋ぎの因果なのか。はたまた、それらとは一線を画すものなのか。勿論、科学的、生物学的な観点から見れば、死は定義できる。それが老いの延長であることも、たんぱく質の老朽化が原因であることも説明されている。けど 死はそんなつまらないものじゃないのよ。1が0になっただけなんて そんな簡単に取り扱えるようなものじゃないわ。死は 死は 人に託された最後の希望よ。愛であり、

光であり、人類と超越した何かを司るものが残した、唯一の救済措置よ。人は、死ぬことでしか報われないわ」

シヌコトデシカムクワレナイワ。

死。

それは。

どういうことだ、斗米憐乃？

「だから私は 実現させた。死を逃避の手段としてではなく、昇華のための手段として、用意した。私は、死を導いた」

「それはあんたが」

殺したのか。

あんたのせいでみんな、死んだのか。天体観測部の連中を、そそのかしたのか。

そして、あんたは。

斗米憐乃は中毒者のように、体をふるわせた。ぶるぶると、小刻みに、雨に震える子犬のように、その華奢な体をふるわせた。と。

「つまらない社会に、つまらない人間！ 弱い者は強いものに搾取されて、生きる術を失って、世界から見放されて、弱い人生を送る！ 飽き飽きしたわ！ 何よこの、低俗な人間たちは！ 偽りの強さを振りかざして、のうのうと生きる凡人！ つまらないのよ、あんたたちは。自分一人じゃ何もできないくせに、他人の手柄を横取りして、他人の弱みに付け込んで、他人をぼろ雑巾のように利用して。自分がいかに他者の存在に惑わされ、誘われ、欺かれ、狂わされてきたのか！ 矯正しようのない人格としての弱さ！ つまらない争い、暗愚な闘争、そしてそれを眺めるだけの傍観者。何もしないクズ 弱い！ 弱すぎる！ だから。だから私が導いてあげた。こんな腐った世界から脱出するための活路を。死という究極の快楽を！」

弱い。

弱い弱い。

弱い弱い弱い。

人はみなバカだ。クズだ、アホだ、ゴミだ。
壊れたように笑う。

身振り手振りを加えて、憤怒する。
夜。

月明かりが射しこむ、穏やかな夜。
ぜんまいが切れた人形のように。
夜色の少女は。

「告白、と捉えていいのか、斗米憐乃」とフルネームで呼びかける。
「自分がやったと、連中を自殺へと追い込んだのは私だと、そういうことなのか？」

「私じゃないわ。うん、私じゃない」

「……違うのか？」

「あなた　本気で催眠術ごときで人を死に追いやれると思ってるの？　それこそ愚かな考えだわ。そんなわけないじゃない。死んだのは真正正銘、天体観測部の部員自身の選択よ」

少女は淫靡に笑って、ふふふと笑む。酷薄に細められた瞳は、黒い塊を映し出している。

「もつとも、そういう風に私が仕込んだんだけど」

「意味が分からないな。掌を返すようだが、人はそう簡単には死ねない」

「死ぬるのよ、これが」と歪と同じようなことをいう。人は意外に、ことのほかあっさり、死を選ぶと、少女はいう。「彼ら天体観測部の部員にはそういう素質があったのよ。そもそも天体観測部を発足したのは、私なのよ。死を身近で見たいから、自ら死地に赴く姿が見たかったから　自殺願望を持っていた生徒を勧誘して、天体観測部を作り上げた。天体観測部の裏の顔は、自殺志願者の集まりだったのよ。それは周囲はおろか、本人でさえも気付き得ない、心の叫び。死にたい、死にたいという悲鳴を、彼らは上げていたわ。こんなつまらない世界はごめんだと、こんな社会なんて生きるだけ無駄だと、神様なんていないんだと、彼らは深層心理でそう世界を解釈していたわ」

だから。

少女は。

「だから、私が解放してあげたのよ。苦痛。懊惱。煩悶。困難。そ

の全てから、弱い自分から解き放つてあげたのよ。　我流の幼稚な催眠術を使つて。こう見えて私、小学校の頃から独学で催眠術を学んでいたのよ。人は人を支配できるのか。人は自らの意志で死ぬのか。それを達成するために有効な手段はなんなのか。幼い私の興味関心はもつぱらそれだったわ。今にしてみれば異質だったでしょうね。みんなが外で遊んでいる頃、私は部屋に閉じこもって怪しげな催眠術書を読んでいたので。自分の志を貫き通せない他者に嫌気が差していたのかしら。私の力でそいつらを変容できないかと、変質させることはできないかと、いつもそう思っていた。信念も意志も持たない、流されるだけの人間がどうしようもなく嫌いだったわ。しかもそんな連中が世界の大多数を占めてるなんて、くだらない。それが一般的なことだと罷り通っている。和を持って同じず　なんて、嘘よ、戯言よ、世迷い事よ。そんな人間、一パーセントもないわ。そもそも確かな自分を持たない奴らに、和なんていう高尚な概念が理解できるはずも、実行できるはずもない」

「それで、あんたは夜になったのか」

「……察しがいいわね。夜という時間はいいわ。だって誰もいないもの。浅い人間も、薄い人間も、軽い人間も、醜い人間も、誰もいない。それは素晴らしいことだわ」

それは単純に夜に外を出歩く人間がいない、というわけでもないのだろう。何か精神的な意味合いがあるのだと思う。

一見壊れてるような奴にも、何かしらのルールが存在する。絶対に曲げられない、不動の制約や桎梏しっくが存在する。そいつが狂つて見えるのも、そのルールが一般通念と離反しりはんしているだけで、狂っているわけではないし、無軌道というわけでもない。

「そういう意味では、佩刀歪しとみゆずりも名伽狭霧も部譲羽も完璧な人間なのかもしれないわ。あの三人には弱さが無い。それはそれで異常よ。三者とも何か欠けている。よく従わせたものね。今や佩刀歪はあなたの下僕よ。そういうあなたも、常人とは違う何かを持っているのかしら」

「そんなわけがない。俺は、ただの人だ」

「何それ。哲学？」

斗米憐乃は楽しそうに笑った。

「ああいった人種には、催眠術みたいな眉唾物は通用しない。催眠術は心の弱さに訴えかけるもの。だから、通じない。だけど、心に弱さを抱えている人間には驚くほどの効果を発揮する。案外簡単だったわ。私の催眠術はやっぱり稚拙だったけど、本人の意識次第で変わるものなのね。あの人たちは一気にのめり込んで来たわ。死への誘惑に、生への絶望に。彼らは枯渇していたのよ。だから、私が潤してあげた。死の水で、空っぽの容器を満杯にしてあげた」

「溢れ出るくらいまで注ぐ必要はなかったんじゃないのか。一度溢れれば、二度と元には戻らない。砂時計はひっくり返らないし、現実にはリセットボタンなんて存在しないし、後戻りなんかできるわけもない」

「当然でしょう。死んだ人間は二度と元には帰らないもの。溢れたものは不可逆なもの。どうにもならない。どうやったって、もう、遅い。転寝素は二度とこの世に顕現しない。そうでしょう？」

「……………」

転寝素。

快活で気性のさっぱりした少女。小動物のように身のこなしが軽く、それでいて優しい子だった。

だった。

「あなたは」と少女は、「あなたは、なぜ私が集団自殺を策謀したと思ったの？ 本当にその程度の理由で、私だと気付いたの？」と問いかける。

それではまるで、自分の犯行を認めているようではないか、と思っただ。しかし、斗米憐乃はそんなことはもはや、どうでもいいような口調でもあった。

何の証拠もない。俺の推理には一切の物的証拠がない。感覚と勘だけで、推理を組み立てた。だからなのか、俺の推理には全くもっ

て現実性を欠乏させていた。

自殺サイトだの、催眠術だの、ものすごく嘘くさい。そんなもの、なんの証明にもならない。

加えて。

今からいうことは、輪にかけて粗雑な憑拠だった。「天岩戸、つていう自殺サイトがあるつていったら」

「もう隠さずにいうけど、あれ、作ったの私だから。そんないちいち確認しないでいいわ」と苦笑を浮かべる。

「あれをな、並び替えてみると、斗米憐乃とまいあわのになるんだ。あ・ま・の・い・わ・と。そして、と・ま・い・あ・わ・の・だろ？」

「……まさか、そんな洒落みたいな根拠で、私が犯人だと、思ったの？」

俺はいたって真面目に、「そうだ」と答える。この推理最大の決め手は、実はそれだったりもする。

「それは気付かなかったわ。盲点ね、盲点。当の私も気づかなかった。けどまあ、結果論でいえば見事的中しているわけだけど」と驚き、しなやかに唇を歪ませる。

「僥倖、という奴だ」と最近覚えた言葉を使ってみる。

「そうね。確かにそれは、僥倖ね。……そういう手段で私のもとまでたどり着くなんて。不自然を通り越して運命的ですらあるわ」

童心に返ったように、少女は綺麗な笑みを浮かべた。

線香花火は三本目に突入している。小さな火の粉が舞った。

弱さへの嫌悪。

死への恍惚。

詰屈した厭世思考はそれらに起因しているようだ。天体観測部を立ち上げたのも、禁断にお近づきになりたかったから。あわよくば、死の片鱗に触れたかったから。

「やっぱり、私だって歪んでいたんだわ。人の命を、人の死を、あもたやすく、受け入れてしまう。いや、むしろ奨励もしているし、私自身もそうするように誘導しているわ。死神ね、私。人の未来を

刈り取る、無慈悲な死神。だって、人が死ぬのが楽しいから。見ていて楽しいから。実際、興奮した。まるで壊れたおもちゃみたいに人が落ちていく。落ちたら死ぬって分かっているのに、あっさりと、何の迷いもなく後悔もなく、楽しげな様子で、死ぬ。死ぬことは幸せなことだと、不幸なことじゃないと、そういつてるみたいだったわ。そんな嬉しそうに死んじゃったら、わくわくしちゃうじゃない」

斗米憐乃は天体観測部の部員だった。部員はみな自殺に恋い焦がれている。死を崇拜するものたちが作り上げた、虚構。

「私も天体観測部の部員だけど、私だけじゃないかな。自殺願望を持ち合わせてなかったのは。私が持っている願望は、そういうものとは違う。そう、自殺観察願望。そういうことかしら。私は自殺する人々を見て法悦を感じるような、破綻した存在なのかしらね。肉が朽ち、骨が砕け、血が垂れる人の体に、耐えようのない愉悦を覚えるのかしら。だったら、あれね。私っていかれてる」

乾いた笑声。どうやら斗米憐乃は笑っているようだ。

髑髏が歯の根をカタカタ鳴らして笑っているような、不吉な絵が浮かぶ。

斗米憐乃は美しく笑う。

ただ。

表情には、人間的なものがない。だから、非人間的な印象を受ける。その笑顔には何かを取り繕った跡があった。

「篝火君、私ね」と呼びかける。斗米憐乃は鉄柵に手をかけていた。

「分かっちゃった」

「何が分かったんだよ」と問いかけながら、壁から離れ、ゆっくりと足を忍ばせる。

「私の本質、によ。私の原初たるものは、畢竟、死だったわ。人が死ぬ姿に興奮を覚える私は、狂っているのよ。我ながらくだらない性癖だわ。どうしてこんな屈折した願望を持って、今まで生きていたのかしら。分からない。ぜんぜん分からないわ。世の中なんてそんなものばかり。私に分かったつもりになっただけで、その実何

も分かっていない。誤った解釈や理解をして、損しかしない。まあ、年がら年中、死について熟考してる女子高生なんて私くらいだと思っただけ。そうした面でも、私が欠陥人間だった。何も変わらないわみんな死んじやったけど、何も変化しない。あなたが気にかけていた子も死んじやったし、天体観測部も空中分解ね。仕方ない結果だとは思っただ、儂いわ。なんでかしらね」

じりじりと足を滑らせる。音をたてないように、不自然に思われないように、静かな足運びを心掛ける。斗米憐乃に気づかれないうちに、そつと、そつと。

「無駄よ」と俺の心を読んだような、冷え冷えとした声が発せられる。動揺してしまう。衝撃で足が止まっている。「既に手遅れなよ。死へと至る衝動から私は逃れられない。だから。だから。ほつといて頂戴」

「嫌だ、といったら」

「死ぬわ」と当たり前のようにいう。「あなたが私を止めようとしたら死ぬし、止めなくても、多分、死ぬでしょうね」

「それ、結末はどう違うんだ？」と情けない表情になる。

「だから、いったでしょう。変わらないって」といって、柵に近づいていく。

目的は明白。

さあ、どうする。

どれを選択する？

「早まるな、って言葉、一度いつてみたかったんだ。くしくもこれをいう機会に恵まれてしまったよ」

足をコンクリートにすりよせて、接近を試みる。

「人っていう生きものは、得体の知れないものを無理やり押し付けられて生きてる。んで、それに準じて生きて、それに準じて死んでいく。人は自らの出産に立ち会えないし、自らの死亡時間さえ知らずに死ぬ。そうして、世界の歯車よろしく、それっぽく生きて、それっぽく死ぬんだ」

「ご高説は死んでから聞くことにするわ」

「あの世で講演会を開けるほど、閻魔様の度量が深かったなんて知らなかったよ」とかいつて、走り出す。

闇をかき分けていくと、一条の光芒が煌めいた。火だろうか。ゆらゆらと蠢いている。それは妖刀の穂先のように鋭利で、禍々しい。「私、もうダメかも。今すぐ死にたい。こんなふざけた俗世から脱出したい。なんのいいこともない。人はなぜ生きるのか、人はなぜ老いるのか、人はなぜ死ぬのか、まあ、全部無意味なんでしょうね。ならなんのために人は生きたり、老いたり、死んだりするのかしら。茶番よ。シナリオの決まった劇だわ。そんなの演じても、何がどうなるというのかしら。初めから無駄だと分かっているのなら、私はこの舞台から退場させてもらうから。後はあなたたちがどうにかして頂戴。私は草場のかげで応援でもするわ」

「バカいうな。頭のネジが落っちちた奴は、歪と練絹でもう足りてるんだよ。お腹一杯なんだよ。なんで俺の周りには、少しだけでも常識をかじった奴がいなんだよ。いや、それは俺の友人関係が終わっているからか。けど、あれだよな。なんで、死ぬ？ あんたの死を悲しむ人、痛む人、嘆く人、憂う人、一杯いるだろ。なのに。なのに、そうあっさり死ねるんだ？ バカか、もう。あんたはバカか。意味が分からん」

突貫。憐れな死神のもとに突き進む。

時間が。

時間もどかしい。

どうして、こうも遠いんだ。俺と斗米憐乃はあまりにも遠い。住む世界が違うからか。有する属性が違うからか。此岸しがんから彼岸は尋常ならざる距離なのか。

もう少しで。

もう少しで。

「つつ」

服が燃える音。

肉が燃える音。

火が己を焼き尽くす。

蛾のように。

それは猛烈な痛みとなつて、俺を襲つた。

体が熱い。

どうにかなつてしまいそう。

「あなた、今痛いって思つてるでしょう？ 痛覚は生の実感。だから、大切にしなさい。下手すると、このまま痛みの感じなくなる体になつちゃうから」

斗米憐乃は点火したチャッカマンを、俺の腹に押し付けた。

熱い。

ものすごく熱い。

おそらく改造したものであると推測する。市販のチャッカマンにそれほどの威力はない。このチャッカマンの火力は明らかに、人の手と悪意が加味されている。

額に玉の汗。じりじりと体を燃やしつくす。繊維と皮膚の焦げる音が香ばしい、わけない。

「熱いでしょう、痛いでしょう？ けど、大丈夫。この感覚から逃れる道はあるわ。今すぐにでもできる。バカバカしいとは思わない？ 一生こんな苦しくて痛くて辛い思いをしながら生きるなんて。分かつてくれたかしら？ 死の価値と、その意義について」

薄ら笑いを浮かべている。それでも表情は凍りついているから、顔に生氣はない。死人のように青白い。それはきつと、月光のせいだろう。

「あんなに幸せそうに飛び降りられちゃったら、私もそうするしかないじゃない。飛び降り自殺しかないじゃない。考えてみれば本末転倒な話ね。観測するほうが観測される側に回るなんて。試験官がモルモットになつた感じかしら。けど、それも一興。それに、こんな綺麗な月の夜に死なないなんて、損よ、損。きつちりと、存分にぬかりなく死なせてもらおうかしら」

斗米憐乃はチャツカマンを引き抜いた。強烈な蹴りを入れる。俺は痛みに顔をしかめて、崩れ去った。ちょうど業火で焼かれた箇所。そこに足蹴りが決まったからか、信じられないくらいの激痛が体中を巡った。

腹を抱えて、うづくまる。

口からは声にならない叫喚と、痰のような唾液が何度も口内をぐちゃぐちゃにした。かっと、咆哮する。陰鬱な響きが、辺りに残響した。

腹の筋肉は使い物にならなかった。皮膚は黒ずんでいて、爛れていた。まるで鉄球を当てられたかのように、醜くへっ込んでいりゃ、へっ込んでいりゃ、削げ落ちたのだろう。よく見れば、下のコンクリートには、燠おきのような煤けた何かがあった。

斗米憐乃は鼻歌を歌いながら、再度鉄柵を掴んだ。そのまま楽しそうに登る。

「……ま、てててて、よおおお」

「何かしら。私、これでも忙しいのよ」と聞いたことのあるセリフを口にする。振り向くことすらしない。斗米憐乃はせっせと鉄柵の向こう側に行こうとする。

「……きよ、享受、するのか？ そんな、何かしらの誰かに強制的に与えられた異常性を、そのまま受け入れるの、か？ 誰のためにも、自分のためにもならない特性を、その法則にのっとって、疑問を呈することなく生きて、死ぬのか？ それこそくだらないだろ。それと訊いとくが、自殺観察願望だとか、自殺願望だとか、それ、本気でいつてるのか？」

「そうよ」

と。

普通にいつてのける。

「わ、わわ、うぐうううおいあ」

何かいおうと口を開いたが、吐き気に耐えられずに、吐いた。なぜ火にあぶられて嘔吐するのか、自分でも分からない。

「あなたに私をとめる力は、ない。自殺へと至る私は、それをするまで、止まらない。自殺するまで生き続ける。そんな矛盾した存在なのよ、私は」

斗米憐乃は、ついに鉄柵の向こう側に辿り着いた。

出っ張りのような、ひどく不安定な場所。柵を隔てた辺りに、斗米憐乃が立っている。今すぐにも、落ちそう。

「あなたというとおり、人は誰しも矛盾を抱いているらしいわ。私にだって、それはあるもの。ただその矛盾が常人とは違うだけであつて。まあ、いまさら気にすることでもないけど」

這いずるように前進した。匍匐前進のようで、体裁が悪い。それでも前に進んだ。斗米憐乃を救えると、そう思いながら、前に進んだ。

不思議な感情。俺はなんのために、この女を助けようとしているのだろうか。

俺の中にわずかでも良心があるとは思えないけど。

「今生の別れ、なんて。辞世の句でも読もうかしら。ふふふ、筋違いかしら。面倒だから止めておくわ。心残りなんてないしね。強いというなら、あなたの乱入で、予定が狂ったことかな。でも、当初の通りさつさと死ぬわ。それじゃあ、バイバイ。あなたとの時間、割と楽しかったわよ」

夜色の少女は逡巡の色を見せることなく、視界から消えた。

斗米憐乃の死は、転寝棗の死と同様に、あっという間に知れ渡った。

やはり前回と同じように休校の措置が取られ、生徒たちは一週間の自宅謹慎を命じられた。それは生徒は勿論、教員のほうにも出ているらしかった。学園のほうでは警察による調査がとり行われているのだとか。

新聞のほうでも、それはおおいに取り立たされた。天体観測部の集団自殺や、斗米憐乃の投身についての記事が、第一面を飾っている。これといったニュースがないからだろうか。一牛鳴地の田舎である日和見村は、慢性的に話題不足なのだ。だからか、新聞はおるかテレビやラジオにも、こればかりが放送されている。あきるくらい、放送されている。

斗米憐乃の自殺から三日がたった。

現段階において、調査は難航しているらしい。他者の介在したような跡が見れらなかつたからだろう。警察は斗米憐乃の墜死を自殺と断定したことが電波の波に乗った。それも当然で、斗米憐乃は間違いなく自らの意志で墜死したのだ。

運よく警察の調査から逃れられたのか、俺の名が捜査線路上に上がることとはなかつた（と思う）。また、刑事が俺の自宅を訪問することもなかつた。それが喜ぶべきことなのか、嘆くべきことなのかは分からない。どちらにしる、斗米憐乃を見殺しにしたことに変わりはない。

直接的に関わっていないとはいえ、嫌疑くらいかけられるかもしれない。ましてや、俺の素性や素行のこともある。一度怪しまれれば、取り返しのつかない場合に発展する危険性もあった。

篝火白夜が斗米憐乃の投身自殺に居合わせたのは、単なる偶然なのか、否か。

未だに考える。

屋上に見える狐火に端を発し、ただならぬ凶事を予感して屋上に向かった。そこには悠々と佇む斗米憐乃がいて。

斗米憐乃が死んだのも、俺のメチャクチャな憶測の的中具合に自暴自棄になったのかもしれない。

あるいは。

元から死ぬ気だったのか。本人もそういつていたような気もするし。俺が屋上に来たのだから、斗米憐乃にとってはどうでもいい些事なのだろう。篝火白夜の存在の有無にかかわらず、斗米憐乃は屋上から飛び降りていたのかもしれない。それ以前に、斗米憐乃が本当に裏で暗躍しているのかすらも分からない。天体観測部の集団自殺も、それを引き起こした原因も、いかんともしがたい。斗米憐乃自身は、それを行ったのは自分だと供述していた。けれど、それが真実であるかどうか、やっぱり不明のまま。

何も解決していない。

篝火白夜の形容しがたい苦しみも、具体性のない推理も、全て雲散霧消してしまった。斗米憐乃は最後の最後まで真相を墓の中まで持っていたのだった。

気分が悪い。

そう思う。

午後一時に起床した俺の体は不調を訴えていた。

もう少して五月は終わる。死と狂気に埋もれた一カ月はもうすぐ次の月に移行する。

太陽はすでに昇っていた。窓からは明るい日光が差し込んでくる。その無駄に晴れやかな日差しに、一層憂鬱になって、ますます力が出なくなる。俺は蒲団に寝転んだ。

腕を首の下に組んで、天井を見つめる。

人は。

理由も分からずに何かを受け取って、理由も分からずにその何かのために死ぬ。人知の及ばぬ、ある何かのために人は死力を尽くし

て、その結果。

神のような不可思議なものに運命やら人生やらを預けて、人は、錯覚したまま生きるのだ。

人は誰しも、今を錯覚している。

それによつて、たくさんの犠牲者が生まれた。斗米憐乃自身や、天体観測部の部員。そして、転寝棗もまた、その一人だった。

先ほどからメールが数十件、受信されている。きつと歪からだと思ふ。登録件数ゼロ件の俺にメールをくれる奴は、そうそういない。多分、一向にメールを返信しない俺を心配しているのだ。

一日中寝ていたかった。

寝るといふ行為は、何も考える必要がないからいい。一己の苦しみや、悩み、それらの煩悶から一時的に離脱できる。考えの放棄できる。それは幸せなことだと、常日頃から思っている。

幸せとは何なのかを知らずに。

転寝家の邸宅は壮重な武家造りだった。脇には松柏マツノキが植樹ウヅケされている。枝梢のざわめく音が、物寂しい。

気後れしながらも、門を叩く。数秒すると、和服を着た侍女が顔を出した。不審な目つきで、俺を見定めている。開門したら、肅然とした雰囲気フツウキにふさわしくない男が立っているのだから、無理もない。

生徒手帳で自分の身分を証明し、転寝鈴蘭に会わせてくれるようにお願いした。まばゆい金髪と釣り目に気押されたのか、侍女は始終

腰が砕けた様子だった。

分かりました、といって、勢いよく閉門。ボタンという重厚な音だけが、山間に木霊した。

染め直したのがいけなかったのか、と髪の一房を掴む。一度黒に染めた髪は、再び金髪に戻っていた。

これといった理由はない。転寝棗の葬式の折に、黒に染め直したのだが、今の髪の色は金色。自分でもなぜ元の木阿弥になったのかは理由不明瞭だ。

多分周りに、改心したとか、更生したとか思われたくないからだろう。理屈もへつたくれもない情動だが、これはこれで俺らしいと思う。いまさら髪の色を変えたくらいでどうなるとも思わないし。

暫時すると、先ほどの侍女が恐る恐るといった様相で、門から顔を出した。「かかかか、篝火、びゃ、白夜様、です、ね？」

どうして俺の名前を知っているのだろうか、と思いながらも、「ん？ ああ、そうだけど」と返答して、先刻のやり取りを思い出す。思い起こしてみれば、この人に生徒手帳を見せたような。

「すす、鈴蘭様のご面会をご希望、でっ、でしたよね？」と泣きそうな顔で問いかけられる。

頷くと、「わ、わたくしがご案内いたしますので、ご同行のほど、よよ、よろしくお願いいたします」とバカ丁寧な言葉が返ってきた。「そそそ、その、門内まで、お入りください」

こうして転寝家の敷地に入る運びとなった。

牡丹ぼたんの留袖を着た侍女は、ぎこちなく先行した。それでも静々とした足運びは洗練された美を感じる。御三家の一角ということもあり、奉公人もまた一流のようだった。

なんだか罪悪感を感じながらも、数寄屋風の屋敷内を歩く。途中、着物の腰元こしもととすれ違う。すれ違った後、女たちが奇異なものを見るような目をしているのが分かった。確認したわけではないが、なんとなく分かる。

「鈴蘭様は今、病に臥しておられます。よほど棗様のご逝去が堪えたのでしよう。最近では病床に就き、絹のようにお疲れです」と侍女は目を伏せる。

「そんなにひどい、ひどいのですか」といい改める。よくよく考えてみれば、この侍女は俺より年上なのだ。

侍女は主人の体調を慮るあまり、俺への恐怖が薄らいでいったらしかつた。俺のことなど毛頭気にせず、眉をひそめ、憂いている。

「鈴蘭様の心情はいわずもがな。母上様は家計の切り盛りにお忙しい身ですし、父上様も蒼氓そうぼうの公僕として面目躍如めいよくのご活躍をなさっております。だからでしょうか。父上様はほとんどお屋敷に在宅いたしません。ですから、鈴蘭様はご家族との親交がいささか乏しかったのです。実質、鈴蘭様の親代わりは姉の棗様でした。その棗様がお隠れになった今、鈴蘭様の心身は極めて不安定なのです。一刻も早く回復なさるとよいのですが……」

侍女が心から転寝鈴蘭の身を案じているようだった。いきなり転寝鈴蘭の容態について語りだしたのも、それに起因しているようである。

同時に侍女は、俺のような非行少年に謁見てつけんが許されたことに狐疑こぎを抱いているようだった。

「こちらでございます」

廊下をしばらく歩くと、櫛形くしがたの窓があつらえられた一室についた。どうやらここがあいつの私室らしい。

「襖の向こうに鈴蘭様がいらつしゃいます。ご用がございましたら、何なりとわたくしどもに声をおかけください」

やはり慇懃な言葉遣いのまま、一礼をし、この場を去った。相手が不良然とした怪漢であっても、客ならばきちんと対応してくれるらしい。

旧弊的な因習が根付いている日和見村では、御三家は敷居が高いとされ、容易に立ち入ることすらできない。それは平成の世であっても連綿と受け継がれている。この村ではいまだにそういった時代

錯誤な封建制度が村民に深く浸透しているのだ。

そういう視点から見れば、なおのこと不可解だった。

転寝鈴蘭と会ったのは数回程度で、その割にこの応接はあまりに寛大に思える。

杞憂だと一蹴して、襖に手をかける。「入るぞ」

部屋の中は予想に反して暗かった。辺りには衾障子ふすましようじや明障子あかりしようじの建具が設けられている。割と小さい間取りだった。

「……転寝？」

背後から西日が漏れてくる。時刻は午後六時を回っているところだった。

「……篝火さん？」と声が聞こえる。それは蚊の鳴くような細かい声だった。

敷き詰められた畳。その中央には蒲団が敷いてある。

そこに。

上体を起こした状態で。

転寝鈴蘭が。

いた。

距離はいくばくもない。光の量が少なかつたせいか、視認できなかったらしい。

転寝鈴蘭は目を細めて俺の顔を見た。眼鏡越しにすがめた瞳が見える。

目が会うと、困ったような嬉しいような顔をして、座るよう促した。枕元に座る。雰囲気に合わせて正座を取るべきかと思つたが、楽な姿勢で結構ですといわれたので、胡坐をかいた。

「いきなりどうしたんですか。わざわざ私の家まで来て」と転寝棗は問うた。それはごく当たり前の質問だった。

「心配だったんだ」と視線を下げて、「心配だったんだ」と二度、いう。

「……そうですか。その、ありがとございます。ご心配なさつてくれて」

「大丈夫なのか。疲れてるみたいだが」

「精神的なものですから、大丈夫なんじゃないかと樂觀視しています。肉体的な疲労はさほどないですし」

「そうか。にしても、おまえ。すごいところに住んでるんだな。江戸時代にタイムスリップか」

「御三家の家は一樣にこんな感じですよ。表御三家の佩刀家も、名伽家もそうですし、裏御三家も大体一緒です」

転寝鈴蘭は静かに一息吐いた。長い睫毛が双眸を彩る。

「奇妙な体制を取る村だよな、ここは」

それに色々と頭がぶつ飛んだ輩も、ザックザック発掘されるしな。そういう俺も、その中の一人なのかもしれないけど。

「そつえば篝火さん。外の出身でしたっけ」と確認を取る。「どうい風に見えますか？ 外から見た私たちと、この村は？」

「……ここに越して来たのは中一の頃だからな。あんまり記憶にないし、そもそも荒れてたからどうにも、って感じだよ」

「あつ、その……ごめんなさい」と縮こまるので、どうしていいのかわからなくなり、とりあえず曖昧な表情を浮かべる。

静寂というより、無音といった風で、時がうつろう。

「安静にしてるよ。心配してたぞ、この人たち」といつて、立ち上がる。ちよつと転寝鈴蘭の不調が気がかりだったのだが、本人の顔を見て、少しだけ安心した。意外に元気そうだ。

「篝火さん！」

転寝鈴蘭が急に声を大きくしたので、少し驚いた。「ん？ 何？」
「ありがとうございます。嬉しかったです。こうやって、身内じゃない人に心配されて、お家に来てもらって……。私、友達いないから。何も取り柄がないから。他人に心配されると、すごく嬉しくありません。こんな自分でも必要とされてるんだって、大切なんだと思われてるんだって、そう思うんです。それで、そ、そのっ！」

触れたら砕けそうな表情。顔を下げて、蒲団の端を掴んでいる。なまじ整った顔立ちだから、巧緻なガラス細工に見えた。

転寝鈴蘭はプルプルと肩を震わせて、ぎゅっと拳を作った。
そして。

「わっ、私と……付き合ってくれませんか……」
言葉は尻すぼみで、表情は弱々しい。

「それはどうい風に解釈したらいいの」

「……うっ、うっうう」と一旦頭を上げた転寝鈴蘭は、俺の顔を見たとたんにすごい勢いで頭を下げた。「こ、言葉通りの意味、です。どうい風にとっても構いません」

「転寝鈴蘭として、篝火白夜に交際を申し込みたいと、そういふことか」

「……はっ、はいい」

「そうか」

俺は後ろを向いて、襖のほうへと向かった。「それは多分、無理だ」

場の空気が何度下がったような気がする。

「……ですよ。私なんかじゃ、篝火さんと釣り合いませんですよ。それに、外見も中身も佩刀さんに全然及ばないし……。私なんかじゃ、ダメですよ。私みたいな女じゃ、ダメですよ」

「そういう意味じゃなくてだな」といい淀む。

「えっ？ それじゃあ、もしかして……！」

「付き合っても何も、おまえ。転寝鈴蘭じゃないだろ」

床に臥した薄幸の少女は、「その、篝火さん？」と戸惑ったように質問した。

体を少女のほうに向ける。俺は立ったまま、口を開いた。「おまえは転寝鈴蘭として付き合うんだろ。そんなこと、無理に決まってるじゃないか。おまえ、転寝鈴蘭じゃないし」

少女はパチパチと目をまたたかせた。さながら二足歩行で歩く犬を目撃したような顔だった。

「なっ、何をいつてるんですか！ 私は真正正銘、転寝鈴蘭ですよ！ 言いがかりも止してください！ 私は真剣で」

片手で制して、ゆっくりと布団のほうまで近づいた。少女のすぐ横に片膝をつく。そうして少女の腕を軽く掴んだ。

少女は特に抵抗も拒絶もしない。されるがまま。意志は見受けられない。

上腕の裾をまくる。健康的な肌が露出。張りのない瑞々しい皮膚。妙だとは思わないか？ 本の虫の転寝鈴蘭の肌が、なぜこうも焼けてるんだ？ 休日は家にこもるか、図書館に向かうとかいってなかったか？ そんな日光を浴びない状況で、こんなに焼けるか？」

少女は瞳孔を拡大させて、頬を病的に蠢かせた。

「おまえは嘘をついている。その身なりも、その体調も、そしてその言葉や俺への想いも、全部、嘘だ。本当のおまえは、俺のことを好きとも何とも思っていない」

「……そんなこと、ない、です。私は本気でっ！」

「嘘っぱちなんだよ、おまえのその感情は！ おまえはその想いを篝火白夜という人間に吐露するのを代行しているだけなんだ。そしてあわよくば、俺と付き合おうとしている。自分を偽って、転寝鈴蘭の代わりをしているだけなんだ」

「……代わり？」

「そつだ。おまえは転寝鈴蘭の代わりを演じているだけなんだ」

そつなんだろ。

「転寝棗」

「きつかけは五月の中旬、商店街の路地裏から始まった。そのとき転寝鈴蘭は悪漢に襲われそうになったんだ。そこでどうにか割り込んで、ことなきを得た。それはおまえも分かるだろ。それでな、転寝鈴蘭は梅雨利の手を借りて病院に行ったんだ。その際、転寝鈴蘭は眼鏡を落としそうになった。それを梅雨利が拾った。その時に見えたんだよ。切り傷だらけの、ボロボロの腕がな。それは十中八九、リストカットの傷だよ。まるで縄に絞められたみたいに、まへんべんなく皮膚が深くえぐられていたんだからな。つまり、転寝鈴蘭は自傷癖のある少女だってことだ。五月だつてのに制服でも私服でも長袖を着ているのは、それを隠すため。雨稜高校は年中、夏服でも冬服でもいい学校だからな。下手に半袖着てリストバンドなんかしても、まず、ばれる。そもそもリストバンド程度で覆い隠せるほど、おまえの傷は尋常でなくらい、病的で、異常で、抑えがたい感情の波があった。転寝鈴蘭が長袖を好む理由はそれに起因していた」

少女は無言だった。

語り続ける。

騙り続ける。

少女の表層を剥がすために。

不毛な行為だと気づかせるために。

「しかし、おまえの腕にはそれが、ない。どこをどう見ても、リストカットの跡なんて見当たらない。それは明らかにおかしいよな。転寝鈴蘭の腕を見たのは二週間くらい前の話だ。そんな短いスパンで傷跡がなくなる道理はない。それ以前に、リストカットを中断できるほど、転寝鈴蘭は強くない。それは断続的にかつ、慢性的に衝動が湧き上がるもんだからだ。止めることは難しい。ますますありえない。勿論、転寝鈴蘭がどんな過程を経て自傷行為に走ったかな

んで、本人にしか分りえないことだ。だから、むやみに邪推したり、曲解はしたくない。俺は別に自傷行為自体が悪いなんて思ってもないしな。そういうことでしか、自分を表現できない奴がいるってだけのことだろ。自分の窮状に苦しんで、誰も助けてくれないのが悲しくて、苦悩を分かってもらいたくて。そんな奴は、この世に一杯いる。俺だってその一人だ。だから、その気持ちを汲み取ってやるくらい、俺にだってできる。できると思ってる」

それは自らの欠陥を吐露しているようなものだった。自らの弱さを、斗米憐乃の嫌悪する弱さを、俺は人一倍多く持っている。矛盾や醜悪なものを背負って、レールの上を進んでいる。

転寝鈴蘭もまた、鬱屈した感情を蓄積していた。辛くてきつい生活を送っていて、それがあの日、爆発した。自分の体に跳ね返ってきた。

代償行為という形で。

「次いで、不審な点がもう一つ。それは、眼鏡だ。おまえのつけてるそれ、伊達眼鏡だろ。凹凸が見当たらない。太陽の光が当たっても、全然へこんだところや出っ張ったところがないんだ。転寝鈴蘭は近眼だから、眼鏡のタイプは凹レンズ。中央部がへこんで、縁に従って厚くなる奴だ。当然、光が当たれば斜めに反射する。だが、おまえの眼鏡は反射の角度や位置がおかしいんだよ。そもそも、反射したようには見えない。ということは、その眼鏡は度の入っていない伊達眼鏡だってことだ。転寝鈴蘭は極度の弱視。そんな目の悪い転寝鈴蘭が度のない眼鏡をつけるってのは妙な話だろ」

襖の隙間から柔らかな斜陽が入りこんでくる。

少女は、眠っているかのように静かだった。呼吸をしているようには見えなかった。それくらい眼前の少女は、無表情で無音だった。「そして、これはまあ、俺の個人的な見解だ。聞き流すつもりで聞いても構わない。ひよっとして転寝鈴蘭は、精神疾患を持っていたんじゃないのか。それもその、男性恐怖症のような、そんな感じのものだ」と声量の下げた声でいう。それは転寝鈴蘭と初めて出会っ

た時から抱いていた感覚だった。

転寝鈴蘭と図書室で出会った時の反応は、明らかに異質だった。尋常でなく狼狽していたし、悪夢にうなされてような目をしていた。瞳孔は大きく見開き、足は小刻みにふるえ、わなないている。「あれはきつと、外部からの精神的ショックによるもの　つまり、強姦だ。その、転寝鈴蘭は、過去に、男に暴行を加えられた経験がある。違うか？　だからあそこまで異常に男を恐れていた。俺に声をかけられたときの転寝鈴蘭は、間違いなく錯乱していたんだ。幸い、姉である棗によって、精神は正常を取り戻した。転寝鈴蘭は、俺たちバカな男どもに人生を狂わされた被害者の一人だったんだ。外れてほしい。こんなクソみたいな最低な話、本当に外れてほしいよ。全世界の被害者の女性に向けて、全世界の男どもを気のすむまで殴りたい。俺も含めて、殴りたい」

もしこれが斗米憐乃の蔑む矛盾や醜悪の正体であるとするならば、なるほど、確かにこんな社会、腐ってるだろうよ。

こんな生物ピラミットみたいに上下が厳格で、ありえない食物連鎖が成立するような、馬鹿げた世界は。

「だから、転寝鈴蘭は極端な男性恐怖症を患っていたんだ。にもかかわらず、おまえはそれほど抵抗するまでもなく、俺に肌を触らせただ。強姦された経験を持つ人は、普通それだけでパニックになる。だかおまえは、そんな態度は見せなかつただろ。俺が男として信用されているから、なんてうぬぼれ、抱かない。自分の身の丈くらい分かる。女にとって、男は全て敵だよ。俺だって下等な男どもの人だしな」

自嘲して、少女の顔を見た。

沈黙が下りる。

それに準じて、めりめりと、めりめりめりと、何かがふるい落とされる。少女は上体を上げたまま、虚ろな目で俺の背後を見ていた。じわりと、じわりじわりと、落ちていく何か。ゆるりと、ゆるりゆるりと、溶けていく何か。

どろりと、どろりどろりと、剥げていく何か。
少女は。

もう、ころ合いかな、と小さく、呟いて。

「あーあ。やっぱりばれてちゃってたんすかねえ」

と。

快活そうに笑って、大きく伸びをする。とたんに部屋の中が明るくなる。

「いやー、すごいつスねえ、本当。まさかこんなにあっさりで見破られるとは思ってなかったつよよ、先輩」

少女は自らの腕を、生地越しにさすった。一転して、病弱な令嬢から、アクティブな少女へと変貌を遂げる。

「おまえ、視力は悪いのか」

「そうつスねえ。2.0つス」

「なら、眼鏡は外していいんじゃないか」といつてみる。「だろ、転寝棗」

そういうと、目の前の少女　転寝棗はかわいらしく舌を出して、「あはは、眼鏡は外しませんよ。これは私の覚悟の証なんすから」というのだった。

少女はニヤニヤと笑う。

「なんだ、先輩って思ってたよりずっと、賢いんスね。不良なんて社会に順応できないクズだと思ってたつスけど、ここにきて価値観が一変したつス。ゲシュタルト崩壊ってやつですよ」

「ゲシュタルト崩壊は違うだろうが」と苦言を呈す。まあ、別の意味で、この少女はゲシュタルト崩壊まっ最中なのだろうけど。

「先輩の推理、推理小説としては三文もいいところつスけど、大体当りつスよ。それよりも私は、先輩の呆れるくらい鋭い勘のほうに驚きつス。推察するに、先輩。それ、直感つスね？」

「俺は呆れるくらい鋭いお前の勘に驚きだよ」

「なるほど。要するに先輩は、勘に頼るだけの、三流の直感探偵である」と、そういうことっスね」

「直感探偵だなんてかっこいいじゃないか。エスパーっぽくて」「侮れないっスねえ、直感探偵白夜」

「それに推理小説でよくあるだろ」と皮肉るようにいって、「双子が出たら双子トリックを疑えって」と結んだ。

転寝棗は苦笑したように顔をしかめた。「決め手はそれっスか？それが私の正体を見破った決め手だったんスか？」

「どうだかな」とごまかすように笑う。
へらへらと。

笑う。

笑って、「苦い経験があるんだよ」と再度笑みを取り繕った。

「苦い経験……？」

「ああ」と三度笑い、「苦い経験だ」と四度笑った。「俺の人生は人を死なせてばかりだよ」

「それは呪われてますね。事情はよく分からないっスけど、その、人でも殺したことあるんスか？」

「あるよ」

「……」

さすがに面喰ったらしく、唇をへの字に曲げる。

しばらくして、少女は乾いた口調でいった。

「へえ。人、殺したこと、あるんスか」

曖昧な笑みを浮かべる。

少し話題をずらす。

「人が死ぬことに慣れてるのは分らないが、多分心のどこかで理解しちまうんだろうな。近くに禁忌を犯した奴がいるって。何かを履き違えた奴がいるって。そんな小さい心の違和感が、だんだん肥大化していって、気がつけば、そいつの本質に気づいちまう。俺の異常者リーダーは半端なく感度がいいんだよ、これが」

「でしようね。なんせ、私たちの歪みに気づけちゃうんスから」

「私たち？」

「そう、私たちっス」と断言するように、いう。「私と、彼女で、私たちなんスよ」

「はあ？」

転寝棗は俺の疑問符に答えず、まったく別のことをいった。「間違探して、あるじゃないですか」

突然の方向転換に戸惑うも、「そりゃあるだろうな」と返す。

「二つの絵が先輩の前にあると仮定してください。その二つはとある少女の肖像画っス。その肖像画にはいくつかの間違いがあるっス。唇の形であったり、鼻の形であったりといった、身体的な変化。そしてピアスであったり、眼鏡であったりの、装飾品的な変化。それらによって、二人の少女が区別される。しかしながら、この二人の少女が双子だったとしたらどうです？ 身体的な変化はほとんどないっスよね。そういう観点で見れば、それによる区別は望めない。次いでそこからピアスや眼鏡を取り除いてしまったら、差異なんてなくなりますよね？」

「なくなるだろうな」

「では、その瞬間にそれらは間違い探しとしての本質を失うことになるっスよね。つまり、その二つの絵は合同になるということです。あらゆる面で同じ。等価。同等。それこそが事の発端なんです」

「それが今回とどう関係するんだ？」と疑問を投げかける。

少女はやはりそれには答えず、話を進めた。

「私と鈴蘭はイコール、というわけではありません。それはあくまで似ているというだけで、同一、というわけではないんです。その違いというのは、プラスなのかマイナスなのか。その程度の違いなんだと思います。差し詰め、マイナスに絶対値を掛ければ、プラスになるような、そんな繋がりなんスよ、私たちは。ある程度の相違点こそあれど、ゼロからの距離は同じ。それらは決して合同にはないえませんが、相似の関係にこそなれど、合同にはなりえないような、非対称的なシンメトリー」

対象とシンメトリーは同じ字義のような気もするが、突っ込まずに先を促す。

「多分先輩は、不思議だったんだと思います。なぜ転寝棗は転寝鈴蘭の皮を被るのか。なりすましは何に起因しているのか。真相にうすうす気づいていた先輩は、不毛であると分かっていて、私の正体を喝破し、穴だらけの直感で、私の上辺を剥ぐことに成功した。私がお思うに、斗米先輩の自殺の件も、先輩が一枚噛んでいると睨んでるっす。私のもとに行きついたのも、斗米憐乃の本質に気づいた結果、芋づる式に辿り着いたんでしょうから。違っつスか？」

「違わないよ、といって、整容を直す。」

「いう気になったのだろう。」

なぜ自らの存在を消去してまで、転寝鈴蘭になろうとするのか。そして。

斗米憐乃との裏の関係性も。

葬式まで上げたはずの転寝棗が生きていて、その実、転寝鈴蘭のほうで死んでいて。

二人のうちどちらが投身自殺をしたのか。棺に納められた遺体ははたしてどちらのものであったのか。

「簡単な話っス。入れ替わったんすよ、私と、鈴蘭は」

「……入れ替わった」

「そうっス。推理小説でよくあるでしょう？ 死んだのは実はもう一人の双子の方割れだったっていう展開。どうやら世間で自殺したのは転寝棗ってことになってるらしいっスけど、それは、違っつんですよ。自殺したのは、鈴蘭のほうだったんすね」

少女の口から語られる物語。

斗米憐乃によって計画された、天体観測部集団自殺。天岩戸なる自殺サイトで予告された、死にゆく者の予定調和。しかし予定調和ながら、その実情はいささか異なる様相を呈している。

まず主犯格である斗米憐乃。彼女はなにも、自分が死にたくて集団自殺計画を立ち上げたわけではない。自殺する人の姿が見たいか

ら、計画した。自殺観察願望、と本人はそういつている。その歪んだ欲望に端を発して、何人もの部員が墜落死した。

そして、その中に、転寝棗がいた、ことになっている。

事実葬儀は肅々と執り行われ、眼前の少女も転寝鈴蘭として参列したはずだった。

こうして転寝棗は世間から抹消された。

しかし当の本人は普通に生きていて、あまつさえ俺の目の前にいたりもする。まずいえることは、ゾンビ説は採用されないということ。加えて、どう警察の目を欺いたのかも気になる。

「どういう意味だよ、それ」

「先輩はどこまで知ってるんすか？ それで説明する内容とその量が変わるっすからね。で、斗米先輩の願望というか、悪癖というか、知ってます？」

「全部知ってるよ。斗米憐乃がぶっ壊れた自殺崇拝者だつてことくらいな」

「……へえ。先輩の面目躍如といったところですねえ。となると、やっぱり斗米先輩の自殺は」

俺は壮大な溜息をついた。「多分、俺のせいだろうな。俺が立ち入ってはいけないうところに足を踏み入れた結果だろうよ」

「ということは、裏で動いたのは先輩だったんすね。なら、斗米先輩の中見、覗いたんすか？」

無言で頷く。頭の中にストンと消える少女の姿がよみがえった。

「おまえも、知ってたのか？ 天体観測部がどういう背景で発足されたのかを」

「大方分かってたっす。斗米先輩からは私と似たようなにおいがしましたから」

「におい？」

「はい。においっす。それも己の業に掣肘を受けた獣のにおいが。きつと同類だったんでしょね。私と斗米先輩は」

「どういふ点が、だよ」

それと、掣肘の意味を注釈してくれ。

「両方とも破綻してることっスよ」とにこやかに相好を崩した。
「私も斗米先輩も、狂ってたんでしょうね。斗米先輩は自殺大好き人間だったし、私は私で、妹好き好きーの大のシスコンだったんスから」

ぶるつと身震いする。転寝棗のいう「好き」には、何か家族愛を越えた何かがドロドロと蠢いていたような気がした。

「……禁断の愛か」と溜息。

「ご明察。私は、転寝棗は、妹の鈴蘭のことが大好きだったんス。それもただの愛情じゃないっスよ。ライクじゃなくて、ラブのほうっス」

「なら」と我慢できなくなつて、「ならなんで殺した？ そんなに好きだったんだろ。ならどうして」と問いただす。

「愛ゆえ、ですよ。何も私は単純に鈴蘭のことが好きだったわけじゃないんです。それはつまり、一体感。私はあらゆる面で鈴蘭と同じであることに愛を感じてたんス。私は鈴蘭と合同であるということに愉悦を覚えていたんです。自分でいうとあれっスけど、一言に要約すれば自己愛ですね。水面に映る自分に恋するナルキッソスみたいなものです。私は一辺倒に鈴蘭本体が好きだったわけじゃなくて、鈴蘭越しに感じ取れる自分、そして自分越しに見える鈴蘭が好きだったんスよ」

ゆるやかに時が過ぎていく。まるでここだけが現実の時間軸から外れているような錯覚を覚える。

「それは幼いころからずっと思っていました。全く同じ成長、まったく同じ容姿、全く同じ背格好。まるでもう一人の自分がいるように感じて、鈴蘭の存在はさながら、私のスピアみたいに思ってたっす。あるいは、鈴蘭が本体で、私がスピア、だったのかもっすけど。まあ、どちらにしろ本体に何かがあっても取り換えが効くような、代替品っすね。そういう意味では、やっぱり代償行為だったんでしょうね、それは」

恍惚の表情を浮かべる。

俺は黙って、少女の独白を聞く。

「それまではそれでよかったです。幸せでした。隣に鈴蘭がいて、私がついて、幸福でした。けど、あの事件をきっかけにその幸せは瓦解しました」

「……あの事件」と思いつくものは一つしかない。「強姦か」

「その通りです。何の因果か知りませんが、中学校の頃、鈴蘭がどっかのクズに純潔を奪われちゃったんです。それで先輩も知っているとっすけど、それが原因で自傷癖がついちゃって。来る日も来る日も自分の腕をカッターナイフで加工してたんす」

「……それがリストカットのきっかけだったのか」

「そうっす。んで、度重なる自傷で心身ともにボロボロになった鈴蘭は、いつ簾が外れるかも分からない日々を過ごしていたんですね。女だから一層、分かるんです。好きでもない男にそんなことされたら、私、死ぬと、思います。……すみません、話、戻しますね。そのせいで男の子と関わることも出来なくなっただけで、友達の数も目に見えて減りました。先輩には想像もできないと思いますけど、私の《くっす》っていう口調、実は鈴蘭も使ってたんすよ。それを私がパ

クって、けど、オリジナルの鈴蘭のほうは色々な面で閉鎖的になっちゃって、口調もだんだんと変化して……。本の虫になったのも、その時期からかな。強姦される前は私以上に元気で人好きする子だったんすけどね」

「だからなんだっていうんだよ」

「怒らないでくださいよ。分かりませんか？ 腕に傷がついたら、合同じゃなくなるじゃないですか。転寝棗と転寝鈴蘭は、同じじゃなくなるじゃないですか」

「……は？」と思わず呟く。何がどうということなのか、うまく咀嚼できない。

「私、嫌だったんす。鈴蘭が傷物になったせいで、私たち姉妹は完璧な双子から、単なる似た者同士に凋落たふらくしてしまったんすよ。そんなの、意味ないじゃないですか。鈴蘭が私と一緒にいる意味と、私が鈴蘭と一緒にいる意味が、ないじゃないですか」

「意味が、ない？」

「はい。鈴蘭の存在理由は私ありきで成立するんです。また、その逆もしかり。鈴蘭は私と同一だったから、生きる権利を有することができた。あるいは、鈴蘭がいたからこそ、私がこの世界で存在することを許された。私と鈴蘭との関係はそれくらい密で、断ち切れない鎖で繋がれていた。けど、今の鈴蘭では、見る影もない。鈴蘭は私以外の何かに零落れいらくしてしまったんす」

だから。

「だから、殺したのか？ 強姦されて心も体も傷つけられて、そんな妹の姿が、自分のようじゃないから、殺したのか？」

「そうっすね。あれは鈴蘭じゃないっすよ。私の皮を被った鈴蘭じゃないです。私でもない、鈴蘭でもない、紛い物。だから鈴蘭と似て非なる鈴蘭を天体観測部をネタに唆したんです。鈴蘭は前々から自殺願望があつたようっすから。それで、二週間くらい前の集団自殺計画について話すと、興奮したようでした。私が天体観測部に入部したのも、全てはこのためっす。確かに斗米先輩は妙な催眠術を

使ってましたけど、あれ、自殺願望を増幅させるためだけのものなんですよ。元から自殺願望皆無の私に効果を望めるわけもない」

「けど、転寝鈴蘭には」

「効果抜群ですよ。ど真ん中に引つかかったみたいで、集団自殺の前にも私になり済まして受けてもらったんすけど、効力はすさまじかったっす。斗米先輩は斗米先輩で多分、私が私でないことに気付いてたんでしょうね。けど、先輩にとってはどっちでもよかったんですよ。私であろうが鈴蘭であろうが、きっちり自殺してくれればそれでいいんすから。むしろ、自殺願望の大きい鈴蘭のほうがやりやすいと思いますし。先輩の目的はただ、自殺する私たちが見ただけっすから」

斗米憐乃の企図は、転寝棗の言説通りだった。斗米憐乃は自殺さえ観測できれば、それでよかったのだ。そのための犠牲が入れ替わるうとも、支障が出ない限り、些事ではない。後々何らかの矛盾が露呈する可能性もあったが、斗米憐乃も最終的には自殺するつもりだったならば、そんなこと関係ない。

だから、不用意に事を荒げることをしなかった。

斗米先輩は斗米憐乃で。

転寝棗は転寝棗で。

銘々水面下で行動していた。

「結果、鈴蘭は自殺しました。葬式で出棺された遺骸は、鈴蘭のものでしたんす」

「……………」

転寝棗と転寝鈴蘭の入れ替わりの真相、その過程、動機は分かった（ような気がする）。理解の範疇を越えているが、理解しようと思えば、できる。

「後は警察の網をどう潜り抜けるか、でしたが、これは一番簡単なことでした」

「転寝家の威光、か」とあまり考えたくないことを、いう。

転寝棗は少し驚いたようだった。「よく分かりましたね。さすが

は直感探偵白夜」

「褒めてんのか、それ」

「マジで褒めてるっスよ」

己の妹の中に垣間見える自分に恋した少女は、屈託のない笑みを浮かべた。

「しかしながら、やっぱり転寝家の威光は並じゃないっスね。よもや死体の隠蔽くらい、朝飯前ってことっス」

「ははは、そいつは怖いな」と囁いた喉で笑声を上げる。

国家機関への手回しは、前回の一件で予想していたので、それほどこ以外ではない。畏怖を覚える程度。

それよりも。

「おまえはそれでいいのか。転寝棗としての自分を捨て、転寝鈴蘭として生きるのか」

転寝棗の愛の根底は自分。なにも転寝鈴蘭に変身する理由にはならない。

「勿論っスよ。私は転寝棗の名を捨てて、これから転寝鈴蘭として生きることにするっス」

「それだつたら、通用しない。おまえの論理は立ちいかなくなるんじゃないのか。おまえの求めているのは転寝鈴蘭越しに見える自分だろ。決して転寝鈴蘭そのものではない」

「まあ、そうっスね」

けど、と転寝棗は強い口調で反駁した。

「けど、それはそれでいいんですよ。確かに私は自分が好きです。

堪らなく好きです。けど、それ以上に、不愉快だったんスよ。二人の間にできた相違が」

「腕のことか？」

「腕もですし、眼鏡や性格もそうです。私は一切合財が同じだった私と鈴蘭に違いができることが嫌だった。だから、鈴蘭を抹消したんス。そうすれば、オリジナルは一人になる。贋物の鈴蘭が健在だつたら、どうしても偽物が生まれるっス。私が本物なのか、鈴蘭が

偽物なのか。それとも、私が偽物なのか、鈴蘭が本物なのか、分らなくなっちゃいます。私にとって、偽物はいたらダメなんスよ。常に本物だけいればいいんス。けどそれには、私か鈴蘭の存在が邪魔です。見た目の違う双子の二人がいる限り、偽物は消えない。だったら、一人に絞り込めばいい。この世界からどちらかを抹殺すれば、残った一人は対比物のない、本物になれるっス。偽物は自動的にいなくなるじゃないですか。勿論自己愛です。自己愛ですけど、私わざわざ棗であることを捨て、鈴蘭を選んだのは、単純に憧れだったから。幼いころの天衣無縫な鈴蘭は私の憧れでした。この口調もこの髪形も、幼少期の鈴蘭をまねたものっス。私にとって強姦される前の鈴蘭こそが本物で、強姦された後の鈴蘭はただの贋作でした。それを私は強姦以前の鈴蘭に自らを投影し、かつ鈴蘭になることにしたんス。私は好きですよ。今の体」

転寝棗は眼鏡のずれを直した。伊達眼鏡のそれは、転寝鈴蘭であることへの証明として、転寝棗の付属品となっている。

「ある意味で私の望んだ合同の一つの形っスね。これも一応は合同じゃないっスか。比べる相手がいないっスから、合同とか相似以前の話っスけど。これで紆余曲折はあつたっスけど、唯一無二の存在として、比較する対象がない存在として、私はオリジナルになれた。同時に転寝棗が偽物になることも防げた。今ここにいるのは本物の鈴蘭っスけど、かといって棗が偽物というわけでもないっス。両者両得。両方とも本物としてあり続けるという、理想的なエンディングっスね」

少女はからからと笑った。

間違いを矯正した結果、その歪みは強大になっていく。

「私って、世界最大のシスコっスよね。なんせ、その本人になるくらい愛してたんスから」

転寝棗、否、転寝鈴蘭は口元に手を当てて、たおやかに笑んだ。

一つ一つはおかしくはない。転寝棗の論理はおかしくない。むしろ整合性に富んでいる。

それが全体性を持った瞬間、こつも異質なものとして映る。

壊れた部品単体では、それほど違和感はない。けれど、その壊れた部品が一点にそろえば、とたんに明確な違和感を表出させる。

「先輩、帰るんスか？」

「帰る。飯食つて寝る」

「もう少しくらい付き合ってくれてもいいじゃないっスか。二人だけの秘密を抱えた仲じゃないっスか」

「そんないかがわしい仲じゃないだろ」

「けど、あれっスよね。秘密の共有って、なんだか恋人みたいですね」

「もしくは共犯」

「あるいは神父と懺悔を求めろ咎人」

「おまえが一度でも許しを求めたか。むしろ嬉々として喋ってただろ」

「うるさいっスねえ。たまには人を信じてみるのもいいかなって思っただけっス。……て言うか、私のほうが咎人側なんスね」

「当たり前だろうが」

「どちらかっていうと、先輩のほうが咎人っスよね。佩刀先輩と鈴蘭、二人の心を絡め取っておきながら、無関心だなんて」

「んなこと知るか。俺は帰る」

「また明日っス、先輩！ これからは鈴蘭として接してくださいね」
「……はいはい」

俺は襖を開けて、わたしの渡殿を出た。

見上げてみると、綺麗な夕空だった。

憎たらしいくらい、綺麗な、空。

今宵、舞台上上がるは三人の役者。

自殺にあくなき興味を持つ女　斗米憐乃。

妹に行き過ぎた愛を投じる女　転寝棗。

秘密裏に己が体を傷つける女　転寝鈴蘭。

そして、四人目の道化師は　。

誰も救うことの叶わなかった男　篝火白夜。

破綻者はしかるべき動機で破綻し、しかるべき手段で破綻する。

破綻者は理由もなく破綻しない。破綻せざるを得ないような、一貫した理由がある。これだけは絶対だと、自分の中で確固たるルールを持つている。

破綻することではしか自分を維持できない奴なんて、割といる。この世界の何割かはそんな奴だ。もしかしたら、そんな奴が地球を回しているのかもしれない。

誰だって、救いを求めている。

何だって、助けを求めている。

何かできたらいい。

篝火白夜は、いつも、そんなことを思っている。

何かできることがあればいい、とも思っている。同時に、諦念を感じている。自己に対する諦めを感じている。

篝火白夜は誰も救えない力を持って余して、ただ生きている。

強くなりたいとか、誰かを救いたいとか、そういうことじゃない。何かできることはないか、自分にできることはないかと、そう思っているだけだ。

善行を積めるほど人がいいわけでもない。かといって、悪行を重

ねられるほど肝が座っているわけでもない。

善でも悪でもない。

悪でも善でもない。

篝火白夜は、そういった曖昧な人間なのだと、自分でもそう思っている。

善にも悪にも徹しない、そんな人間なのだと、思っていたりもする。

第三十九話 " 22 (後書き)

キャスト(中間発表)

・篝火白夜
かがりびびやくや

十六歳。男。存命。

特技 喧嘩が強い。教科書速読。昼寝。

人生観 やりたいことは分からない。けど、やりたくないことは分かる。

・佩刀歪
はかしひずみ

十六歳。女。存命。

誓ったこと 白夜と一生添い遂げること。

趣味 白夜の寝顔を眺めること。手を握ってあげること。

・練絹玉梓
ねりぎぬたますき

十六歳。女。存命(通院中)。

長所 あり過ぎて困る。

短所 なさ過ぎて困る。

・梅雨利東子
つゆりとうし

十六歳。女。存命。

体質 果汁飲料で酔う。

言いたいこと お金でなんでも買えるなら、奇跡だってお金で

買えるんじゃないの？

・名伽狭霧なごせきぎり

十七歳。女。故人。

人生の教訓 動静動、すなわち、静動静。

作者に言いたいこと 出番が少ないのだが。

・転寝棗うたたねなつめ

十五歳。女。存命。

趣味 星を見ること。

特技 その気になれば五十メートルを八秒台で走れる。

・転寝鈴蘭うたたねすずらん

一五歳。女。故人。

趣味 読書。

特技 その気になれば本のページを八秒台で読める。

・斗米憐乃とまいあわの

一七歳。女。故人。

好きな人種 不可能を可能にする天才。

嫌いな人種 不可能を不可能のままにしておく凡人。

です。

相変わらずの稚拙な文ですが、お楽しみいただけただけでしょうか。甚だ不安です。

キャラが多くなったので、整理の意味も込めて、跋文に登場人物のプロフィールを載せました。

埒外編はまだ続きます。その折は是非ご購入なさっていただけると、作者冥利に尽きるというものです。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8654s/>

神隠しが起こる村 埒外編

2011年9月20日03時29分発行